番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2757	鎹	(8.7)	0.8	0.3	(7.1)	鉄	断面長方形の棒状，脚被部の破片，棒状関あり	竈西側上層	

第220号住居跡（第553図）

位置　調査区北部中央のG13h1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第223号住居跡を掘り込み，第160・224号住居，第401・416号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　重複している他の遺構に掘り込まれているために全容は不明であり，北壁や東壁の立ち上がりの様子も確認できなかったが，南北軸は2.5m，東西軸は4.0mと推定される。平面形は西側部分の形状からみてN－7°－Eを主軸とする長方形と考えられる。壁高は最も残りの良い西壁で16cmを測り，壁は外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦である。壁溝は西壁で確認されている。

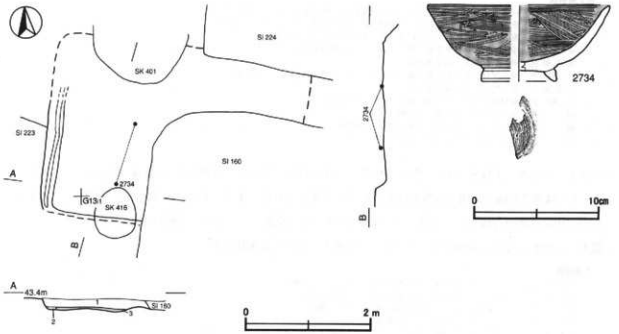
竈　北壁あるいは東壁に付設されていたものと想定されるが，他の遺構によって両壁とも掘り込まれているために遺存していない。

ピット　検出されていない。

覆土　3層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・粘土ブロック少量（貼り床）

遺物出土状況　土師器片83点（坏16，高台付椀5，甕62），須恵器片8点（坏7，甕1），鉄製品（釘ヵ）1点，



第553図　第220号住居跡・出土遺物実測図

礫2点（1点に被熱痕あり）がほぼ全域から散在した状態で出土している。2734は中央部床面と南壁寄りの下層から出土した破片2点が接合したものであり，本跡廃絶時の埋め戻しの段階で埋土と共に投棄されたものと考えられる。墨書土器片は内面黒色処理の土師器坏ヵの細片であるが，墨書は判読できない。なお，須恵器片はいずれも細片のため，混入したものと考えられる。

所見　伴う遺物が少なく時期は明確ではないが，重複関係などから判断して，時期は10世紀中葉から後葉の間と考えられる。

第220号住居跡出土遺物観察表（第553図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2734	土師器	高台付椀	[14.6]	6.0	[5.6]	雲母・長石・石英	暗灰黄	普通	底部回転糸切り後高台貼り付け，体部内・外面ヘラ磨き	中央部床面・下層	20%

第221号住居跡（第554・555図）

位置　調査区北部のG12h8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第222・230号住居，第155・156・405号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　一辺が6.0m前後の方形で，主軸方向はN－7°－Eである。壁高は約26cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は周回している。

竈　北壁の中央部に付設されており，規模は焚口部から煙道部まで約130cm，袖部幅約120cm，壁外への掘り込みは約30cmである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は，火床部から緩やかに立ち上がり，中位で急な傾斜で立ち上がる。土層断面図中，4層は天井部の崩落土である。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
2　灰　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量，ロームブロック微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量，砂質粘土ブロック微量
4　灰　褐　色　砂質粘土ブロック多量，焼土ブロック・炭化物中量
5　暗赤褐色　焼土ブロック・炭化物中量
6　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化物中量，ロームブロック・砂質粘土ブロック微量
7　暗赤褐色　焼土ブロック多量，炭少量
8　灰　褐　色　砂質粘土ブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
9　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
10　褐　　色　ロームブロック中量，黒色土ブロック微量
11　褐　　色　焼土ブロック多量，粘土粒子中量

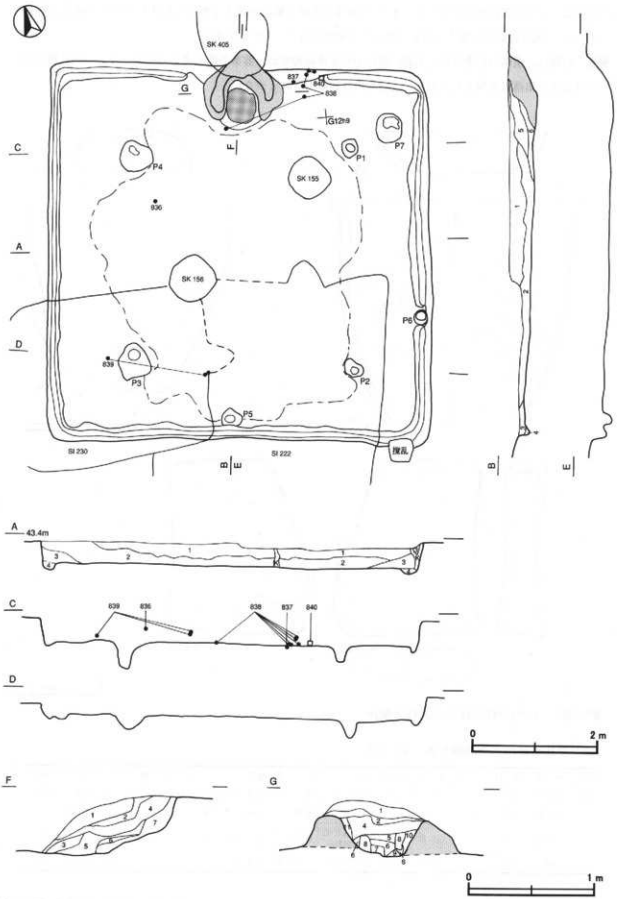
ピット　7か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さは30～50cmで，柱間は3.5m前後で規則的に配されている。P5は深さ15cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。また，P6は深さ13cmで，壁柱穴と考えられるが，他には認められない。なお，P7は東コーナー部に位置しているが，詳細は不明である。

覆土　6層からなり，各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量，焼土ブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　黒　　色　ロームブロック・炭化物少量，焼土ブロック微量
4　褐　　色　ロームブロック中量，炭化材微量
5　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量，砂質粘土ブロック微量
6　灰　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質土ブロック少量

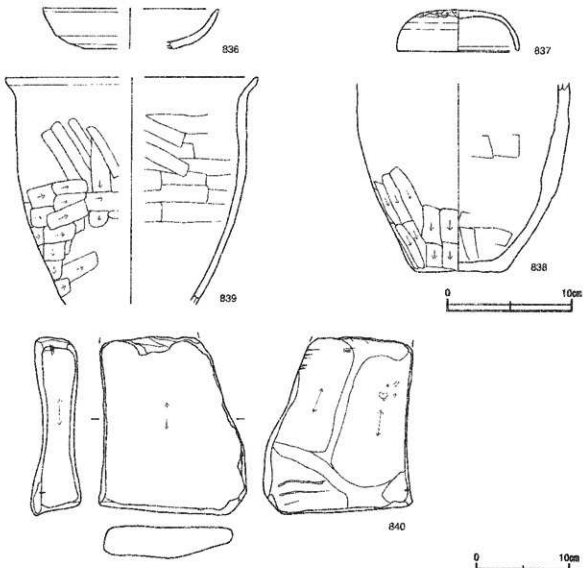
遺物出土状況　出土遺物は土師器片568点（坏134，甕432，甑1，手捏土器1），須恵器片9点（坏7，壺2），課4点がほぼ全域から散在した状態で出土している。836は，西部の覆土中層から出土し，837・840は，北壁



第554図　第221号住居跡実測図

際の床面からそれぞれ出土している。また，838は北壁際と竈南の覆土下層から出土した数点の破片が接合したもので，839は南西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

所見　時期は，遺構の形態と出土土器の形状から8世紀初頭から前葉の間と考えられる。なお，当遺跡において8世紀代の集落は関散としており，当該期の住居数も8軒と少ない。



第555図　第221号住居跡出土遺物実測図

第221号住居跡出土遺物観察表（第555図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
836	須恵器	坏	[14.0]	(3.2)	[7.0]	石英	灰	普通	口唇部に細い沈線が巡る	西部中層	10%
837	須恵器	蓋	9.6	3.3	—	長石	黒褐	普通	天井部多方向のヘラ削り	北壁際床面	70%
838	土師器	甕	—	(15.0)	7.0	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	二次焼成	内面ヘラナデ	北壁際・竈南下層	60%
839	土師器	甕	[29.0]	(18.0)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	内面ヘラナデ	南西部下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
840	砥石	18.8	15.6	5.2	2030.0	砂岩	砥面3面，その他は剥離面	北壁際床面	

第222号住居跡（第556・557図）

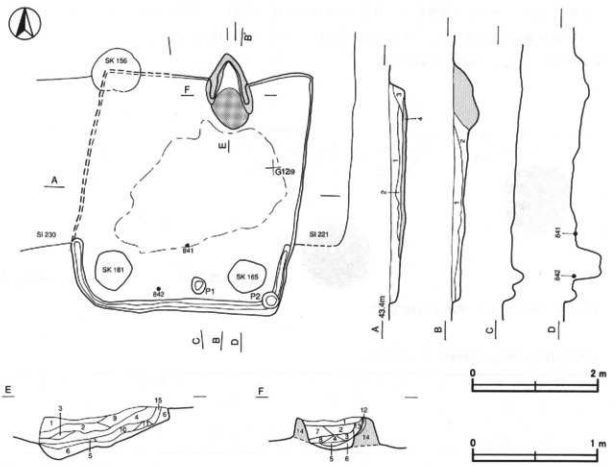
位置　調査区北部のG12h8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第221・230号住居跡を掘り込み，第156・165・181号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　長軸は約3.8m，短軸は約3.4mの長方形で，主軸方向はN－4°－Eである。壁高は約14cmで，やや外傾して立ち上がっている。

床　南部を除いて貼床である。ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は，南壁際と南東・南西コーナー部で確認されている。

竈　北壁の中央部東寄りに付設されており，規模は焚口部から煙道部まで約120cm，袖部幅約70cm，壁外への掘り込みは約40cmである。袖部内壁には，土師器甕片や礫を補強材として使用している。火床部は床面から深さ約20cmほど皿状に掘りくぼめ，火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道の立ち上がりに柱状の礫が据えられ，火熱を受けている。煙道は，緩やかな傾斜で立ち上がっている。



第556図　第222号住居跡実測図

竈土層解説

1 極暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
3 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
4 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子少量
5 黒色 焼土ブロック少量
6 黒褐色 ローム粒子中量，焼土ブロック少量
7 黒褐色 焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
8 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量
9 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
10 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
11 暗褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
12 にぶい赤褐色 砂粒中量，焼土ブロック少量
13 にぶい赤褐色 焼土粒子多量，炭化粒子・砂粒少量
14 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
15 黒褐色 焼土ブロック・炭化材少量

ピット 2か所。P1は深さ約20cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。また，P2は深さ約10cmで，壁柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり，各層にローム粒子や焼土を含む人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化物少量
2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化物・粘土粒子微量
3 暗褐色 焼土粒子少量，ローム粒子・炭化物微量
4 黒褐色 ローム粒子・炭化物少量，焼土粒子微量（貼床）

遺物出土状況 出土遺物は土師器片572点（坏232，高台付椀35，甕303，甑1，手捏土器1），須恵器片17点（坏7，甕9，蓋1），礫38点（被熱痕5），鉄滓4点がほぼ全域から散在した状態で出土している。841は南部中央，842は南壁際やや西寄りのいずれも床面から出土している。843は覆土中から出土している。

所見 本跡の時期は，第230号住居跡を掘り込んでいることや，出土土器の形状から，11世紀前半と考えられる。

第557図 第222号住居跡出土遺物実測図

第222号住居跡出土遺物観察表（第557図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
841	土師器	小皿	8.4	1.5	5.4	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ロクロナデ，底部回転糸切り	南部床面	70%
842	土師器	高台付椀	15.8	6.5	[7.4]	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	南部床面	60%

番号	器種	最大径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
843	土玉	0.9	0.8	0.2	0.6	雲母・石英・赤色粒子	側面ヘラ削り，両面穿孔	覆土中	

第223号住居跡（第558図）

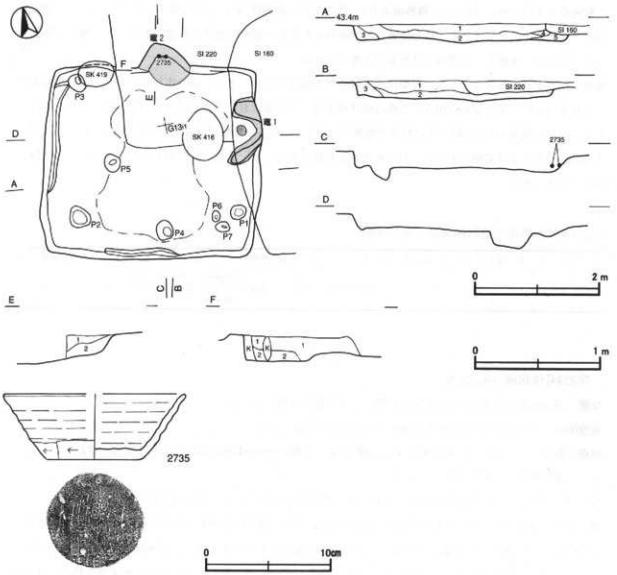
位置　調査区北部中央のG12i0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第160・220号住居，第416・419号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　N－115°－Eを主軸とする長軸3.5m，短軸3.1mのほぼ方形である。壁高は最も残りの良い南壁で27cmを測り，壁はやや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈前から出入り口施設にかけてよく踏み固められている。壁溝は西壁と南壁の一部で確認されている。

竈　2か所。竈1は東壁のほぼ中央部に付設され，壁外への掘り込みはほとんどない。規模は焚口部から煙道部まで52cm，袖部幅108cmほどで，袖部は床面とほぼ同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられており，火熱を受けて赤変しているが焼き締まった感じはない。また，煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。竈2は北壁のほぼ中央部に付設され，付近の壁面や床面から竈材の一部の流出とみられる粘土粒子や砂粒が検出されている。煙道部は急な傾斜で立ち上がる形状で，壁外



第558図　第223号住居跡・出土遺物実測図

への掘り込みは40cmである。天井部や袖部は遺存しておらず，後述する出入り口施設に伴うピットが竈2と対峙する位置にあることから，竈2から竈1への作り替えが行われたことが想定される。

竈2土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物・粘土ブロック少量

ピット　7か所。P1～P3が配置と形状から主柱穴と考えられ，深さは12～19cmであるが，北東コーナーに対応する柱穴は検出されていない。P4は深さが17cmで，竈2と対峙する南壁際に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5・P6・P7は深さが20cm・12cm・14cmであるが，性格は不明である。

覆土　5層からなり，ロームブロックや焼土を多く含んだブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
3　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量，粘土ブロック・炭化粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片420点（坏70，高台付坏1，甕349），須恵器片41点（坏29，高台付坏1，壺3，甕8），灰釉陶器片1点（椀），礫3点（被熱痕あり），鉄滓1点（若磁性あり），炭化種子1点（桃）がほぼ全域から散在した状態で出土している。2735は竈2の煙道の立ち上がり部から逆位の状態で出土して，被熱痕が認められることから，支脚として使用されたものと考えられる。

所見　出土土器の形状などから，時期は9世紀前葉と考えられる。また，竈の作り替えでも出入り口部を変更した状況はない。覆土中から出土した桃の炭化種子は，当遺跡において多く出土する果実種の一つである。これまでの分析結果から，当時の生活残滓が廃棄されたもの，あるいは祭祀的なものとして埋められたものなど，人為的な行為により遺構にもたらされた可能性が指摘されている。また，食害痕があることから，栽培種の可能性も考えられる。

第223号住居跡出土遺物観察表（第558図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2735	須恵器	坏	(14.2)	5.2	7.6	雲母・長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り，体部下端手持ちヘラ削り	竈火床部	50%

第224号住居跡（第559図）

位置　調査区北部中央のG13h1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第156・213・220号住居跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状　N－111°－Eを主軸とする長軸3.2m，短軸2.6mの南北に長い長方形である。壁高は10～15cmほどで，壁は外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，西壁際から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈　東壁の南寄りを40cmほど掘り込んで付設されているが，遺存状態が悪いために火床部の一部と煙道部が確認できただけである。火床部はほぼ床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し，煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。なお，竈前の床面が赤変硬化し，焼土が散在していることから，作り替えて火床部を移した可能性が考えられる。

竈土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　極暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量

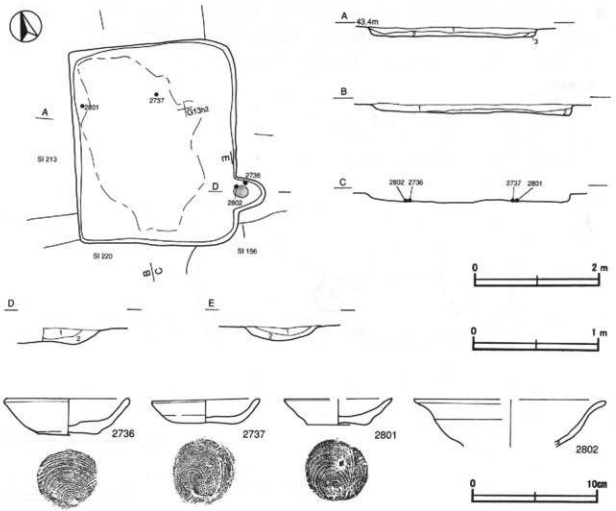
ピット　検出されていない。

覆土　3層からなり，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片214点（坏69，小皿5，甕140），須恵器片19点（坏13，蓋1，甕5），灰釉陶器片2点（椀）がほぼ全域から散在した状態で出土している。完形の2736は竈火床部から正位で出土しているが，被熱痕が認められないことから，本跡廃絶時に遺棄したものと考えられる。2737は中央部北壁寄りの床面，2801は西壁際の床面からそれぞれ正位の状態で出土しており，本跡廃絶時に投棄したものと考えられる。なお，覆土中より出土した灰釉陶器片は，いずれも猿投産黒笹90号窯式のものと考えられる。また，須恵器細片は破断面が摩滅しており，混入したものである。

所見　本跡からは小形化した小皿片が出現していることや，土師器坏の形状から，時期は11世紀前半と考えられる。



第559図　第224号住居跡・出土遺物実測図

第224号住居跡出土遺物観察表（第559図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2802	土師器	高台付椀か	[15.4]	(3.7)	－	雲母	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ	竈火床部	10%
2736	土師器	小皿	9.8	3.0	4.8	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	竈火床面	100% PL231
2737	土師器	小皿	8.4	2.0	4.8	赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	中央部北壁寄り床面	80%
2801	土師器	小皿	[8.6]	2.0	5.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	西壁際床面	60%

第225号住居跡（第560図）

位置　調査区北部のほぼ中央のG13i1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第160号住居，第403号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

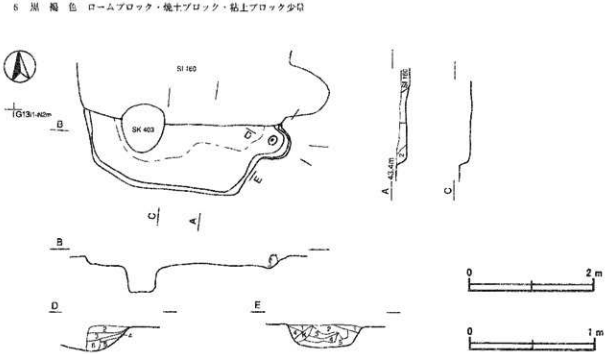
規模と形状　南壁際を除く大部分が第160号住居に掘り込まれているため，確認できたのは東西軸約2.6m，南北軸0.6mとわずかな部分であり，N－99°－Eを主軸とする2.6m前後の方形または長方形と推定される。外傾して立ち上がる壁の様子が南壁で確認でき，壁高は15cmほどである。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。なお，壁溝は検出されていない。

竈　東壁の中央部から南寄りに付設されたことが想定される。第160号住居に掘り込まれたため，袖部や火床部は遺存していない。焚外への掘り込みは40cmほどで，煙道の立ち上がり部には砂岩が支脚として据えられており，火熱を受けて脆くなっている。また，煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
3　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量
4　暗　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量
5　褐　　色　ロームブロック中量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量



第560図　第225号住居跡実測図

ピット　検出されていない。

覆土　2層からなり，ロームブロックや焼土を多く含んだ人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況　土師器片2点（高台付椀1，甕1），支脚1点が出土している。

所見　出土した土器はいずれも平安時代の所産と考えられ，竈を有する住居形態と重複関係から見て，時期は10世紀中葉と考えられる。

第226号住居跡（第561・562図）

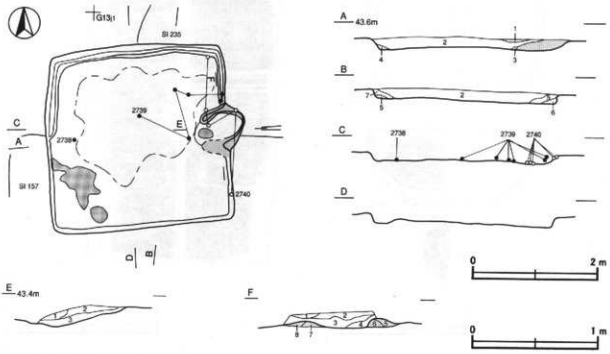
位置　調査区北部中央のG13j1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第157・235号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　N－84°－Eを主軸とする一辺2.9m前後の方形である。壁高は最も残りの良い部分で16cmほどであり，各壁とも外傾しながら立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は竈北側の東壁から西壁にかけて確認でき，本来は周回していたものと推定できる。

竈　東壁のほぼ中央部に付設され，焚口部から煙道部まで84cm，袖部幅80cmほどである。壁外への掘り込みは30cmほどで，天井部は崩落しているため遺存せず，土層断面図中の第2層が崩落土に相当し，粘土粒子や砂粒を多く含んでいる。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築され，火床部は浅い皿状に掘りくぼめられて，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は，火床部から緩やかに外傾して立ち上がる。



第561図　第226号住居跡実測図

竈土層解説

1　暗　褐　色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量
2　黒　褐　色　炭化物中量，焼土ブロック少量，ローム粒子微量
3　黒　褐　色　炭化物中量，焼土ブロック・ローム粒子少量
4　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
5　暗　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量
6　暗 赤 褐 色　焼土ブロック多量
7　褐　　色　ローム粒子多量，粘土粒子少量
8　暗　褐　色　粘土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量

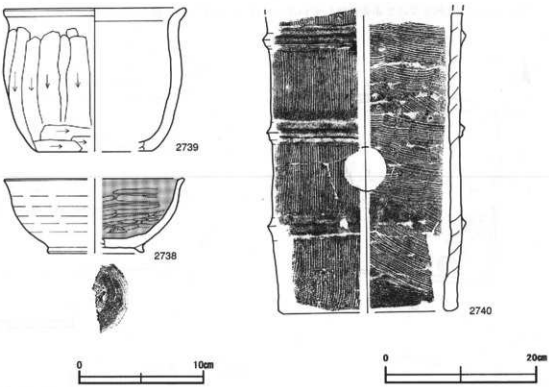
ピット　検出されていない。

覆土　7層からなり，ロームブロックや焼土を多く含んだ不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
7　黒　　色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片308点（坏69，高台付椀１，小皿２，甕236），須恵器片８点（坏５，甕３），埴輪片５点，礫42点（被熱痕あり，２点に砥面あり），鉄製品１点（刀子），鉄滓１点がほぼ全域から散在した状態で出土している。2738は西壁際床面，2739は竈手前から東壁際にかけての覆土下層より出土した破片15点が接合したものである。2740は竈火床部から東壁際下層にかけて出土した破片５点が接合したもので，被熱痕が認められ，竈材として利用されたものと考えられる。2740以外の遺物は，本跡廃絶時に投棄されたものと考えられる。なお，南西コーナー部に多数の火熱を受けた礫と共に焼土塊が検出されており，廃絶時の埋め戻しの段階で投棄されたものと考えられる。



第562図　第226号住居跡出土遺物実測図

所見　出土した小皿や高台付椀などの形状や住居跡の重複関係などから見て，時期は11世紀前半と考えられる。また，竈内およびその周辺から被熱痕が認められる円筒埴輪片が出土しており，竈の支脚および補強材として使用されていた可能性がある。

第226住居跡出土遺物観察表（第562図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2738	土師器	高台付椀	14.4	5.9	[7.6]	雲母	に示い橙	普通	底部ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ，体部外面ロクロナデ	西壁際床直	30%
2739	土師器	小形甕	14.2	11.4	[9.2]	雲母・長石	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ	中央部・竈北側下層	60%

番号	種別	器種	器高	底径	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2740	埴輪	円筒埴輪	[39.5)	[24.0]	1.2～1.9	雲母・長石・石英	に示い橙	一次焼成	外面縦位のハケ目，内面斜位から横位のハケ目凸帯貼り付け	竈火床部・東壁際下層	30%

第230号住居跡（第563図）

位置　調査区北部西寄りのG12h8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第221号住居跡を掘り込み，第222号住居，第156号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　東部を第222号住居に掘り込まれているが，N－87°－Eを主軸とする長軸3.2m，短軸2.7mほどの東西に長い長方形と推定される。壁高は重複を受けていない西壁で25cmほどを測り，外方向に開き気味に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は，北壁から西壁と南壁の一部で確認でき，本来は周回していたものと推定できる。

竈　東壁のほぼ中央部に付設され，第222号住居に掘り込まれているため，火床部だけが確認された。付近の床面には粘土粒子や砂粒が散在しており，竈材の一部と考えられる。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱を受けて赤変硬化している。

ピット　7か所。配置と形状からP1～P4が主柱穴と考えられ，深さは16～21cmである。P5は深さが24cmで，竈と対峙する西壁際に位置し，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さがそれぞれ8cm・30cmで，性格は判然としない。

覆土　4層からなり，ロームブロックや焼土を多く含んだ堆積状況を示した人為堆積である。

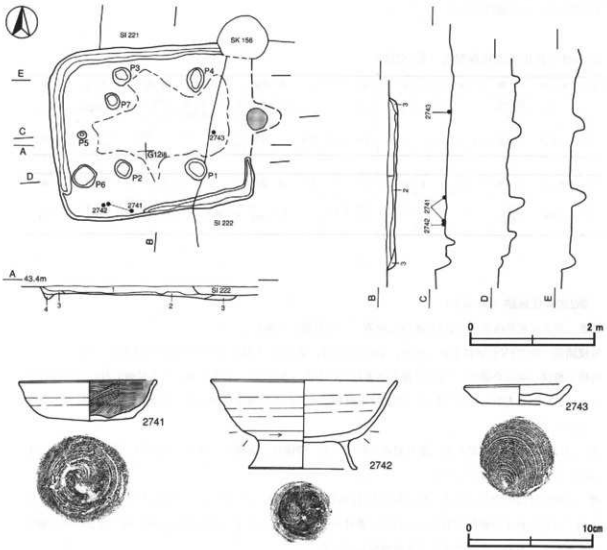
土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　黒褐色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック微量
4　黒褐色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片266点（坏73，高台付椀14，小皿2，甕177），須恵器片12点（坏8，高台付坏2，甕2），碗2点（被熱痕あり），瓦片1点（平瓦ヵ）がほぼ全域から散在した状態で出土している。2741は南壁際の床面から逆位の状態で出土し，2742は南西コーナー部床面から正位の状態でそれぞれ出土している。これらは，本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。2743は竈前の覆土下層から出土しており，重複関係にある第222号住居跡に伴うものであると考えられる。なお，須恵器片と平瓦片は混入したものである。

所見　出土した坏は口径・器高ともに小形化してきており，また重複関係などから見て，時期は10世紀後葉と

考えられる。



第563図　第230号住居跡・出土遺物実測図

第230号住居跡出土遺物観察表（第563図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2741	土師器	坏	10.8	3.2	6.9	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ，体部ロクロナデ	南壁際床面	100% PL231
2742	土師器	高台付椀	14.7	7.0	8.5	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け，ナデ，体部下端回転ヘラ割り	南西コーナー部床面	75%
2743	土師器	小皿	8.3	1.6	5.5	赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	竈面下層	95% PL231

第234号住居跡（第564・565図）

位置　調査区北部のＧ12ｊ9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第８・10号井戸に掘り込まれている。

規模と形状　長軸は約3.7m，短軸は約3.3mの長方形で，主軸方向はＮ－８°－Ｅである。壁高は15cm前後で，やや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は一部で重複のために確認できないが，周回していたものと考えられる。

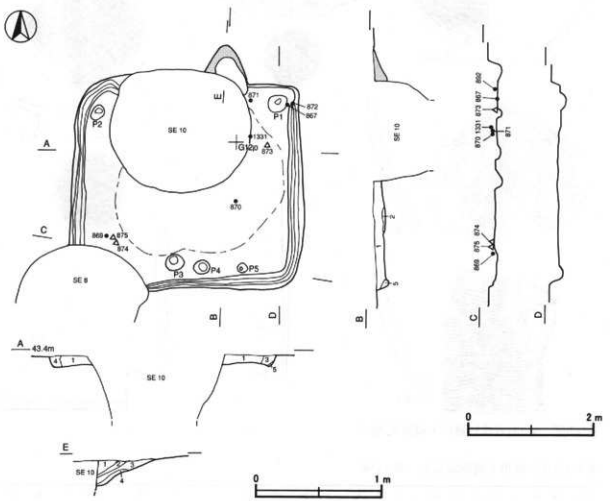
竈　北壁の中央部東寄りに付設されている。袖部及び焚口部は重複のために掘り込まれており，規模は確認できないが，壁外への掘り込みは約50cmで，煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック多量

ピット　５か所。Ｐ１・Ｐ２は深さ約10cmと浅いが，コーナー部に配されていることから柱穴と考えられる。Ｐ３は深さ約12cmで，出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ４・Ｐ５の性格は不明である。

覆土　５層からなり，各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

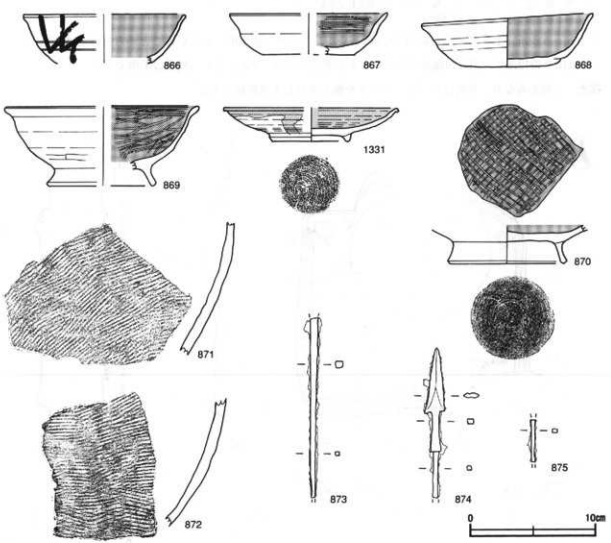


第564図　第234号住居跡実測図

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　褐　　色　ロームブロック中量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック中量
5　黒　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　出土遺物は土師器片92点（坏51，高台付椀５，甕36），須恵器片19点（坏４，甕15），灰釉陶器片２点（椀１，皿１），土製品１点（不明），鉄製品３点（鎌１，棒状金具２）が北東部から南西部にかけて散在した状態で出土している。867は北東部の床面から出土している。また，870は中央部，871～873は北東部，869・874・875は南西部のそれぞれ覆土下層から出土している。さらに，1331の灰釉陶器は竈前の覆土下層から出土しており，折戸53号窯式併行と考えられる。

所見　時期は，出土土器の形状から10世紀前葉と考えられる。



第565図　第234号住居跡出土遺物実測図

第234号住居跡出土遺物観察表（第565図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
866	土師器	坏	[12.8]	(3.9)	－	雲母	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ	覆土中	5% 体部外面墨書[□]

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
867	土師器	坏	[12.4]	3.3	[7.4]	石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ，内面ヘラ磨き	北東部床面	35%
868	土師器	坏	13.6	4.3	7.2	雲母・石英	黒褐	普通	ロクロナデ	覆土中	60%
869	土師器	高台付椀	[15.4]	6.3	8.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ，内面ヘラ磨き	南西部下層	10%
870	土師器	高台付椀	—	(3.0)	9.5	長石・石英	にぶい赤褐	普通	底部ヘラ切り後，高台貼り付け，内面ヘラ磨き	中央部下層	40%
871	土師器	甕	—	(10.5)	—	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部外面平行叩き	北東部下層	5%
872	土師器	甕	—	(11.1)	—	雲母・長石・石英	黄灰	普通	体部外面平行叩き	北東部下層	5%
1331	灰釉陶器	壺	[13.8]	2.7	6.0	緻密	灰・灰オリーブ	良好	底部回転糸切り，釉は浸け掛け	竈南下層	70% PL246

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
873	棒状金具	(14.5)	0.6	0.6	(13.2)	鉄	断面方形	北東部下層	
874	鎹	(11.9)	1.4	0.4	(13.0)	鉄	基部・部欠損，長三角形式a	南西部下層	
875	棒状金具	(3.9)	0.3	0.2	(1.2)	鉄	断面長方形	南西部下層	

第235号住居跡（第566図）

位置　調査区北部のG13j1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第157・226号住居に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.1m，短軸2.4mの東西に長い長方形で，主軸方向はN－101°－Eである。壁高は約12cmと低く，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈の前面から西壁付近にかけて硬化面の広がりが見られる。壁溝は第157号住居に掘り込まれた部分を除き確認されており，本来は周回していたと考えられる。

竈　東壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで80cm，両袖部幅約76cmで，壁外への掘り込みは50cmである。遺存状態は悪く，天井部は崩落している。袖部は東壁に砂質粘土を貼り付けた痕跡がわずかに確認される程度である。竈付近の床面には竈材と思われる粘土粒子や砂粒が散在しており，意図的に壊された可能性が考えられる。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し，その部分は火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　黒褐色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
4　黒色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
5　黒色　ロームブロック・焼土ブロック微量
6　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子少量

貯蔵穴　長径48cm，短径36cmの楕円形で，南東コーナー部に付設され，深さは28cmである。底面形状は長方形を呈し，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

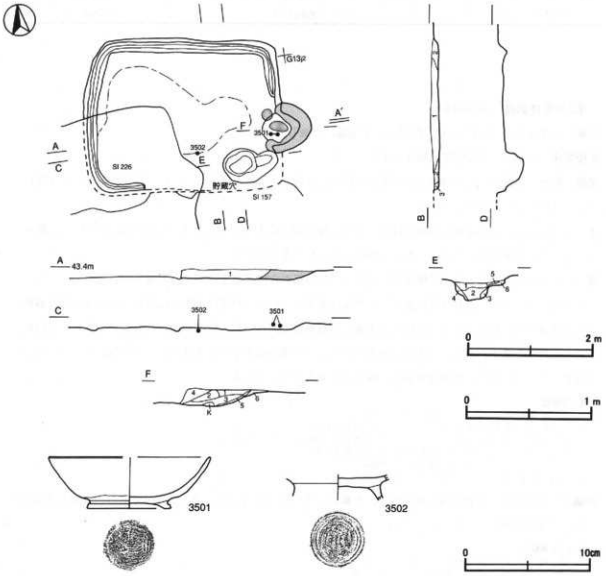
1　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒褐色　ローム粒子中量
4　暗褐色　ロームブロック中量
5　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子中量
6　褐色　ローム粒子多量

覆土　3層からなり，各層にロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
3　黒　　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片86点（坏47，高台付椀7，小皿2，甕30），須恵器片2点（甕），礫3点（被熱痕）が出土したが，ほとんどが覆土下層からのものであり，床面から確認された遺物は少ない。また，竈内と竈周辺の破片が接合した3501は火熱を受けておらず，本跡廃絶後の埋め戻す段階で投棄されたものと考えられる。

所見　当遺跡におけるこの時期の住居跡は，小形で竪穴部に主柱穴を持たず，主軸方向が東を指すものが多く，本跡もその典型である。また，須恵器を用いなくなっていることや小皿片が出土していること，坏や甕の形状から，時期は10世紀後葉と考えられる。



第566図　第235号住居跡・出土遺物実測図

第235号住居跡出土遺物観察表（第566図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3501	土師器	高台付椀	(12.6)	4.9	[6.6]	雲母・長石	明赤褐	良通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	竈火床部・覆部下層	50%
3502	土師器	高台付椀	—	(2.0)	—	雲母・白色粒子	にぶい褐	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	南部下層	30%

第241号住居跡（第567図）

位置　調査区北部のH12d0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第240号住居跡を掘り込み，第215・243号住居，第15号溝，第162号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　第240号住居跡と重複している東側は壁部を正確に捉えることはできず，遺存している西壁と硬化した床の範囲や竈の位置から，N－85°－Eを主軸とする長軸約4.8m，短軸約4.0mの東西に長い長方形と推定される。西壁は壁高18～22cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，壁際を除いた床面全体が硬化している。

竈　第240号住居跡の覆土上の東壁に位置し，焚口部から煙道部まで84cm，両袖部幅120cmである。床面から10cmほど掘り込んだ部分にロームブロックを主体とした褐色土を床面の高さまで充填し，その上に砂質粘土を用いて構築されている。天井部は崩落して，袖部も遺存状態は悪く，その痕跡が確認されただけであるが，土層断面図中，第7層に相当する火床面は，被熱した部分が厚さ5cmにわたって厚く焼き締まっており，使用頻度の高さがうかがわれる。煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック少量
2　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
3　暗　褐　色　焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子微量
4　暗　褐　色　焼土ブロック中量，炭化物少量
5　褐　　色　砂質粘土ブロック中量，ロームブロック少量
6　暗赤褐色　ロームブロック中量，砂質粘土粒子少量
7　赤　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子微量

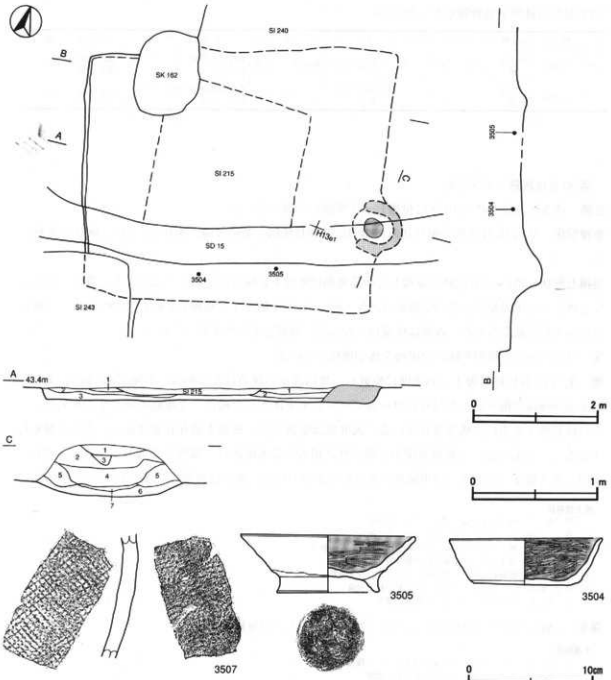
覆土　3層からなり，各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片50点（坏40，高台付椀9，甕1），須恵器片13点（坏6，甕4，甑1，壺2），灰釉陶器片1点（椀），土製品35点（支脚），礫2点（被熱痕）が覆土下層を中心に出土しているが，これらの大半は住居廃絶後に投棄された細片で，破断面が摩滅しているものも多く，本跡廃絶後の埋め戻しの段階で埋土中に混入したものと考えられる。3504は南壁付近の床面からまとまって出土した6片が接合したもので，完形に近い状態で復元されたことから，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見　本跡は，床面がほぼ全域わたって硬化していることや竈の火床面から見て，存続期間が長い可能性が考えられる。また，伴出遺物が少なく時期は明確ではないが，床面から出土した遺物の形状から10世紀前葉と考えられる。



第567図　第241号住居跡出土遺物実測図

第241号住居跡出土遺物観察表（第567図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3504	土師器	坏	12.0	3.8	7.3	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き	南部床面	95% PL231
3505	土師器	高台付坏	13.8	4.6	8.0	雲母	にぶい黄褐	普通	体部内面ヘラ磨き	南部床面	70%
3507	須恵器	甕	－	(9.9)	－	雲母・長石	灰	普通	体部外面格子目叩き，内面当て具痕	覆土中	5%

第244号住居跡（第568図）

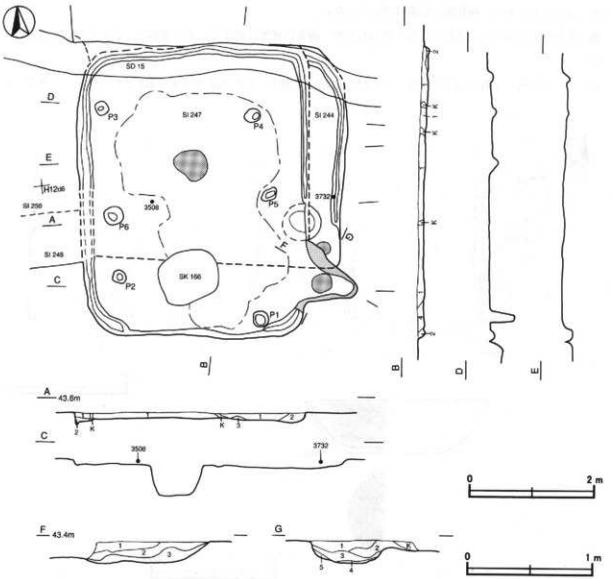
位置　調査区北部のH12c6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第247号住居へ作り替えが行われ，第15号溝，第166号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　遺存部が少なく平面形状は明確ではないが，第247号住居が本跡の北壁と西壁をそのまま利用して建て替えている可能性が高く，N－98°－Eを主軸とする長軸約4mの方形または長方形と推定され，壁高は6cmと低く，外傾して立ち上がっている。

床　遺存部が少ないため詳細は不明であるが，第247号住居の床と高さが等しく，また，遺存している壁の際から壁溝が確認されている。南東部にわずかなくぼみがある。

竈　東壁南寄りに構築されているが，第247号住居に壊されてほとんど遺存しておらず，火床と思われる直径12cmほどの焼土層が確認されただけである。火床部は浅い皿状を呈しており，火熱による焼き締まった感じは見られなかった。作り替えと考えられる第247号住居の竈が南東コーナー部に本跡の竈と一部重なるように付設されているが，本跡の竈袖部を再利用しているような痕跡はなかった。



第568図　第244・247号住居跡実測図

ピット　明らかに本跡に伴うと考えられるピットは存在せず，本跡を掘り込んでいる第247号住居のピットの中で，P1～P4は，位置的に本跡の主柱穴であったものを再度利用している可能性が考えられる。

覆土　重複のため残存部分が少なく堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器片4点（甕），土製品11点（支脚）が竈付近の床面から出土している。

所見　本跡は第247号住居跡へと作り替えが行われており，伴出遺物はほとんど出土していないが，時期は10世紀後葉に比定される第247号住居跡とほぼ同時期かそれ以前と考えられる。

第246号住居跡（第569図）

位置　調査区北部南寄りのH12e5区に位置し，平坦部に立地している。

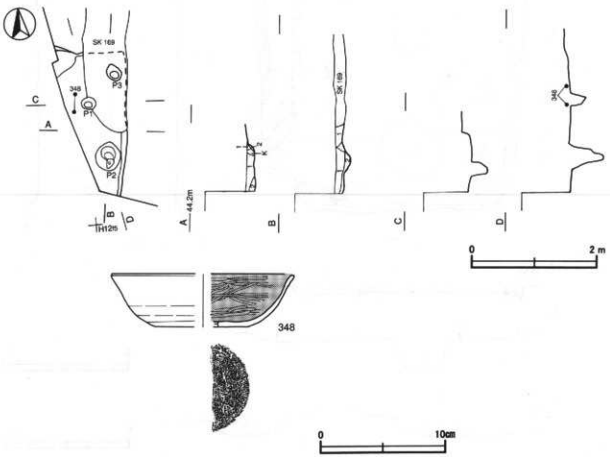
重複関係　第169号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　大部分が調査区域外に延びているため，全体の様相は把握できないが，南北軸2.2m，東西軸0.8mだけが確認できた。確認された壁高は16cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であり，硬化面や壁溝は認められない。

竈　北壁の中央部に付設されていると思われるが，調査区域外に延びるため右袖部の一部が検出されただけである。

ピット　3か所。主柱穴はP1が相当し，深さは40cmである。P2は深さ54cmであるが，P2・P3とも性格



第569図　第246号住居跡出土遺物実測図

は不明である。

覆土　2層のみ確認された。遺存部が少なく，堆積状況は判然としない。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム ブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　褐　　色　ローム ブロック多量，焼土粒子少量

遺物出土状況　出土遺物は少なく，土師器片65点（坏24，甕41），礫1点が出土しただけである。ほとんどが細片で図示できたものは少ない。348は北東部の覆土下層から出土している。

所見　本跡は大部分が調査区域外に延びているため，住居全体の様相は把握できないが，土師器片の形状から，時期は9世紀後葉と考えられる。

第246号住居跡出土遺物観察表（第569図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	成形	手法の特徴	出土位置	備考
348	土師器	坏	[14.3]	4.2	[7.4]	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面下端・底部へラ削り	北東部下層	35%

第247号住居跡（第568・570図）

位置　調査区北部のH12d6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第248・259号住居跡を掘り込み，第15号溝，第166号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.7m，短軸3.7mの長方形で，主軸方向はN－98°－Eである。西壁高は12cmと低いが，遺存部はほぼ直立して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部から南壁部にかけて硬化しており，壁溝は南壁を除いて巡っている。

竈　東壁の南東コーナー寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで96cm，両袖部幅100cmで，壁外への掘り込みは80cmである。火床部は浅い皿状を呈し，土層断面図中，第4層の上面が火床面に相当すると考えられ，火熱を受けて赤変硬化している。また，火床部の奥には雲母片岩が下部を埋め込まれた状態で設置され，支脚として利用されたものであり，煙道はそこから急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　褐　色　ローム ブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　黒　　色　ローム ブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
3　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量，ローム ブロック微量
4　暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，炭化粒子少量
5　黒　褐　色　粘土粒子中量，ローム ブロック・焼土粒子少量

ピット　6か所。P1～P6は形状から柱穴と考えられるが，配置が不規則であり，主柱穴であるかどうかは不明である。

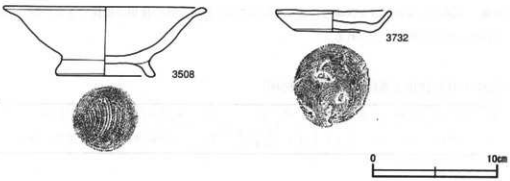
覆土　4層からなり，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説
1　黒　　色　ローム粒子・炭化物・焼土ブロック微量
2　黒　褐　色　ローム ブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量
4　褐　　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片224点（坏201，高台付椀8，甕8，小皿7），須恵器片4点（坏2，高台付坏1，甕1），鉄滓1点，礫19点（被熱痕16）が主に中央部の覆土中層と下層から出土している。また，甕片に対して坏片が多数を占めており，比率的に不自然であることから，これらのほとんどは住居廃絶後に投棄されたもの

と推測される。また，覆土中から出土した須恵器は，細片で破断面が摩滅しており，混入したものと考えられる。なお，3508は，中央部西寄りの床面から出土しており，本跡廃絶時に遺棄されたと考えられる。

所見　小皿や甕の形状から，時期は10世紀後葉と考えられる。本跡は第244号住居跡の南壁をそのまま生かして構築され，また双方の竈が南東コーナー部付近に付設されていることなどから，作り替えが行われたと考えられる。



第570図　第247号住居跡出土遺物実測図

第247号住居跡出土遺物観察表（第570図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3508	土師器	高台付椀	15.7	5.5	7.8	雲母	灰褐	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	中央部床面	70% PL231
3732	土師器	小皿	9.2	1.6	6.1	長石	褐	普通	底部回転糸切り	東部床面	100% PL231

第251号住居跡（第571図）

位置　調査区北部のH12a7区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第233・250・263・266号住居跡を掘り込み，第452・458号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　覆土が浅いため正確には捉えられないが，西壁部と竈の位置から，N－92°－Eを主軸とする長軸約2.7mの方形または長方形と推定される。遺存している西壁高は10cmで，ゆるやかに外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，それほど硬化した部分は認められず，また，壁溝も確認されていない。

竈　東壁の中央部に構築されていたと考えられ，焚口部から煙道部まで78cm，両袖部幅約60cmである。南部分が第458号土坑に壊されており，右袖部や天井部，焚口部の部分は遺存していない。火床部は床面と同じ地山面をそのまま使用し，赤変硬化している。煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

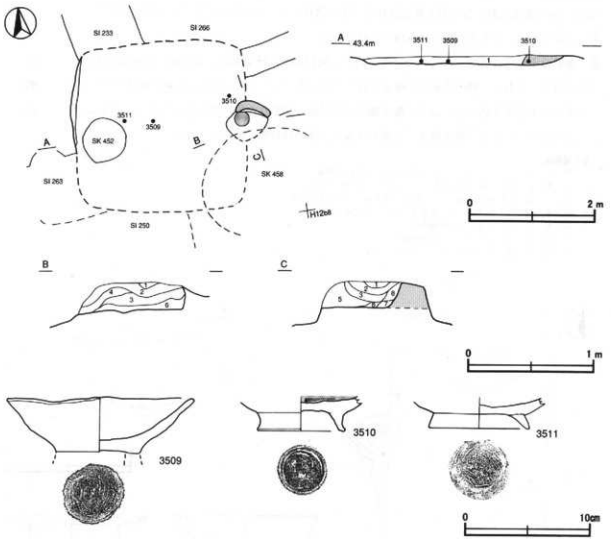
1　黒　褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
3　極暗褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
6　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量
7　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
8　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量

覆土　ローム粒子が均一に堆積している単一層で，自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片269点（坏191，高台付椀５，小皿４，甕69）が中央部の床面と覆土下層から散在した状態で出土している。3509は中央部の床面から出土しており，本跡廃絶時に遺棄されたと考えられる。

所見　高台付椀や小皿，甕の形状から，時期は10世紀後葉と考えられる。なお，当遺跡では古墳時代から平安時代にかけての住居跡が多数確認され，大半が人為堆積の状況を示しているが，10世紀後葉から11世紀前葉に比定される住居跡は自然堆積状況を示すものもあり，集落の変遷を考える上で興味深い。



第571図　第251号住居跡・出土遺物実測図

第251号住居跡出土遺物観察表（第571図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3509	土師器	高台付坏	14.8	(4.6)	－	雲母・長石	にぶい橙	不良	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	中央部床面	80% PL231
3510	土師器	高台付椀	－	(2.8)	[7.0]	雲母	黒褐	普通	体部内面ヘラ磨き	東部下層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3511	土師器	高台付椀	－	(2.5)	7.8	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付けナデ	中央部中層	20%

第254号住居跡（第572図）

位置　調査区北部のG12h6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第255号住居跡を掘り込み，第256号住居に掘り込まれている。

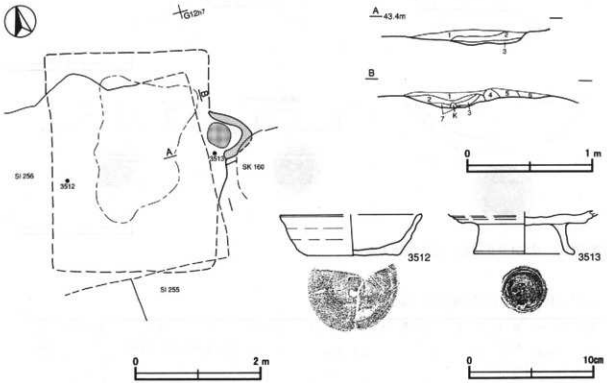
規模と形状　覆土が浅いため平面形状は明確に捉えられないが，主軸方向はN－100°－Eで長軸約3.5m，短軸約2.7mの南北に長い長方形と推定される。壁は遺存していないため立ち上がりは不明である。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。

竈　東壁の中央部に構築されていたと考えられ，焚口部から煙道部まで約96cm，両袖部幅約118cmである。天井部は崩落しており，袖部も基部が確認されただけである。しかし，付近の床面に粘土粒子や砂粒と一緒に火熱を受けた土器片が散在しており，竈廃絶時に意図的に壊された可能性が考えられる。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられているが，焼き締まった感じはなく，煙道は外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　灰　褐　色　砂粒・粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
3　褐　　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
4　灰　黄　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
5　灰　褐　色　ローム粒子・炭化物微量
6　黒　褐　色　ロームブロック炭化物微量
7　黒　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック少量



第572図　第254号住居跡・出土遺物実測図

覆土　遺構確認段階で一部床面が露出した状態で検出されたため，堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器片62点（坏24，高台付椀22，小皿2，甕14），須恵器片3点（坏1，甕2）が竈周辺から中央部にかけて出土しており，竈内には火熱を受けていない坏類の破片が多数確認されている。これらのほとんどは住居廃絶時に投棄されたものと考えられ，図示した3512と3513が相当する。

所見　高台付椀が足高となることや小皿が出土していることなどから，時期は10世紀後葉と考えられる。なお，本跡を掘り込んでいる第256号住居もほぼ同時期ではあるが，土層から判断し，本跡の方が古い住居であると判断した。

第254号住居跡出土遺物観察表（第572図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3512	土師器	坏	(11.0)	3.2	7.2	雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	覆土下層	50%
3513	土師器	高台付椀	－	(3.4)	7.8	雲母・石英	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	底部床面	50%

第255号住居跡（第573図）

位置　調査区北部のG12h6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第274号土坑を掘り込み，第254・256号住居，第160号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.3m，短軸約3.2mの方形で，主軸方向はN－8°－Wである。壁高は23cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，壁際を除いた床面全体がよく踏み固められている。竈前面と中央部と南西コーナー部の床面にわずかなくぼみが2か所確認されている。

竈　北壁を壁外に50cmほど掘り込んで構築されている。天井部は崩落しており，袖部は北東に砂質粘土を貼り付けた痕跡がわずかに確認される程度である。火床部は床面を10cmほど皿状に浅く掘りくぼめて作られており，火床面は赤変している。煙道は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック中量，粘土粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック多量

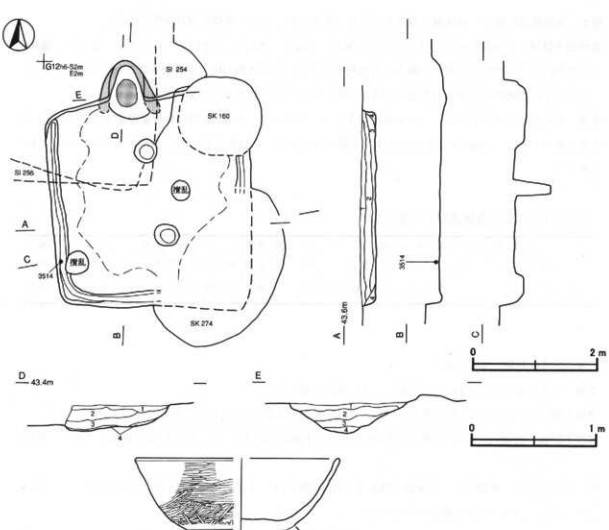
覆土　4層からなり，ロームブロックや炭化物を含み，ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　炭化物中量，ローム粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片208点（坏69，高台付坏17，甕122），須恵器片12点（甕），石器1点（砥石），鉄滓3点が中央部の覆土中層から下層を中心に出土しており，これらは本跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。3514は南東部の覆土下層から出土している。

所見　坏や甕の形状から，時期は9世紀後葉と考えられる。



第573図　第255号住居跡・出土遺物実測図

第255号住居跡出土遺物観察表（第573図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3514	土師器	高台付坏	[16.0]	(6.0)	－	雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ磨き，内面ナデ	南西部下層	40%

第256号住居跡（第574・575図）

位置　調査区北部のG12h6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第254・255号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　覆土が薄く，一部床面が露出した状態で検出されたため平面形状は明確に捉えられないが，N－0°を主軸とする長軸約3.6m，短軸3.0mの長方形と推測される。壁は遺存していないため立ち上がりは不明

である。

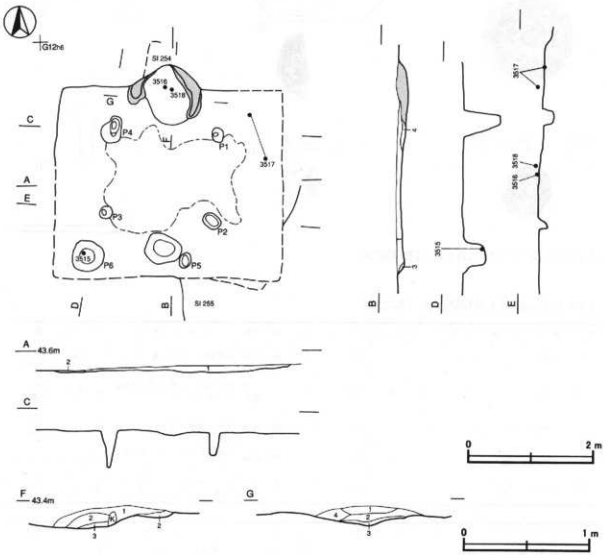
床　ほぼ平坦で，４本の主柱穴の内側がよく踏み固められている。P５付近の床面でわずかなくぼみが確認されているが，詳細は不明である。。

竈　北壁の中央部に構築されていたと考えられ，焚口部から煙道部まで約96cm，両袖部幅約116cmである。天井部は崩落しており，袖部はその痕跡が認められるだけである。火床部には焼土ブロックのほかにロームブロックも多く含まれ，明確に火床面を捉えることはできなかった。また煙道は，上部が削片されているため外傾して立ち上がる様子が若干認められる程度である。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物微量
3　暗　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子・砂粒・粘土ブロック少量

ピット　６か所。主柱穴はP１～P４が相当し，深さは20～48cmである。P５は南壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P６は南西コーナー部に位置し，深さ38cmであるが，性格は不明である。



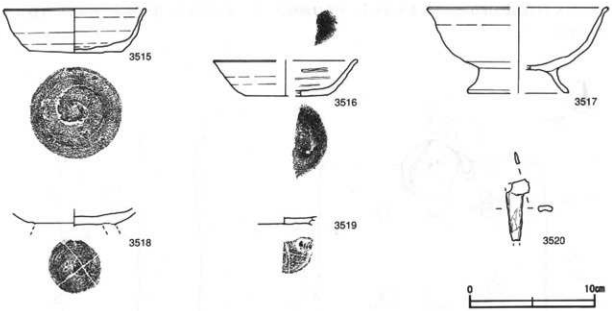
第574図　第256号住居跡実測図

覆土　4層からなり，各層に焼土を含む人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子中量，炭化物・砂粒・粘土ブロック少量
2　極暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
4　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子中量，焼土粒子・砂粒・粘土ブロック少量

遺物出土状況　土師器片277点（坏177，高台付椀17，甕83），須恵器片22点（甕21，甑1）が覆土下層と床面を中心に，ほぼ全域に散在した状態で出土している。3515はP6の覆土下層から出土しているが，土師器甕片や石も一緒に出土しており，完形であるものの投棄された可能性が高い。

所見　土師器甕の口縁端部の形状や坏の形状などから，時期は10世紀後葉と考えられる。なお，当該期の住居跡は本跡の位置する調査区北部に密集しており，集落はさらに調査区域外の北西方向へ広がるものと推測される。



第575号　第256号住居跡出土遺物実測図

第256号住居跡出土遺物観察表（第575図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3515	土師器	坏	11.2	3.5	7.4	雲母	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	P6下層	100% PL232
3516	土師器	坏	[11.2]	2.8	[6.2]	雲母	橙	二次焼成	体部内面ヘラ磨き，底部回転ヘラ切り後，ナデ	竈火床部	20% 刻書「□」
3519	土師器	坏	－	(0.7)	－	雲母	にぶい橙	普通	底部の調整不明	覆土中	5% ヘラ記号「+」
3517	土師器	高台付椀	[14.2]	7.8	[8.0]	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	北東部中朝	30%
3518	土師器	高台付椀	－	(1.2)	－	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	竈火床部	5% ヘラ記号「+」

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3520	不明	(4.8)	(1.3)	(0.4)	(4.9)	鉄	円状に屈曲するが，全体的に扁平である。	覆土中	

第257号住居跡（第576～583図）

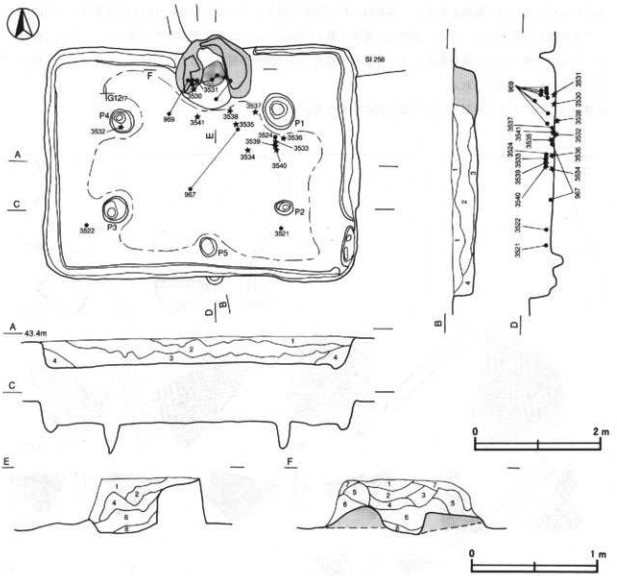
位置　調査区北部のG12f7区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第258号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸5.0m，短軸3.8mの東西に長い長方形で，主軸方向はN－8°－Eである。壁高は30～38cmで，ほぼ直立して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，中央部と竈西側がよく踏み固められており，壁溝が周回している。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで84cm，袖部幅96cmで，壁外への掘り込みは20cmである。土層断面図中，第6層が粘土や焼土のブロックを多く含んでおり，天井部の崩落土と考えられる。左袖部は2枚の丸瓦を芯材としてその周囲に砂質粘土を貼り付けて構築されているが，右袖部は遺存状態が悪く，また瓦も確認されていない。しかし，竈周辺から瓦が確認されており，東袖部も西袖部同様瓦を芯材として使用していたと想定される。火床部は，床面を約20cmほど掘りくぼめた後，焼土混じりのローム土を床面と同じ高さまで埋め戻して使用している。煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。



第576図　第257号住居跡実測図

竈土層解説
1 黒 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子ブロック少量
2 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
3 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量
4 黒 褐 色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量
5 極 暗 褐 色 ロームブロック中量
6 褐 灰 色 粘土ブロック多量，焼土ブロック中量
7 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
8 灰 褐 色 粘土粒子多量，焼土ブロック少量

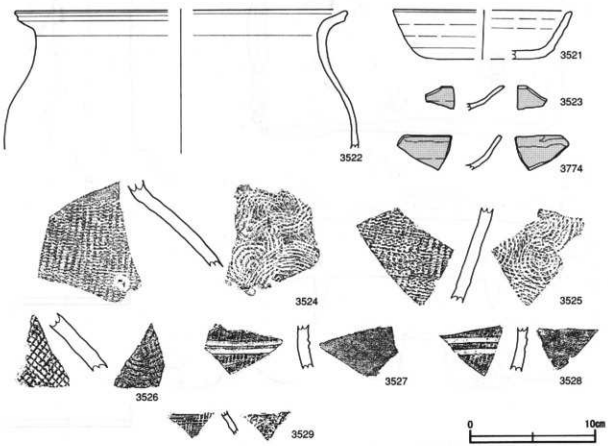
ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さは32～40cmである。P5は深さ21cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4層からなり，各層にロームブロックを含む人為堆積である。

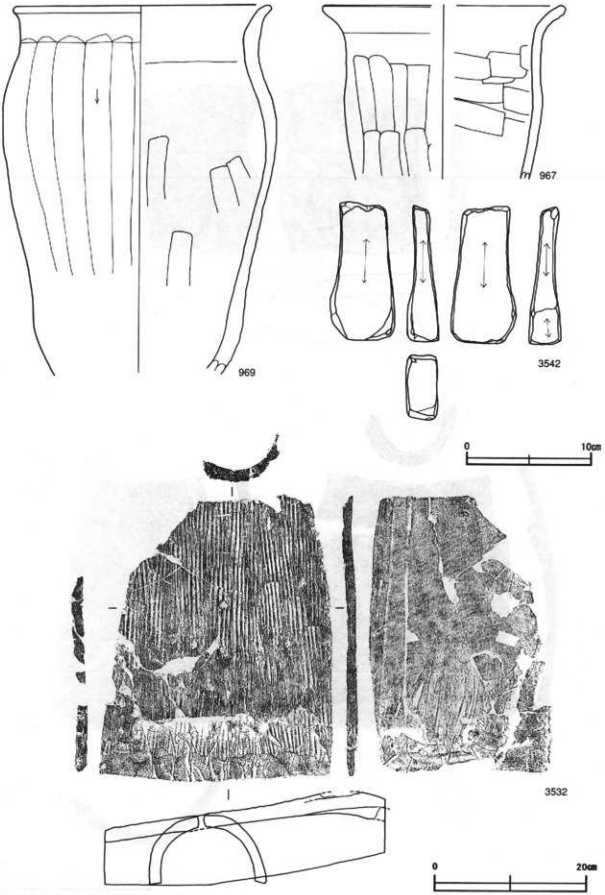
土層解説
1 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
2 黒 褐 色 焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
3 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量，粘土粒子微量
4 暗 褐 色 粘土粒子少量，ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片1047点（坏153，高台付坏3，甕891），須恵器片61点（坏17，甕40，蓋4），灰釉陶器片3点（長頸瓶），緑釉陶器片2点（段皿，椀），石器1点（砥石），瓦片39点，鉄製品1点（不明），礫1点（被熱痕）が竈周辺から中央部を中心に散在しているが，瓦を除いて完形遺物はなく，すべて破片である。3530と3531は竈左袖部の芯材として使用された状況で出土しているが，中央部の床面にも多数の瓦（3532～3541）が確認されている。これらは火熱を受けているものが多く，竈の芯材あるいは補強材として使用されたものと推測されるが，瓦の出土範囲が広く，一部重ねられた状態で出土しているものもあり，本跡廃絶時に意図的に壊した可能性が考えられる。また，3521は，覆土下層から出土しているが，埋め戻す段階で埋土とともに混入していたものと考えられ，灰釉陶器片3点と緑釉陶器片2点は覆土上層から出土しており，本跡廃絶後，埋没過程で投棄されたと考えられる。

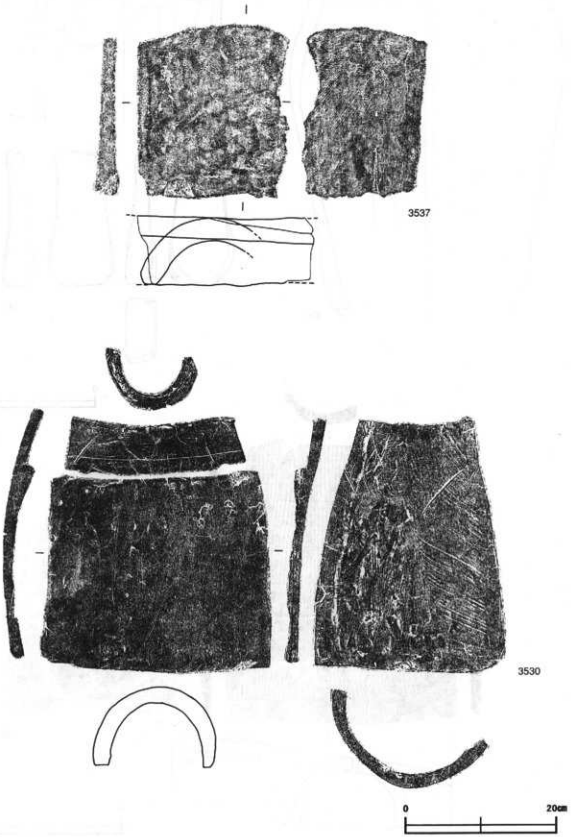
所見 坏や甕の形状から見て，時期は8世紀中葉と考えられる。



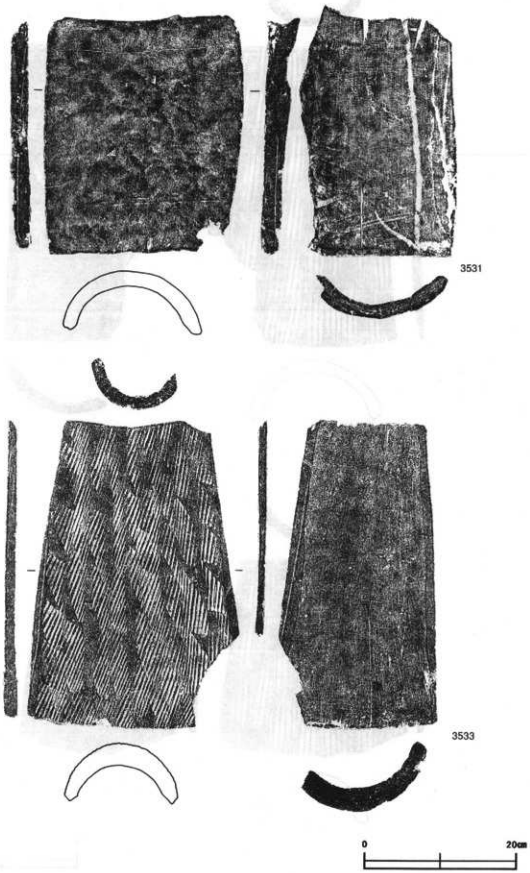
第577図 第257号住居跡出土遺物実測図(1)



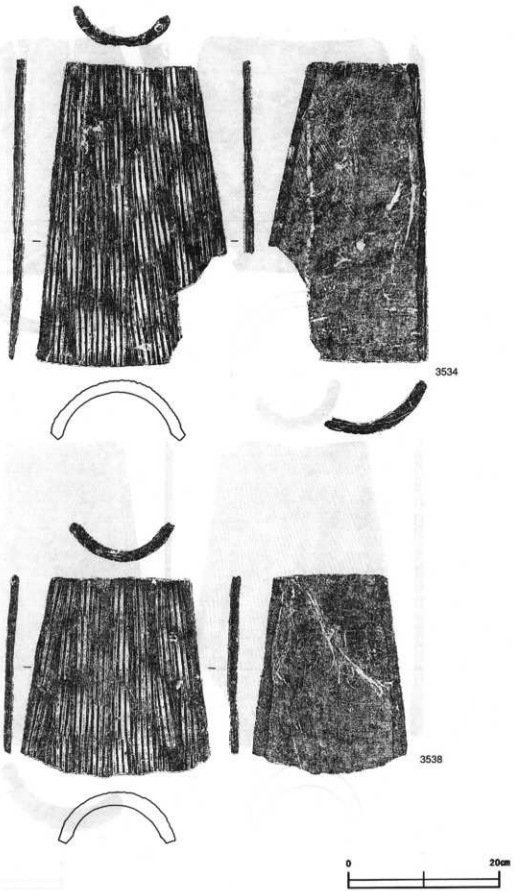
第578図　第257号住居跡出土遺物実測図(2)



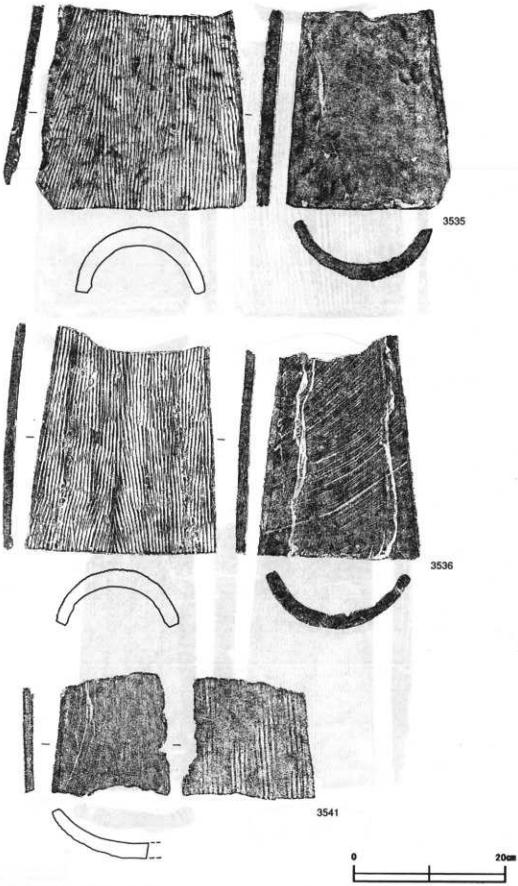
第579図　第257号住居跡出土遺物実測図(3)



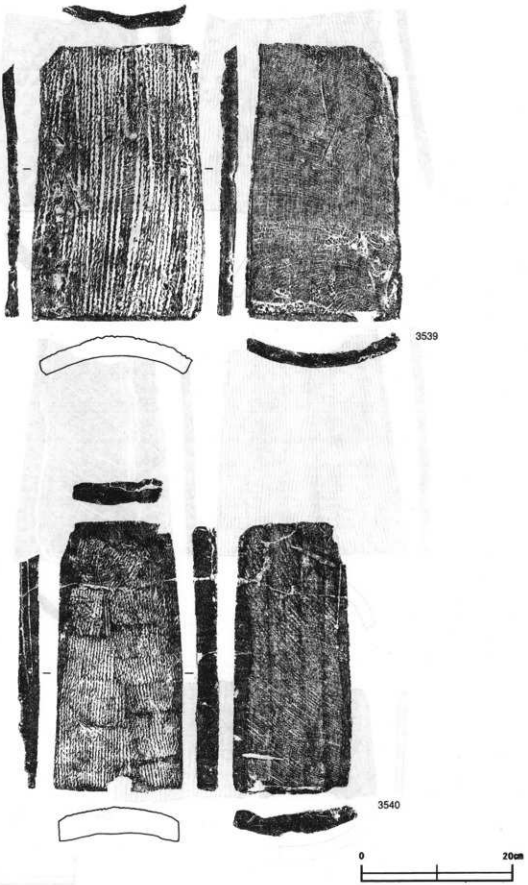
第580図　第257号住居跡出土遺物実測図(4)



第581図　第257号住居跡出土遺物実測図(5)



第582図　第257号住居跡出土遺物実測図(6)



第583図　第257号住居跡出土遺物実測図(7)

第257号住居跡出土遺物観察表（第577～583図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3521	須恵器	坏	[14.0]	3.9	[8.4]	長石	灰白	普通	体部内・外面ロクロナデ	南東部下層	40%
3522	土師器	甕	[26.0]	(11.0)	－	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面ロクロナデ	覆土下層	20%
969	土師器	甕	20.2	(29.5)	－	長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ削り，口縁部横ナデ	竈左袖部	60%
967	土師器	甑	[19.0]	(13.9)	－	長石・石英	明褐	普通	口縁部横ナデ	中央部床面	10%
3523	緑釉陶器	段皿	－	(1.9)	－	緻密	灰白・淡黄	普通	口縁部内・外面ロクロナデ	北東部上層	20%
3774	緑釉陶器	椀	－	(2.7)	－	緻密	緑釉	普通	体部ロクロナデ	覆土上層	5%
3524	須恵器	甕	－	(7.1)	－	長石	灰白	普通	体部外面格子目叩き，内面同心円状の当て具痕あり	北東部中層	5%
3525	須恵器	甕	－	(7.5)	－	長石	黄白	普通	体部外面格子目叩き，内面同心円状の当て具痕あり	北西部下層	5%
3526	須恵器	甕	－	(5.3)	－	長石	灰	普通	体部外面格子目叩き，内面同心円状の当て具痕あり	覆土中	5%
3527	須恵器	甕	－	(3.6)	－	長石・石英	灰	普通	頸部外面二条の沈線，格子目叩き	北西部中層	5%
3528	須恵器	甕	－	(3.6)	－	砂粒	褐灰	普通	頸部外面二条の沈線，格子目叩き	覆土中	5%
3529	須恵器	甕	－	(1.2)	－	砂粒	灰	普通	体部外面格子目叩き，内面刷毛調著	南西部下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質および特徴	出土位置	備考
3532	軒丸瓦	(38.0)	17.7	3.2	(2,900)	凸面平行叩き，凹面布目痕，釘孔径0.6cm	中央部床面	60% 二次焼成
3537	軒丸瓦	(23.8)	(15.3)	2.8	(1,900)	凸面ヘラ削り，凹面布目痕	中央部床面	40% 二次焼成
3530	丸瓦	33.0	20.7	3.5	3,480	凸面ヘラ削り，凹面布目痕	竈左袖部	100% 二次焼成
3531	丸瓦	32.5	18.7	2.2	(2,840)	凸面ヘラ削り，凹面布目痕	竈左袖部	70% 二次焼成
3533	丸瓦	41.4	(19.2)	3.5	(3,600)	凸面平行叩き，凹面布目痕	中央部床面	90% 二次焼成
3534	丸瓦	40.8	(19.3)	1.7	(2,270)	凸面平行叩き，凹面布目痕	中央部床面	80%
3535	丸瓦	(27.0)	17.5	1.7	2,220	凸面平行叩き，凹面布目痕	中央部床面	70% 二次焼成
3536	丸瓦	(30.1)	18.4	2.2	(2,150)	凸面平行叩き，凹面布目痕，糸切り痕残す	中央部床面	70% 二次焼成
3538	丸瓦	(26.5)	(17.0)	2.0	(1,690)	凸面平行叩き，凹面布目痕	中央部床面	60%
3539	熨斗瓦	37.3	21.2	2.6	3,310	凸面縄目叩き，凹面布目痕	中央部床面	95% 二次焼成
3540	熨斗瓦	36.2	16.4	3.3	3,030	凸面縄目叩き，凹面布目痕	中央部床面	95% 二次焼成
3541	平瓦	(16.0)	(16.0)	2.2	(820)	凹面布目痕，凸面平行叩き	中央部床面	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質および特徴	出土位置	備考
3542	紡石	(11.3)	5.2	2.5	177.7	凝灰岩，断面は方形を呈し，規格性が強い	覆土中	

第259号住居跡（第584図）

位置　調査区北部のH12e5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第248号住居跡を掘り込み，第247号住居，第15号溝に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.1m，短軸約2.7mの長方形で，主軸方向はN－2°－Eである。西壁高は16cmで，ゆるやかに外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められ，床面全体に焼土ブロックが散在している。

竈　北壁中央部付近の床面に砂質粘土が散在し，竈があったことが想定されるが，第15号溝に掘り込まれており，遺存していない。

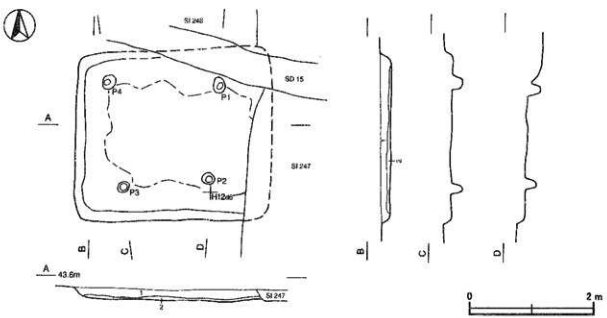
ピット　4か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さは16～20cmである。

覆土　2層からなり，焼土ブロックや炭化粒子を含む人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況　土師器片33点（坏3，甕30），須恵器片1点（甕）が覆土中から出土しているが，床面から確認された土器片はほとんどない。これらは投棄されたと考えられ，また，破断面が摩滅している土器は，本跡廃絶後の埋め戻しの段階で埋土とともに混入したものと考えられる。

所見　床面から焼土が検出され，土器類などはあらかじめ持ち出されていることから見て，住居廃絶に伴った焼失住居と考えられる。なお，出土土器が平安時代の所産と考えられることや，近接する第295号住居跡と住居形態や主軸方向が近似することから，時期は9世紀代の可能性が高い。



第584図　第259号住居跡実測図

第262号住居跡（第585図）

位置　調査区北部のG12a0区に位置し，平坦部に立地している。

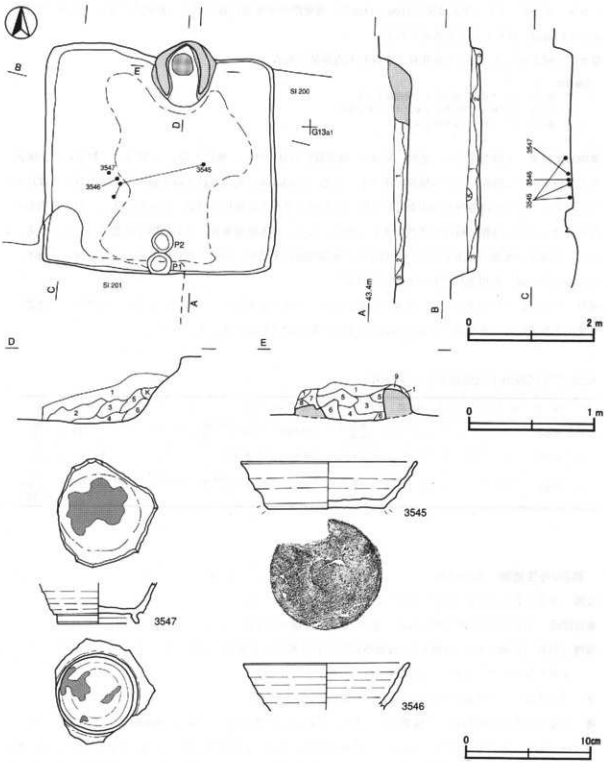
重複関係　第200号住居跡を掘り込み，第201号住居に掘り込まれている。

規模と形状　長軸・短軸ともに3.6mの北西コーナー部が若干張り出した方形で，主軸方向はN－3°－Eであ

る。壁高は2～27cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であり，竈の前面から出入り口施設にかけ硬化面が広がっている。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで100cm，袖部幅98cm，壁外への掘り込みは24cmである。遺存状態が悪く，袖部は基部が遺存している程度である。火床部は床面と同じ地山面をそのまま使用しており，火床面は赤変硬化している。煙道は外傾して立ち上がっている。



第585図　第262号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土ブロック中量，炭化粒子・粘土ブロック少量
2 暗 褐 色 焼土粒子・粘土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
3 暗 褐 色 焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物・粘土ブロック少量
4 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子中量，ロームブロック・粘土ブロック少量
5 灰 褐 色 焼土ブロック・粘土ブロック中量，炭化物少量，ロームブロック微量
6 暗 赤 褐 色 焼土ブロック・炭化物中量，粘土粒子少量
7 灰 褐 色 焼土ブロック中量，炭化物少量，ロームブロック微量
8 灰 褐 色 粘土ブロック多量，焼土粒子少量，ロームブロック微量
9 灰 褐 色 焼土ブロック中量，粘土粒子少量，ローム粒子・炭化物微量

ピット 2か所。P1・P2は深さ21cm・44cmで，南壁際の中央部に竈に対し一直線上に並んで位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層からなり，焼土や炭化粒子を含む人為堆積である。

土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
3 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片27点（甕24，坏3），須恵器片31点（坏16，甕12，蓋3），礫3点（被熱痕）が床面と覆土下層を中心に散在している状態で出土している。3545は床中央部の径2mの範囲内で検出された破片が接合したもので，3546は竈内から中央部にかけて広範囲に点在する破片が接合したものである。他に竈内から火熱を受けていない坏類の破片が多数出土しており，これらは本跡廃絶後，早い段階で投棄されたものと考えられる。中央部の床面から出土している3547は，底部内面に朱墨痕，外面に墨痕が認められ，外面に擦痕も見られることから硯に転用されたものと考えられる。

所見 竪穴部に主柱穴を持たず，出入り口施設にピットを2か所用いているだけであり，供膳具に須恵器が多く使用されていることや出土土器の形状から見て，時期は8世紀中葉と考えられる。

第262号住居跡出土遺物観察表（第585図）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3545	須恵器	坏	13.9	3.7	9.2	雲母・長石・石英	明赤褐灰	普通	底部回転ヘラ切り後，二方向のヘラ削り	中央部下層	80% PL232
3546	須恵器	坏	13.1	(3.7)	－	長石	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	竈中央部下層	40%
3547	須恵器	高台付坏	－	(3.2)	6.4	長石	褐灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	中央部床面	20% 転用硯，朱墨・墨の痕跡あり

第264号住居跡（第586図）

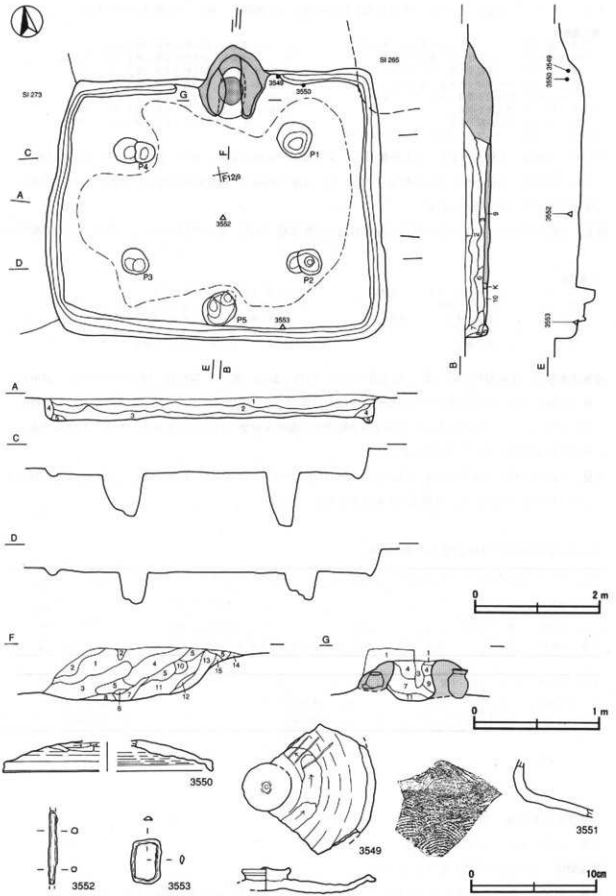
位置 調査区北部のF12j9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第273号住居跡を掘り込み，第265号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.4m，短軸4.3mの東西に長い長方形で，主軸方向はN－15°－Eである。壁高は7～35cmで，東壁が外傾しているほかはほぼ直立して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められ，壁溝が周回している。

竈 北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで96cm，袖部幅92cm，壁外への掘り込みは50cmである。天井部は崩落しており，土層断面図中の第10～13層が崩落土に相当する。両袖部には土師器甕が芯材として使用され，左袖部は逆位で，右袖部は正位で据えられている。火床部は地山を若干掘りくぼめて



第586図　第264号住居跡・出土遺物実測図

使用しており，赤変硬化している。煙道は火床部から緩やかに外傾した後，急な傾斜で立ち上がっている。

竪土層解説

1 黒 褐 色 ローム ブロック・焼土ブロック少量
2 極 暗 褐 色 ローム ブロック・焼土粒子少量
3 暗 褐 色 ローム粒子中量，焼土ブロック少量
4 褐 色 粘土ブロック多量，焼土ブロック少量
5 にぶい赤褐色 焼土粒子多量，粘土ブロック少量
6 黒 褐 色 焼土粒子中量
7 褐 色 ローム粒子多量
8 黒 色 ローム ブロック中量，焼土ブロック少量
9 にぶい赤褐色 粘土粒子多量，焼土粒子中量
10 にぶい赤褐色 粘土粒子多量，焼土ブロック少量
11 暗 赤 褐 色 粘土粒子多量，焼土ブロック中量
12 暗 赤 褐 色 粘土粒子多量，焼土ブロック中量
13 暗 赤 褐 色 粘土粒子中量，炭化物少量
14 暗 褐 色 炭化粒子少量，焼土ブロック微量
15 灰 褐 色 粘土粒子多量，焼土ブロック少量

ピット 5か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さは40～68cmである。P2～P4では柱の圧痕が2か所認められ，掘え替えが行われたことが想定される。P5は深さ26cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 10層からなり，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第9層はロームを主体とした貼床部である。

土層解説

1 黒 色 ローム ブロック・焼土ブロック微量
2 黒 色 ローム ブロック微量
3 黒 色 ローム粒子・焼土ブロック微量
4 黒 色 ローム粒子中量
5 黒 色 ローム粒子微量
6 黒 褐 色 ローム粒子少量
7 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土ブロック微量
8 黒 褐 色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
9 黒 色 ローム ブロック・焼土粒子少量
10 暗 色 ローム ブロック微量

遺物出土状況 土師器片44点（甕），須恵器片62点（坏47，蓋12，甕3），炭化材，礫10点（被熱痕）が中央部の覆土中層と下層から主に出土しているが，床面から確認された遺物は少なく，図示した遺物も覆土上層から下層にかけて出土したものである。大部分の遺物は住居廃絶後投棄されたものや流入したものが主体であり，本跡に伴出遺物は少ないものと考えられる。

所見 本跡は主柱穴の圧痕から柱の掘え替えが行われたと考えられるが，床面に拡張した痕跡は認められなかった。坏や甕の形状から，時期は8世紀中葉と考えられる。

第264号住居跡出土遺物観察表（第586図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3549	須恵器	蓋	[17.4]	2.0	－	長石	灰	不良	天井部ヘラ削り	北壁際下層	25% 器形歪む
3550	須恵器	蓋	[16.6]	(2.4)	－	長石	灰	普通	天井部ヘラ削り	北壁際下層	20%
3551	須恵器	甕	－	(4.6)	－	雲母・長石	灰黄褐	普通	体部外面同心円状の叩き	北西部下層	

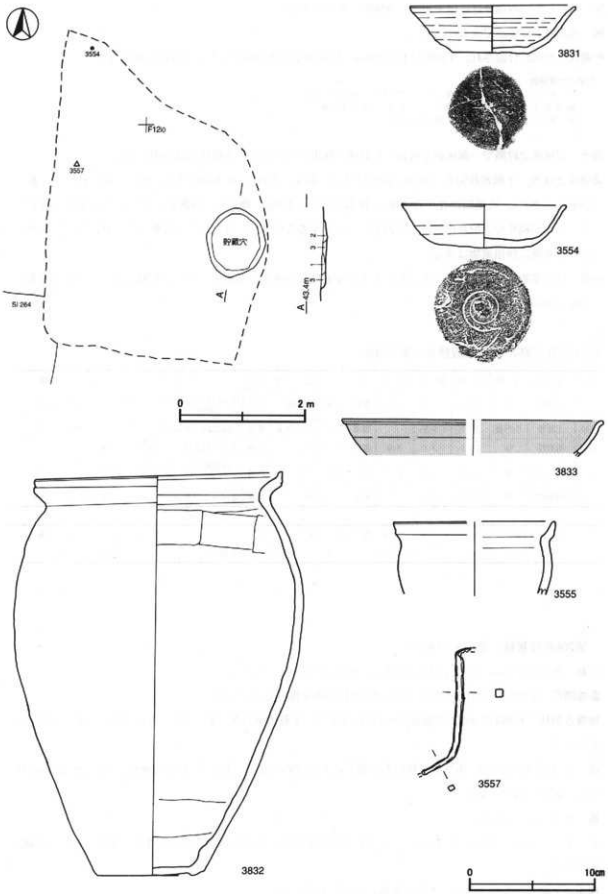
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3552	棒状製品	(5.8)	0.7	0.5	3.7	鉄	断面方形	中央部下層	
3553	不明	3.5	2.3	0.3	5.5	銅	巻金具か	南壁際床面	

第265号住居跡（第587図）

位置 調査区北部のF12i0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第264号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北部から東部にかけて攪乱を受けているため，全体的な規模及び形状は不明である。



第587図　第265号住居跡・出土遺物実測図

床　遺存している部分はほぼ平坦で，全体的に軟弱である。

竈　撹乱により確認できなかった。

貯蔵穴　東部に付設され，平面形は長径110cm，短径90cmの楕円形を呈し，深さは8cmと浅い。

貯蔵穴土層解説

1　黒　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
2　暗褐褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量

覆土　遺構確認段階で一部床面が露出した状態で検出されたため，堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器片92点（坏38，高台付坏9，蓋4，甕41），須恵器片26点（坏12，高台付坏3，蓋4，長頸瓶1，甕6），灰釉陶器片1点（椀），鉄製品2点（不明），礫1点（被熱痕）が，主に北部から出土している。大半が細片で，撹乱部付近から出土している土器片が多く，ほとんどが投棄されたり混入したものと考えられ，本跡に伴出遺物は少ない。

所見　伴出遺物が少なく不明であるが，大半が平安時代の所産であることから，時期は大きく9世紀後葉から10世紀前葉の間と推測される。

第265号住居跡出土遺物観察表（第587図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3554	土師器	坏	12.9	3.4	7.3	雲母・石英	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後，二方向のヘラ削り	北部下層	60%
3555	土師器	小形甕	[12.7]	(5.9)	－	雲母・長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面ロクロナデ	南部下層	10%
3831	須恵器	坏	13.1	3.7	6.0	雲母・石英	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	85%
3832	土師器	甕	19.4	31.8	8.3	長石・石英	赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部内面ヘラナデ	覆土中	90%
3833	灰釉陶器	椀	[22.6]	(2.8)	－	緻密	黄灰	普通	体部ロクロ整形	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3557	不明	(10.2)	0.3～0.7	0.7	(14.4)	鉄	断面四角形で先端尖る	西部床面	

第266号住居跡（第588・589図）

位置　調査区中央部のG12j7区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第231A・231B・233・238・253号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約3.6m，短軸約3.0mの長方形で，主軸方向はN－15°－Wである。壁高は約18cmで，ほぼ直立する。

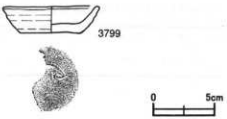
床　ほぼ平坦であるが，南部には楕円形の掘り込みが認められる。また，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

竈　検出されていない。

ピット　2か所。深さ約28～36cmで，いずれも形状から柱穴と考えられるが，位置が不規則であり，詳細は不明である。

覆土　6層からなり，ブロック状に堆積した人為堆積である。

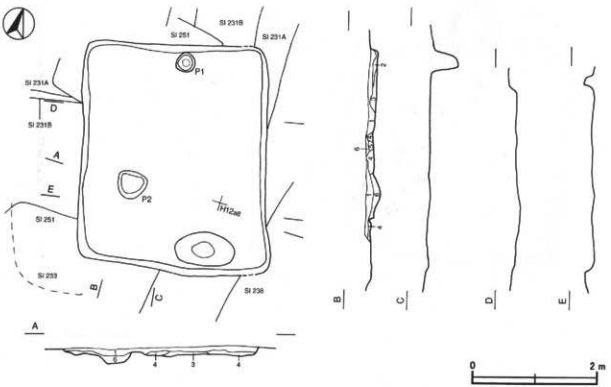
土層解説
1 黒 褐 色 ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
2 黒 褐 色 ロームブロック多量，焼土ブロック・炭化粒子少量
3 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子少量，焼土ブロック微量
4 褐 色 ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
5 黒 褐 色 ロームブロック多量，炭化粒子少量，焼土ブロック微量
6 黒 褐 色 ロームブロック多量，炭化粒子少量



第588図　第266号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片41点（坏10，高台付椀１，小皿５，甕25），須恵器片５点（甕），灰釉陶器片１点（椀）が，主に覆土中から出土している。大半は破断面が摩滅した細片で，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したと推測され，伴出した土器は，床面から出土した小皿片だけである。

所見　出土した小皿はいずれも口径が９cm未満で小形化しており，時期は11世紀前半と考えられる。また，当遺跡では，本跡と規模や形状が類似した遺構が数軒確認されているが，その大半は11世紀代以降に位置付けされる。これらの遺構の特徴として竈が検出されていないことや伴出遺物がほとんど確認されないことが挙げられるが，床面については硬化している場合と，それほど硬化していない場合とに二分される。当該期の住居から置き竈片が検出されている例があることから，硬化した床面を持つ場合は住居跡と判断したが，本跡のように硬化していない場合は板床などの床材が設置された住居も想定され，居住施設以外の目的で建てられた可能性もあると想定される。



第589図　第266号住居跡実測図

第266号住居跡出土遺物観察表（第588図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3799	土師器	小皿	[7.5]	2.1	4.7	雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	覆土中	40%

第267号住居跡（第590～592図）

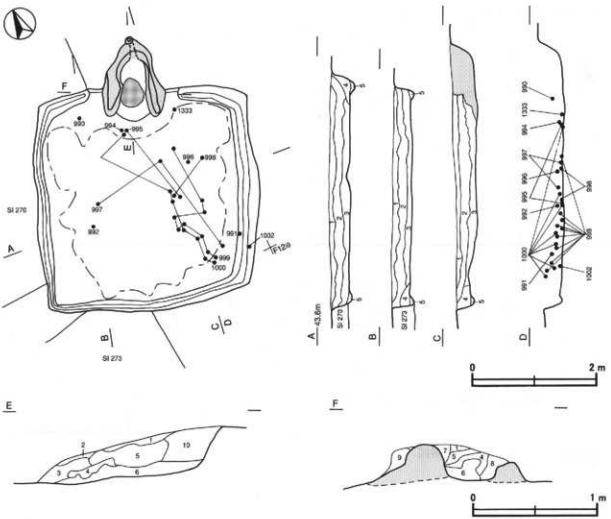
位置　調査区北部のF12h8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第270・273号住居跡を掘り込んでいる。

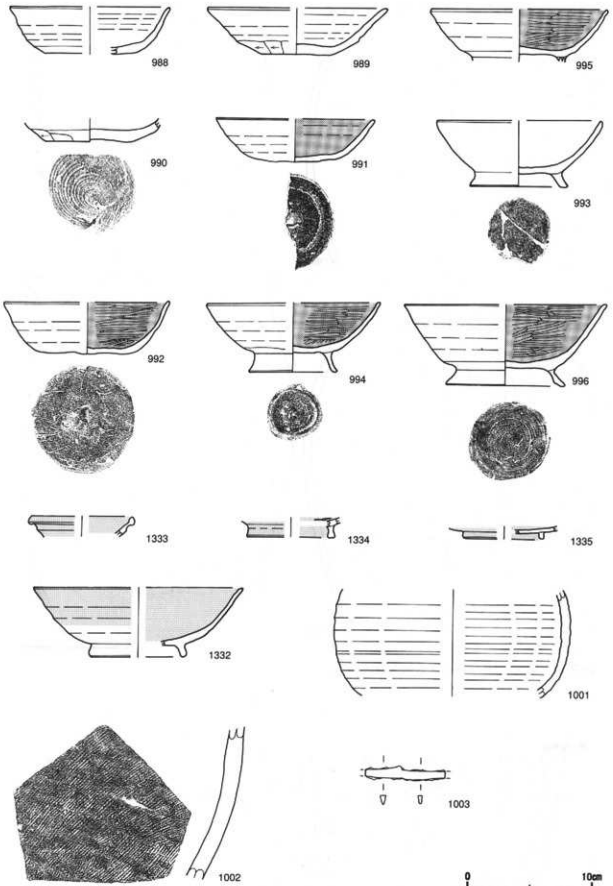
規模と形状　一辺が3.5m前後の方形で，主軸方向はN－19°－Eである。壁高は25～30cmで，やや外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められ，壁溝は周回している。

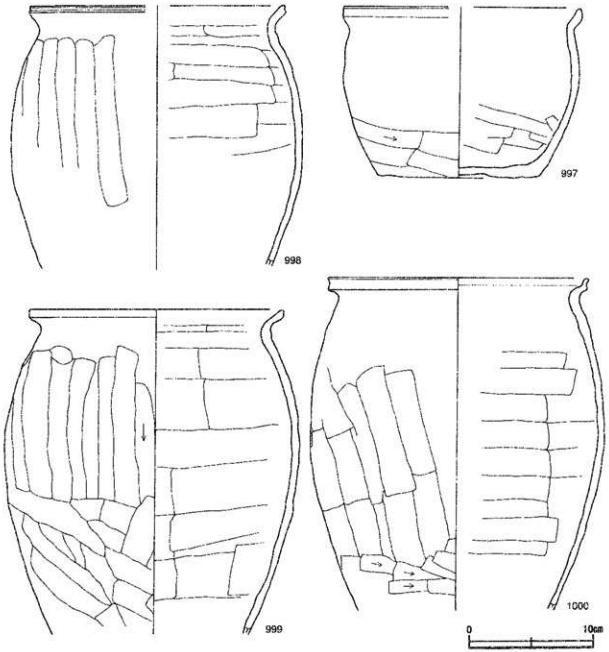
竈　北壁の中央部に付設されており，規模は焚口部から煙道部まで約130cm，袖部幅約100cm，壁外への掘り込みは約80cmである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は急な傾斜で立ち上がっている。



第590図　第267号住居跡実測図



第591図　第267号住居跡出土遺物実測図(1)



第592図　第267号住居跡出土遺物実測図(2)

竈土層解説

1　褐　灰　色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック多量，ローム粒子・炭化粒子中量
2　黒　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　焼土ブロック・砂粒中量，ロームブロック・炭化粒子少量
4　極暗赤褐色　焼土ブロック多量，砂質粘土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
5　暗　赤　褐　色　砂質粘土ブロック多量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
6　極暗赤褐色　砂質粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
7　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック多量，炭化粒子少量
8　暗　褐　色　ロームブロック多量，焼土ブロック中量
9　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
10　灰　赤　色　焼土ブロック多量，ロームブロック・炭化物少量

覆土　5層からなり，各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化物微量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量，砂質粘土ブロック微量
3　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
4　暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　出土遺物は土師器片1214点（坏510，高台付坏24，甕670，鉢10），須恵器片65点（坏36，高台付坏3，瓶2，甕18，甑3，蓋3），灰釉陶器片2点（椀1，長頸瓶1），緑釉陶器片2点（椀1，皿1），鉄製品1点（刀子），石器3点（砥石），焼成粘土塊19点，礫17点がほぼ全域から散在した状態で出土している。988・989は竈内の覆土中，990は北西部の覆土中層，991は南東部の覆土中層，992は西部の覆土下層，994は竈前の覆土下層，1001は覆土中，1002は南東部の床面，1003は覆土中，1332・1334・1335は竈内の覆土中からそれぞれ出土している。また，993は南部の覆土中，995は竈前と中央部の床面，996は中央部の覆土下層と覆土中，997は中央部の床面と西部・南東部の覆土下層，998は中央部と東部の床面から出土した破片がそれぞれ接合したものである。さらに，999・1000は，南東部の覆土上層から竈前の床面にかけて散在した状態で出土した数点の破片が接合したものである。これらの遺物は，ほとんどが住居廃絶に伴って遺棄または投棄されたものと考えられる。1332～1335の灰釉・緑釉陶器片は，いずれも猿投産で，黒笹90号窯式併行と考えられる。

所見　本跡は南東部の床面に焼土が薄く広がっており，その中から出土した土器は二次焼成を受けていることから，廃絶に伴う焼失住居と想定される。時期は，出土土器の形状から10世紀前葉と考えられる。

第267号住居跡出土遺物観察表（第591・592図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
988	土師器	坏	[12.7]	3.7	[7.0]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ，底部回転ヘラ切り	竈内覆土中	30%
990	土師器	坏	－	(1.9)	7.0	雲母・石英・白色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り，体部下端ヘラ削り	北西部中層	60%
991	土師器	坏	[12.6]	3.4	6.0	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ	南東部中層	40%
992	土師器	坏	[12.1]	4.2	8.1	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ヘラ磨り	西部下層	50%
993	土師器	高台付椀	[13.1]	5.3	[7.8]	雲母・赤色粒子	橙	普通	器面荒れ，底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	覆土中	40%
994	土師器	高台付椀	[13.8]	5.5	6.8	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	竈前下層	50%
995	土師器	高台付椀	[14.0]	(4.1)	－	雲母・石英	にぶい赤橙	普通	ロクロナデ	中央部床面	30%
996	土師器	高台付椀	16.0	6.5	9.8	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	中央部下層	70%
997	土師器	鉢	[18.9]	13.5	12.8	雲母・石英	灰白	普通	底部ヘラ削り，口縁部横ナデ	中央部床面	60%
998	土師器	甕	[20.0]	(20.9)	－	雲母・石英・赤色粒子	明褐	普通	体部内面ナデ，口縁部横ナデ	中央・東部床面	20%
999	土師器	甕	20.0	(25.8)	－	雲母・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内面ナデ，口縁部横ナデ	南東・中央部上層	60%
1000	土師器	甕	20.6	(26.4)	－	雲母・石英	にぶい褐	普通	口唇部外方へつまみ上げ	東京中央部上層	40%
989	須恵器	坏	[12.4]	3.7	5.6	長石・石英	にぶい橙	二次焼成	ロクロナデ，体部下端ヘラ磨り	竈内覆土中	40%
1001	須恵器	瓶類	－	(8.5)	－	長石・石英	黄灰	普通	ロクロナデ	覆土中	10%
1002	須恵器	甕	－	(12.3)	－	長石・石英	黄灰	普通	体部外面平行叩き	南東部床面	5％
1332	灰釉陶器	椀	[16.6]	5.4	[7.6]	緻密	灰黄	良好	ロクロナデ	竈内覆土中	40%猿投産
1333	灰釉陶器	長頸瓶	[8.4]	(1.6)	－	緻密	灰黄	良好	ロクロナデ	北部床面	5％猿投産

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1334	緑釉陶器	椀	-	(1.6)	[6.9]	緻密	明灰黄	良好	ロクロナデ，内面ヘラ磨き	竈内覆土中	5%強接産
1335	緑釉陶器	皿		(1.0)	[6.2]	緻密	灰	良好	ロクロナデ，内面ヘラ磨き	竈内覆土中	5%強接産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1003	刀子	(6.4)	1.0	0.4	(6.7)	鉄	切先・茎尻欠損，背関	覆土中	

第269号住居跡（第593図）

位置　調査区北部のG13f8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第118・268号住居跡を掘り込み，第350号土坑，第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.5m，短軸約2.4mの長方形で，主軸方向はN－104°－Eである。壁高は5～17cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，硬化面は確認されなかった。

竈　東壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで80cm，袖部幅120cm，壁外への掘り込みは44cmである。天井部は崩落して，袖部も遺存状態が悪く，壁面に貼り付けられた白色粘土と砂粒を主体とする灰褐色土が，その痕跡として残っているだけである。火床部は浅い皿状を呈しているが，焼き締まった感じはなく，火床面には火熱を受けて赤変している土師器坏が重なり合って出土しており，支脚として使用されたものと考えられる。煙道は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　炭化物中量，ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・炭化物少量

覆土　3層からなり，各層に焼土ブロックを含む人為堆積である。

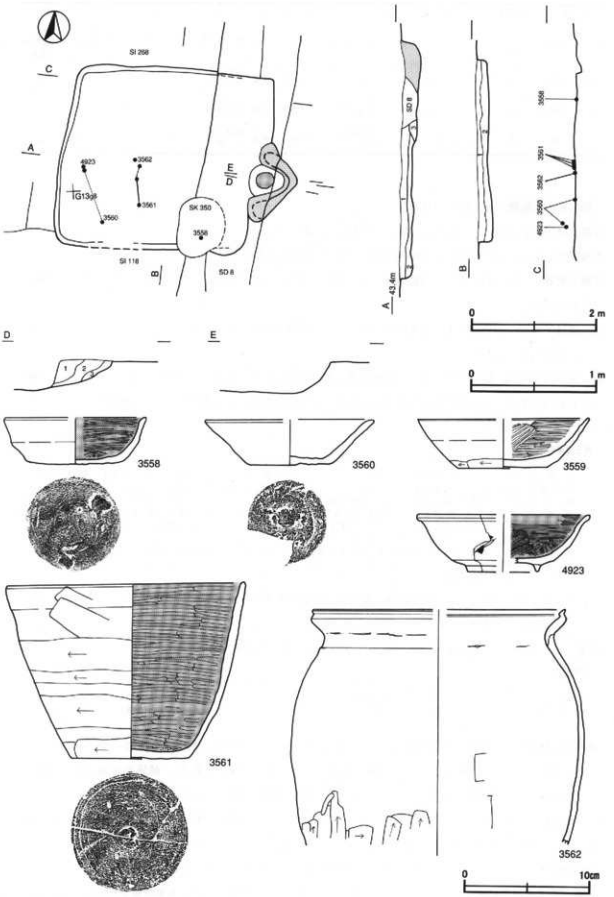
土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片221点（坏41，高台付坏1，鉢10，甕169），須恵器片29点（坏25，高台付坏1，甕3），灰釉陶器片1点（瓶）が南西部の覆土中層から下層を中心に出土しており，本跡廃絶後に投棄されたと考えられ，3558～3561が相当する。3562は中央部床面から出土しているものの，残存部が少なく投棄された可能性が高い。

所見　本跡は，床が軟弱であることや竈の火床部に使用した痕跡があまり見られないことなどから，存続期間は短かったと推測される。時期は，出土遺物の形状から9世紀後葉と考えられる。

第269号住居跡出土遺物観察表（第593図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3558	土師器	坏	[11.0]	3.7	7.9	雲母	にぶい赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き	南西部下層	70% PL232
3559	土師器	坏	[13.4]	3.9	[7.0]	雲母・長石	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き	南西部下層	45%



第593図　第269号住居跡・出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4923	土師器	高台付椀	[13.6]	4.6	[6.0]	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	底部切り離し後，高台貼り付け	西部下層	40% 体部外面墨痕あり
3580	須恵器	坏	[13.1]	3.4	6.1	長石	にぶい黄	普通	底部回転ヘラ切り後，二方向のヘラナデ	西部下層	50%
3561	土師器	鉢	15.5	14.0	9.5	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り	西部下層	95% PL232
3562	土師器	甕	[20.0]	(18.6)	－	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ，外面下位ヘラ削り	中央部床面	30%

第270号住居跡（第594・595図）

位置　調査区北部のF12h8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第267・272号住居，第106号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　長軸が約4.2m，短軸が約3.9mのほぼ方形で，主軸方向はN－5°－Wである。壁高は28cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。煙道は西部で壁下を巡っていることから，本来は周回していたものと考えられる。

竈　北壁の中央部に付設されており，規模は焚口部から煙道部まで約120cm，袖部幅約150cm，壁外への掘り込みは約40cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用し，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量
3　暗赤褐色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
4　暗赤褐色　粘土粒子中量，焼土ブロック・砂粒少量
5　黒褐色　粘土粒子・灰中量，焼土ブロック少量，炭化物微量
6　灰褐色　焼土粒子中量，砂質粘土ブロック少量，炭化粒子微量
7　黒褐色　砂質粘土ブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
8　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量，炭化粒子微量
9　灰褐色　砂質粘土ブロック多量，焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
10　褐灰色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
11　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
12　暗褐色　ローム粒子・砂粒少量，焼土粒子微量
13　褐色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土ブロック少量
14　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土ブロック少量，炭化粒子微量
15　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化物微量
16　黒褐色　焼土粒子中量

ピット　2か所。P1・P2は深さ30cm・35cmで，形状と配置から主柱穴と考えられるが，重複のため対応するピットは認められない。

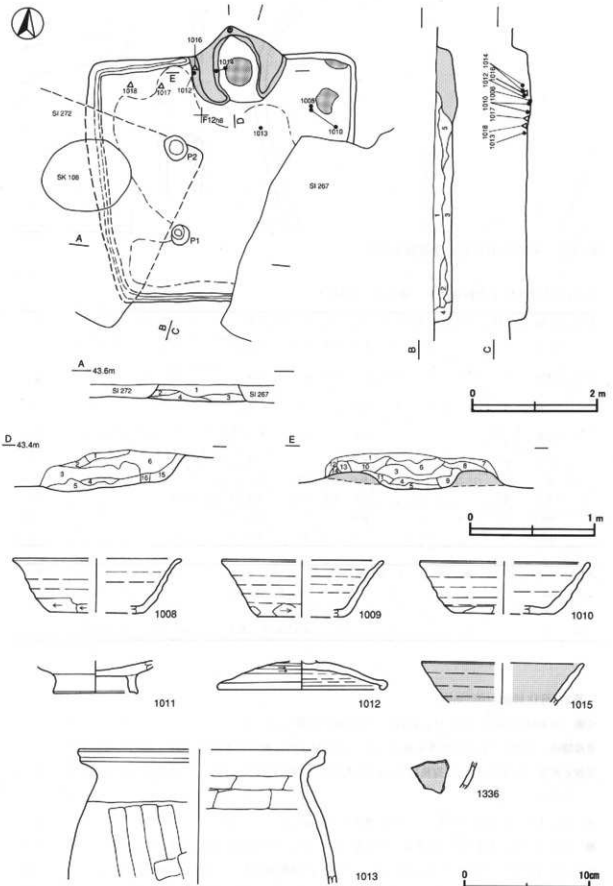
覆土　5層からなり，各層にロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

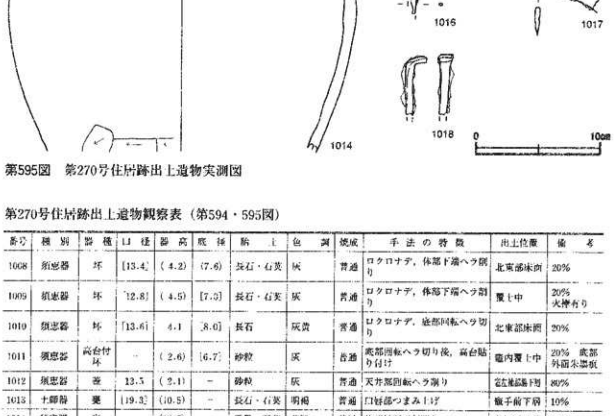
1　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック微量
4　黒褐色　ロームブロック・焼土粒子微量
5　黒褐色　焼土ブロック・炭化粒子少量，ロームブロック・砂質粘土ブロック微量

遺物出土状況　出土遺物は土師器片738点（坏198，高台付坏4，甕535，甑1），須恵器片84点（坏48，高台付坏2，甕31，壺3），灰釉陶器片2点（椀），鉄製品3点（鎌1，鑿1，釘1），焼成粘土塊8点，礫10点がほぼ全域から散在した状態で出土している。1008は北東部の床面，1012・1016は竈左袖部脇の覆土下層，1017・1018は北西部の床面からそれぞれ出土している。また，1010は北東部の床面，1013は竈前の覆土下層，1014は竈火床部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。さらに，1009・1015・1336は覆土中，1011は竈内の覆土中から出土している。1015・1336は灰釉陶器片で，猿投産と考えられる。

所見　遺物の大半は覆土中から検出されたもので，時期は明確ではないが，重複関係や床面から検出された土器の形状から，9世紀前葉と推測される。



第594図　第270号住居跡・出土遺物実測図



第595図　第270号住居跡出土遺物実測図

第270号住居跡出土遺物観察表（第594・595図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1008	須恵器	坏	[13.4]	(4.2)	(7.6)	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ，体部下端ヘラ削り	北東部床面	20%
1009	須恵器	坏	[12.8]	(4.5)	[7.0]	長石・石英	灰	普通	ロクロナデ，体部下端ヘラ削り	覆土中	20% 火棒有り
1010	須恵器	坏	[13.6]	4.1	8.0	長石	灰黄	普通	ロクロナデ，底部回転ヘラ切り	北東部床面	20%
1011	須恵器	高台付坏	—	(2.6)	[6.7]	砂粒	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	竈内覆土中	20% 底部外面朱墨痕
1012	須恵器	甕	13.5	(2.1)	—	砂粒	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	竈焚口部下層	80%
1013	土師器	甕	[19.3]	(10.5)	—	長石・石英	明褐	普通	口縁部つまみ口縁	竈手前下層	10%
1014	須恵器	甕	—	(17.7)	—	雲母・石英	黄灰	普通	体部外面平行叩き	竈火床部中層	10%
1015	灰釉陶器	椀	[12.8]	(3.3)	—	砂粒	灰白	普通	ロクロナデ	覆土中	5%猿投産
1338	灰釉陶器	椀	—	(2.2)	—	砂粒	灰白	普通	ロクロナデ	覆土中	5%猿投産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1016	鏃	(6.7)	0.9	0.3	(4.6)	鉄	茎部欠損，主頭整箭式	竈左袖部脇下層	
1017	鎌	(9.4)	2.4	0.4	(21.8)	鉄	柄付部欠損	北西部床面	
1018	釘	(4.2)	1.2	0.5	(8.5)	鉄	頭部は薄く叩き伸ばされ，屈曲する	北西部床面	

第272号住居跡（第596図）

位置　調査区北部のF12h7区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第270・275号住居跡を掘り込み，第106号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.1m，短軸約2.9mの方形で，主軸方向はN－135°－Eである。壁高は20cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，硬化している中央部が若干高くなっている。

竈　東壁の中央やや南寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで80cm，袖部幅88cm，壁外への掘り込みは認められない。天井部は崩落しており，土層断面図中の，第6・7層が崩落土に相当する。袖部は砂質粘土を用いて構築されているが，左袖部は遺存状態が悪く確認できなかった。火床部は浅い皿状を呈し，火床面は一部赤変しているが，焼け締まった感じはない。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

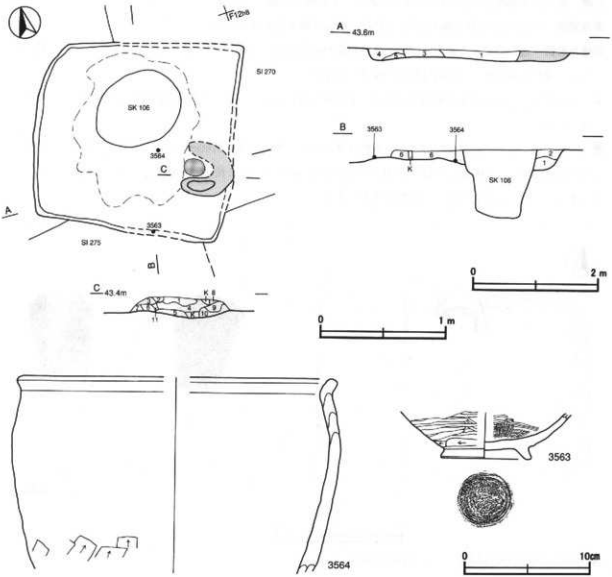
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック少量
2　極暗褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量
3　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子少量
4　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
5　赤　褐　色　焼土粒子多量
6　黒　褐　色　焼土ブロック・粘土ブロック少量，ロームブロック微量
7　極暗赤褐色　焼土ブロック・粘土ブロック少量
8　極暗褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック微量
9　黒　褐　色　ロームブロック少量
10　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
11　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量

覆土　6層からなり，不規則なブロック状の堆積の人為堆積である。

土層解説

1　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック微量
4　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック少量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物・粘土粒子微量

遺物出土状況　土師器片94点（高台付椀１，甕93），須恵器片５点（坏），礫２点（被熱痕）が竈内と竈周辺の



第596図　第272号住居跡・出土遺物実測図

床面から主に出土しており，遺物の92%を占める土師器甕片は，出土位置から竈で使用されていたと考えられる。須恵器の坏類は覆土上層から下層にかけて検出されており，本跡廃絶後，埋没過程で投棄されたと考えられる。

所見　床面から出土している高台付椀や甕片から，時期は10世紀後葉の可能性が高い。

第272号住居跡出土遺物観察表（第596図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3563	土師器	高台付椀	－	(3.7)	5.0	雲母・長石	明赤褐	普通	体部内・外面ヘラ磨き	南壁際下層	60%
3564	土師器	甕	[24.4]	(15.5)	－	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部内面ナデ，外面ヘラ削り	中央部下層	30%

第275号住居跡（第597図）

位置　調査区北部西寄りのF12h7区に位置し，平坦部に立地している。

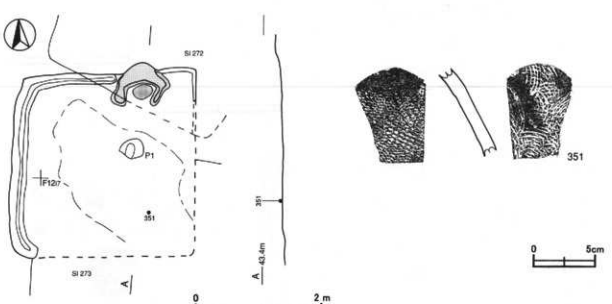
重複関係　第273号住居跡を掘り込み，第272号住居に掘り込まれている。

規模と形状　遺存している竈の位置と，北・西壁の状況から，N－0°を主軸とする一辺約3.0mの方形と推定される。遺存状態が悪く，壁高は明確に確認できなかった。

床　ほぼ平坦で，北西部から東南部にかけてよく踏み固められている。壁溝は北西部から南西部にかけて検出されている。

竈　北壁の中央やや東寄りに付設され，規模は焚口部から煙道部まで約60cm，袖部幅90cmで，壁外への掘り込みは約20cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面をそのまま使用し，火熱を受けて赤変硬化している。

ピット　1か所。深さは20cmで，性格は不明である。



第597図　第275号住居跡・出土遺物実測図

覆土　遺存状態が悪く，堆積状況は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器片90点（坏29，高台付坏２，甕59），須恵器片９点（坏６，甕３），礫２点が出土している。ほとんどが細片で図示できたものはなく，破断面が摩滅していることから住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。351は南部下層から出土したもので，破断面が摩滅しており住居廃絶後に投棄されたものである。

所見　本跡は７世紀前葉と比定される第273号住居跡を掘り込み，10世紀後葉と比定される第272号住居跡に掘り込まれていることと，出土した土師器片や須恵器片の形状から，時期は８世紀中葉と考えられる。

第275号住居跡出土遺物観察表（第597図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	新上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
351	須恵器	甕	－	(7.0)	－	長石	灰	普通	外面格子状の叩き，内面同心円の当て具痕	南部床面	5%

第279号住居跡（第598・599図）

位置　調査区北部のＧ12d5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第278号住居跡を掘り込み，第141・142号土坑，第７号井戸に掘り込まれている。

規模と形状　床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，遺存している床面の範囲と竈の位置からＮ－40°－Ｗを主軸とする長軸約4.8m，短軸約3.5mの長方形と推定される。壁は遺存していないため，立ち上がりは不明である。

床　床面の一部は削平されて確認できないが，点在する硬化した床面から判断してほぼ平坦で，中央部を中心に踏み固められていたものと推測される。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで88cm，袖部幅90cm，壁外への掘り込みは15cmである。天井部は崩落しており，土層断面図中の第10・12層が崩落土に相当する。袖部は床面と同じ高さにローム土を主体とした褐色土を基部とし，その上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は浅い皿状を呈しており，支脚として転用された羽口が下部を埋め込まれた状態で出土している。火床面は火熱を受けて赤変しているが硬化はしていない。煙道は火床部から外頸して緩やかに立ち上がっている。

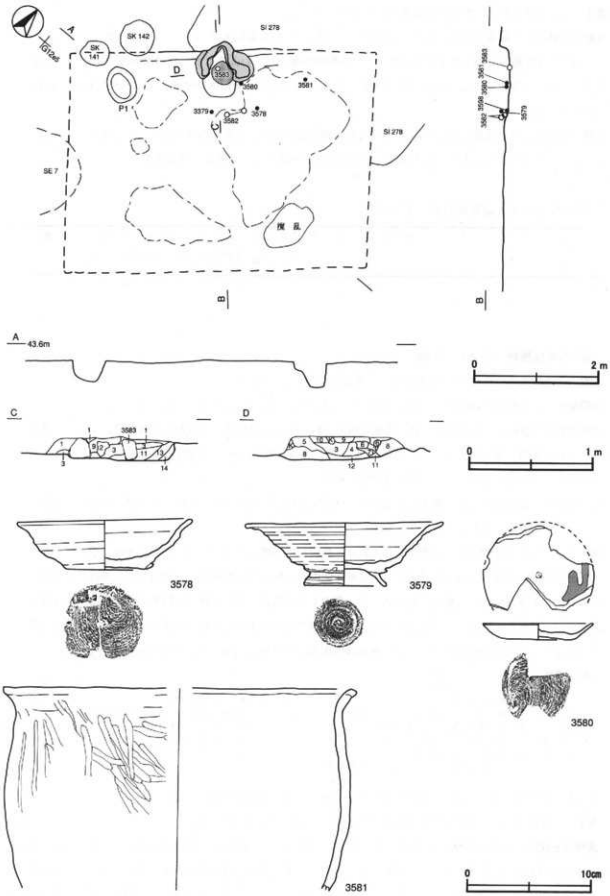
竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子多量
3　暗　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック微量
4　褐　　色　焼土粒子中量，ローム粒子少量
5　黒　褐　色　焼土ブロック・砂粒少量，ロームブロック微量
6　灰　褐　色　粘土粒子多量，焼土粒子少量
7　黒　褐　色　焼土粒子多量，ロームブロック・砂粒微量
8　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化材微量
9　灰　褐　色　砂粒多量，ロームブロック・焼土粒子少量
10　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，粘土粒子中量
11　黒　褐　色　ローム粒子微量
12　赤　褐　色　焼土粒子・粘土ブロック多量，ローム粒子少量
13　黒　褐　色　ロームブロック微量
14　暗　褐　色　ロームブロック中量

ピット　１か所。深さ33cmで，形状から柱穴と判断したが，性格は不明である。

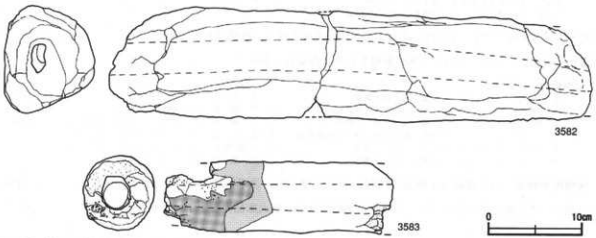
覆土　遺構確認段階で竈周辺を除き削平されており，堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器片284点（坏17，高台付坏７，甕260），土製品９点（羽口），礫６点（被熱痕４）が竈内と竈周辺の床面から出土している。投棄されたと考えられる3581は北東部床面から出土している。3582と3583は人形の羽口で，3582は竈の前面から２つに折れた状態で出土し，3583は支脚として使用された状態で竈火床部からそれぞれ出土している。また，投棄された径約20cmの礫が竈内から検出されている。



第598図　第279号住居跡・出土遺物実測図

所見　出土した羽口は，長さ51cm，幅11cmと大きなものであり，その形状から本跡周辺に大形の鉄生産遺構があったことが想定され，当遺跡を考える上で貴重な資料である。また，坏や小皿，甕などの形状から，時期は11世紀前半と考えられる。



第599図　第279号住居跡出土遺物実測図

第279号住居跡出土遺物観察表（第598・599図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3578	土師器	坏	13.7	4.0	6.2	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り	中央部床面	70%
3579	土師器	高台付坏	15.3	5.2	6.5	雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	中央部床面	70% PL232
3580	土師器	小皿	8.8	1.3	5.5	長石	にぶい褐	普通	底部回転糸切り	竈焚口部	60%　灯明皿に転用
3581	土師器	甕	[27.5]	(16.0)	－	長石・石英	灰褐	普通	体部内面ナデ，外面ヘラ磨き	北東部床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3582	羽口	51.0	11.0	8.4	3.4	5233	土	先端部欠損，断面長方形	中央部床面	
3583	羽口	24.0	(外径) 7.5		3.0	2325	土	先端部鉄滓融着，断面円形	竈火床部	支脚に転用

第280号住居跡（第600・601図）

位置　調査区北部のG12f2区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第287号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　南北軸は約3.6m，東西軸は西側が調査区域外に延びているために約3.2mだけが確認でき，平面形は方形または長方形と想定される。主軸方向はN－102°－Eである。壁高は約45cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は北・東壁の一部で認められる。

竈　東壁の北寄りに付設されており，規模は焚口部から煙道部まで約105cm，袖部幅約90cm，壁外への掘り込みは約30cmである。火床部は床面と同じ高さの平坦面を使用し，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は，急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒　　色　粘土粒子中量，焼土ブロック少量
2 黒　　色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量
3 灰　褐　色　粘土粒子多量，焼土ブロック少量
4 暗　褐　色　焼土ブロック少量，粘土粒子微量
5 灰　褐　色　砂質粘土ブロック多量
6 暗　褐　色　焼土ブロック中量，粘土粒子少量
7 褐　　色　粘土粒子多量，焼土ブロック中量
8 赤　褐　色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量
9 黒　　色　焼土粒子中量，ロームブロック少量
10 褐　　色　ローム粒子多量
11 暗 赤 褐 色　焼土ブロック多量，ロームブロック少量
12 暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，砂質粘土ブロック少量
13 黒　褐　色　焼土ブロック・粘土粒子少量
14 黒　褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子少量
15 黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量

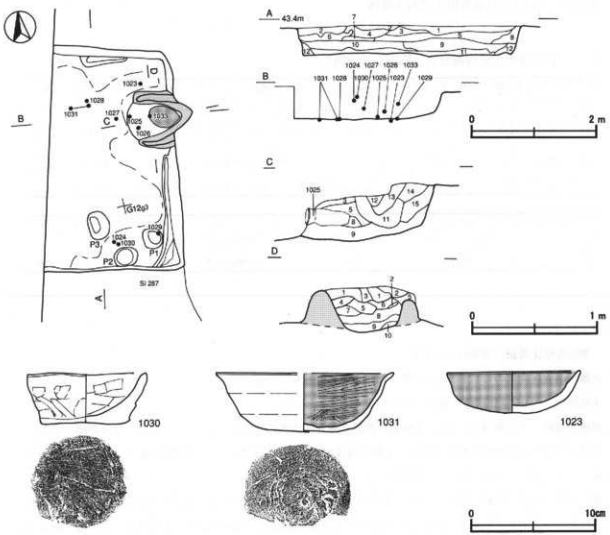
ピット　3か所。P1～P3はいずれも深さ10cm前後と浅く，性格は不明である。

覆土　12層からなり，ブロック状の堆積をした人為堆積である。

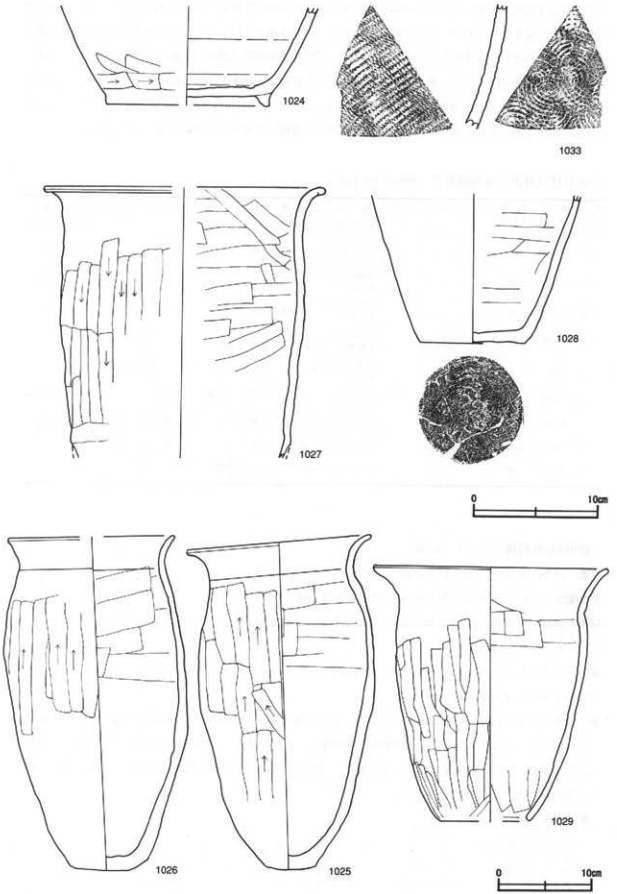
土層解説

1 黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
2 極 暗 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
3 黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
4 黒　　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
5 黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
6 黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
7 黒　褐　色　ローム粒子中量
8 黒　褐　色　ローム粒子微量
9 黒　褐　色　ロームブロック中量，砂質粘土ブロック少量
10 黒　　色　ロームブロック中量，焼土ブロック微量
11 極 暗 褐 色　ロームブロック多量，焼土ブロック少量
12 黒　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　出土遺物は土師器片282点（坏42，甕240），須恵器片8点（坏1，瓶1，甕6）がほぼ全域から散在した状態で出土している。1025・1026はそれぞれ竈火床部の覆土下・中層から，横位で出土している。



第600図　第280号住居跡・出土遺物実測図



第601図　第280号住居跡出土遺物実測図

また，1023は北東部床面，1028・1031は北部床面，1029は南東部床面からそれぞれ出土している。これらは住居廃絶に伴い遺棄されたものと考えられる。さらに，1027は竈前中層，1024・1030は南部上層，1033は竈火床部覆土上層からそれぞれ出土している。これらは，住居廃絶後の埋没過程で投棄されたものと考えられる。

所見　本跡は焼土の広がりから焼失住居と考えられ，土器の出土状況を土層断面に対応させると，覆土下層から出土した遺物は焼失前に遺棄され，覆土中層以上から出土した土器は焼失後に投棄されたものと考えられる。時期は，出土土器の形状と東壁の北寄りに竈を付設した竈構の形態から10世紀後葉と考えられる。

第280号住居跡出土遺物観察表（第600・601図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1023	土師器	坏	20.6	3.4	－	長石・赤色粒子	灰黄褐	普通	器面荒れ	北東部床面	90% PL232
1031	土師器	坏	(14.0)	4.7	[8.0]	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	ロクロナデ，底部回転ヘラ切り	北部床面	40%
1025	土師器	甕	18.8	35.5	5.0	雲母・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部外面ヘラナデ，胴部横ナデ	竈火床部中層	100% PL233
1026	土師器	甕	[17.5]	35.5	6.0	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部外面ヘラナデ，胴部横ナデ	竈火床部中層	80%
1027	土師器	甕	[22.0]	(21.5)	－	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラナデ，口縁部横ナデ	竈前中層	20%
1028	土師器	甕	－	(11.9)	8.4	石英・赤色粒子	橙	普通	底部外面ヘラ削り，体部内面ヘラナデ	北部床面	40%
1029	土師器	甑	24.2	26.8	[9.2]	石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部横ナデ，単孔式	南東部床面	80% PL232
1030	土師器	手捏土器	9.4	4.1	7.1	長石・石英	にぶい褐	普通	底部ヘラ切り，口縁部横ナデ	南部上層	100% PL232
1024	須恵器	長頸瓶	－	(8.1)	[13.0]	石英・白色粒子	灰黄褐	普通	ロクロナデ，高台貼り付け	南部上層	10%
1033	須恵器	甕	－	(7.8)	－	長石・石英	褐灰	普通	外面縦格子状叩き，内面当て具痕	竈火床部上層	5%

第284号住居跡（第602・603図）

位置　調査区北部のG12g5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第285号住居跡を掘り込み，第263号土坑に掘り込まれている。

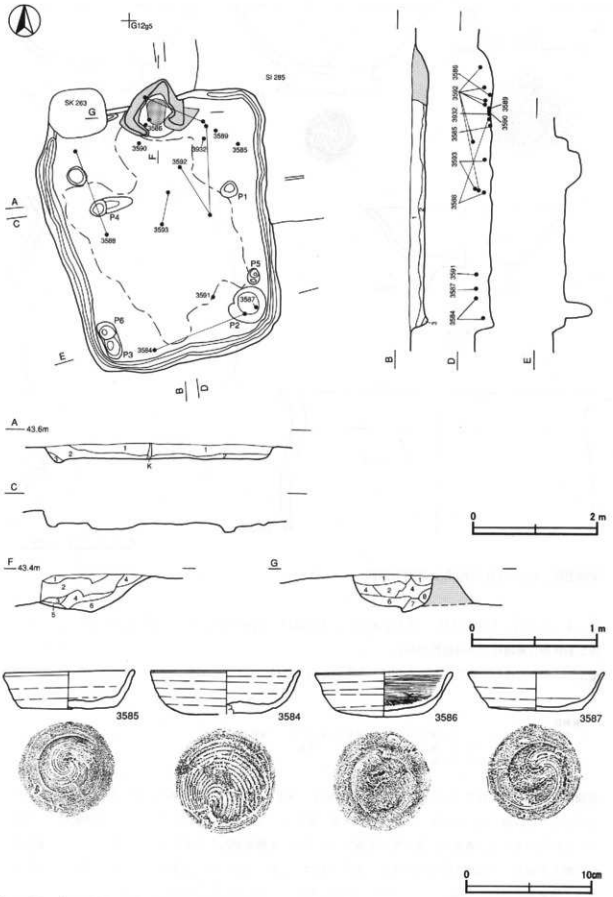
規模と形状　長軸約4.2m，短軸約3.6mの長方形で，主軸方向はN－3°－Wである。壁高は約20cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部と竈の前面がよく踏み固められており，壁溝が全周している。北西コーナー付近の床面でわずかなくぼみが確認されている。

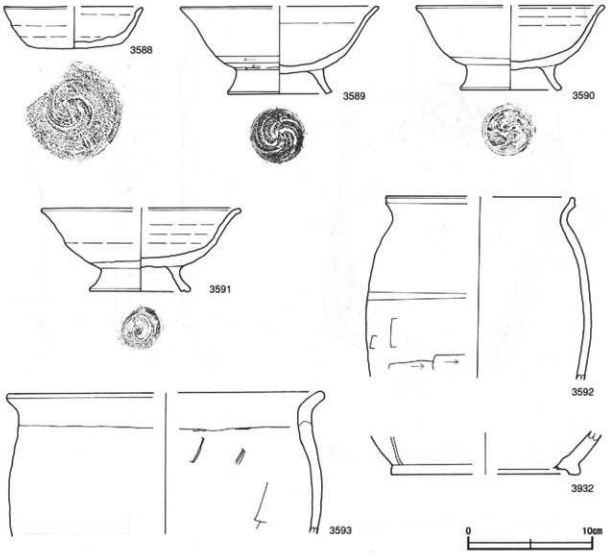
竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築され，焚口部から煙道部まで約96cm，袖部幅約128cm，壁外への掘り込みは26cmである。天井部は崩落し，土層断面図中の第4・6層が崩落土に相当する。袖部の遺存状態は良好で，内側は赤変している。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられているが，焼き締まった感じはない。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗褐色　焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量，ロームブロック微量
2　暗褐色　粘土ブロック中量
3　暗褐色　焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量，ローム粒子微量
4　暗褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック・灰少量
5　黒褐色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ローム粒子少量，粘土粒子微量
6　暗褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
7　暗赤色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
8　黒赤色　ローム粒子・焼土ブロック少量，粘土粒子微量



第602図　第284号住居跡・出土遺物実測図



第603図　第284号住居跡出土遺物実測図

ピット　6か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さ約12～42cmである。P5・P6は深さ約10～12cmで，位置と形状から補助柱穴の可能性が高い。

覆土　3層からなり，各層にロームブロックを含む人為堆積である。土層断面図中の第3層は壁溝部の土層である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
2　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片275点（坏152，高台付椀14，小皿3，甕106），須恵器片24点（坏7，甕17），灰釉陶器片1点（広口壺）が，中央部から竈周辺の床面と覆土上～下層にかけて出土している。本跡廃絶時に遺棄された土器片の多くは，竈前面と竈右側の床面から出土し，本跡廃絶後に投棄された土器片の多くは，竈や竈付近の覆土上層から下層にかけて散在する。前者は3585・3589・3590・3932が相当し，後者は3584・3592が相当する。須恵器片はいずれも細片で，埋め戻す段階で埋土とともに混入したと考えられる。

所見　高台付椀の形状や小皿が出現することなどから見て，時期は10世紀後葉と考えられる。

第284号住居跡出土遺物観察表（第602・603図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3584	土師器	坏	11.0	3.6	5.6	雲母・長石・石英	橙	普通	底部糸切り離し	東部覆土中層	90%
3585	土師器	坏	10.4	3.0	7.9	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラナデ	北東部床面	95% PL232
3586	土師器	坏	11.0	3.7	7.6	雲母・長石	明褐灰	普通	底部回転ヘラ切り後，多方向のナデ	竈火床部底面	80% PL233
3587	土師器	坏	10.8	3.1	7.5	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラナデ	南東部上層	70% 黒斑あり
3588	土師器	坏	[10.9]	3.3	7.1	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラナデ	西部床面	50%
3589	土師器	高台付椀	[15.6]	6.9	8.3	雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	北東部床面	45% PL233
3590	土師器	高台付椀	[14.9]	6.7	7.9	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	竈手前床面	50% PL233
3591	土師器	高台付椀	[15.7]	6.7	8.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南東部上層	60%
3592	土師器	甕	[15.0]	[11.5]	－	雲母・長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラナデ	竈中・中央部覆土上～下層	25%
3593	土師器	甕	[25.0]	(11.2)	－	雲母・長石	明褐	普通	口縁部横ナデ，体部外面ヘラナデ	中央部覆土中	10%
3932	灰釉陶器	広口壺	－	(3.0)	[15.0]	緻密	灰白・灰黄	普通	底部高台貼り付け後，ナデ，釉は流し掛け	北東部床面	10%

第285号住居跡（第604・605図）

位置　調査区北部のG12g5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第284号住居に掘り込まれている。

規模と形状　一辺約3.5mの方形で，主軸方向はN－90°－Eである。壁高は16～20cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。

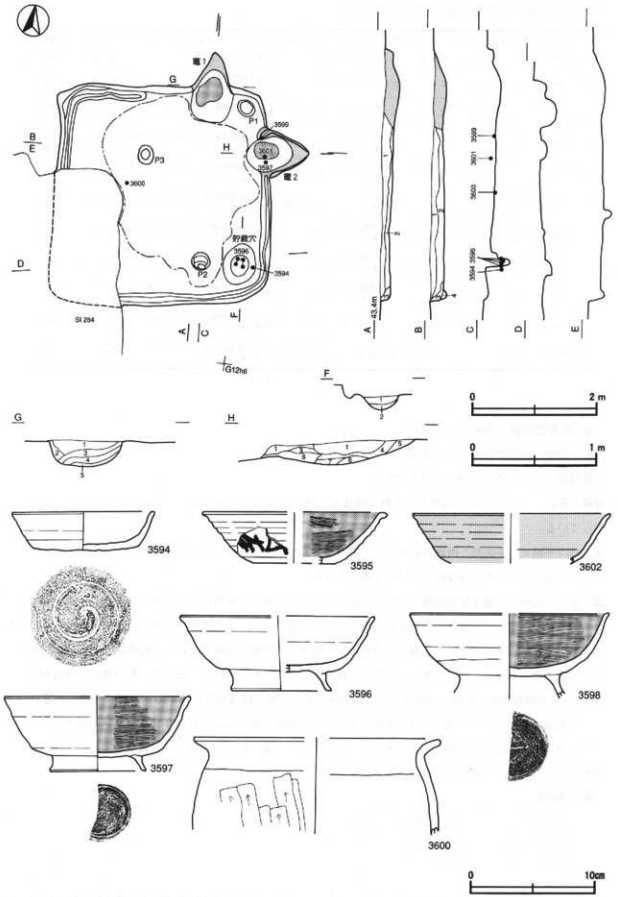
床　ほぼ平坦で，中央部と竈の前面がよく踏み固められている。壁溝は，第284号住居に掘り込まれた部分を除いて確認され，本来は周回していたと考えられる。

竈　竈1は北壁部，竈2は東壁部のそれぞれ北東コーナー部寄りに砂質粘土で構築されている。竈1は両袖部とも壊されて，竈1から竈2への据え替えが行われたと考えられ，また壁外への掘り込みは約60cmである。火床部は，床面を約8cmほど皿状に掘りくぼめられ，灰混じりの焼土が確認された土層断面図中の第5層の上面が火床面と考えられる。また，煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。竈2は，焚口部から煙道部まで約100cm，袖部幅約78cm，壁外への掘り込みは約60cmである。天井部は崩落しているが，袖部の遺存状態は良好で，内側は赤変している。火床部は，床面を約5cmほど皿状に掘りくぼめられ，ブロック状に硬化している。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。なお，竈2付近の床面には，竈材と思われる粘土粒子や砂粒が散在しており，意図的に壊されたと考えられる。

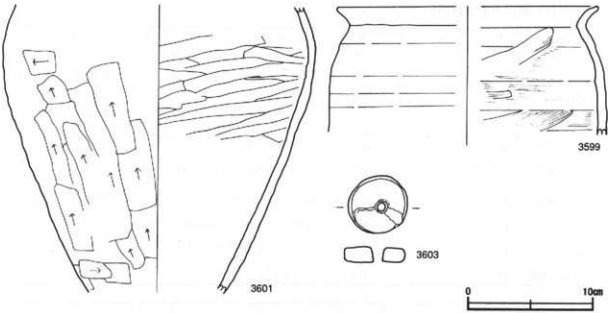
竈1土層解説

1　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
4　暗褐褐色　焼土ブロック多量，灰少量
5　暗赤褐色　焼土ブロック多量

ピット　3か所。P1～P3は深さ12～16cmで，形状から見て柱穴と考えられるが，位置が不規則であり，詳細は不明である。



第604図　第285号住居跡・出土遺物実測図



第605図　第285号住居跡出土遺物実測図

竈２土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ローム粒子少量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・灰少量
6　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子・砂質粘土ブロック少量
7　黒　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量
8　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

貯蔵穴　長軸約72cm，短軸約52cmの楕円形で，南東コーナー部に付設され，深さは約28cmである。底面形状は円形を呈し，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量
2　黒　　色　ローム粒子中量

覆土　4層からなり，各層にロームブロックを含む人為堆積である。土層断面図中の第９層は，壁溝部の土層である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量
4　褐　　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　土師器片1198点（坏523，高台付椀55，甕620），須恵器片46点（坏23，甕23），緑釉陶器片１点（稜椀），土製品１点（紡錘車）が，竈や貯蔵穴周辺の床面と覆土下層を中心に出土している。図示した土器の内，3594～3596は貯蔵穴から出土しているが，いずれも覆土中から検出されたもので，本跡廃絶後に流れ込んだと考えられる。また，3597と3601は，竈火床部から出土しているが，3597は火熱を受けておらず，投棄されたもので，3601はつぶれた状態で出土しており，本跡廃絶時に遺棄されたと考えられる。

所見　土師器坏の形状などから見て，時期は10世紀中葉と考えられる。また，本跡からは「□庄」と墨書された坏が出土しているが，当遺跡において９軒の住居跡から同様の墨書（「庄」・「南庄」）が確認されている。いずれも同時期に比定される住居跡から出土したもので，坏に墨書されている。当遺跡あるいは周辺の地域が荘園に属していた可能性があることを示す資料である。

第285号住居跡出土遺物観察表（第604・605図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3594	土師器	坏	11.2	3.2	8.1	雲母	にぶい赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	竈火焚上中層	75%
3595	土師器	坏	[14.6]	4.1	[6.4]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	貯蔵穴覆土下層	30% 墨書「□中」
3596	土師器	高台付椀	[15.3]	5.8	7.8	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部高台貼り付け後，ナデ	貯蔵穴覆土中層	45%
3597	土師器	高台付椀	[14.6]	6.0	7.6	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	竈火床部覆土中	20%
3598	土師器	高台付椀	[14.8]	(6.7)	－	雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	南部覆土中	25% 底部ヘラ記号
3599	土師器	甕	[20.8]	(10.2)	－	雲母・長石	橙	普通	体部内面ハケ状工具によるナデ	竈覆土中	20%
3600	土師器	甕	[19.6]	(7.6)	－	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面縦位のヘラ削り	中央部床面	10%
3601	土師器	甕	－	(22.9)	－	雲母・長石・石英	橙	普通	体部内面横位のヘラ状工具によるナデ	竈火床部覆土中	50%
3602	紡錘車土製品	紡錘	[15.8]	(4.0)	－	緻密	灰白・黄褐	良好	軸は刷毛塗り	東西部覆土上層	10%

番号	器種	形	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3603	紡錘車	4.8	1.3	1.0	25.9	土	上面に刻線痕あり	南西部覆土上層	

第286号住居跡（第606・607図）

位置　調査区北部のG12h4区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第152号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.5m，短軸約3.2mの長方形で，主軸方向はN－24°－Eである。壁高は8cmと低い。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は認められない。

竈　北壁の中央部に付設されているが，遺存状態が悪く，火床面と壁外への煙道部の掘り込みが確認できただけである。火床部は床面から約5cmほど皿状に掘りくぼめ，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は，火床部から緩やかに立ち上がっている。

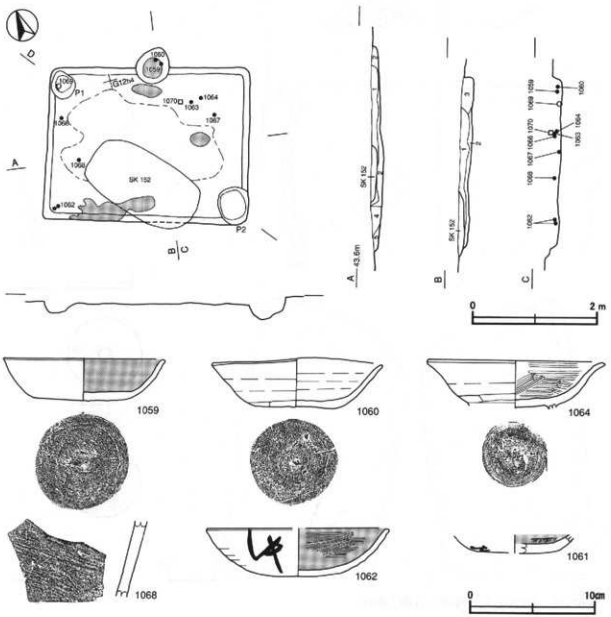
ピット　2か所。P1・P2は深さ20cm・22cmで，コーナー部に配されているが，性格は不明である。

覆土　5層からなり，ロームブロックや焼土を含み，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子極量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量
3　黒　　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量
4　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック微量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量

遺物出土状況　出土遺物は土師器片350点（坏134，高台付椀8，椀6，甕202），須恵器片17点（坏3，蓋14），土製品1点（紡錘車），石器1点（砥石）がほぼ全域から散在した状態で出土している。1059は竈火床部の覆土下層から逆位，また，1060は竈火床面から出土しており，いずれも火熱を受けていることから支脚として転用されたと考えられる。1061は覆土中，1062は南西部の覆土下層からそれぞれ出土しており，いずれも体部外面に墨書されている。さらに，1063・1064は北東部の覆土下層，1066は北西部の覆土中層，1067は北東部の床面，1068は西部の覆土下層，1069はP1の覆土中層，1070は竈付近の覆土上層からそれぞれ出土している。1070の砥石は竈付近の覆土上層から出土し，火熱を受け赤変している。

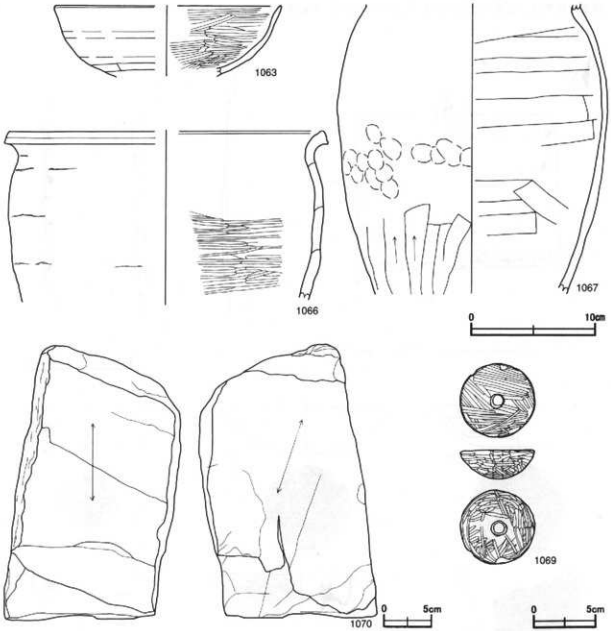
所見　時期は，遺構の形態と出土土器の形状から10世紀前葉と考えられる。



第606図　第286号住居跡・出土遺物実測図

第286号住居跡出土遺物観察表（第606・607図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1059	土師器	坏	12.8	3.4	－	石英	にぶい橙	二次焼成	器面荒れ，底部回転ヘラ切り	竈下層部下層	100% PL233
1061	土師器	坏	－	(1.4)	[7.0]	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土中	15%　体部下端墨書「□」
1062	土師器	坏	[14.2]	3.9	[8.0]	雲母・石英	灰黄	普通	ロクロナデ，底部回転ヘラ切り	南東部下層	40%　体部外面墨書「□」
1063	土師器	坏	[18.0]	(5.6)	－	雲母・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	ロクロナデ，内面ヘラ磨き	北東部下層	30%
1060	須恵器	坏	13.5	4.0	6.5	砂粒	灰	二次焼成	ロクロナデ，底部回転ヘラ切り	竈火床面	100%



第607図　第286号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1064	土師器	高台付椀	14.0	4.0	－	雲母・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	北東部下層	60%
1066	土師器	鉢	[25.0]	(13.3)	－	砂粒	にぶい橙	普通	口縁部内面荒れ，体部内面ヘラ磨き	北東部下層	10%
1067	土師器	甕	－	23.2	－	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部外面指頭痕，内面ヘラナデ	北東部床面	50%
1068	須恵器	甕	－	(6.0)	－	雲母・石英・赤色粒子	灰褐	普通	体部外面平行叩き	覆土中	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
1069	紡錘車	5.9	2.2	1.1	70	砂粒	半球状を呈し，両面穿孔	P 1 上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
1070	紡石	27.7	18.7	13.1	9080.0	砂岩	底面2面，その他は剥離面，被熱痕有り	竈付近上層	

第288号住居跡（第608図）

位置　調査区北部のG12h2区に位置し，平坦部に立地している。

規模と形状　長軸約4.0m，短軸約3.9mの方形で，主軸方向はN－107°－Eである。壁高は約15cmで，外傾して立ち上がっている。

床　平坦で，中央部が踏み固められ，焼失による焼土ブロックが散在している。

焼土焼土層
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量
3　明　褐　色　焼土粒子多量，炭化物微量

竈　竈1は東壁中央部やや南寄りに構築され，竈2は竈1の廃絶後，左袖部を再利用して東壁中央部に再構築されている。竈1は意図的に壊されているためほとんど遺存しておらず，火床面だけが確認された。竈2は，焚口部から煙道部まで約100cm，袖部幅約80cm，壁外への掘り込みは約38cmである。天井部は崩落しているが，袖部の遺存状態は良好で，内側は赤変している。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられているが，焼き締まった感じはない。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈2土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子少量，炭化物・粘土粒子微量
2　黒　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量

ピット　3か所。P1・P2は深さ10～12cmで，主柱穴の可能性があるが，北側に相対する位置に主柱穴は検出されず，詳細は不明である。P3は，深さ約12cmで，西壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

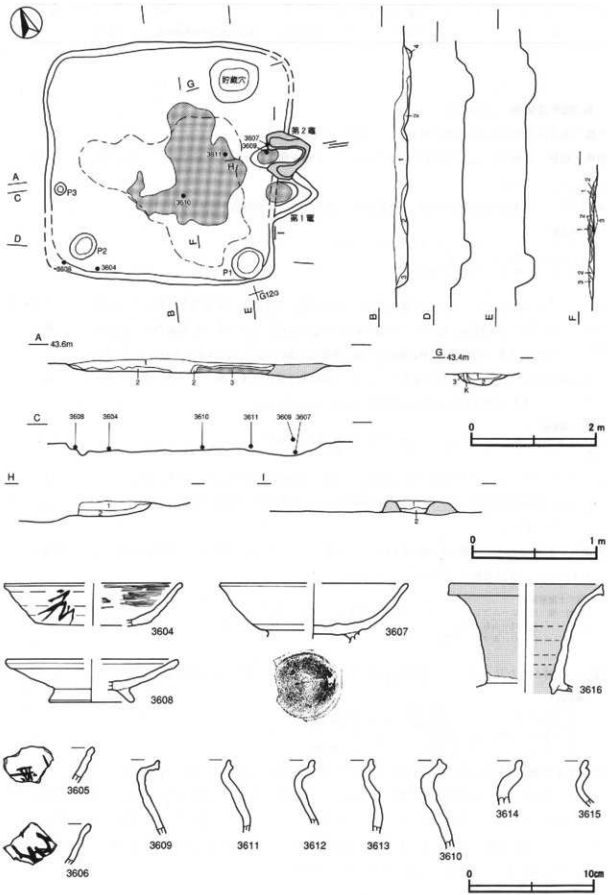
貯蔵穴　長軸約80cm，短軸約68cmの楕円形で，北東コーナー部に付設され，深さは約16cmである。底面形状は長方形を呈し，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物・粘土ブロック微量
2　褐　　色　ローム粒子多量
3　黒　　色　ロームブロック微量

覆土　4層からなり，焼土や炭化物を各層に含み，不規則なブロック状の堆積を示した人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化物少量
3　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量
4　黒　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック少量，炭化物微量

遺物出土状況　土師器片608点（坏378，高台付坏12，甕218），須恵器片26点（坏12，蓋2，甕12），灰釉陶器片2点（短頸壺）が，住居跡全体に散在している。その大半が破片で，残存率が50%以上に達する土器はないため，投棄されたものや埋土中に混入していたものが主体となっていると考えられ，投棄された時期に違いが認められる。焼失段階以前に投棄された遺物は，焼土層の下から出土した3610と3611が相当し，火熱を受けている。焼失後投棄された遺物は3609・3614・3615が相当し，覆土上層から出土している。



第608図　第288号住居跡出土遺物実測図

所見　床面から焼土が検出され，食膳具類はあらかじめ持ち出されていることから見て，住居廃絶に伴った焼失住居と考えられる。伴出遺物が少ないため時期は特定できないが，床面から出土した土師器坏に「□床」と墨書されていることや，土師器の坏や高台付坏の形状などから見て，9世紀中葉と想定される。

第288号住居跡出土遺物観察表（第608図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3604	土師器	坏	[14.2]	3.3	[9.2]	雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	南壁際床面	20% PL250 墨書「庄」
3605	土師器	坏	-	(2.9)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ	貯蔵穴覆土中	10% PL250 墨書「□南，ヵ
3606	土師器	坏	-	(3.2)	-	雲母・長石・石英	明橙	普通	体部内面ヘラ磨き	北東部覆土下層	10% 墨書「庄」
3607	土師器	高台付坏	[14.8]	(4.8)	-	雲母・長石	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	竈火床部	30%
3608	土師器	高台付坏	[13.6]	3.2	6.8	長石	黒	普通	底部高台貼り付け後，ナデ	南壁西より床面	40%
3609	土師器	甕	-	(5.9)	-	雲母	橙	普通	体部内・外面ナデ	竈火部覆土中	10%
3610	土師器	甕	-	(7.1)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ナデ	中央部床面	10%
3611	土師器	甕	-	(5.7)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部内・外面ナデ	竈南床面	10%
3612	土師器	甕	-	(5.1)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ，外面ナデ	南東部覆土下層	10%
3613	土師器	甕	-	(6.0)	-	雲母・長石・石英	赤褐	普通	体部内・外面ナデ	竈覆土中	10%
3614	土師器	甕	-	(3.2)	-	雲母・長石・石英	橙	普通	体部内・外面ナデ	貯蔵穴覆土下層	10%
3615	土師器	甕	-	(3.8)	-	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口唇部横ナデ，つまみ上げ調整	西部覆土上層	10%
3616	灰釉陶器	長頸瓶	[12.2]	(8.7)	-	緻密	灰黄・灰オリーブ	良好	頸部の最小径は口部との接合部に持ち，口縁部に向かって大きく開く，釉は流し掛け	北部覆土中	10%

第292号住居跡（第609・610図）

位置　調査区北部のH12c2区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第293・294・297号住居跡を掘り込んでいる。

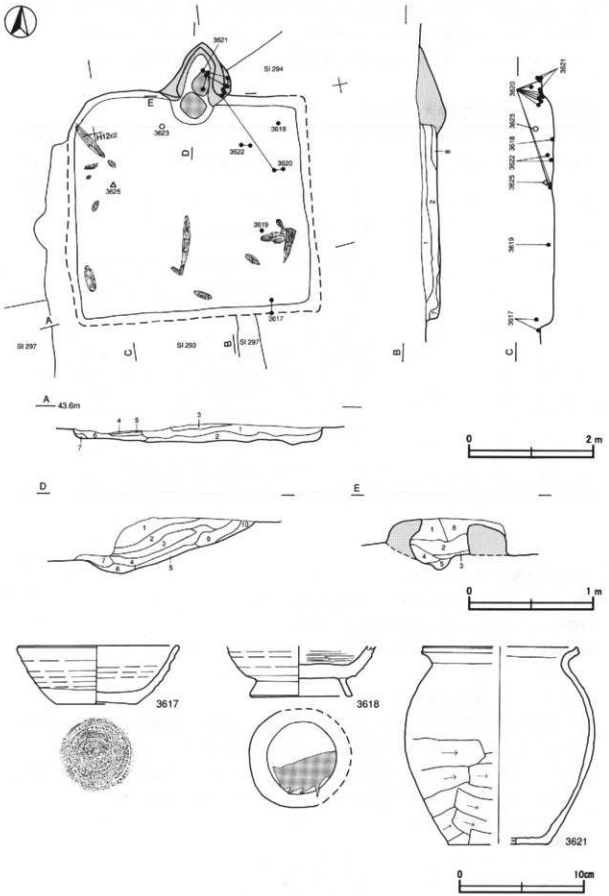
規模と形状　長軸約3.9m，短軸約3.7mの方形で，主軸方向はN－7°－Eである。壁高は16～18cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。

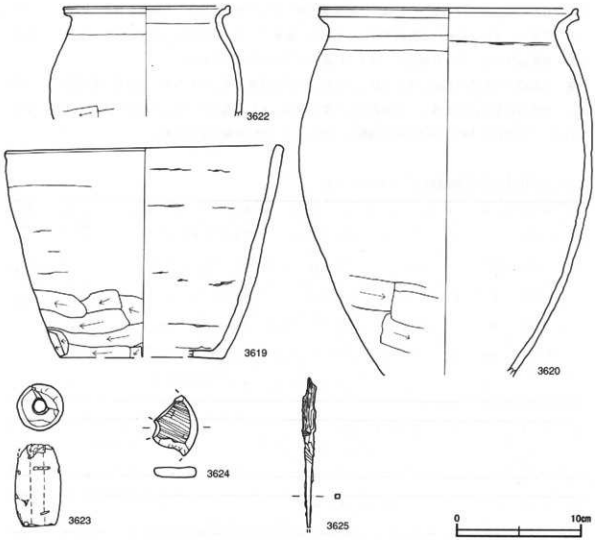
竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築され，焚口部から煙道部まで約144cm，袖部幅約120cm，壁外への掘り込みは約80cmである。遺存状態は悪く，天井部は崩落し，袖部も壁面に貼り付けられた砂質粘土が痕跡として残っているだけである。また，竈覆土中と竈付近の床面には焼土や粘土のブロックが認められ，意図的に壊されたことが推測される。火床部には煙土と思われるロームブロックが多く，明確に火床面を捉えることはできなかった。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化物・粘土ブロック少量
2　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
5　明赤褐色　焼土ブロック多量，粘土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量



第609図　第292号住居跡出土遺物実測図



第610図　第292号住居跡出土遺物実測図

6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
7　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
8　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック中量，炭化物少量
9　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・粘土ブロック少量
10　暗赤褐色　焼土ブロック多量，ローム粒子少量

ピット　検出されていない。

覆土　8層からなり，ロームや焼土のブロックを各層に含む人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化物・粘土粒子中量，ロームブロック少量
4　赤　褐　色　焼土粒子多量，ロームブロック・炭化物少量
5　黒　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子少量
7　黒　褐　色　ローム粒子多量，焼土ブロック中量，炭化粒子少量
8　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量

遺物出土状況　土師器片443点（坏63，高台付坏4，甕376），須恵器片17点（坏12，蓋2，甕3），土製品1点（紡錘車）鉄製品1点（釘）が，中央部から竈周辺の，覆土中・下層を中心に出土しているが，床面から検出された遺物は少ない。竈内からは坏類が多数検出されているが，いずれも火熱を受けておらず，また，竈内と竈周辺の破片が接合した土器3622も認められることから，これらの大半は，本跡廃絶後の埋め戻す段階で投棄

されたものと考えられる。また，遺物には遺構確認面と覆土下層から出土した破片が接合したものもあり，埋め戻し作業が一度に行われたと推測され，中央部やや南東コーナー部寄りから出土している3619が相当する。なお，須恵器片は，いずれも細片で，埋土中に混入していたと考えられる。

所見　土師器の坏や甕の形状などから見て，時期は9世紀後葉と考えられるが，当該期に比定される住居跡からは，須恵器の製作技法を残した土師器の鉢や甕が現れ，また，煮炊き具和に須恵器をほとんど用いなくなっており，この傾向は本県や本県周辺の特徴と一致し，工人層の変貌が想定される。

第292号住居跡出土遺物観察表（第609・610図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3617	土師器	坏	12.8	4.6	6.3	雲母・石英	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	南壁際覆土中層	100% PL233
3618	土師器	高台付坏	－	(4.0)	8.1	雲母・長石	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	北東部床面	50% 硬に転用
3619	土師器	鉢	22.0	17.0	13.1	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	体部外面下端横位のヘラ削り	東部覆土下層	70% PL233
3620	土師器	甕	20.4	(29.3)	－	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面下端横位のヘラ削り	竈覆土中・西部床面	50%
3621	土師器	小形甕	[12.2]	15.7	(8.0)	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	体部外面中位以下横位のヘラ削り	竈覆土中	30%
3622	土師器	小形甕	13.2	(8.8)	－	雲母・長石	明赤褐	普通	口唇部横ナデ，体部外面ヘラナデ	北東部床面	40%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3623	土錘	6.5	3.7	1.1	(7.9)	土	断面円形	竈覆土上層	
3624	紡錘車	(3.6)	0.8	[1.0]	(15.5)	土	4分の3欠損	東部覆土上層	坏底部を転用

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3625	釘	(12.0)	(0.5)	(0.5)	(14.3)	鉄	断面隅丸形，木質遺存	西部覆土中層	

第295号住居跡（第611図）

位置　調査区北部のH12c3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第294号住居跡を掘り込み，第15号溝・第258・284号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，遺存している床面の範囲と竈の位置から，N－0°を主軸とする長軸約3.8m，短軸約3.0mの長方形と推定される。

床　床面の一部は削平されて確認できないが，ほぼ平坦で，中央部を中心に踏み固められていたと推測される。

竈　竈の上半部分はすでに削平され，検出できたのは火床面と袖部の一部だけであるが，袖部は粘土と焼部に遺存した砂質粘土が確認された程度である。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ，火床面は硬化はしていないものの，赤変している様子が認められる。なお，土層断面図中の第4層は竈掘り方の土層である。また煙道は，上部が削片されているため外傾して立ち上がる様子が若干認められる程度である。

竈土層解説

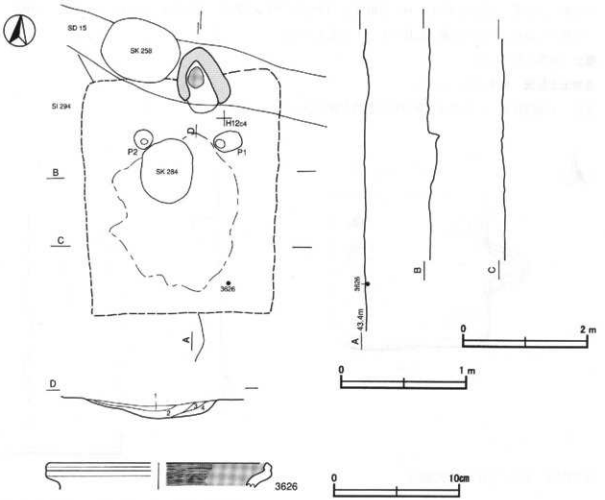
1　赤　褐　色　焼土粒子多量，炭化粒子少量
2　褐　色　ロームブロック多量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　炭化物・粘土ブロック少量，焼土ブロック微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量

ピット　2か所。径38～52cmで，主柱穴の可能性があるが，南側に相対する位置に主柱穴は検出されず，詳細は不明である。

覆土　一部床面が露出した状態で検出されたため，堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器片37点（坏4，甕33）が床面から出土しているが，すべて破片であり，本跡廃絶直後に投棄されたと考えられる。3626は南東コーナー部から出土した資料である。

所見　伴出遺物が少なく，時期は明確ではないが，土師器鉢などの形状からみて，9世紀後葉から10世紀初頭の間と推測される。



第611図　第295号住居跡・出土遺物実測図

第295号住居跡出土遺物観察表（第611図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3626	土師器	小形甕	[17.2]	(2.1)	－	雲母	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き	南東部床面	10%

第296号住居跡（第612図）

位置　調査区中央部のⅠ14f3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第354・363・441号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　一辺約2.5m方形で，主軸方向はN－96°－Wである。床面がほぼ露出した状態で検出されたため，壁の立ち上がりは不明である。

床　ほぼ平坦で，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

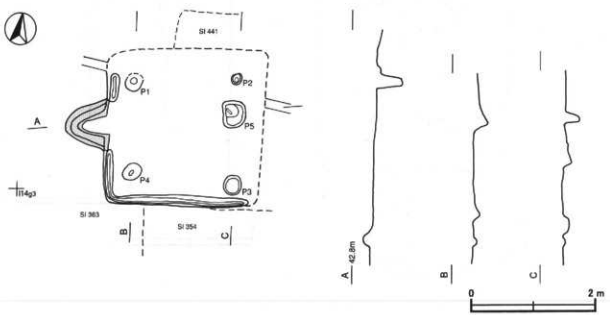
竈　西壁の中央部に砂質粘土で構築されているが，遺存状態は悪く，壁外へ約55cmほど掘り込まれているのが確認されただけである。なお，煙道は外傾して立ち上がっている。

ピット　5か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さ10～24cmである。P5は深さ約12cmで，東壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　検出されていない。

遺物出土状況　検出されていない。

所見　重複関係から，時期は10世紀後葉以降と推測される。



第612図　第296号住居跡実測図

第299号住居跡（第613図）

位置　調査区北部のⅠ12d4区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第180号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　東西軸は約3.4mで，南部が調査区域外に延びているため，南北軸は約3.6mだけが確認でき，N－95°－Eを主軸とする一辺3.4m前後の方形あるいは長方形と推測される。壁高は14～20cmで，外傾して立ち上がっている。

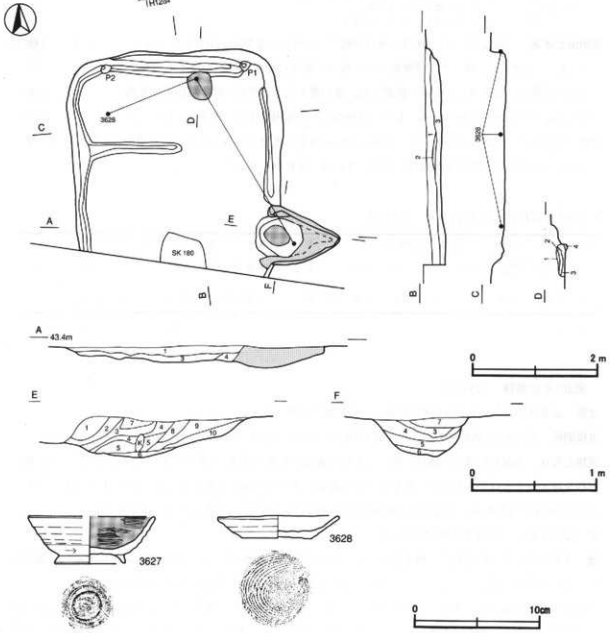
床　ほぼ平坦で，全体的に軟弱である。壁溝が周回しており，また，南壁やや北寄りの位置から中央部にかけて一本の仕切り溝が北壁に平行して延びている。また，北壁に径約40cmの焼土塊が検出されたが，床面に火熱

を受けた痕跡は認められない。

焼土塊土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子少量
3　黒　　色　ロームブロック・焼土粒子少量
4　褐　　色　ロームブロック多量

竈　東壁の南部に砂質粘土で構築され，焚口部から煙道部まで約136cm，袖部幅約98cm，壁外への掘り込みは約94cmである。天井部は崩落し，土層断面図中の第２～５，８～10層が崩落土に相当する。袖部の遺存状態は良好で，内側は赤変している。火床部は床面を約６cmほど掘り下げて使用し，火床部は赤く焼き締まっている。また煙道は，火床部から外傾して立ち上がっている。



第613図　第299号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
2 黒 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
3 黒 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
4 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック中量，ロームブロック少量
5 黒 色 焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
6 黒 褐 色 焼土粒子少量
7 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
8 暗 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
9 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量
10 灰 褐 色 焼土ブロック中量，炭化物少量，ローム粒子・粘土ブロック微量

ピット 2か所。いずれも北壁際に位置しており，位置と形状から見て壁柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり，各層にロームブロックと焼土を含む人為堆積である。

土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
3 黒 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック少量
4 黒 色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片355点（坏54，高台付椀7，小皿10，甕284），須恵器片5点（坏4，甕1），灰釉陶器1点（椀），鉄滓3点，礫1点（被熱痕）が，竈内と竈周辺や北壁付近の覆土下層を中心に出土している。大半は本跡廃絶後に投棄されたものと推測され，竈の覆土中と北壁際の焼土塊内及び北西コーナー部から出土した破片が接合した3628が相当する。また，須恵器片や灰釉陶器片は，埋土中に混入していたと考えられる。

所見 坏や小皿の形状などから見て，時期は10世紀後葉と推測される。また，当該期集落の特徴のひとつである東壁部に竈を付設した住居形態は，以後，北壁部へと推移していく。

第299号住居跡出土遺物観察表（第613図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3627	土師器	高台付椀	[9.8]	3.8	5.6	雲母	橙	普通	体部内面ヘラ磨き	東部覆土中	60%
3628	土師器	小皿	9.5	1.9	5.6	雲母・長石	橙	普通	底部回転糸切り離し	竈焚口中・北壁覆土下層	70%

第301号住居跡（第614図）

位置 調査区中央部のⅡ12g4区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係 第302号住居跡を掘り込み，第303号住居に掘り込まれている。

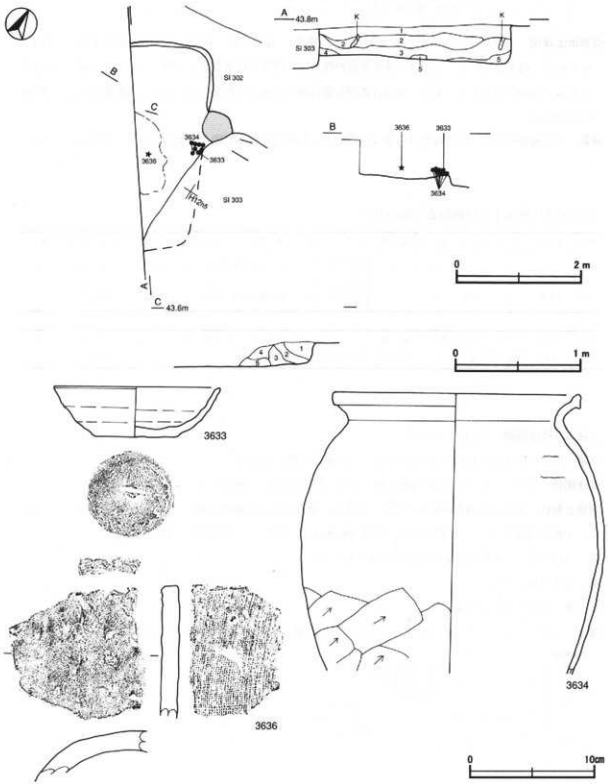
規模と形状 南西部が調査区域外に延び，また南東部が第303号住居に掘り込まれているため，明確に規模と形状を捉えることはできないが，遺存している北コーナー壁と竈の位置から，N－60°－Eを主軸とする一辺約3.0m前後の方形あるいは長方形と推測される。壁高は約20cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。

竈 東壁の中央部に砂質粘土で構築されているが，意図的に壊された上に第303号住居跡に南東部が掘り込まれ，規模は明確に捉えられなかった。東壁には砂質粘土を貼り付けた袖部の痕跡がわずかに確認され，火床部と想定される位置には，焼土ブロックのほかにロームブロックも多く含まれているため，明確に火床部を捉えることはできなかった。また煙道は，上部が第303号住居に壊されているが，外傾して立ち上がる様子が若干認められた。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量，粘土ブロック微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
4　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量



第614図　第301号住居跡・出土遺物実測図

ピット　検出されていない。

覆土　5層からなり，各層にロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
5　黒　　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量

遺物出土状況　土師器片50点（坏7，高台付坏1，甕42），瓦片1点（丸瓦）が，中央部と竈周辺の覆土中・下層を中心に出土している。大半は本跡廃絶後の埋め戻す段階で投棄されたと考えられ，中央部の覆土上層から出土した3636が相当する。また，3634は竈内と竈前面の床面から出土しているが，本跡廃棄時に遺棄された可能性が高い。

所見　伴出遺物が少ないため時期は明確ではないが，住居の規模や形態などから見て，9世紀後葉と考えられる。

第301号住居跡出土遺物観察表（第614図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3633	土師器	坏	13.2	4.0	6.8	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	竈周床面	60%
3634	土師器	甕	19.6	(22.3)	－	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面下端ヘラ削り	竈覆土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質および特徴	出土位置	備考
3636	丸瓦	(16.5)	(8.9)	(1.6)	(210)	凸面ヘラ削り，凹面布目痕	中央部覆土上層	

第303号住居跡（第615・616図）

位置　調査区中央部のH12h5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第301・302・305号住居跡を掘り込み，第210号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　南西部が調査区域外に延びているが，遺存部から長軸約3.9m，短軸約2.4mの南北に長い長方形で，主軸方向はN－0°と推測される。壁高は約30cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，壁際を除いた床面全体が硬化している。

竈　検出されていない。

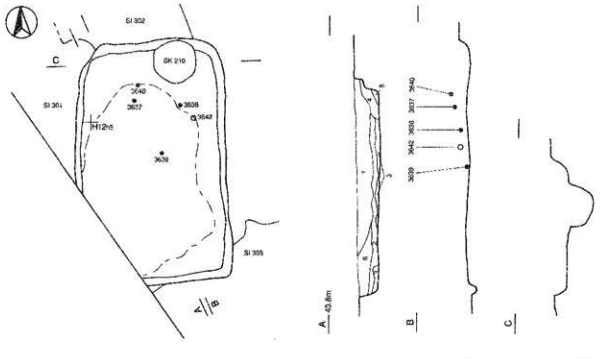
ピット　検出されていない。

覆土　6層からなり，ロームブロックを主体とし，各層に焼土を含む人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量
4　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
5　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片399点（坏181，高台付椀32，小皿4，甕182），須恵器片30点（坏15，高台付坏11，甕4），緑釉陶器片1点（椀），轆7点（被熱痕6）が，中央部から北部にかけての覆土中・下層を中心に出土している。これらの大半は，本跡廃絶後に投棄されたり，本跡廃絶後の埋め戻しの段階で埋土中に混入したと考えられ，前者は3637・3638・3642が相当し，後者は須恵器片が相当する。なお，3639は中央部の床面から完形で出土しており，住居廃絶時に遺棄されたと考えられる。

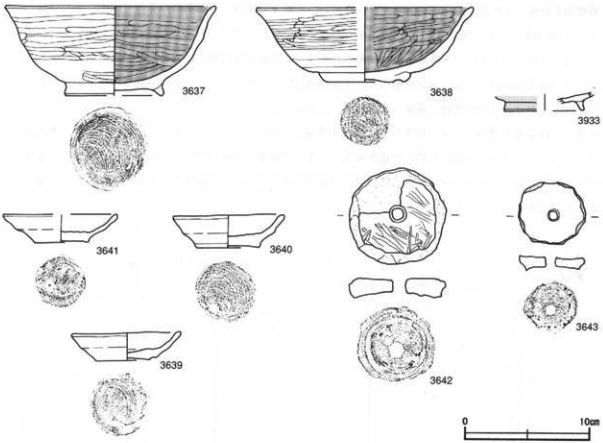
所見　本跡は竈が認められず，形状も南北軸が東西軸の1.6倍と長く，このような住居形態は，当遺跡には存在していない。また，床面は平坦で全体が硬化し，多くの供膳具類も出土しているため，工房跡や倉庫などの収納施設とは考えにくく，酒竈を備えた住居の可能性も考えられる。土師器坏や小皿の形状などから見て，時期は11世紀前半と考えられる。



第615図　第303号住居跡実測図

第303号住居跡出土遺物観察表（第616図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3637	土師器	高台付椀	16.5	7.2	[8.0]	雲母・石英	明赤褐	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	北部覆土上層	50% Pl.233
3638	土師器	高台付椀	[15.1]	5.9	6.8	雲母	明褐	普通	体部内・外面ヘラ磨き	北部覆土上層	50%
3639	土師器	小皿	8.7	2.2	4.8	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り離し	中央部覆土下層	100% Pl.233
3640	土師器	小皿	8.8	2.6	5.0	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転糸切り離し	北部覆土上層	70%
3641	土師器	小皿	(9.0)	2.2	4.2	雲母・長石	赤褐	普通	底部回転糸切り離し	東壁覆土下層	50%
3033	緑釉陶器	椀	－	(1.4)	[5.4]	緻密	灰黄・オリーブ灰	良好	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	東部覆土上層	10%



第616図　第303号住居跡・出土遺物実測図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3642	紡錘車	(7.7)	1.6	1.1	81.9	土	両面から穿孔している，外面剥離部分あり	北東部覆土上層	坏底部を転用
3643	紡錘車	(5.3)	1.0	1.0	23.2	土	両面から穿孔している	北東部覆土上層	坏底部を転用

第306号住居跡（第617・618図）

位置　調査区中央部のH12g6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第305号住居跡・第209号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　東西軸は約4.7mであるが，北部は調査区域外に延びているため，南北軸は約2.5mだけが確認できた。遺存している壁やピットの位置などから，N－9°－Eを主軸とする方形または長方形と推測される。

床　ほぼ平坦で，4本の主柱穴の内側がよく踏み固められている。壁溝は調査区域外で不明であるが，ほぼ周回していたと考えられる。

竈　確認されていないが，調査区域外に位置する北壁部に構築されていたと推測される。

ピット　5か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さ40～58cmである。P5は深さ約24cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

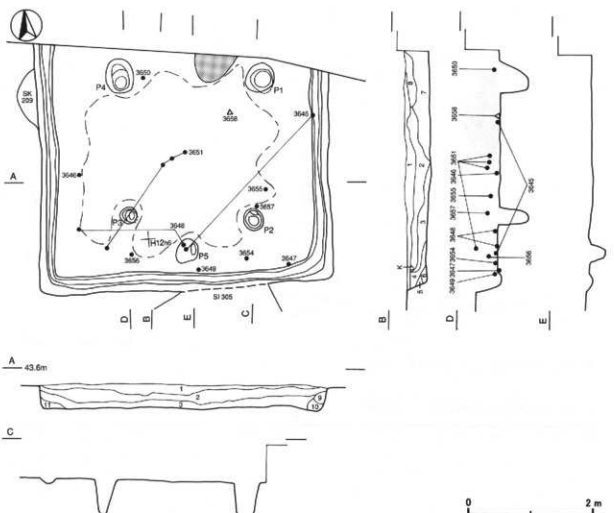
覆土　11層からなり，ロームブロックや焼土ブロックを主体とした人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
3　極暗褐色　ロームブロック少量

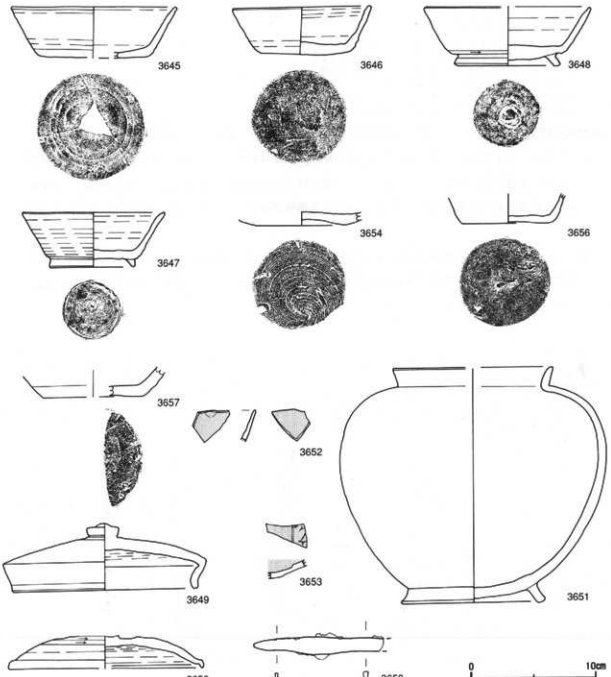
4　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
5　褐　　色　ローム粒子多量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
7　黒　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック・粘土粒子少量
8　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
9　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
10　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
11　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片９点（甕），須恵器片27点（坏７，甕19，甑１）が，全域の覆土下層を中心に出土している。図示した土器の中では，3647・3649は南壁際，3646は西壁際のいずれも床面から完形に近い状態で出土しており，本跡に伴う土器と考えられる。その他のほとんどは覆土下層から出土したもので，本跡廃絶後の早い段階で投棄されたと考えられる。3652・3653は遺構確認面から出土しており，耕作等による混入と考えられる。

所見　当遺跡におけるこの時期の住居や掘立柱建物は，主軸方向が真北よりやや東を指すものが多く，本跡もその典型である。また，供膳具に須恵器が使用され，土師器がないことや須恵器の坏の形状などから見て，時期は８世紀後葉と考えられる。



第617図　第306号住居跡実測図



第618図　第306号住居跡出土遺物実測図

第306号住居跡出土遺物観察表（第618図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3645	須恵器	坏	13.1	4.1	8.7	雲母・長石・石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	東壁際床面・P5覆土下層	90%
3646	須恵器	坏	11.0	4.0	7.4	雲母・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラナデ	西壁際覆土下層	100% PL234
3654	須恵器	坏	－	（1.0）	7.3	雲母	黒褐	普通	底部回転糸切り離し	竈壁際覆土下層	20%
3656	須恵器	坏	－	（2.4）	7.0	雲母・長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	南部覆土中層	20% 底部ヘラ記号「+」
3657	須恵器	坏	－	（2.3）	［8.0］	雲母・長石	明灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	竈東部覆土中層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3647	須恵器	高台付坏	11.4	4.3	6.7	雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南壁際床面	90% PL234
3648	須恵器	高台付坏	(13.2)	4.7	8.0	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南西部床面	50%
3649	須恵器	壺	14.6	5.3	－	雲母・長石・石英	黄灰	良好	天井部ロクロナデ	南壁際覆土下層	90%
3650	須恵器	蓋	(15.3)	(2.6)	－	長石	灰	普通	天井部ヘラ削り	北部覆土下層	40% 自然釉
3651	須恵器	短頸壺	12.6	18.7	11.4	長石	灰	普通	口唇部・体部内外面ロクロナデ	中央部・南西部覆土中層	40% PL234
3652	緑釉陶器	輪花皿	(2.6)	－	－	緻密	灰白・緑灰	良好	口縁部にくびれを有する	東部覆土上層	10%
3653	緑釉陶器	段皿	(1.5)	－	－	緻密	黄灰・緑灰	良好	体部内面に段を持つ，印刻花紋あり	南部覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3658	刀子	(10.2)	(1.3)	(0.5)	(11.5)	鉄	刃部，一部欠損	中央部覆土下層	

第311号住居跡（第619図）

位置　調査区中央部のI12b7区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第310号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　南北軸は約2.8mで，西側部分が調査区域外に延びているため，東西軸は約1.4mだけが確認でき，N－70°－Eを主軸とする一辺2.8m前後の方形あるいは長方形と推測される。壁高は約30cmで，外傾して立ち上がっている。

床　全体的に軟弱で，床面を明確に捉えることはできなかったが，ほぼ平坦と推測される。

竈　東壁の中央部に砂質粘土で構築され，焚口部から煙道部まで約82cm，袖部幅約64cm，壁外への掘り込みは約42cmである。天井部と両袖部の内側は崩落し，土層断面図中の第1～3層がこれらに相当する。火床部は浅い皿状を呈しており，火熱を受けているが，焼き締まった感じはない。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
2　赤　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
3　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子少量
5　赤　褐　色　焼土ブロック少量，炭化粒子微量
6　赤　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子微量
7　黒　褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
8　暗　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
9　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット　検出されていない。

覆土　5層からなり，ロームや焼土のブロックを主体とした人為堆積である。

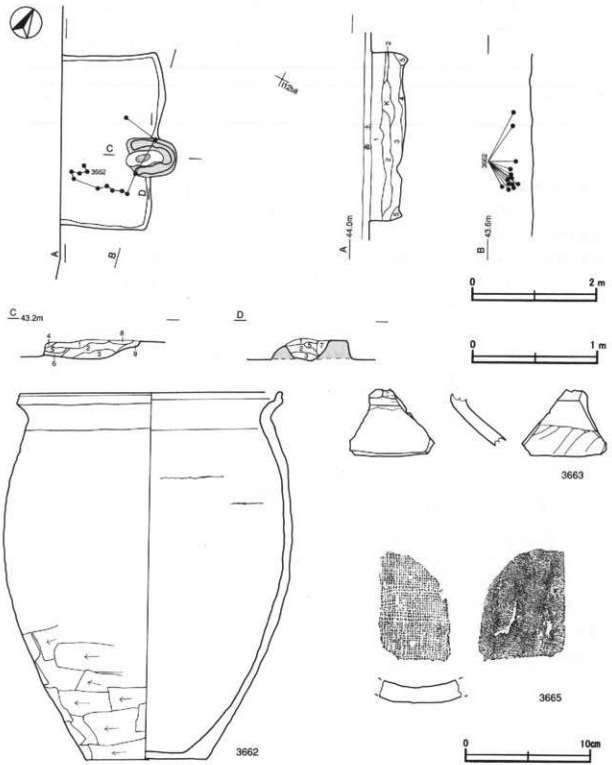
土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
4　褐　　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片10点（甕），須恵器片32点（坏24，甕8），緑釉陶器片1点（皿），瓦片1点（平瓦），石器1点（砥石）が，主に竈内や竈周辺の覆土中から出土している。これらは，本跡廃絶後に投棄されたと考

えられ，3662が相当する。また3663は北東部の覆土下層から出土したもので，破断面が一部摩滅していることから，本跡廃絶時の埋め戻す過程で埋土中に混入したと考えられる。3665や緑釉陶器片は，耕作による撹乱などで混入したと考えられる。

所見　当遺跡から出土した瓦は，混入したものも含めると多数出土しているが，当集落内へは竈構築材としての二次的活用を目的として搬入されたと推測され，当遺跡と近接する新治郡衙や，生産地からの搬入が想定さ



第619図　第311号住居跡・出土遺物実測図

れる。伴出遺物が少ないため判断材料に乏しいが，竈内から出土している坏や甕の形状，住居形態の傾向などから見て，時期は9世紀後葉と考えられる。

第311号住居跡出土遺物観察表（第619図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3662	土師器	甕	20.4	29.3	9.6	雲母・長石・石英	橙	普通	体部外面ヘラ磨横位のヘラ削り	竈焚き口，北部，南部覆土1層	40%
3663	須恵器	甕	－	（4.2）	－	長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	北東部覆土下層	5% 砥石転用

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質および特徴	出土位置	備考
3665	平瓦	（8.7）	－	（1.4）	（120.0）	凹面布目痕，凸面ヘラ削り	覆土中	

第317号住居跡（第620・621図）

位置　調査区中央部のⅠ12g9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第315・318号住居跡を掘り込み，第422号住居に掘り込まれている。

規模と形状　一辺約4.0mの方形で，主軸方向はN－5°－Eである。壁高は8～23cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，竈の前面から出入口施設にかけて硬化面が広がっており，整溝が周回している。南東コーナー部と北西コーナー寄りの床面でわずかなくぼみが3か所確認されている。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築され，焚口部から煙道部まで約100cm，袖部幅約122cm，壁外への掘り込みは約64cmである。天井部は崩落し，土層断面図中の第3・4層が崩落土に相当する。袖部の遺存状態は良好で，内側は赤変している。火床部は浅い皿状を呈し，土層断面図中の第6層の上面が火床面であり，その部分は赤変硬化している。また，煙道は火床部から急傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子・粘土ブロック微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量
3　灰　黄　褐　色　粘土ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子・砂質粘土ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
7　黒　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量

ピット　4か所。いずれも主柱穴で，深さは28～60cmである。

覆土　9層からなり，焼土や炭化物を各層に含み，不規則な堆積状況を示す人為堆積である。第3～6層には竈材の一部流出が見られる。

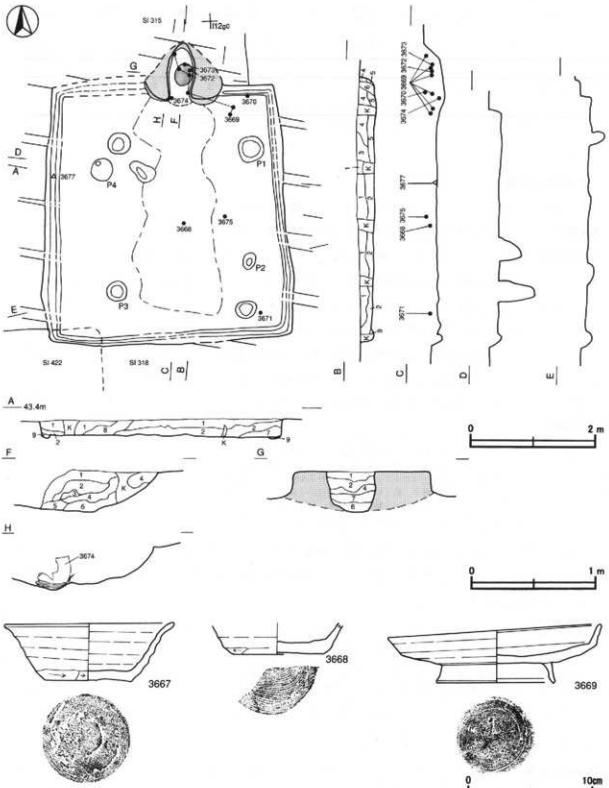
土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
3　灰　黄　褐　色　粘土ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
4　にぶい赤褐色　砂質粘土粒子・焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
7　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
8　暗　褐　色　ローム ブロック・焼土粒子少量
9　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片529点（甕528，甑1），須恵器片88点（坏62，蓋1，鉢21，甕4），鉄製品1点（刀子），礫2点（被熱痕）が，竈周辺や東壁付近から北東コーナー部にかけて主に覆土下層から出土している。これらは，本跡廃絶後間もなく投棄されたものと考えられ，3669・3670・3671が相当する。また，3672は支脚に，3674

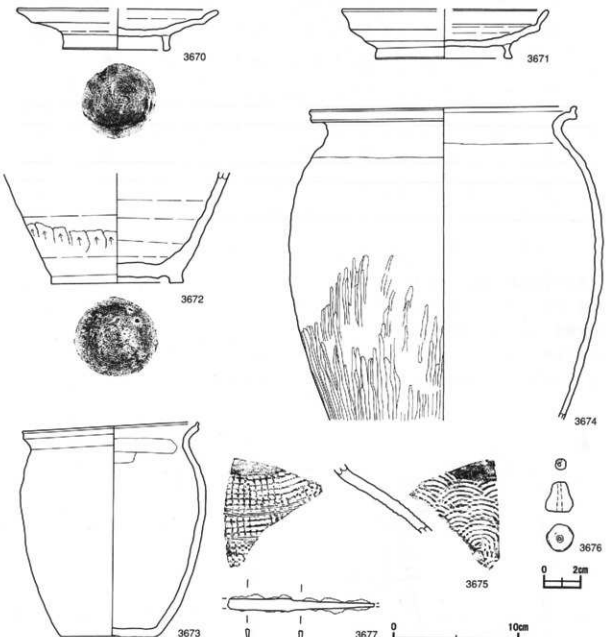
は袖部構築材にそれぞれ使用されていたもので，いずれも竈内から逆位で出土している。覆土中から出土した3675は，破断面が摩滅しており，混入したものと考えられる。

所見　供膳具に須恵器が使用され土師器がないことや，坏や盤の形状などから見て，時期は9世紀中葉と考え



第620図　第317号住居跡・出土遺物実測図

られる。なお，当遺跡の須恵器製品は，主に当遺跡から北方向約2.8kmに位置する堀の内窯跡群から供給されているが，製作技法や胎土の異なる坏類も多数見られ，郡内における他の生産地や郡域を超えた隣接地の検討が必要である。



第621図　第317号住居跡出土遺物実測図

第317号住居跡出土遺物観察表（第620・621図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3667	須恵器	坏	13.4	4.6	6.8	雲母・長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り	覆土中	70% PL234
3668	須恵器	坏	－	(2.5)	[7.0]	雲母・長石	褐灰	普通	底部回転糸切り離し	中央部覆土下層	20%
3669	須恵器	盤	16.9	4.6	9.5	雲母・長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	北東部覆土中層	70%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3670	須恵器	盤	[15.8]	3.3	8.5	雲母・長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南壁際覆土中層	60% PL234 硯に転用
3671	須恵器	盤	[16.3]	3.9	[10.9]	雲母・長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南東部覆土中層	45%
3672	須恵器	壺	－	(8.8)	10.4	雲母・長石	赤褐	普通	体部下端縦位のヘラ削り	竈覆土中	30%
3673	土師器	小形甕	13.9	17.0	[7.1]	雲母・長石・石英	褐	普通	体部内・外面ナデ	竈覆土中	60% PL234
3674	土師器	甕	20.4	(25.0)	－	雲母・長石・石英	明赤褐	良好	体部外面下端ヘラ磨き	竈火床部	30%
3675	須恵器	甕	－	(5.3)	－	雲母・長石	灰	普通	外面格子目叩き，内面当て具痕あり	東部覆土中層	5%

番号	器種	長さ・幅	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3676	土錘	1.5	1.5	0.3	2.8	土	断面円形	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3677	刀子	(11.5)	1.1	0.3	(13.2)	鉄	刃部，片関	西壁際床面	

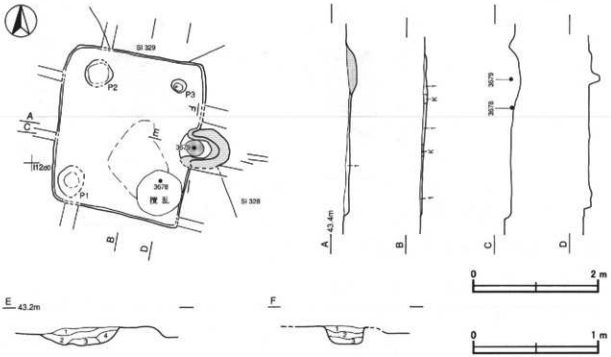
第319号住居跡（第622・623図）

位置　調査区中央部のH12c0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第328・329号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約2.5m，短軸約2.4mの方形で，主軸方向はN－98°－Eである。壁高は約10cmと低い。

床　ほぼ平坦で，中央部から南部にかけて一部硬化した面が確認された。



第622図　第319号住居跡実測図

竈　東壁の中央部に砂質粘土で構築され，焚口部から煙道部まで約78cm，袖部幅約62cm，壁外への掘り込みは約58cmである。天井部は崩落しているが，袖部の遺存状態は良好で，内側は赤変している。火床部は約6cmの厚さで赤く焼き締まり，皿状を呈している。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化物少量
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量

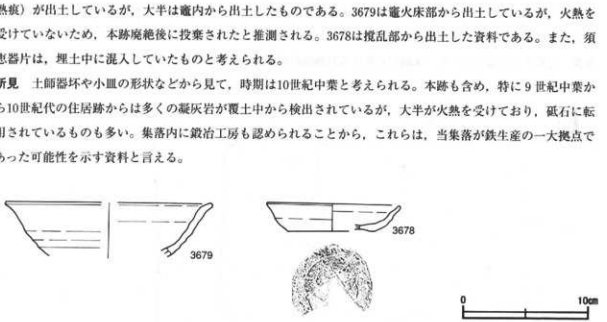
ピット　3か所。いずれも主柱穴で，深さ20～24cmである。主柱穴が想定される南東コーナー部は攪乱を受けているため不明である。

覆土　ローム粒子が均一に堆積している単一層で，自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片90点（坏2，高台付椀2，小皿10，甕76），須恵器片9点（坏4，甕5），礫5点（被熱痕）が出土しているが，大半は竈内から出土したものである。3679は竈火床部から出土しているが，火熱を受けていないため，本跡廃絶後に投棄されたと推測される。3678は攪乱部から出土した資料である。また，須恵器片は，埋土中に混入していたものと考えられる。

所見　土師器坏や小皿の形状などから見て，時期は10世紀中葉と考えられる。本跡も含め，特に9世紀中葉から10世紀代の住居跡からは多くの凝灰岩が覆土中から検出されているが，大半が火熱を受けており，砥石に転用されているものも多い。集落内に鍛冶工房も認められることから，これらは，当集落が鉄生産の一大拠点であった可能性を示す資料と言える。



第623図　第319号住居跡出土遺物実測図

第319号住居跡出土遺物観察表（第623図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3678	土師器	坏	10.5	2.3	6.7	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	攪乱部	50%
3679	土師器	坏	[16.2]	(4.3)	－	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部内・外面ロクロナデ	竈火床部覆土中	10%

第320号住居跡（第624図）

位置　調査区中央部のH12h0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第323・324・507号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　後世の攪乱を受けており，壁を正確に捉えることはできなかったが，床面に広がった焼土の範囲

と竈の位置から，N－96°－Eを主軸とする一辺約3.3mの方形または長方形と推定される。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，床面全体に焼土粒子や炭化物が広がっている。また，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

竈　遺存状態が悪く，天井部や袖部は認められず，白色粘土粒子と砂粒を主体とする灰褐色土が，径約80cmにわたり円形状に広がっているだけである。火床部と想定される位置には，焼土ブロックのほかにロームブロックも多く含まれ，明確に火床面を捉えることはできなかった。

ピット　検出されていない。

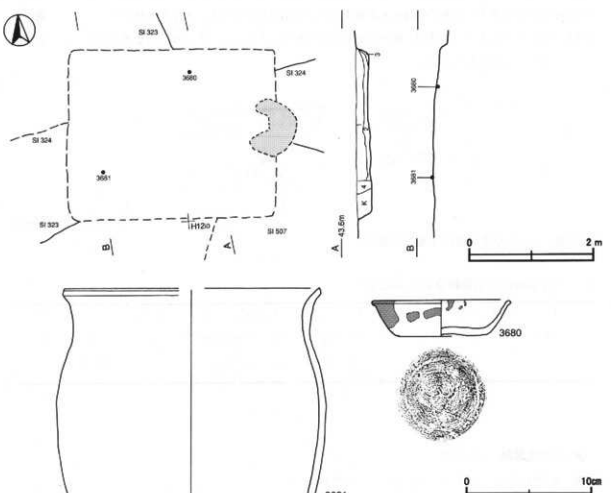
覆土　4層からなり，ロームや焼土のブロックを各層に含む人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
3　暗 赤 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片38点（坏4，高坏1，小皿9，甕24），須恵器片1点（坏），礫1点（被熱痕）が，覆土中から出土している。大半が細片で，投棄あるいは混入したと考えられ，投棄されたものとしては南西部の床面から出土している3681が相当する。

所見　完形土器がないことや，床面に点在する被熱痕の形跡，土層の堆積状況などからみて，住居廃絶に伴っ



第624図　第320号住居跡・出土遺物実測図

た焼失住居と考えられる。また，遺物が少ないため時期は明確ではないが，床面に投棄された土師器の坏や甕の形状から，10世紀中葉と推測される。

第320号住居跡出土遺物観察表（第624図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3680	土師器	坏	10.8	2.8	7.2	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部回転糸切り後，手持ちヘラ削り	北壁際床面	70% 煤付着
3681	土師器	甕	(20.2)	(17.0)	－	雲母・石英	にぶい赤褐	普通	体部内面ヘラナデ	南西部床面	20%

第325号住居跡（第625図）

位置　調査区中央部のH12i9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第324号住居跡を掘り込み，第264号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　覆土が浅く正確には捉えられないが，遺存している壁と竈の位置から，N－20°－Wを主軸とする一辺約3.0mの方形または長方形と推定される。壁高は10cmと低く，立ち上がりは不明である。

床　ほぼ平坦であるが，硬化している中央部が若干高くなっている。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約120cm，袖部幅約104cm，壁外への掘り込みは約40cmである。竈付近の床面には竈材と思われる焼土ブロックが散在しており，意図的に壊された可能性が高く，天井部は崩落して，袖部の遺存状態も悪い。火床部は浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第4層の下面が火床面に相当し，赤変硬化している部分が確認された。煙道は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量，灰微量
2　暗 赤 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量，炭化粒子微量
3　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
4　赤　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
5　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
6　明 赤 褐 色　焼土ブロック多量，ローム粒子少量
7　黒　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量
8　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
9　明 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
10　暗 赤 褐 色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
11　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少無

ピット　検出されていない。

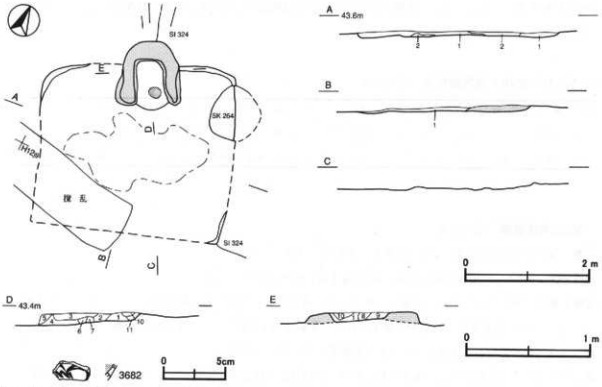
覆土　2層からなり，ロームブロックや粘土を含む，人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
2　明　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量

遺物出土状況　土師器片334点（坏132，高坏6，小皿21，甕125，甑50），須恵器片3点（甕），礫2点（被熱痕）が，全域の覆土中に散在した状態で出土している。甕片に対して坏片が多数を占めており，量的に不自然であることから，大半は住居廃絶後に投棄されたと推測される。また，覆土中から出土した3点の須恵器の細片は，破断面が摩滅しており，混入したと考えられる。

所見　小皿が出現していることや，供膳具に須恵器を用いられなくなっていること，当該期の住居形態の特徴から，時期は10世紀中葉と考えられる。



第625図　第325号住居跡・出土遺物実測図

第325号住居跡出土遺物観察表（第625図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3682	土師器	坏	－	(1.2)	－	長石	橙	普通	体部内面ヘラ磨き	南西部覆土上層	5％ 墨書「□」

第328号住居跡（第626図）

位置　調査区中央部のⅠ13c1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第329号住居跡，第1号溝跡を掘り込み，第319号住居，第464号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.8m，短軸3.4mの長方形で，主軸方向はN－37°－Wである。壁高は24cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈の前面から出入口部にかけて硬化面が広がっている。壁溝は，南東コーナー部が不明であるが，本来は周回していたと考えられる。北西コーナー部及び中央部の北東コーナー寄りの床面でわずかなくぼみが確認されているが，詳細は不明である。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約120cm，袖部幅約84cm，壁外への掘り込みは約18cmである。天井部は崩落しており，土層断面図中の第5層が相当する。袖部の遺存状態は良好で，内側が火熱を受けて赤変している。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し，火床面は焼き締まっている。煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
2　灰　褐　色　粘土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
3　暗赤褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
5　灰　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
6　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　1か所。深さ16cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　北東コーナー部に付設され，長軸60cm，短軸42cmの楕円形で，深さは40cmである。底面形状は長方形を呈し，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量

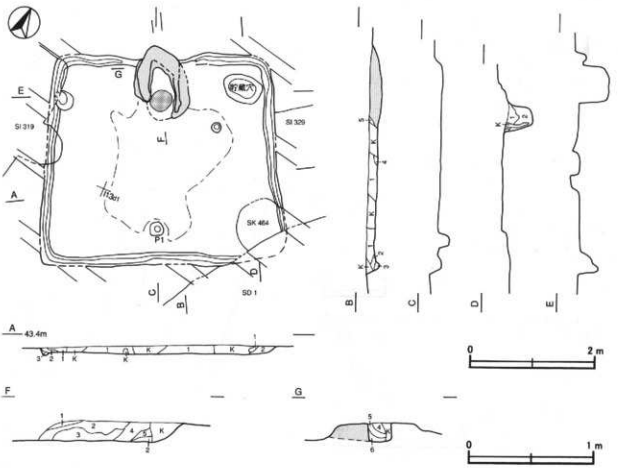
覆土　5層からなり，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第4層には竈材の一部流出が見られる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
2　暗赤褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，炭化物微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片4点（坏2，甕2）が覆土中から出土している。すべて破断面が摩滅した細片で，混入と考えられる。

所見　床面がよく踏み固められて，また，竈の火床面が厚く焼き締まっていることや，食膳具類はあらかじめ持ち出されていることなどから見て，比較的長い居住期間を経て廃絶されたものと推測される。なお，伴出遺物は検出されないため時期は明確ではないが，竪穴部に主柱穴を持たない小形の住居形態であることや，重複関係からみて，8世紀後葉前後の住居跡と推測される。



第626図　第328号住居跡実測図

第331号住居跡（第627図）

位置　調査区中央部のH13 j 8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第342号住居跡，第203号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，遺存している床面の範囲から，N－10°－Eを主軸とする一辺約2.2mの方形または長方形と推定される。壁は遺存していないため立ち上がりは不明である。

床　西部は削平されているため確認できないが，ほぼ平坦で硬化した床は径約2mの範囲で確認された。

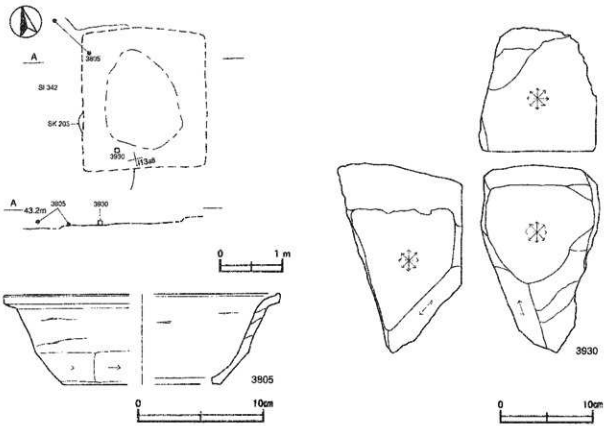
窓　検出されていない。

ピット　検出されていない。

覆土　堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器片13点（坏5，甕8），石器1点（砥石）が床面から出土している。すべて細片で，破断面が摩滅している土器片もあり，住居廃絶後に投棄されたものや埋め戻す段階で埋土中に混入したと考えられる。3805は北西コーナー部と第342号住居跡から出土した破片が接合したもの，3930は南西コーナー部からそれぞれ出土している。

所見　竈は認められず，倉庫的な施設の可能性も考えられるが，当遺跡から置き竈の破片が数点検出されていることや，第303号住居跡と住居形態が類似していることなどから，置き竈を備えた住居の可能性が高い。伴出遺物がないため時期は明確ではないが，投棄された土師器片や重複関係から，10世紀前葉頃と推測される。



第627図　第331号住居跡・出土遺物実測図

第331号住居跡出土遺物観察表（第627図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3805	土師器	甕	[21.8]	7.2	[12.4]	雲母	にぶい橙	普通	体部ヘラ削り	北西部床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3939	砥石	19.7	12.4	13.0	3600	凝灰岩	砥面は3面	南西部床面	

第342号住居跡（第628図）

位置　調査区中央部のH13 j7 区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第331号住居，第203号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸4.0m，短軸3.1mの東西に長い長方形で，主軸方向はN－25°－Eである。壁高は5～10cmと低く，立ち上がりは不明である。

床　ほぼ平坦で，中央部から竈前面にかけてよく踏み固められており，壁溝は南壁を除いて認められた。北西コーナー部と中央部の床面でわずかなくぼみが確認されている。

竈　北壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されているが，竈廃絶時に意図的に壊された可能性が高く，竈前の床面に火熱を受けた土器片や竈構築材の粘土粒子や砂粒が散在している。また，竈の大半が削平されており，検出できたのは袖部と煙道の一部だけである。火床部が想定される位置には焼土ブロックのほかにロームブロックも多く含まれ，明確に火床面を捉えることはできなかった。煙道は上部が削平されているため，外傾して立ち上がる様子が若干認められる程度である。

竈土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子・砂質粘土粒子多量，ロームブロック・炭化粒子少量
2　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
4　黒褐色　炭化粒子中量，焼土ブロック・ローム粒子少量
5　暗褐色　焼土ブロック少量
6　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
7　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
8　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
9　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
10　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
11　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・粘土ブロック少量
12　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・粘土ブロック少量

ピット　2か所。P2は深さ26cmで，位置的に出入り口施設に伴うピットの可能性が高い。P1は深さ28cmで，形状から柱穴と判断したが，詳細は不明である。

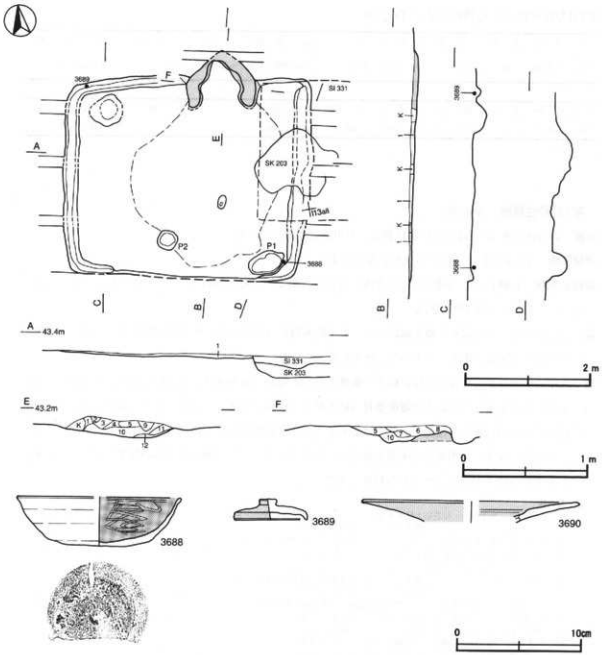
覆土　単一層であるが，覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

1　暗褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片63点（坏28，甕35），須恵器片10点（坏4，蓋1，短頸壺5），灰釉陶器片2点（皿，壺），鉄製品1点（不明），鉄滓1点，礫1点（被熱痕）が，西側部分の床面から主に出土している。大半が細片で完形に近い状態で検出された遺物はなく，投棄あるいは埋土中に混入していたものと考えられる。3689は北西コーナー壁際，3688は南東コーナー壁際のいずれも床面から出土しており，住居廃絶後間もなく投棄されたものと考えられる。

所見　伴出遺物は少ないが，住居跡廃絶後間もなく投棄された土師器坏から，時期は9世紀後葉と推測される。



第628図　第342号住居跡・出土遺物実測図

第342号住居跡出土遺物観察表（第628図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3688	土師器	坏	[13.0]	3.9	7.8	雲母・長石	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	南東部床面	40%
3689	灰釉陶器	蓋	5.8	1.7	－	緻密	灰黄・オリーブ灰	良好	釉は刷毛塗り	北西壁溝部	80% PL235 猿投産（黒笹14号窯式）
3690	灰釉陶器	段皿	[16.9]	(1.7)	－	緻密	灰白・灰黄	良好	体部内面に段を有する，釉は刷毛塗り	東部覆土上層	10% 猿投産（黒笹90号窯式）

第344号住居跡（第629図）

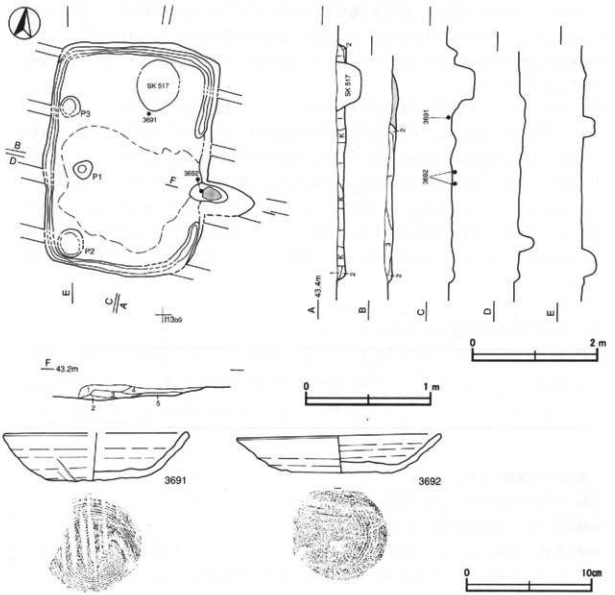
位置　調査区中央部のⅠ13a8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第517号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.8m，短軸2.6mの南北に長い長方形で，主軸方向はN－94°－Eである。壁高は7～14cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈の前面から出入口部にかけて硬化面が広がっており，壁溝が周回している。

竈　東壁の中央部やや南寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約108cm，袖部幅約50cm，壁外への掘り込みは約76cmである。遺存状態が悪く，天井部は崩落しており，袖部は東壁に砂質粘土を貼り付けた痕跡がわずかに確認される程度である。火床部は浅い皿状を呈し，土層断面図中の第2層下面が火床面に相当すると考えられ，焼き締まっている。煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。



第629図　第344号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

1　暗赤褐色　焼土ブロック・砂質粘土粒子中量
2　暗赤褐色　焼土ブロック多量
3　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土粒子少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物微量
5　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量

ピット　3か所。P1は深さ18cmで，構築の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2・P3は形状から柱穴と考えられるが，相対する東側には柱穴は認められず，詳細は不明である。

覆土　3層からなり，ロームブロックや炭化粒子を含み，ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック小量，焼土粒子・炭化物少量

遺物出土状況　土師器片86点（坏36，高台付椀1，小皿8，甕41），須恵器片6点（坏3，鉢1，甕2），瓦1点，鉄滓2点，礫6点(被熱痕)が，中央部と竈付近から出土しているが，床面から確認された遺物は少なく，大半は覆土下層から検出されたものである。また，竈内と竈周辺の破片が接合した3692は火熱を受けておらず，本跡廃絶後の埋め戻す段階で投棄されたと考えられる。3691は中央部の床面から出土しており，住居廃絶時に遺棄されたと考えられる。

所見　小皿の形状から，時期は10世紀中葉と考えられる。また，当遺跡からは，竈を東壁の南部に付設し，北側に広い空間を持つ本跡と形状が似ている住居跡が多数確認されている。これらの住居跡の特徴は，遺棄された遺物が，北部よりも中央部や南部から多く出土し，北部と中央部を仕切る溝が認められる例（第299号住居跡）があり，硬化した床面が本跡のように北部では確認されない例（本跡，第378・472号住居跡他）が多いなどが挙げられる。このような共通点から，居住者たちは意識して北部を広く空けて使用したことがうかがわれ，中央部から南部は，土器類の収納や食事をする空間に充てていたと考えられる。また北側は，これら南側での用途以外を想定すると，寝室などに充てられていたと推測され，さらに板床やむしろなどの存在も想定される。

第344号住居跡出土遺物観察表（第629図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3691	土師器	坏	[14.4]	3.9	7.5	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転糸切り離し	中央部床面	40% 底石転用
3692	土師器	坏	16.0	3.1	8.0	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底部回転糸切り離し後，ナデ	竈内・竈手前床面	35%

第345号住居跡（第630・631図）

位置　調査区中央部のH13j9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第131号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　東西軸は約4.0mで，北側部分が調査区域外に延びているため，南北軸は約2.2mだけが確認でき，N－96°－Eを主軸とする一辺4.0m前後の方形あるいは長方形と推測される。壁高は約20cmで，外傾して立ち上がっている。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，それほど破化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。南西コーナー部の床面でわずかなくぼみが確認されており，位置的に貯蔵穴の可能性もあるが，詳細は不明である。

竈　東壁の中央部やや南寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約96cm，袖部幅約100cm，壁外への掘り込みは約72cmである。遺存状態が悪く，天井部は崩落しており，袖部は東壁に砂質粘土を貼り付けた痕跡がわずかに確認される程度である。火床部は床面から20cmほど掘りくぼめた後，焼土混じりのローム土で床面と同じ高さまで埋め戻して使用しており，火床面は焼き締まっている。土層断面図中の第4層上面が火床面に相当すると考えられる。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

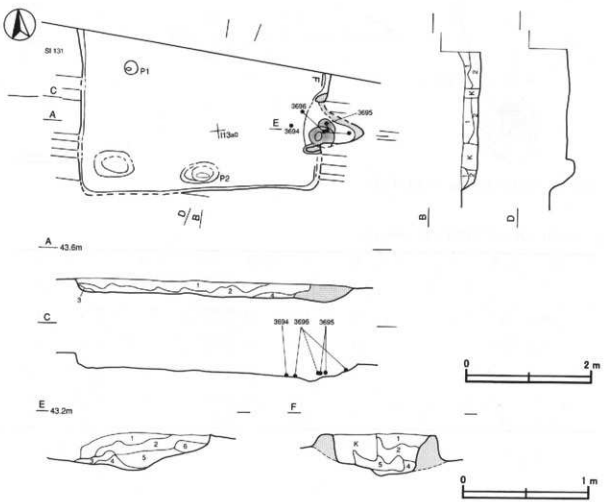
1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗赤褐色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
5　赤　褐　色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
6　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット　2か所。P1は西壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は深さ18cmで，形状から柱穴と考えられるが，詳細は不明である。

覆土　4層からなり，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

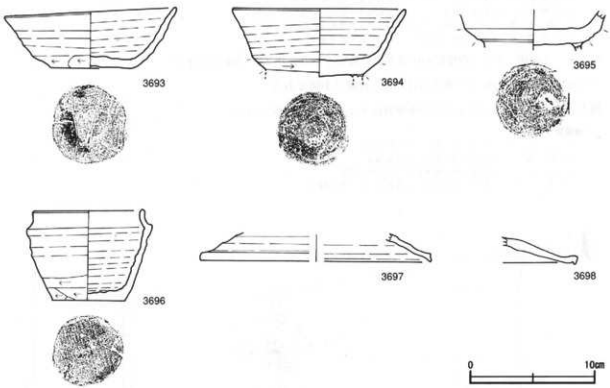
1　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量



第630図　第345号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片54点（坏5，坩2，甕47），須恵器片51点（坏32，高台付坏3，蓋1，短頸壺4，甕11），鉄製品1点（不明），礫1点（被熱痕）が，竈と竈周辺の床面を中心に出土しており，3694～3696が相当する。これらの土器片は，いずれも火熱を受けておらず，本跡廃絶後間もなく投棄されたと考えられる。3697・3698は覆土中から出土しており，本跡廃絶後の埋没段階に投棄されたものと考えられる。

所見　住居廃絶に伴って，食膳具類はあらかじめ持ち出されており，竈も意図的に壊した状況がうかがえる。また，須恵器坏の出土数や形状から見て，時期は9世紀中葉と考えられる。



第631図　第345号住居跡出土遺物実測図

第345号住居跡出土遺物観察表（第631図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3693	須恵器	坏	13.5	4.8	6.2	雲母・長石	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後，二方向のヘラナデ	東部覆土中	40%
3694	須恵器	高台付坏	13.6	(5.4)	－	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	竈前覆土下層	90%
3695	須恵器	高台付坏	－	(3.2)	－	長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	竈中層	30%
3696	須恵器	短頸壺	8.5	7.2	5.7	雲母・石英	褐灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	竈内・竈前覆土下層	85% PL234
3697	須恵器	蓋	[18.2]	(2.2)	－	長石	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	南部覆土中	10%
3698	須恵器	蓋	－	(2.2)	－	長石	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	覆土中	10%

第346号住居跡（第632図）

位置　調査区中央部のH12h7区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第323号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸2.6m，短軸2.5mの方形で，主軸方向はN－3°－Wである。壁高は17cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，硬化している中央部が若干高くなっている。また，壁溝は西側の壁際で確認された。

竈　竈1から竈2への掘え替えが行われ，竈1は東壁の中央部やや南寄り，竈2は北壁の中央部やや東寄りにそれぞれ砂質粘土で付設されている。竈1は，焚口部から煙道部まで約84cm，壁外への掘り込みは約68cmであるが，竈廃絶時に意図的に壊して，埋め戻されたと考えられ，天井部と袖部はいずれも遺存していない。天井部の崩落上は上層断面図中の第2～6層が相当する。火床部は地山を若干掘りくぼめて使用されており，焼き締まっている。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がる。竈2は，焚き口から煙道部まで約80cm，袖部幅約68cm，壁外への掘り込みは約56cmである。天井部は崩落しており，土層断面図中の第6・7・12・13層が相当する。なお，左袖部の内側は崩落しており，土層断面図中の第7層が相当する。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し，火床面は焼き締まっている。また，煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈1土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック少量
2　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量
3　極暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
6　黒褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
7　黒褐色　ロームブロック中量，粘土粒子少量
8　極暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
9　暗赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック少量
10　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量
11　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量
12　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
13　灰褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
14　極暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量

竈2土層解説

1　黒褐色　焼土ブロック・ロームブロック中量，炭化粒子少量
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
3　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
5　黒褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
6　極暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
7　黒褐色　ロームブロック中量，粘土粒子少量
8　暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
9　暗赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック少量
10　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量
11　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物少量
12　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量

ピット　3か所。P1は深さ12cmで，位置と硬化した床面との関係から，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2・P3は，形状から柱穴と考えられるが，詳細は不明である。

覆土　5層からなり，ロームや焼土のブロックを各層に含み，不規則なブロック状の堆積をした人為堆積である。

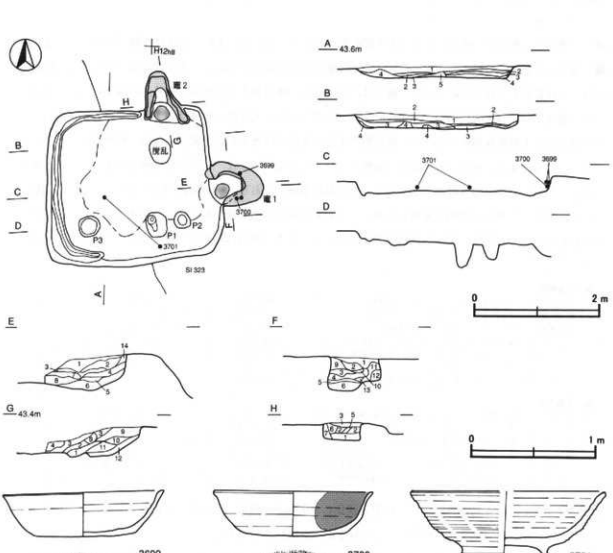
土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子少量
3　暗褐色　ロームブロック中量
4　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
5　極暗褐色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片222点（坏107，高台付椀3，小皿9，甕102，甑1），須恵器片11点（坏3，高台付坏4，甕4），灰釉陶器片1点（椀），鞴3点（被熱痕）が，主に覆土下層から出土しており，床面から確認された遺物は少ない。これら覆土中から検出された土器片は，本跡廃絶後の埋め戻しの段階で投棄されたと考えられる。また，竈1内から火熱を受けていない土師器坏が出土しているが，これらは第2竈へ据え替える段階で投棄されたと考えられ，3699・3700が相当する。また，竈2内から赤変した土師器甕片が数点出土しているが，いずれも完形とはならず，第2竈前面の土器片を含め，本跡廃絶後間もなく埋め戻しの段階で投棄されたと考

えられる。

所見　本跡は竈1から竈2への据え替えを行っているが，竈1内に残された土器片と住居廃絶直後に投棄された土器片には時期差はほとんど認められず，竈2の使用期間が短期であったと推測される。また，土師器坏や甕の形状から，時期は10世紀後葉と考えられる。



第632図　第346号住居跡・出土遺物実測図

第346号住居跡出土遺物観察表（第632図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3699	土師器	坏	12.6	3.7	7.8	雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	竈・南部覆土中層	80%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3700	土師器	坏	12.4	3.6	7.6	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	竈覆土中層	80% 煤付着
3701	土師器	高台付椀	[15.3]	5.1	6.9	雲母・長石	橙	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	中央部・南部覆土下層	50%

第347号住居跡（第633図）

位置　調査区中央部のⅠ13d0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第351号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約3.4m，短軸約2.5mの南北に長い長方形で，主軸方向はN－6°－Eである。壁高は16cmで，外傾して立ち上がっている。

床　後世の攪乱を受けているため詳細は不明であるが，遺存している部分はほぼ平坦で，それほど硬化した部分は認められず，壁溝は確認された壁下を巡っている。

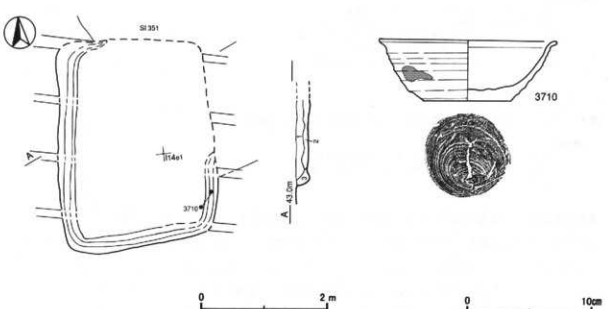
竈　検出されていない。

ピット　検出されていない。

覆土　3層からなり，ローム粒子が均一に堆積している単一層で，自然堆積である。第3層は，壁溝部の層である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片133点（坏51，小皿2，甕80），須恵器片3点（蓋1，甕2），礫4点（被熱痕2）が，全域の覆土中から散在した状態で出土している。大半が細片で，伴出遺物は少なく，埋没過程で投棄されたものと考えられる。



第633図　第347号住居跡・出土遺物実測図

所見　竈は認められず，床面も硬化していないため断定できないが，土師器坏の形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。

第347号住居跡出土遺物観察表（第633図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3710	土師器	坏	13.9	4.9	6.7	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	底部回転糸切り離し	南東部覆土中層	70%

第355号住居跡（第634図）

位置　調査区中央部のⅠ13e8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第352・448号住居跡を掘り込み，第9号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状　重複している東壁は壁部を正確に捉えることができず，遺存している西壁と硬化した床の範囲や竈の位置から，N－2°－Eを主軸とする長軸約3.7m，短軸約2.3mの東西に長い長方形と推定した。壁高は8cmと低く，立ち上がりは不明である。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，中央部から竈の前面にかけて硬化面が広がっている。壁溝は確認されていない。

竈　北壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約80cm，袖部幅約72cm，壁外への掘り込みは約24cmである。遺存状態は悪く，天井部は崩落しており，袖部は南壁に砂質粘土を貼り付けた痕跡がわずかに確認される程度である。火床部は浅い皿状を呈し，土層断面図中の第4層下面が火床面に相当すると考えられ，赤変硬化している。火床部の奥には凝灰岩が下部を埋め込まれた状態で据えられ，支脚として使用されたと考えられる。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子・灰少量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量

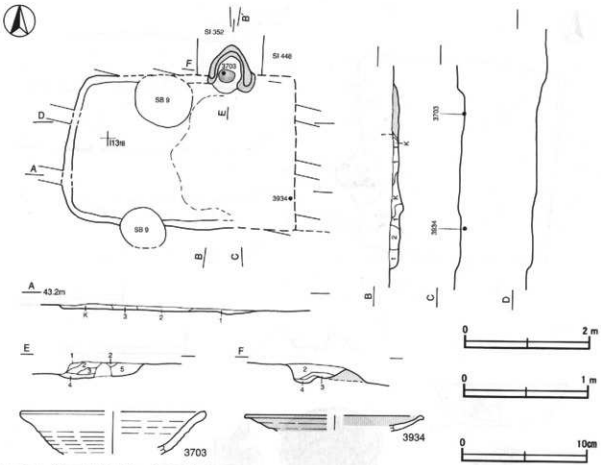
ピット　検出されていない。

覆土　3層からなり，不規則なブロック状の堆積をした人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　灰　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片52点（坏10，高坏1，甕41），須恵器片10点（坏4，甕6），礫1点（被熱痕）が，竈内と全域の覆土中に散在した状態で出土している。大半が細片で，攪乱部付近から出土している土器片が多く，伴出遺物は少ないが，投棄あるいは混入したものと考えられる。3703は竈内から凝灰岩や土器片数点と一緒に出土しているが，火熱を受けておらず，本跡廃絶後の埋め戻す段階で投棄されたと考えられる。

所見　西側に大きな空間を有した特異な形状である。また西部の床面は平坦で，それほど硬化した部分は認められず，板床などの床材の設置も想定される。土師器坏の形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。



第634図　第355号住居跡・出土遺物実測図

第355号住居跡出土遺物観察表（第634図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3703	土師器	坏	[14.4]	(3.4)	－	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ	竈火床面	10%
3934	灰釉陶器	皿	[7.0]	(1.2)	－	緻密	灰白・乳白	良好	釉は刷毛塗り	東部床面	10%　東濃産（光ヶ丘1号窯式）

第362号住居跡（第635図）

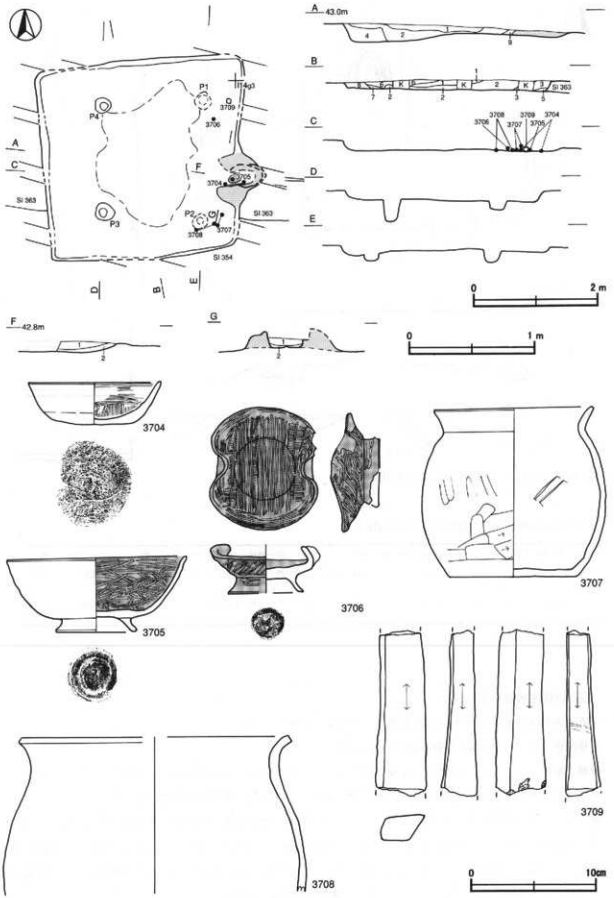
位置　調査区中央部のⅠ14g2区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第354・363号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　一辺3.3mの方形で，主軸方向はN－92°－Eである。壁高は15cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，4本の主柱穴の内側がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈　東壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約82cm，袖部幅約78cm，壁外への掘り込みは約40cmである。天井部は崩落しており，土層断面図中の第2層が相当する。袖部や火床部の遺存状態は良好で，両袖部には凝灰岩が芯材として使用されている。火床部は，床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火床面は焼き締まっている。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。



第635図　第362号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

1　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒　　色　粘土粒子少量，焼土ブロック微量

ピット　4か所。深さは12～32cmで，いずれも位置的に主柱穴と考えられる。

覆土　9層からなり，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。第9層には竈材の一部流出が見られる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック微量
7　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
8　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況　土師器片545点（坏61，高台付椀8，耳皿1，小皿28，甕457），須恵器片23点（坏8，甕15），灰釉陶器片2点（椀），鉄滓2点，石器3点（砥石），礫7点（被熱痕）が，竈内と南側の覆土下層を中心に出土しており，床面から確認された遺物は少ない。なお，3707は南東コーナー部，3709は北東部のそれぞれ床面から出土しており，いずれも完形に近く，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また，3704と3705は竈内から出土しているが，火熱を受けており，支脚として使用されていた可能性が高い。

所見　床面からは凝灰岩4点，砥石3点が認められ，鉄滓も2点出土しており，鉄生産に関わる遺構の可能性が高いが，詳細は不明である。また，土師器の坏や甕の形状，東壁に竈を有する住居形態などから，時期は10世紀中葉と考えられる。

第362号住居跡出土遺物観察表（第635図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3704	土師器	坏	10.4	3.4	6.4	雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	竈内	60%
3705	土師器	高台付椀	14.2	6.0	6.2	雲母	灰黄褐	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	竈内	80%
3706	土師器	耳皿	9.8	3.8	[6.0]	白色粒子	黒	普通	口縁部～台部，内・外面ヘラ磨き	北東部覆土下層	85% PL235
3707	土師器	小形甕	12.6	13.6	10.2	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部内面ヘラナデ，外面下端ヘラ削り	南東部床面	50%
3708	土師器	甕	[14.2]	(12.4)	－	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラナデ	南東部床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3709	砥石	(13.1)	4.0	2.6	(187)	緑泥片岩	砥面は4面	北東部床面	

第366号住居跡（第636図）

位置　調査区中央部のⅠ14j4区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第365号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約3.2m，短軸約2.9mの長方形で，主軸方向はN－6°－Wである。壁高は7cmと低く，立ち上がりは不明である。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。壁溝は確認されていない。

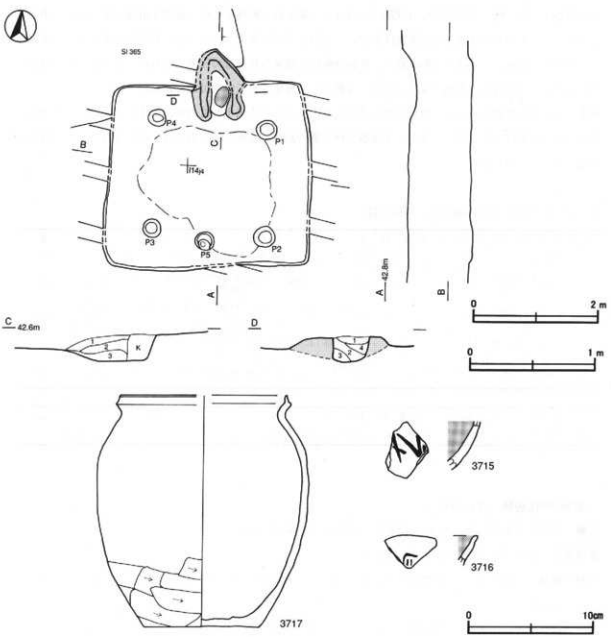
竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約116cm，袖部幅約76cm，壁外への掘り込みは約52cmである。天井部は崩落しており，土層断面図中の第２層が相当する。袖部の遺存状態は良好で，内側が赤変している。火床部は浅く皿状に掘りくぼめられているが，焼き締まった感じはなく，明確に火床面を捉えることはできなかった。また，煙道は外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
2　黒　　色　焼土ブロック・粘土ブロック少量，ロームブロック微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
4　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化粒子・粘土ブロック微量

ピット　５か所。主柱穴はＰ１～Ｐ４が相当し，深さは７～21cmである。Ｐ５は深さ52cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　堆積状況は不明である。



第636図　第366号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片51点（坏6，高台付坏1，甕44），須恵器片7点（坏6，甕1），鏃3点（被熱痕）が全域の覆土中から出土しており，床面から出土した土器片は少ない。大半は住居廃絶後に投棄あるいは混入したものと考えられ，図示した土器が相当する。3715・3716は覆土中，3717は竈内の覆土中からそれぞれ出土している。

所見　本跡を含め，当遺跡からは「庄□」，「庄南」と書かれた墨書土器12点が出土しているが，これらはすべて土師器坏の体部外面に墨書されており，供膳具であった可能性が高い。また「六万」，「万」などの吉祥を表す墨書と一緒に検出された例もある。なお，書体や筆跡から同一人物によって書かれたと推測できる墨書は3点に留まり，そのほかは複数人による筆跡である。これらの墨書の意味については明確ではないが，「庄」は居宅などを表す可能性が考えられる。また，これらの墨書はすべて識字者層によって書かれたものと考えられるが，当遺跡内からは，転用硯数点と円面硯1点が検出されただけである。土師器の坏や甕の形状から，時期は9世紀前葉と考えられる。

第366号住居跡出土遺物観察表（第636図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3715	土師器	坏	－	(3.7)	－	雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	覆土中	5%墨書「庄」
3716	土師器	坏	－	(2.3)	－	雲母	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	覆土中	5%墨書「＿」
3717	土師器	小形甕	[13.4]	18.4	9.0	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面下端横位のヘラ削り	竈内	40%

第371号住居跡（第637図）

位置　調査区中央部東寄りのJ14a1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第406号住居跡を掘り込み，第36号掘立柱建物に掘り込まれている。また，耕作による攪乱を受けている。

規模と形状　遺存している竈の位置や，西・南・東壁から，N－6°－Eを主軸とする一辺約3.5mの方形と推定される。確認された壁高は20cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈の手前から南壁際にかけてよく踏み固められ，壁溝は南西コーナー部で確認された。

竈　北壁の中央部やや東寄りに付設されているが，遺存状態が悪いため，袖部幅110cmだけが確認された。

竈土層解説
1　灰　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
2　暗　赤　色　粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
3　灰　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量
4　にぶい褐色　焼土ブロック少量，ロームブロック・粘土粒子微量

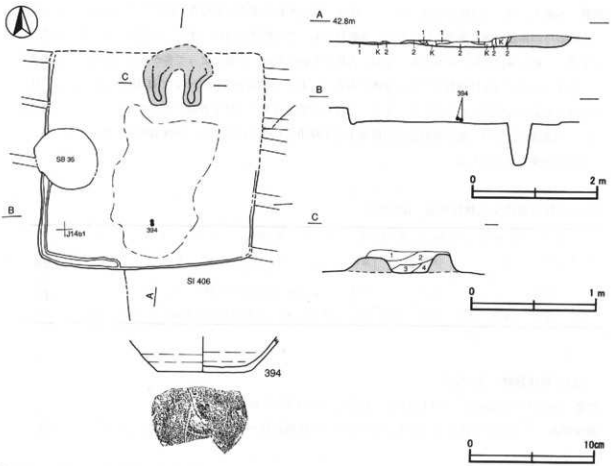
ピット　検出されていない。

覆土　2層からなり，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積と考えられる。

土層解説
1　灰黄褐色　粘土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況　土師器片94点（坏15，甕79），須恵器片7点（坏4，甕3），緑釉陶器片1点，礫7点が出土している。ほとんどが細片で図示できたものは少なく，394は南部の床面から出土したもので，破断面の摩滅も見られないことから本跡に伴うと考えられる。また，竈内覆土中から出土した緑釉陶器片は，小破片のため図示できなかったが，胎土から猿投産と考えられる。

所見　本跡は覆土が薄く，第406号住居跡に掘り込まれ，また，後世の撹乱も受けていることなどから，住居全体の形状を捉えることはできなかった。住居の規模や南部の床面から出土した坏の形状などから，時期は10世紀中葉と考えられる。



第637図　第371号住居跡・出土遺物実測図

第371号住居跡出土遺物観察表（第637図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
394	須恵器	坏	－	(2.9)	7.0	長石	灰	普通	体部ロクロ整形，底部回転ヘラ切り	南部床面	30%

第377号住居跡（第638図）

位置　調査区中央部のⅠ14d3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第360号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　大半が調査区域外に延びているため，南北軸約3.0m，東西軸約0.7mだけしか確認できず，正確な規模や形状は捉えられないが，N－4°－Eを主軸とする方形あるいは長方形と推測される。壁高は23～33cmで，外傾して立ち上がっている。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，それほど硬化した部分は認められず，また壁溝も確認されていない。

竈　検出されていない。

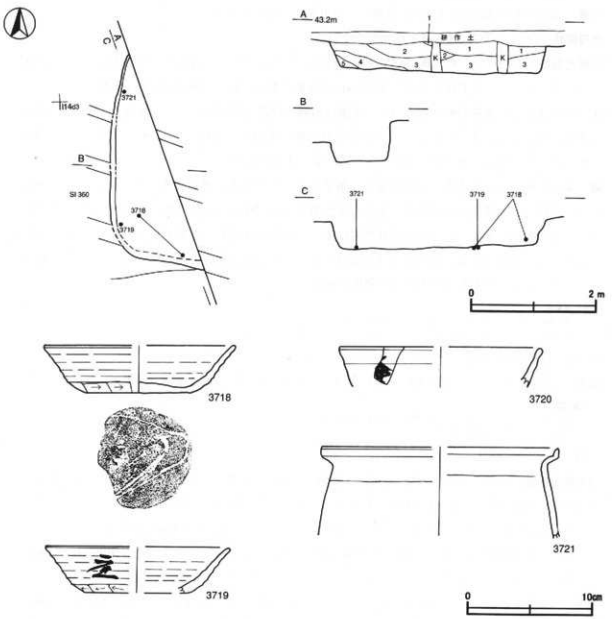
ピット　検出されていない。

覆土　5層からなり，ロームや焼土のブロックを含む人為堆積である。

土層解説

1　黒　　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
4　暗　褐　色　焼土粒子中量
5　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片72点（坏6，高台付坏2，甕64），須恵器片4点（坏）が，全域の覆土下層を中心に出土しており，床面から確認された遺物は少ない。大半は本跡廃絶後の埋め戻す段階で投棄されたと考えられる。また，3718と3721は床面から出土しているが，いずれも破片であり，本跡廃絶後間もなく投棄された可能性が高い。



第638図　第377号住居跡・出土遺物実測図

所見　土師器坏の形状などから見て，時期は８世紀後葉と考えられる。

第377号住居跡出土遺物観察表（第638図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3718	須恵器	坏	[15.2]	3.9	8.2	雲母・石英	灰白	普通	体部外面下端手持ちヘラ削り	南西部床面・ド層	40% 黒斑あり
3719	須恵器	坏	[14.6]	3.7	[8.4]	雲母・長石	灰黄	普通	体部外面下端手持ちヘラ削り	南西部床面	20% 内250 墨書「庄」
3720	須恵器	坏	[16.0]	(3.1)	－	長石	灰黄褐	普通	体部内・外面ロクロナデ	西部覆土中	40% 黒斑
3721	土師器	皿	[18.9]	(7.0)		雲母・石英	にぶい赤褐	普通	体部内面ヘラナデ	西壁際床面	10%

第378号住居跡（第639図）

位置　調査区中央部のＩ13ｉ9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第375・467号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　重複している北側の壁は正確に捉えることはできず，遺存している南側の壁と竈の位置から，Ｎ－110°－Ｅを主軸とする一辺約3.5mの方形と推定される。壁高は約10cmと低い。

床　中央部がよく踏み固められており，壁溝は南側の壁際で確認されたが，重複している部分は壁溝を明確に捉えることはできなかった。第375号住居跡と重複した部分からは，ローム粒子主体の貼り床が確認された。西コーナー部の床面からわずかなくぼみが確認されている。

竈　東壁の中央部やや南寄りに砂質粘土で構築され，焚口部から煙道部まで約52cm，袖部幅約80cm，壁外への掘り込みは約60cmである。竈の上部が削平され，検出できたのは火床部と袖部の一部だけである。また撹乱を受けているため遺存状態は悪く，袖部は砂質粘土を貼り付けた痕跡と基部がわずかに確認された程度である。火床部は浅い皿状を呈し，火床面は焼き締まっている。また煙道は，外傾して立ち上がる下部が若干認められた程度である。

竈土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量

ピット　検出されていない。

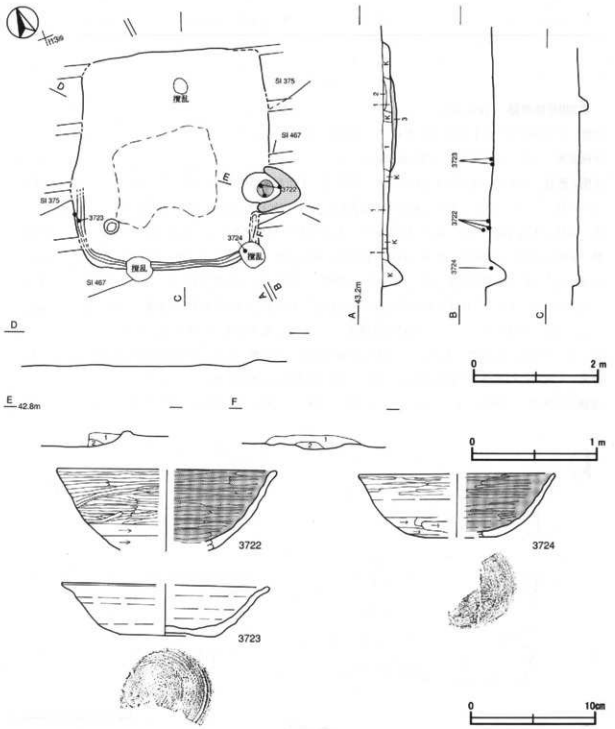
覆土　３層からなり，ロームや焼土のブロックを含む人為堆積で，第３層は貼床部である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片86点（坏32，小皿５，甕49），須恵器片３点（坏１，甕２），礫５点（被熱痕４）が，南壁付近の床面や床面に近い覆土中から確認されている。3722は竈内から出土しているが，火熱を受けておらず，3723は西壁際から出土した破片が接合したものである。これらはいずれも残存率が50%に満たないことから，多くは本跡廃絶後間もなく，埋め戻す段階で投棄されたものと考えられる。また，須恵器片や灰釉陶器片は，埋土中に混入していたものと考えられる。

所見　当該期集落における住居形態の特徴としては，竈が東壁のやや南寄りに付設され，住居跡の主軸は南東方向を指すことが挙げられる。また，土師器坏は客体化して，外面に磨きを施す高台付椀が新たに出現する段

階である。時期は10世紀後葉と位置づけることができる。



第639図　第378号住居跡・出土遺物実測図

第378号住居跡出土遺物観察表（第639図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3722	土師器	高台付椀	[17.3]	(6.5)	－	雲母	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ヘラ磨き	竈火床部	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3723	土師器	坏	[16.3]	4.0	7.5	雲母・長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り離し	西壁際覆土下層	40%
3724	土師器	坏	[15.5]	5.0	[5.0]	雲母	にぶい褐	普通	体部内・外面ヘラ磨き	撹乱部	30%

第380号住居跡（第640図）

位置　調査区中央部のⅠ13g6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第715・757号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　床面の一部が削平されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，遺存している床面の範囲と竈の位置から，N－100°－Eを主軸とする長軸約3.2m，短軸約2.7mの長方形と推定される。

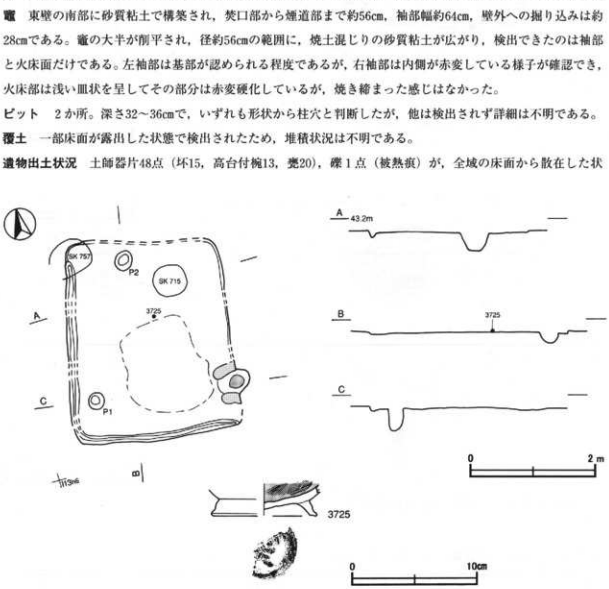
床　北側の床面は削平されて確認できないが，ほぼ平坦で，中央部を中心に踏み固められていたと推測される。

竈　東壁の南部に砂質粘土で構築され，焚口部から煙道部まで約56cm，袖部幅約64cm，壁外への掘り込みは約28cmである。竈の大半が削平され，径約56cmの範囲に，焼土混じりの砂質粘土が広がり，検出できたのは袖部と火床面だけである。左袖部は基部が認められる程度であるが，右袖部は内側が赤変している様子が確認でき，火床部は浅い皿状を呈してその部分は赤変硬化しているが，焼き締まった感じはなかった。

ピット　2か所。深さ32～36cmで，いずれも形状から柱穴と判断したが，他は検出されず詳細は不明である。

覆土　一部床面が露出した状態で検出されたため，堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器片48点（坏15，高台付椀13，甕20），礫1点（被熱痕）が，全域の床面から散在した状



第640図　第380号住居跡・出土遺物実測図

態で出土している。大半が細片で，接合関係にある土器もなく，住居廃絶後間もなく投棄されたものと考えられる。3725は中央部の床面から出土している。

所見　土師器の坏や甕の形状などから見て，時期は10世紀後葉と考えられる。当該期に比定される住居は，当遺跡の南部に比べて中央部から西部にかけた範囲で比較的密集している傾向にある。なお，10世紀代に比定される住居跡の総数は，8・9世紀代に比べて約2倍と大幅に増えており，当遺跡の繁栄期と言える。

第380号住居跡出土遺物観察表（第640図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3725	土師器	高台付椀	－	(2.5)	[8.5]	雲母	明赤褐	普通	体部内面ヘラ磨き	中央部床面	10%

第385号住居跡（第641図）

位置　調査区中央部のⅠ13h3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第384号住居跡を掘り込み，第23号井戸に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約5.2m，短軸約3.6mの東西に長い長方形で，主軸方向はN－4°－Wである。壁高は約32cmで，直立して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部が踏み固められている。南壁中央部付近の床面で4か所のくぼみが確認されているが，詳細は不明である。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されているが，煙道部は耕作による攪乱を受けており，焚口部から煙道部の立ち上がりまで約80cm，袖部幅約134cm，壁外への掘り込みは約40cmだけが確認できた。天井部は崩落し，土層断面図中の第4層が崩落土に相当する。袖部の遺存状態は良好で，内側は赤変している。火床部は厚さ約12cmにわたって厚く焼き締まって，使用頻度の高さがうかがわれ，土層断面図中の第8層に相当する。また煙道は，上部が削平されているため傾して立ち上がる部分が若干認められた程度である。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化物微量
3　暗　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
4　暗　褐　色　粘土ブロック中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化物・粘土ブロック少量
5　褐　　色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化物少量
6　暗　褐　色　焼土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量
7　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　暗赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子微量
9　暗　褐　色　粘土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

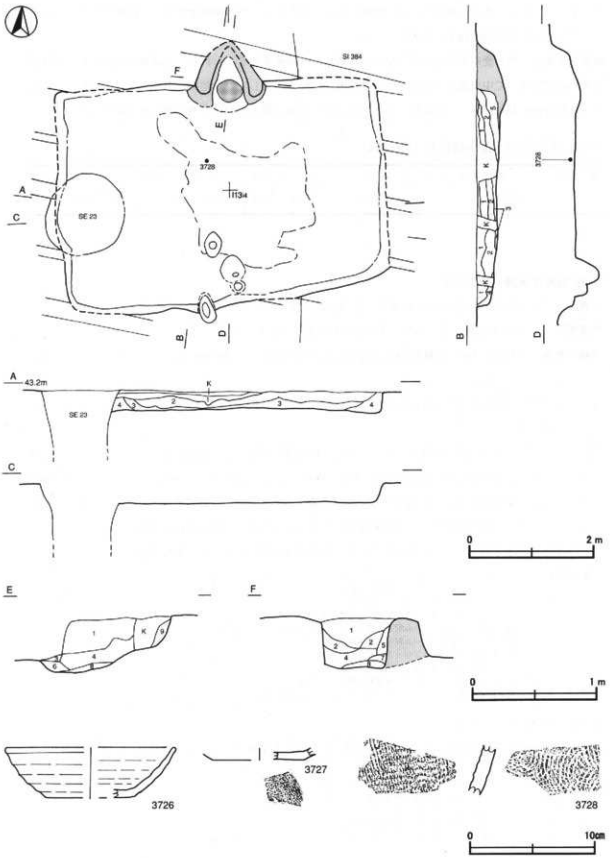
ピット　検出されていない。

覆土　5層からなり，各層にローム粒子を中量以上含む人為堆積で，第5層には竈材の一部流出が見られる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子多量，炭化粒子中量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
5　暗　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子・粘土ブロック少量

遺物出土状況　土師器片308点（坏56，甕252），須恵器片46点（坏27，蓋1，甕18），礫7点（被熱痕）が，北東部の上層から下層にかけて出土している。3726と3727は北東部の覆土中層，3728は中央部の覆土下層から出土しているが，これらは本跡廃絶後の埋め戻す段階で埋土中に混入していたものと考えられる。



第641図　第385号住居跡・出土遺物実測図

所見　出土遺物の10%以上は埋土中に混入した本跡以前の時期に比定される遺物で，大半の住居跡に同様の状況が見られる。これは，当地域に長期に渡って集落が営まれていたことを物語る。なお本跡は，床面がよく踏み固められていることや竈の火床面の焼き締まり具合から見て，存続期間が長い住居であった可能性が高い。また，伴出遺物が少ないため，時期は明確ではないが，須恵器の坏や甕の形状などから見て８世紀前葉と考えられる。

第385号住居跡出土遺物観察表（第641図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3726	須恵器	坏	(13.4)	4.0	(7.0	長石	黄灰	普通	口縁部・体部内・外部ロクロナデ	東部覆土中層	20%
3727	須恵器	坏	－	(0.9)	(7.4)	長石	褐灰	普通	底部回転ヘラ切り	東部覆土中層	10%　底部外面刻書
3728	須恵器	甕	－	(4.0)	－	長石・石英	黄灰	普通	外面格子目叩き，内面当て具痕あり	中央部覆土下層	10%

第386号住居跡（第642図）

位置　調査区中央部のＩ13ｊｄ区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第384・443号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　一辺約3.7mの方形で，主軸方向はＮ－11°－Ｅである。壁高は15～25cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，４本の主柱穴の内側がよく踏み固められている。壁溝は南壁の中央部と北壁際を除いて確認された。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築され，焚口部から煙道部まで約116cm，袖部幅約120cm，壁外への掘り込みは約76cmである。遺存状態は悪く，竈付近の床面には砂質粘土や土師器の甕片が散在しており，意図的に壊されたものと考えられる。天井部は崩落し，袖部は東壁に砂質粘土を貼り付けた痕跡がわずかに確認される程度である。火床部には焼土ブロックのほかにロームブロックも多く含まれ，明確に火床面を捉えることはできなかった。また，煙道は急傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

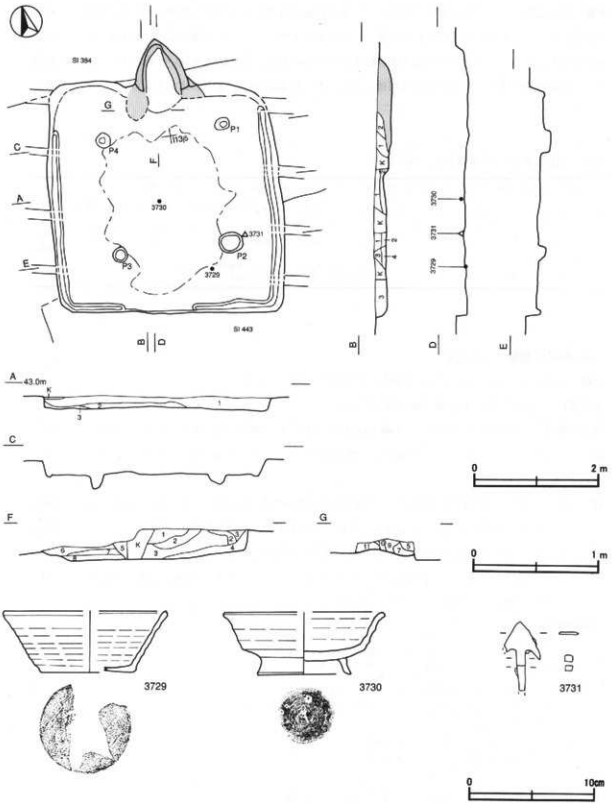
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
2　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量
4　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
5　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
6　暗赤褐色　粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量，ロームブロック微量
7　黒　　色　ロームブロック少量
8　暗　褐　色　ローム粒子少量
9　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
10　暗赤褐色　粘土粒子多量，ロームブロック微量
11　暗　褐　色　ロームブロック中量

ピット　４か所。いずれも主柱穴で，深さは11～23cmである。

覆土　４層からなり，各層にロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，砂粒少量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量



第642図　第386号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片335点（坏16，甕319），須恵器片61点（坏47，高台付坏4，甕10），鉄製品2点（鎌・不明），礫13点（被熱痕10）が，中央部と北東コーナー部の床面を中心に出土している。中央部から出土した3730，南東コーナー部から出土した3729・3731は，いずれも住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また，南西コーナー部には焼土塊が検出されたが，床面は火熱を受けていないため，土器類とともに投棄されたものと考えられる。

所見　須恵器坏の形状などから見て，時期は9世紀中葉と考えられる。

第386号住居跡出土遺物観察表（第642図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3729	須恵器	坏	〔12.8〕	4.9	7.5	雲母・長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ撫り	南東部床面	40%
3730	須恵器	高台付坏	〔12.5〕	4.9	7.4	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	中央部覆土下層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3731	鎌	(5.4)	(2.6)	0.6	(2.1)	鉄	刃関，一部欠損，残存長3.3cm	東部覆土下層	

第387号住居跡（第643図）

位置　調査区中央部のJ13a4区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第443号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約4.2m，短軸約4.0mの方形で，主軸方向はN－14°－Eである。壁高は約28cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦で，中央部が焼化している。壁溝は確認されていない。

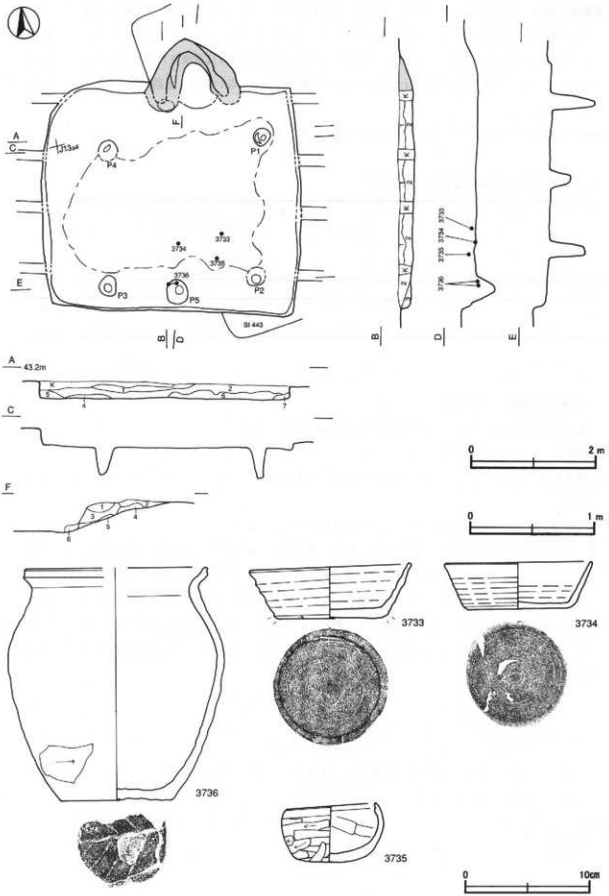
竈　北東壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約104cm，袖部幅約154cm，壁外への掘り込みは約70cmである。竈付近の床面には竈材と思われる焼土ブロックが散在しており，意図的に壊された可能性が高く，遺存状態は悪い。天井部は崩落して，土層断面図中の第1・2・6層が崩落土に相当し，袖部も壁面に貼り付けられた砂質粘土が痕跡として残っているだけである。火床部と考えられる位置には，埋土と思われるロームブロックが多く，明確に火床面を捉えることはできない。また，煙道は外傾して立ち上がる。

竈土層解説
1　灰　褐　色　焼土ブロック・粘土ブロック少量，ロームブロック微量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック・粘土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
3　にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
4　暗　赤　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック微量
5　暗　赤　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック微量
6　にぶい赤褐色　粘土ブロック中量，焼土ブロック・ロームブロック微量

ピット　5か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さ44～72cmである。P5は深さ約32cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口部に伴うピットと考えられる。

覆土　7層からなり，ロームブロックを主体とした人為堆積である。第2層には竈材の一部流出が見られる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，粘土ブロック・炭化粒子微量



第643図　第387号住居跡・出土遺物実測図

3　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック中量
5　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片103点（坏43，高坏4，甕32，甑24），須恵器片25点（坏20，高台付坏2点，高盤2，甕1），灰釉陶器片1点（椀），礫23点が，主に南部の床面と北部の覆土中から出土している。また，甕片に対して坏片が多数を占めており，量的に不自然であることから，大半は住居廃絶後に投棄あるいは混入したものと推測される。なお，3733・3734は床面から，3736はP5の覆土上層から検出されているが，これらの土器片は多数の破片とともに出土しており，住居廃絶後間もなく一括して投棄されたと推測される。3735は南部の覆土中層から出土しており，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したと考えられる。

所見　土器の形状から見て，時期は8世紀中葉と考えられる。

第387号住居跡出土遺物観察表（第643図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3735	土師器	坏	7.1	4.6	5.8	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	底部ヘラ削り	南部覆土中層	90% PL235
3733	須恵器	坏	12.7	4.3	8.3	長石	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	中央部床面	90% PL234
3734	須恵器	坏	11.7	3.7	7.8	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	中央部床面	80%
3736	土師器	小形甕	[14.2]	18.5	8.6	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	底部木葉痕	P5覆土上層	40%

第388号住居跡（第644図）

位置　調査区中央部のJ13c5区に位置し，平坦部に立地している。

規模と形状　長軸約4.2m，短軸約3.8mの方形で，主軸方向はN－0°である。壁高は20～31cmで，外傾して立ち上がっている。

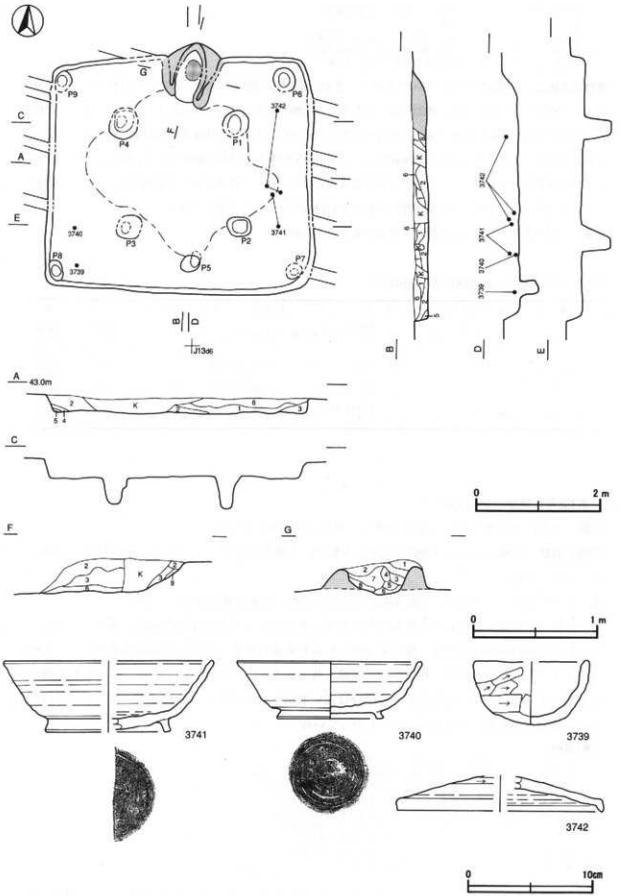
床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められているが，壁溝は確認されていない。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約80cm，袖部幅約84cm，壁外への掘り込みは約20cmである。攪乱を受けているため遺存状態は悪く，天井部は崩落して，土層断面図中の第5・6層が崩落土に相当する。袖部も基部が遺存しているだけであり，火床部も左側の半分が攪乱を受けているが，遺存している部分は浅い皿状を呈しており，赤変しているのが認められる。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量，粘土ブロック微量
3　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
5　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子・粘土ブロック少量
6　黒　褐　色　焼土粒子・炭化物・粘土ブロック少量，ローム粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量
9　暗　褐　色　ロームブロック少量，ローム粒子微量

ピット　9か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さ40～36cmである。P5は深さ約26cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口部に伴うピットと考えられる。P6～P9は深さ7～24cmで，各コーナー部に位置



第644図　第388号住居跡・出土遺物実測図

しており，位置と形状から壁柱穴の可能性が高い。

覆土　8層からなり，ブロック状に堆積した人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量
6　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
7　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・粘土ブロック少量
8　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況　土師器片147点（坏24，椀1，甕121，甑1），須恵器片22点（坏6，高台付坏7，壺9），鉄製品1点（不明），碟20点が，覆土中から出土している。3739と3740は南西部，3741と3742は東部のいずれも破片が接合されたもので，これらの土器片はすべて広範囲に渡って出土しており，住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。また，3739は，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したと推測される。

所見　土器片の多くは投棄あるいは混入したもので，床面から出土した遺物はないため，時期を明確に捉えることはできない。投棄された土器片から見て，住居を廃絶した時期は，8世紀中葉と推測される。

第388号住居跡出土遺物観察表（第644図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3739	土師器	甕	[9.0]	5.1	－	雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	底部ヘラ削り	南西部覆土中層	70%
3740	須恵器	高台付坏	14.5	4.6	8.2	長石・石英	褐灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南西部覆土下層	80% PL234
3741	須恵器	高台付坏	[16.5]	5.7	[9.8]	長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南東部覆土中層	50%
3742	須恵器	蓋	[16.3]	(2.7)	－	長石	灰	普通	天井部石方向の回転ヘラ削り	北東部覆土中層	70%

第391号住居跡（第645・646図）

位置　調査区中央部のJ13e5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第405号住居跡，第40号井戸跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約4.3m，短軸約3.6mの長方形で，主軸方向はN－92°－Eである。壁高は約34cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，重複した部分が若干低くなっており，中央部はよく踏み固められており，北側の壁際に壁溝が確認された。

竈　東壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約80cm，壁外への掘り込みは約20cmである。天井部は崩落しているが，袖部は内側が赤変しているのが確認された。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられ，硬化はしていないものの，焼き締まっている。火床部には多数の甕片が投棄されており，また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　明赤褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
2　極暗赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物・粘土粒子微量
3　暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック少量，炭化物・粘土粒子微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化物微量
5　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック少量

ピット　6か所。主柱穴はP1～P3が相当するが，P1に相対すると予測される南東部分は，検出できなかった。P4は，西壁際の中央部付近に位置しており，出入り口部に伴うピットと考えられる。　P5は，位置と形状から補助柱穴の可能性が高い。

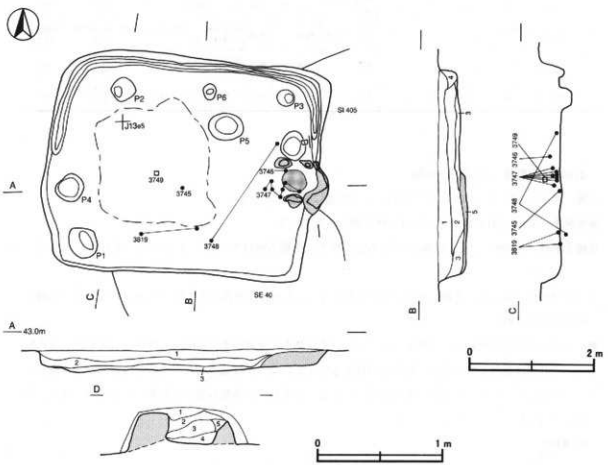
覆土　5層からなり，ロームブロックを主体にした人為堆積である。第5層は貼り床部の土層である。

土層解説

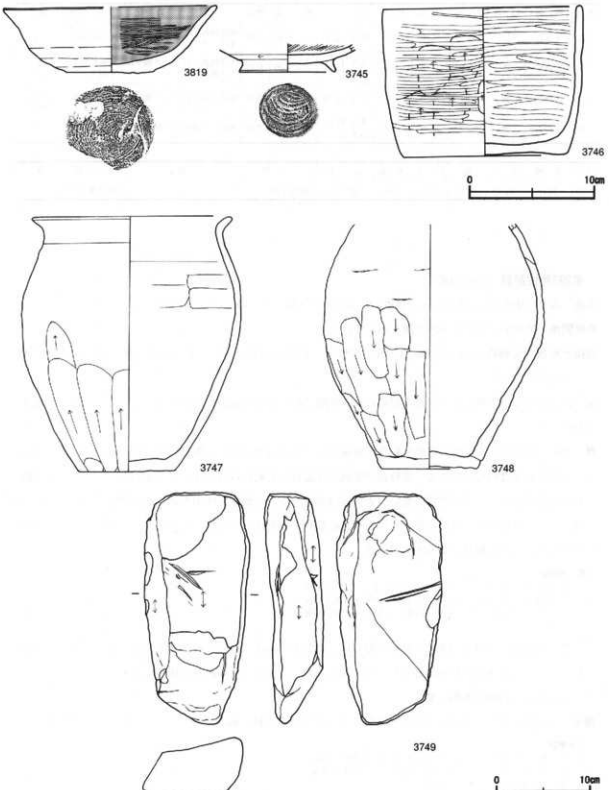
1　黒　褐　色　ロームブロック微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
3　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量
4　黒　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量
5　褐　　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片504点（坏154，高台付椀25，皿3，鉢8，甕313，甑1），須恵器片68点（坏46，高台付皿1，蓋3，甕18），土製品1点（土玉），鉄製品1点（不明），石器1点（砥石），鉄滓1点，礫10点が，全域の覆土上層を中心に出土している。3819と3745はいずれも床面，3747は竈内の破片が接合したもので，これらは住居廃絶時に遺棄されたと考えられる。このほか，床面から古墳時代に比定される土器片が多数検出されているが，いずれも細片であり，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。

所見　本跡は第40号井戸跡の上に貼床を施し構築されているが，時期差はほとんど見られない。このことから，本跡を構築する段階で井戸跡の存在を知っていた可能性が高く，貼り床も厚く施されている。時期は10世紀中葉と考えられる。



第645図　第391号住居跡実測図



第646図　第391号住居跡出土遺物実測図

第391号住居跡出土遺物観察表（第645・646図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3819	土師器	坏	[16.9]	5.2	6.8	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り離し	南部床面	50% 油煙付着

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3745	土師器	高台付椀	－	(1.8)	7.6	雲母・長石	にぶい褐	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	中央部床面	20%
3746	土師器	鉢	[15.8]	11.8	13.0	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	体部外面手持ちヘラ削り後，ヘラ磨き	東部覆土中層	30%
3747	土師器	甕	20.7	27.0	10.3	雲母・石英	明赤褐	普通	体部下端手持ちヘラ削り	竈内床面	70% PL235
3748	土師器	甕	－	(25.9)	10.0	雲母・長石・石英	橙	普通	底部一方向のヘラ削り	東・南部覆土下層	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3749	砥石	(24.2)	(11.1)	(6.2)	(1960)	凝灰岩	砥面4面	中央部覆土上層	

第392号住居跡（第647図）

位置　調査区中央部のⅠ13b7区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第400・459号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約3.9m，短軸約3.8mの方形で，主軸方向はN－3°－Eである。壁高は約20cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められ，壁際に比して中央部が若干高くなっている。壁溝は確認されていない。

竈　北壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約80cm，袖部幅約62cm，壁外への掘り込みは約42cmである。竈付近の床面には竈材と思われる焼土ブロックが散在しており，意図的に壊された可能性が高く，遺存状態は悪い。天井部は崩落して，土層断面図中の第1層が崩落土に相当する。袖部も耕作土により壊され，壁面に貼り付けられた砂質粘土が痕跡として残っているだけである。火床部が位置すると思われる部分も撹乱により不明である。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
2　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子少量，粘土粒子微量
3　黒　褐　色　焼土ブロック中量，粘土粒子少量，ローム粒子微量

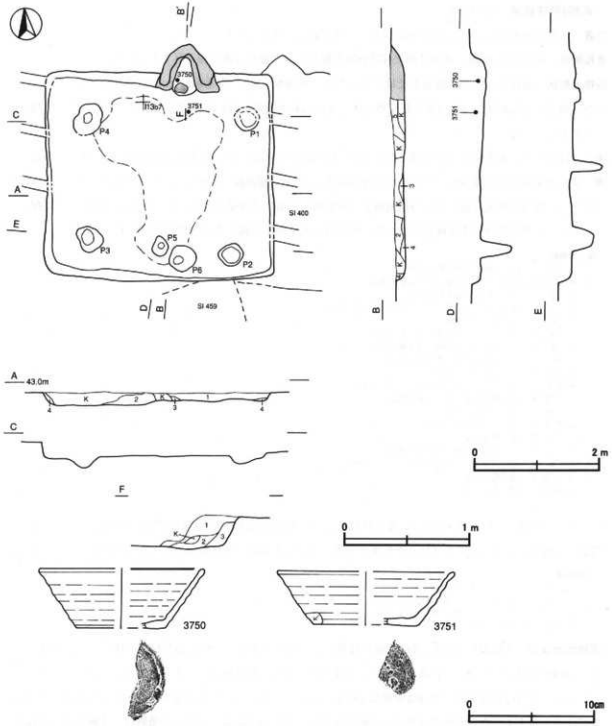
ピット　6か所。主柱穴はP1～P4が相当し，深さ20～36cmである。P5は深さ約54cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口部に伴うピットと考えられる。P6は，位置と形状から出入り口部に伴うピットと考えられるが，詳細は不明である。

覆土　5層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック中量
4　黒　褐　色　ローム粒子中量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック，炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片39点（坏3，高坏1，甕35），須恵器片16点（坏14，高台付坏1，瓶1）が，竈内と，南側の覆土下層を中心に出土しており，床面から確認されたものは少ない。3750は竈の覆土中層から出土しているが，その他の土器片は細片で，埋土中に混入していたものや，住居廃絶後間もなく投棄されたものと推測される。



第647図　第392号住居跡・出土遺物実測図

所見　大半が埋土中に混入していた土器片の可能性が高く特定が困難であるが，小形の甕がみられることや坏の形状から，時期は9世紀前葉と考えられる。

第392号住居跡出土遺物観察表（第647図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3750	須恵器	坏	[13.0]	4.6	[7.0]	雲母・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	竈覆土中層	20%
3751	須恵器	坏	[13.8]	4.2	[8.4]	石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	竈前覆土中層	10%

第394号住居跡（第648図）

位置　調査区中央部南部のJ13d9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第393号住居跡，第30号掘立柱建物跡を掘り込み，第19号溝に掘り込まれている。

規模と形状　本跡の南半分が撹乱を受けているため，東西幅4.6m，南北軸2.1mだけが確認され，N－9°－Wを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は最も残りの良い東壁で17cmほどであり，壁は外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は，西壁際に検出されている。

竈　北壁の東寄りに付設され，焚口部から煙道部まで112cm，袖部幅116cmほどである。壁外への掘り込みは80cmほどで，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ，火熱を受けて赤変硬化している。煙道は，火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　褐　暗　褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
4　暗　赤　褐　色　焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　焼土ブロック微量
6　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
7　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量
8　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量
9　暗　褐　色　ロームブロック多量
10　極　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量
11　暗　赤　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子微量
12　赤　褐　色　粘土ブロック多量
13　暗　赤　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
14　黒　褐　色　焼土粒子少量
15　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
16　赤　褐　色　焼土ブロック多量，粘土ブロック・砂粒少量
17　暗　赤　褐　色　焼土粒子多量
18　暗　赤　褐　色　焼土粒子少量

ピット　1か所。P1は深さ44cmで，竈の西脇にあり，竈関連遺構とも考えられるが，性格は不明である。

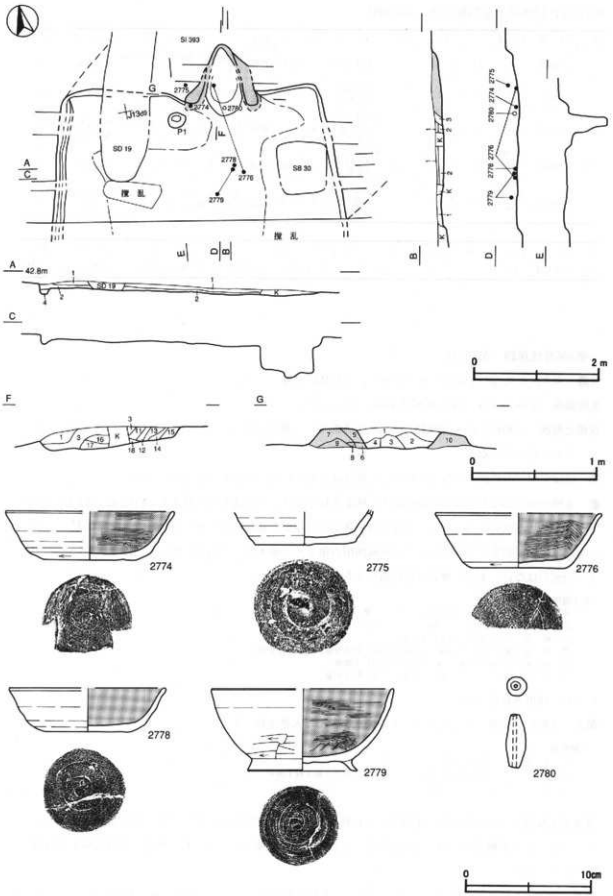
覆土　4層からなり，ロームブロックや焼土を多く含んだ不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック中量
2　暗　褐　色　ロームブロック多量
3　極　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック中量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片244点（坏60，高台付椀8，小皿2，甕174），須恵器片13点（坏6，高台付坏1，甕6），緑釉陶器片1点（椀），脚状土錘1点，小礫21点（10点に被熱痕あり）が主に竈から中央部にかけて出土している。2774は竈前床面，2778は中央部床面からそれぞれ出土し，2776は竈火床面と中央部床面，2779は中央部床面と覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。これらの遺物は，本跡廃絶時に投棄されたものと考えられる。また，2775は竈左袖の北側から出土して，被熱痕が認められることから，袖部の補強材もしくは芯材として使用された可能性があり，本跡廃絶時に投棄されたものと考えられる。なお，覆土中から出土した緑釉陶器片は狼投産と考えられ，須恵器片は破断面が摩滅しているため，混入したものである。

所見　出土した小皿片や高台付椀などの形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。



第648図　第394号住居跡・出土遺物実測図

第394号住居跡出土遺物観察表（第648図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2774	土師器	坏	[13.5]	3.9	6.9	雲母・長石	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り，体部下端回転ヘラ削り	竈前床面	40%
2775	土師器	坏	[10.9]	2.7	7.8	雲母・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	二次焼成	回転ヘラ切り後，ナデ	竈左袖部	40%
2776	土師器	坏	[13.2]	4.4	[7.6]	雲母・長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り，体部下端回転ヘラ削り	中央部床面・竈火床面	55%
2778	土師器	坏	[12.4]	3.5	6.6	雲母・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	中央部床面	40%
2779	土師器	高台付椀	[13.6]	6.6	8.8	雲母・長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	一次焼成	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，体部下端ヘラ削り	中央部床面・下層	40%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2780	管状土錘	4.3	1.6	0.3	(9.0)	土	ナデ，にぶい橙色を呈する，端部一部欠損	竈焚口部	二次焼成

第396号住居跡（第649図）

位置　調査区中央部のＪ13ｄ０区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第383・399・456号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約2.8m，短軸約2.2mの長方形で，主軸方向はＮ－98°－Ｅである。壁高は約14cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

竈　東壁の中央部やや南寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約76cm，袖部幅約40cm，壁外への掘り込みは約20cmである。天井部は崩落しているが，袖部は遺存状態が良好で，内側は赤変している。火床部は浅い皿状を呈しており，上層断面図中の第２・４層下面が火床面に相当し，赤変しているが，焼き締まった感じはない。また，煙道は急傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
4　黒　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子・粘土粒子少量，ローム粒子微量
5　暗　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　焼土ブロック中量，炭化粒子・粘土粒子少量

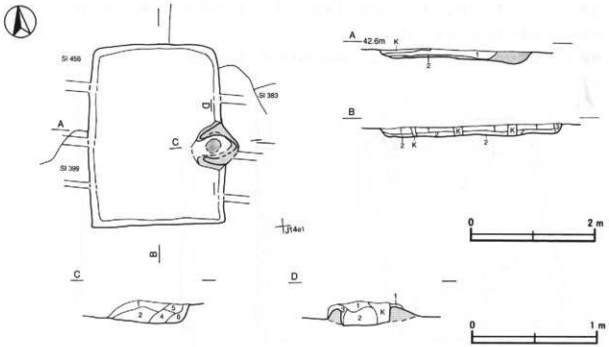
ピット　検出されていない。

覆土　３層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック少量
2　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片11点（小皿２，高台付椀３，甕６），須恵器片１点（甕），礫４点が，覆土中から出土している。大半が細片で，出土遺物は少なく，ほとんどが投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものである。

所見　遺物からは時期を明確に特定できないが，主柱穴を持たないことや東壁の竈が付設されていることなど，当遺跡における10世紀後葉期の住居形態の典型を示しているため，この時期を想定したい。



第649図　第396号住居跡実測図

第397号住居跡（第650図）

位置　調査区中央部のＪ14c1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第456号住居跡・第30号掘立柱建物跡を掘り込み，第59号井戸，第654・670・671・1514号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.3m，短軸約2.8mの長方形で，主軸方向はＮ－11°－Ｅである。壁高は約20cmで，外傾して立ち上がっている。

床　中央部がよく踏み固められ，壁際に比して中央部が若干低くなっている。壁溝は確認されていない。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されていたと推測されるが，第654号土坑に壊されており，遺存している部分は右袖部だけである。右袖部は地山を掘り残した基部に砂質粘土を貼り付けて構築されているのが確認された。

ピット　4か所。いずれも主柱穴で，深さ25～48cmである。

覆土　3層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。第4層には竈材の一部流出が見られる。

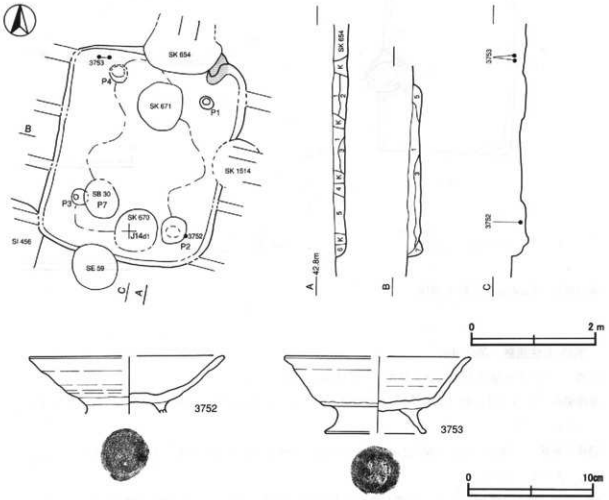
土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・砂質粘土粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量
4　黒　褐　色　ロームブロック微量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック微量

遺物出土状況　土師器片96点(坏14，高台付椀７，甕片65)，須恵器片９点(坏７，甕２)，緑釉陶器１点(皿)，鉄製品１点（不明），鉄滓10点，礫２点が，竈前の床面と全域の覆土中から出土している。大半が細片で，本跡に伴う遺物は少なく，ほとんどが投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものである。竈前の床面から出土している甕は，砂質粘土と共に検出されており，住居廃絶時に意図的に竈が壊され，これらの

遺物が散乱したと考えられる。また，3752は，南東部の壁際から数点の甕片と共に検出されており，住居廃絶後間もなく投棄されたものと考えられる。

所見　住居形態や高台付椀の形状からみて，時期は10世紀中葉と考えられる。



第650図　第397号住居跡出土遺物実測図

第397号住居跡出土遺物観察表（第650図）

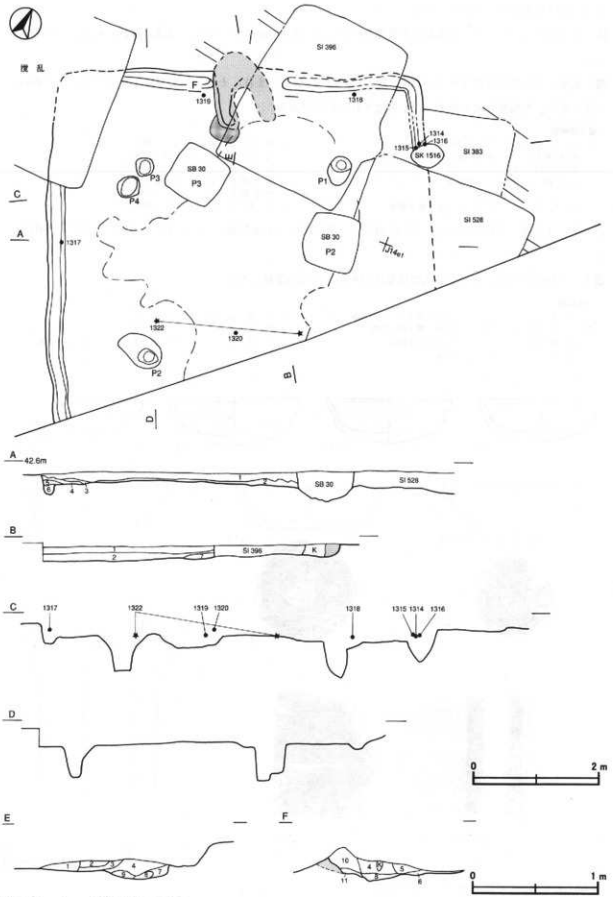
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3752	土師器	高台付椀	[15.3]	(4.6)	－	雲母	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南東部床面	50%
3753	土師器	高台付椀	[14.7]	6.1	[8.0]	雲母・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	北西部覆土中層	30%

第399号住居跡（第651・652図）

位置　調査区中央部東寄りのＪ13e0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第383号住居跡を掘り込み，第396・528号住居，第1516号土坑，第30号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状　南部が調査区域外に延びているため，東西軸は6.0m，南北軸は4.5mだけが確認できた。遺存している竈の位置や，北・西壁，硬化面の広がりから，N－23°－Wを主軸とする方形と推定される。壁高は20



第651図　第399号住居跡実測図

cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，ピットの内側から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は確認された壁際を巡っている。

竈　北壁の中央部に付設されているが，第396号住居に掘り込まれ，また，後世の耕作を受けているため残存状態が悪く，左袖部と火床部の一部が確認されただけである。

竈土層解説

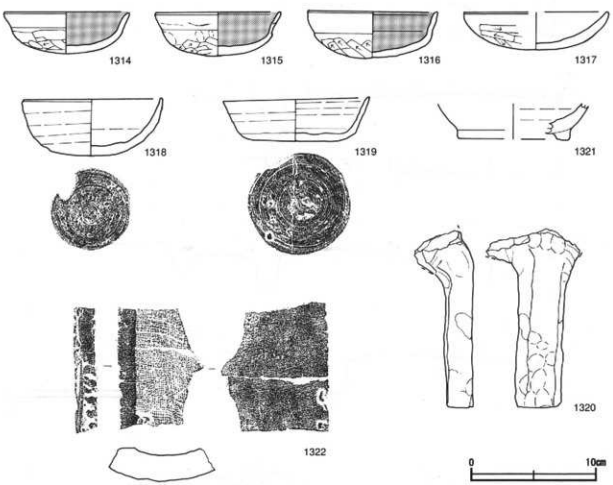
1　褐　灰　色　粘土ブロック多量
2　暗 赤 褐 色　ローム粒子少量，焼土ブロック微量
3　極暗赤褐色　焼土ブロック少量
4　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック少量，粘土ブロック微量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
6　暗　褐　色　ロームブロック微量
7　褐　灰　色　ロームブロック微量
8　暗 赤 褐 色　ロームブロック・焼土粒子微量
9　暗 赤 褐 色　焼土粒子少量，ロームブロック微量
10　暗 赤 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック少量
11　黒　褐　色　ロームブロック微量

ピット　4か所。主柱穴はP1～P3が相当し，深さは50～60cmである。P4は深さ53cmで，性格は不明である。

覆土　7層からなり，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック微量
5　暗　褐　色　ロームブロック少量
6　暗　褐　色　ロームブロック中量
7　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量



第652図　第399号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片561点（坏199，高坏8，甕353，三足鍋1），須恵器片19点（坏11，甕8），灰釉陶器片2点，瓦片1点（平瓦）が出土している。1314～1316は東壁際の床面から出土したもので，内面黒色処理が施されている。また，1318・1319は北壁際の下層，1317は西壁際の中層から出土しており，それぞれ完形または完形に近い状態で出土していることから，住居廃絶時に遺棄されたと考えられる。1320・1322は中央部の中層と床面，1321は南東部の覆土中から出土しており，1321は貯土から須投産の折戸53号窯式併行と考えられる。なお，灰釉陶器片は混入したものである。

所見　第396・528号住居跡に掘り込まれており，住居全体の様相は把握できないが，時期は出土土器の形状から8世紀初頭と考えられる。

第399号住居跡出土遺物観察表（第652図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1314	土師器	坏	10.1	3.3	－	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部内面・口縁部横ナデ	東壁際下層	100% PL234
1315	土師器	坏	10.1	3.4	－	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面・口縁部ナデ	東壁際下層	95% PL235
1316	土師器	坏	10.4	3.7	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面・口縁部ナデ	東壁際下層	100% PL235
1317	土師器	坏	[11.6]	3.1	－	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り	西壁際中層	40%
1318	須恵器	坏	11.0	4.5	－	石英	灰褐	普通	底部回転ヘラ切り	北壁際下層	100% PL235
1319	須恵器	坏	11.6	3.6	8.1	長石・石英・角礫	灰	普通	底部回転ヘラ切り	北壁際下層	80% PL235
1321	灰釉陶器	長頸瓶	－	(2.9)	[8.8]	雲母・黒色粒子	灰黄	普通	体部ロクロナデ，高台貼り付け後，ナデ	南東部覆土中	10%須投産（折戸53号窯式併行）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1320	土師器	三足鍋	(14.2)	(7.4)	(4.8)	石英・雲母・赤色粒子	明黄褐	普通	ナデ，指頭痕	中央部下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
1322	平瓦	(10.5)	(8.4)	2.1	(250.0)	凹面布目痕，凸面ナデ，側面に一部被熱痕有り	中央部床面	

第410号住居跡（第653図）

位置　調査区中央部のJ13e2区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第1号溝跡を掘り込み，第822・823号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.4m，短軸約3.2mの方形で，主軸方向はN－104°－Eである。壁高は約32cmで，ほぼ直立する。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められ，第1号溝と重複している部分からは，貼り床が確認された。壁溝は遺存部分で確認されており，本来は周回していたと考えられる。

竈　東壁の中央部やや南寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約98cm，袖部幅約96cm，壁外への掘り込みは約60cmである。

覆土層解説

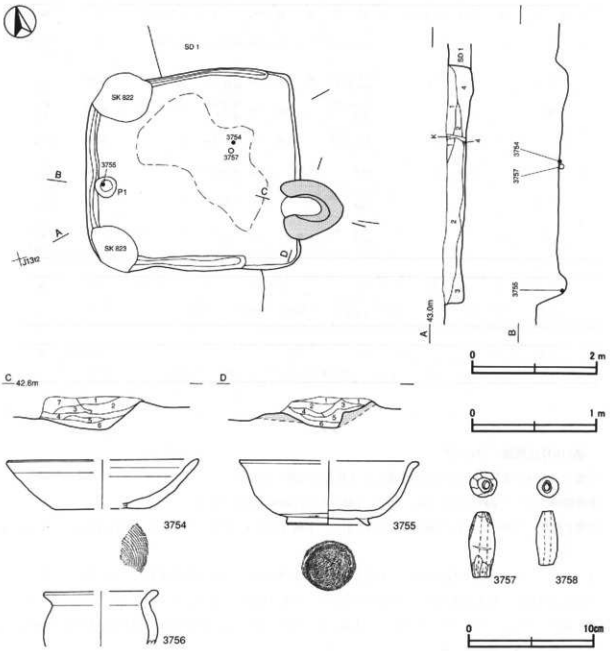
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量，灰微量
2　暗 赤 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量，炭化粒子微量
3　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
4　赤　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量，灰微量
6　暗 赤 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量，炭化粒子微量
7　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子・粘土ブロック少量

ピット　1か所。深さ約18cmで，西壁際の中央部に位置しており，出入り口部に伴うピットと考えられる。

覆土　4層からなり，焼土や炭化粒子を含んだ人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　極 暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量



第653図　第410号住居跡・出土遺物実測図

3　暗 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物微量
4　黒 褐 色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量

遺物出土状況　土師器片203点（坏37，高台付椀12，小皿４，甕150），須恵器片19点（坏10，蓋１，甕８），土製品２点（管状土錘），礫３点が，覆土中から出土している。大半が細片で，埋土中に混入していたものや，住居廃絶後間もなく，投棄されたものと推測される。床面から検出された遺物は少ないが，中央部から出土した3754・3757が相当し，いずれも住居廃絶時に遺棄されたと考えられる。3755は，出入り口ピットの底面から検出されており，住居廃絶後，遺棄されたものがピット内へ落ち込んだと考えられる。

所見　住居形態や高台付椀の形状からみて，時期は10世紀後葉と考えられる。また，竈火床面の検出状況から竈が長期に，または頻繁に使用された痕跡が認められる。

第410号住居跡出土遺物観察表（第653図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3754	土師器	坏	(15.2)	3.9	(7.6)	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り離し	中央部床面	10%
3755	土師器	高台付椀	(14.0)	5.1	6.4	雲母	橙	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	P１覆土下層	70% Pl.235
3756	土師器	小形甕	(8.8)	(4.3)	－	雲母・長石	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ナデ	北部覆土中	10%

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3757	管状土錘	5.2	2.1	0.7	19.4	土	断面円形，両端部へラ削り	中央部床面	
3758	管状土錘	4.3	1.8	0.9	9.3	土	断面円形	北東部覆土中	

第411号住居跡（第654図）

位置　調査区中央部のＪ13f１区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第412号住居跡，第４号溝跡を掘り込み，第13号溝，第815・831号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約4.4m，短軸約3.3mの長方形で，主軸方向はＮ－94°－Ｅである。壁高は約24cmで，ほぼ直立する。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈　検出されていない。

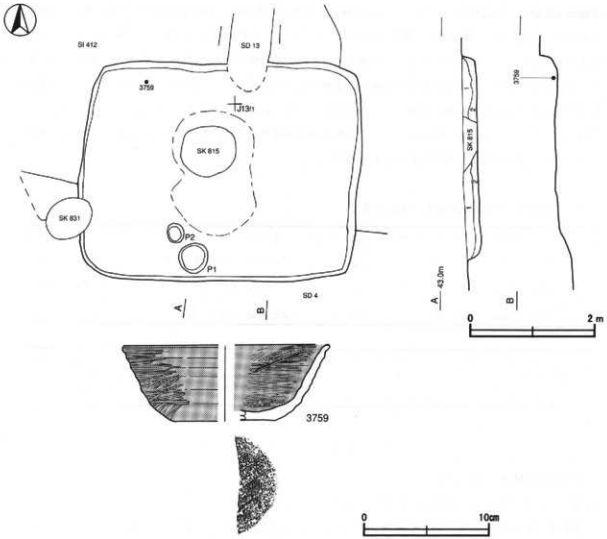
ピット　２か所。Ｐ１は南壁際の中央部に位置しており，出入り口部に伴うピットと考えられる。Ｐ２は形状から柱穴と考えられるが，詳細は不明である。

覆土　２層からなり，ロームブロックを主体とした人為堆積である。

土層解説
1　暗 褐 色　ロームブロック中量
2　黒 褐 色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化材少量

遺物出土状況　土師器片131点（坏34，高坏２，高台付椀11，甕84），須恵器片46点（坏５，高台付坏２，蓋８，甕31），礫２点，炭化材が主に覆土下層から出土している。これらは埋土中に混入していたものが中心となっており，続いて投棄されたものが多く，遺棄された遺物は少ない。3759は北壁際，炭化材は中央部のいずれも覆土下層から出土しており，住居廃絶後に投棄されたと考えられる。

所見　住居形態や高台付椀の形状からみて，時期は11世紀前半と考えられる。



第654図　第411号住居跡・出土遺物実測図

第411号住居跡出土遺物観察表（第654図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3759	土師器	坏	[16.2]	6.0	[7.8]	雲母・石英	橙	普通	体部内・外面ヘラ磨き	北西部覆土下層	40%

第413号住居跡（第655図）

位置　調査区中央部のＪ12d7 区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第465・584号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　南北軸は4.17ｍで，西側部分が調査区域外に延びているため，東西軸は2.41ｍだけが確認でき，Ｎ－100°－Ｅを主軸とする方形または長方形と推測される。壁高は15cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦で，竈の前面から中央部にかけて硬化面の広がりが認められる。壁溝は遺存部で確認され，本来

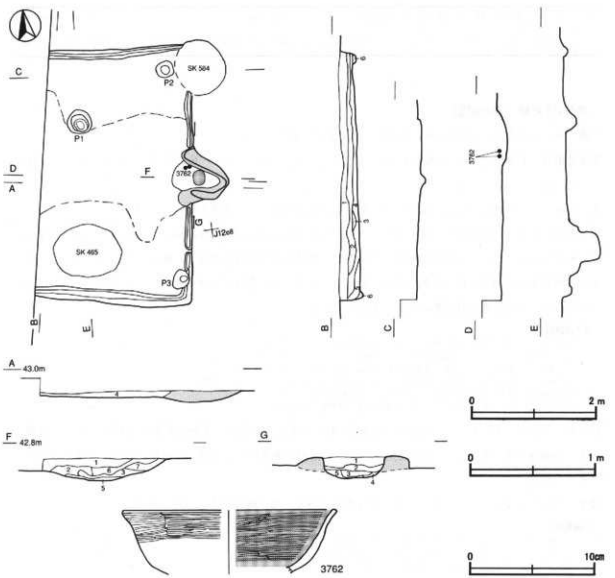
は周回していたと考えられる。

竈　東壁の中央部やや東南寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約84cm，袖部幅約86cm，壁外への掘り込みは約50cmである。天井部は崩落して，土層断面図中の第３・６層が崩落土に相当する。袖部は遺存状態が悪く，基部が確認されただけである。火床部は床面を約８cmほど掘り下げて使用し，硬化はしていないが，赤変している様子が認められる。また，煙道は緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　赤　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　赤　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　炭化粒子中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
6　赤　褐　色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
7　極暗褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量

ピット　３か所。主柱穴はＰ１が相当し，深さ20cmである。相対すると予測される部分は，調査区域外にある部分と重複等により壊された部分とがあり詳細は不明である。Ｐ２・Ｐ３は，深さ10～12cmで，位置と形状か



第655図　第413号住居跡・出土遺物実測図

ら補助柱穴の可能性が高い。

覆土　6層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。第4層には竈材の一部流出が見られる。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
3　極暗褐色　砂質粘土粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
5　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
6　黒　褐　色　ローム粒子少量・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片50点（坏15，高台付椀3，小皿1，甕31），須恵器片11点（坏7，甕4），鉄滓1点，礫3点が，主に覆土中から出土している。大半が細片で本跡に伴う遺物は少なく，ほとんどが投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものである。3762は竈焚き口部から出土しているが，火熱を受けているため，支脚として使用されていたと考えられる。

所見　住居形態や竈支脚として使用されていた高台付椀の形状から，時期は11世紀前半と考えられる。

第413号住居跡出土遺物観察表（第655図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3762	土師器	高台付椀	[16.8]	(5.1)	--	雲母	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ヘラ磨き	竈覆土中層	30%

第417住居跡（第656図）

位置　調査区中央部のJ12b0区に位置し，平坦部に立地している。

規模と形状　長軸約3.5m，短軸約3.3mの方形で，主軸方向はN－12°－Eである。壁高は約16cmで，外傾して立ち上がっている。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められ，壁溝が周回している。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約62cm，袖部幅約102cm，壁外への掘り込みは約36cmである。天井部は崩落しているが，遺存状態は比較的良好で，袖部の内面は赤変している。火床部は床面を約10cmほど皿状に掘り下げて使用し，赤変している様子が認められ，火熱を受けた土器片が数点確認された。また，煙道は急傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物・粘土ブロック少量
2　暗赤褐色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量，ロームブロック少量
3　赤　褐　色　焼土ブロック多量，砂質粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子微量
4　赤　褐　色　焼土ブロック多量，砂質粘土ブロック中量，炭化粒子・ロームブロック微量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
6　暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量

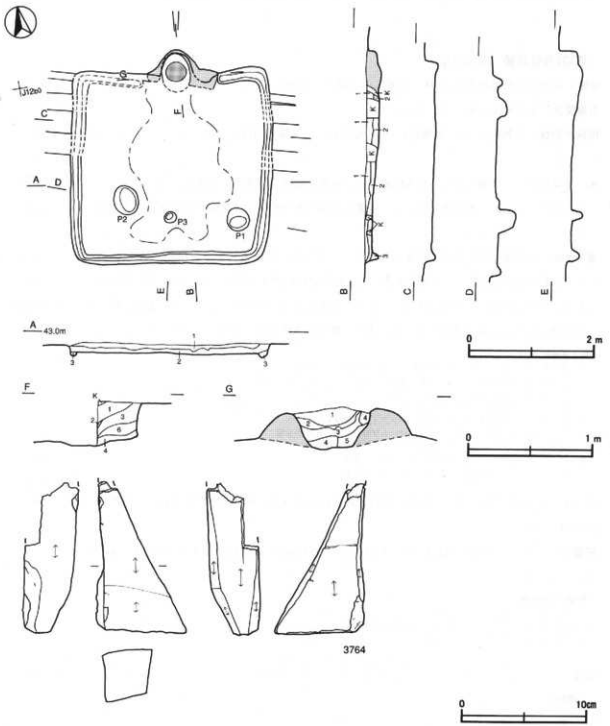
ピット　3か所。P1・P2は深さ16～24cmで主柱穴と考えられるが，北側に相対する位置に主柱穴は検出されず，詳細は不明である。P3は深さ約16cmで，南壁の中央部付近に位置しており，出入り口部に伴うピットと考えられる。

覆土　3層からなり，ローム粒子主体の自然堆積である。第3層は壁溝部の層である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物微量
3　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片46点(坏6，高坏1，甕39)，須恵器片10点(坏7，蓋1，甕2)，土製品1点(不明)，石器1点（砥石），鉄滓1点，礫10点が，覆土中から出土している。住居廃絶時に使用可能な土器は持ち出されており，床面から検出された遺物はなかった。竈火床面から検出された細片は，火熱を受けており，遺棄されたと考えられる。また，大半の遺物は覆土中から検出されており，これらは本跡廃絶後の埋没過程で投棄されたり，流れ込んだものと推測される。



第656図　第417号住居跡・出土遺物実測図

所見　伴出遺物が少ないため，判断するのは困難であるが，近接する第421号住居跡と住居の形態や主軸方向が一致していることや，竪穴部に主柱穴を持たない住居形態などから，時期は9世紀中葉と推測される。

第417号住居跡出土遺物観察表（第656図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3794	砥石	(11.8)	(7.0)	(3.9)	(306)	凝灰岩	砥面5面	南東部覆土中	

第421号住居跡（第657図）

位置　調査区中央部のI13j3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第1号溝を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約3.5m，短軸約3.2mの長方形で，主軸方向はN－10°－Eである。壁高は約32cmで，ほぼ直立する。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められ，壁際に比べて中央部が若干低くなっている。第1号溝と重複している部分には，貼り床を施している。壁溝は東側と西側の壁下で確認されたが，本来は周回していたと考えられる。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約138cm，袖部幅約76cm，壁外への掘り込みは約240cmである。天井部は崩落して，竈土層断面図中の第1～3・6・7層が崩落土に相当する。袖部の遺存状態は良好で，内側は赤変している。火床部は浅い皿状を呈しており，竈土層断面図中の第9層下面が火床面に相当し，焼き締まっている。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子少量，炭化粒子・灰微量
2　灰褐色　砂質粘土ブロック中量，焼土ブロック少量，ローム粒子微量
3　暗褐色　焼土ブロック・炭化粒子中量，ロームブロック少量
4　褐　　色　砂質粘土ブロック多量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
5　赤褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化物少量
6　暗赤褐色　砂質粘土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量
7　褐　　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子微量
8　暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
9　暗褐色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット　2か所。P1・P2の深さはそれぞれ23cm・24cmで，東・西壁際中央部に位置しているが，その性格は不明である。

貯蔵穴　北東コーナー部に付設され，長径50cm，短径48cmの楕円形で，深さは58cmである。壁は外傾して立ち上がっている。

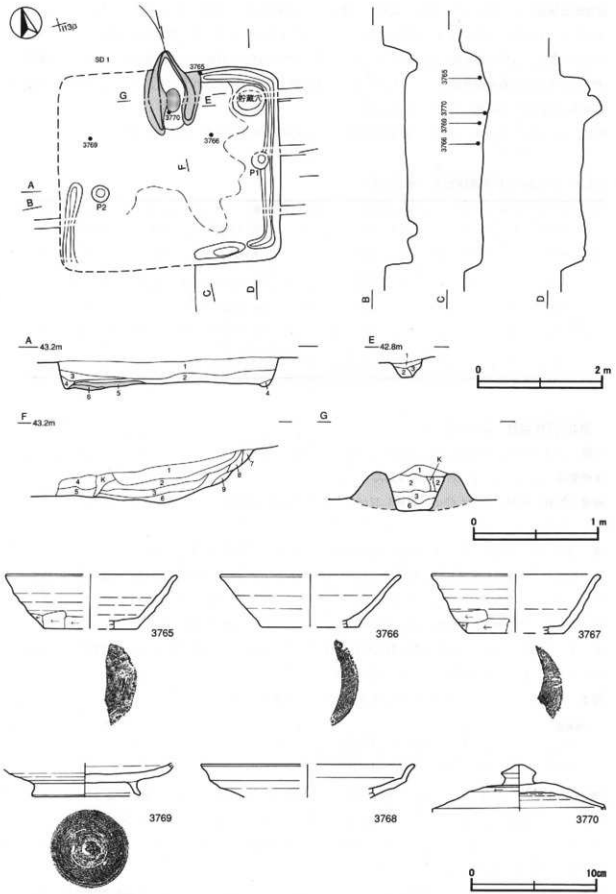
貯蔵穴土層解説

1　暗褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量
2　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化物微量
3　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・砂質粘土ブロック少量

覆土　6層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。第5・6層は貼り床部の層である。

土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック中量，炭化物・粘土ブロック微量
2　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物少量
3　黒褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量
4　褐　　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
5　黒褐色　ロームブロック多量
6　褐　　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量



第657図　第421号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片53点（坏6，高坏1，甕46），須恵器片51点（坏38，蓋6，盤6，甕1），鉄滓1点，礫8点が，主に覆土中と竈周辺の床面から出土している。床面から出土した土器の多くは須恵器で，土師器は少ない。これらは住居廃絶時に遺棄されたと考えられ，3765・3766・3769・3770が相当する。また，土師器の坏片や高坏片は破断面が摩滅しているものが多く，また覆土中から検出されており，大半が投棄あるいは住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものである。

所見　小形の盤が見られることや土師器坏の形状から，時期は9世紀中葉と考えられる。

第421号住居跡出土遺物観察表（第657図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3765	須恵器	坏	[13.4]	4.4	7.4	長石	灰黄	普通	体部下端手持ちヘラ削り	竈覆土下層	40%
3766	須恵器	坏	[14.2]	4.2	[7.8]	雲母	黄灰	普通	底部一方向のヘラ削り	中央部覆土下層	20%
3767	須恵器	坏	[13.2]	4.7	[7.6]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り	貯蔵穴覆土中	20%
3768	須恵器	盤	[16.8]	(2.7)		雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	東部覆土中	10%
3769	須恵器	蓋	－	(2.6)	8.7	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	北部覆土下層	60%
3770	須恵器	蓋	－	(3.8)	－	雲母・長石・石英・骨針	黄灰	普通	天井部左方向の回転ヘラ削り	竈内	30%

第422号住居跡（第658図）

位置　調査区中央部のⅠ12h9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第315～318号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　規模は長軸3.65m，短軸3.37mの方形で，主軸方向はN－5°－Eである。壁高は15cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，それほど硬化した部分は認められない。壁溝は，東側を除いて確認された。

竈　北壁の中央部やや東寄りに，竈構築材と思われる砂質粘土を含んだ褐色土が直径約80cmの範囲に広がっており，また，その直下から，火床面と思われるブロック状に硬化した焼土が確認されたため，この位置に竈が構築されていたと推測されるが，ほとんど遺存していないため，詳細は不明である。

ピット　5か所。P1～P4は位置と形状から主柱穴と考えられ，P5は深さ約36cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口部に伴うピットと考えられる。

覆土　3層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

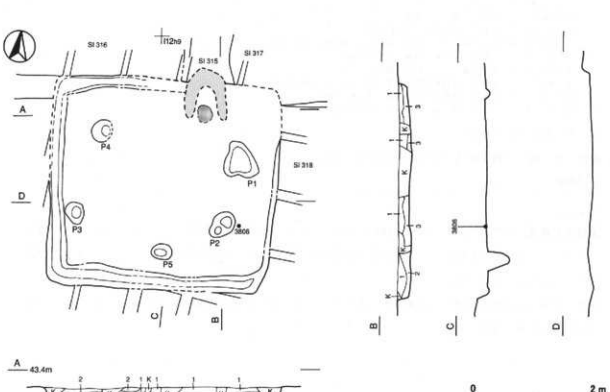
土層解説

1　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片11点（坏4，甕6，甑1），須恵器片9点（坏4，蓋2，盤1，甕2），鉄滓1点，礫13点が，主に覆土中から出土している。3806は，南東部の床面から検出されたが，ほかはすべて全域の覆土中から出土している。これらの土器片は大半が細片で，伴出遺物は少ないと考えられ，多くが投棄されたり住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものである。

所見　本跡は，床面がそれほど硬化していないことや竈の使用状況などから見て，存続期間は短期であったと推測される。また，同時期の土器が出土した第421号住居跡と主軸方向や住居の形態が近似しており，同じ集

落を構成していたことが想定され，時期は9世紀前葉と推測される。



第658図　第422号住居跡・出土遺物実測図

第422号住居跡出土遺物観察表（第658図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3806	須恵器	壺	－	(2.3)	9.8	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南東部床面	30%

第423号住居跡（第659図）

位置　調査区中央部のⅠ12j0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第425号住居跡を掘り込み，第432号住居，第855・882・887号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約4.3m，短軸約4.0mの方形で，主軸方向はN－100°－Eである。壁高は約8cmと低く，立ち上がりは不明である。

床　遺存している部分はほぼ平坦であるが，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

竈　東壁の中央部に砂質粘土で構築されているが，遺存状態は悪く，壁外へ約44cmの掘り込みが確認されただけである。特に北側は重複により遺存していない。また，右袖部は基部だけが遺存しているが，火床部は検出されず，竈材と思われる焼土ブロックと火熱を受けた土器片が確認されただけである。

竈土層解説

1　暗 赤 褐 色　焼土粒子多量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
2　極 暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
5　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量，焼土粒子微量
6　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
7　黒　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　極 暗 褐 色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量
9　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量

ピット　検出されていない。

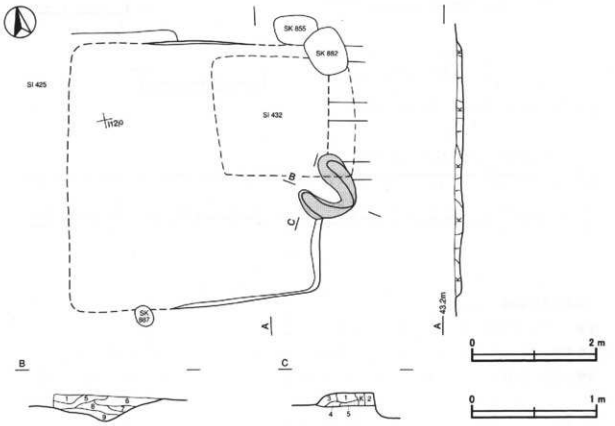
覆土　単一層で，覆土が浅く堆積状況は不明である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片53点（坏12，高台付椀２，小皿８，甕31），須恵器片３点（甕），礫７点が，覆土中から出土している。大半が細片で，本跡に伴う遺物は少なく，ほとんどが投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものである。

所見　小皿はいずれも口径が９cm未満で小形化しており，また東壁部に竈が付設されている住居形態から，時期は10世紀後葉と考えられる。



第659図　第423号住居跡実測図

第426号住居跡（第660図）

位置　調査区中央部のK12b4区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第430号住居跡を掘り込み，第837～839号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　西側部分が調査区域外に延びており，また，床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，遺存している床面の範囲や竈の位置から，N－110°－Eを主軸とする一辺3.6m前後の方形または長方形と推定される。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈　南東壁の中央部やや南寄りに砂質粘土で構築されていたと推測されるが，上部が削平されているため確認できたのは火床面と思われる径約32cmの焼土ブロックの範囲だけで，皿状を呈している。

ピット　1か所。深さ30cmで，形状から見て柱穴と考えられるが，1か所だけの確認であり，詳細は不明である。

覆土　検出されていない。

遺物出土状況　土師器片9点（坏3，小皿1，甕5），須恵器片1点（坏）が，全域の床面から出土しているが，すべて細片で破断面は摩滅しており，住居廃絶後の埋没過程で混入したと考えられる。

所見　遺物が少ないため断定できないが，東壁部に竈が付設されている住居形態や，主軸方向が近接する第513号住居跡とほぼ一致することなどから，時期は10世紀後葉と推測される。

第660図　第426号住居跡実測図

第427号住居跡（第661図）

位置　調査区中央部のK12c5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第585号土坑に掘り込まれ，北東部は撹乱を受けている。

規模と形状　一辺約3.5mの方形で，主軸方向はN－10°－Eである。壁高は約14cmで，外傾して立ち上がる。

床　北東部は撹乱のため不明であるが，遺存している部分はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められており，壁溝が周回している。

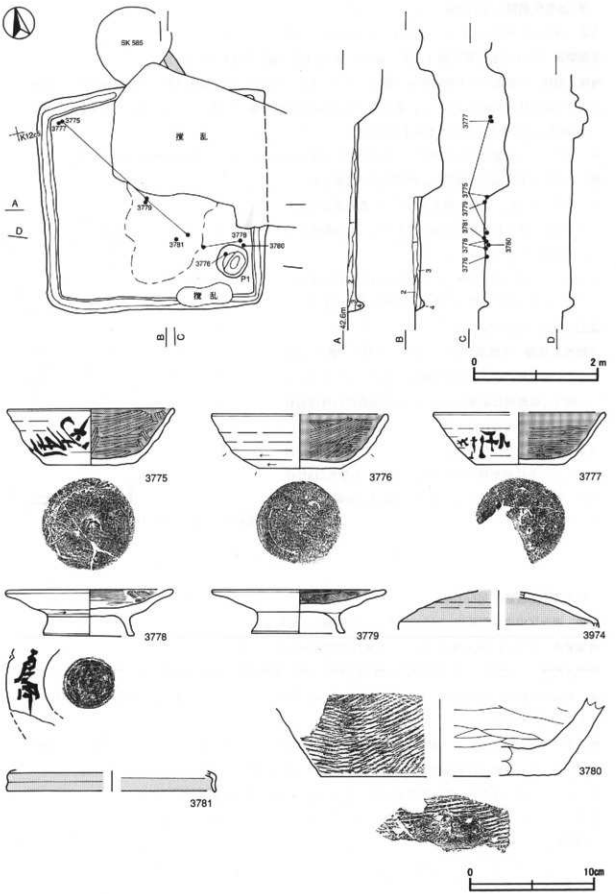
竈　北壁中央部に砂質粘土で構築されているが，大半が第585号土坑に壊され，さらに一部が後世の撹乱も受けているため，壁外へ約40cmほど掘り込まれているのが確認されただけである。

ピット　1か所。深さ16cmで，形状から見て柱穴と考えられるが，詳細は不明である

覆土　4層からなり，各層に炭化粒子を含んだ人為堆積で，第4層は壁溝部の層である。

土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4　褐　　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量



第661図　第427号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片90点（坏58，高台付皿3，甕29），須恵器片26点（蓋1，甕25），灰釉陶器2点（蓋），鉄滓3点，礫7点が主に覆土中から出土している。また，本跡は甕片に対して坏片が多数を占め，比率的に不自然で，大半は住居廃絶後に投棄されたと推測される。また，図示した遺物は3780と3974を除き床面から出土したものであるが，これらは破片が広範囲に検出されたもので，住居廃絶後間もなく投棄されたものと推測される。3780は破断面が摩滅しており，埋土中に混入したものである。

所見　土師器の坏・高台付皿の形状から，時期は9世紀後葉と考えられる。

第427号住居跡出土遺物観察表（第661図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3775	土師器	坏	13.2	4.5	7.2	雲母・長石	明褐	普通	底部回転ヘラ切り	中央部・北西部床面	80% PL249 外面墨書「庄酒」
3776	土師器	坏	[13.8]	4.3	6.5	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	P1覆土上層	50%
3777	土師器	坏	[13.6]	4.1	7.0	長石	にぶい赤褐	普通	底部回転ヘラ切り	北西部床面	40% PL249 外面墨書「庄酒」
3778	土師器	高台付皿	13.2	3.8	7.2	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き，外面下端回転ヘラ調り	南東部床面	90% PL249 外面墨書「庄酒」
3779	土師器	高台付皿	13.6	3.5	7.3	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	中央部床面	50%
3780	須恵器	甕	－	(6.1)	[19.0]	長石	黄灰	普通	体部内面横ナデ，外面平行叩き	東壁際ド層	5%
3781	灰釉陶器	蓋	[16.6]	(1.6)	－	ヒルローム状の吹き出し	淡・オリーブ灰	良好	口縁部内・外面ロクロナデ	中央部床面	5% 尼北窯
3974	灰釉陶器	蓋	－	(3.0)	－	緻密	オリーブ灰	普通	天井部内・外面ロクロナデ	覆土中	10%

第432号住居跡（第662図）

位置　調査区中央部の I 12 j 0 区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第423号住居，第882号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約2.3m，短軸約2.0mの長方形で，主軸方向はN－100°－Eである。壁高は約18cmで，外傾して立ち上がっている。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

竈　検出されていない。

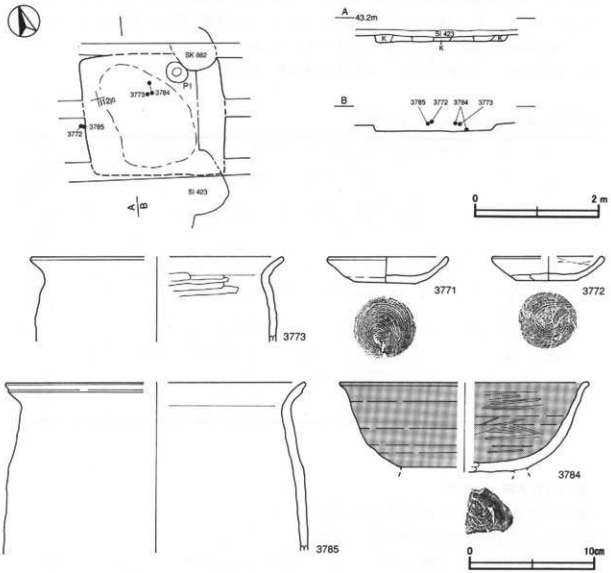
ピット　1か所。深さ34cmで形状から見て柱穴と考えられるが，位置が不規則であり，詳細は不明である。

覆土　1層からなり，焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片93点（坏15，高台付椀13，小皿2，甕62，甑1），須恵器片13点（坏11，蓋1，甕1），鉄滓4点，礫18点が，覆土中から出土している。床面から確認された遺物は少なく，大半は覆土上層で検出され，住居廃絶後に投棄あるいは混入したものと考えられ，図示した土器が相当する。3784は，床面と覆土上層の破片が接合したもので，住居廃絶後間もなく埋め戻し作業が行われたことを推測できる資料である。

所見　本跡の廃絶時期は，投棄された土師器坏片から，11世紀前半と考えられるが，この時期の住居は小形で竈を持たないものが多い。



第662図　第432号住居跡出土遺物実測図

第432号住居跡出土遺物観察表（第662図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3784	土師器	高台付椀	[19.9]	(6.9)	－	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後ナデ，体部内面ヘラ磨き	中央部覆土中層・床面	30%
3771	土師器	小皿	9.5	2.2	4.9	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	覆土中	70%
3772	土師器	小皿	[8.5]	1.9	4.8	雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	西部覆土中層	60%
3773	土師器	小形甕	[19.8]	(6.7)	－	雲母・長石・石英	橙	普通	体部内面ヘラ磨き	中央部覆土中層	10%
3785	土師器	甕	[23.7]	(13.4)	－	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内・外面ナデ	西部覆土中層	10%

第433号住居跡（第663・664図）

位置　調査区南部のL12C1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第464号住居に掘り込まれている。

規模と形状　第464号住居に掘り込まれているため東部は確認できないが，南北軸が3.8m確認されN－17°－Eを主軸とする方形または長方形と推測される。壁高は約17cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められており，壁溝も周回していたものと推測される。

竈　北壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約96cm，壁外への掘り込みは約57cmである。右袖部は破壊され，左袖部の遺存状態も悪い。火床部には埋土と思われるロームブロックが多く，明確に火床面を捉えることはできなかった。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説

1　褐　　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　にぶい赤褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量
5　にぶい赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット　検出されていない。

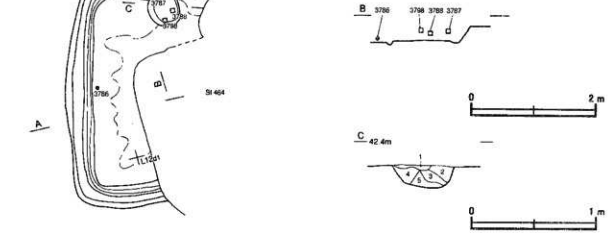
覆土　2層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説

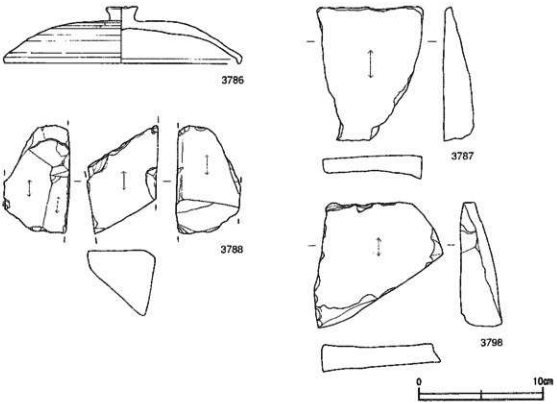
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土ブロック・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片22点（坏6，高台付坏3，甕12，鉢1），須恵器片19点（坏3，蓋5，甕11），鉄製品3点（不明），鉄滓2点，石器7点（砥石），礫26点が，覆土中から出土している。3786は，北西壁際の床面から出土し，残存率が50%を超える遺物はこの1点のみである。その他はすべて細片で，本跡に伴う遺物は少ないと考えられ，ほとんどが投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻す段階で埋土に混入したものである。

所見　須恵器蓋の形状や住居跡の主軸の向きから，時期は8世紀中葉と考えられる。



第663図　第433号住居跡実測図



第664図　第433号住居跡出土遺物実測図

第433号住居跡出土遺物観察表（第664図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3786	須恵器	蓋	(18.7)	4.5	－	長石・針状骨片	灰褐	普通	天井部3段の回転ヘラ削り	北西部覆土下層	70% PL236

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3787	砥石	10.7	8.5	2.4	279	砂岩	砥面は1面	北東部覆土下層	
3788	砥石	(9.1)	(5.6)	(5.1)	(278)	凝灰岩	砥面は4面	北東部覆土下層	
3798	砥石	9.9	10.3	3.4	319	凝灰岩	砥面は1面	北東部覆土下層	

第434号住居跡（第665・666図）

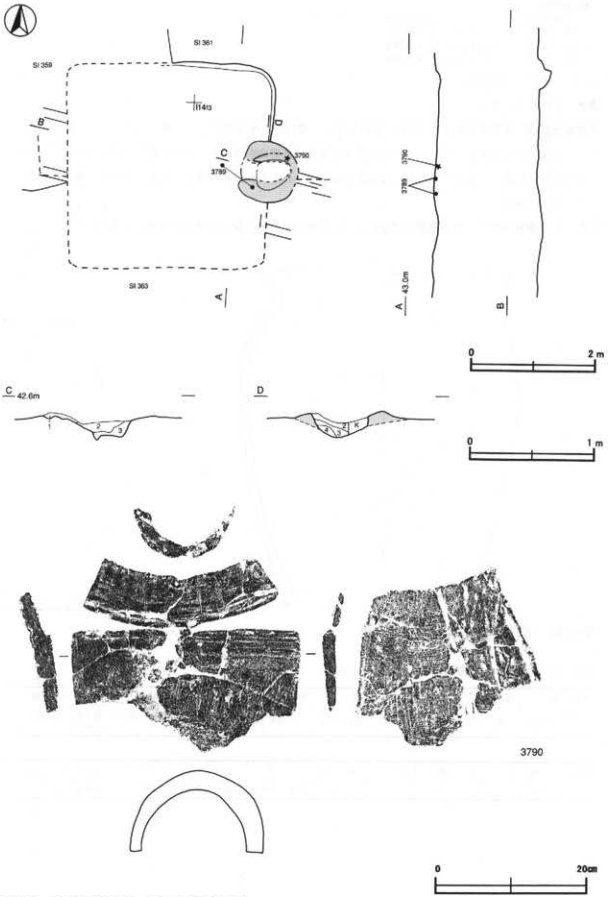
位置　調査区中央部のⅠ14f2区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第359・361・363号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　後世の耕作による攪乱を受けており，壁部を正確に捉えることはできなかったが，床面に広がった焼土の範囲や竈の位置から，N－94°－Eを主軸とする一辺約3.3mの方形と推定される。壁は遺存していないため立ち上がり具合は不明である。

床　それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

竈　東壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約91cm，袖部幅約126cm，壁外への掘り込みは約57cmである。遺存状態は悪く，袖部も砂質粘土を主体とした基部が確認されただけである。火床部には埋土と思われるロームブロックが多く，明確に火床面を捉えることはできなかった。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。



第665図　第434号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説

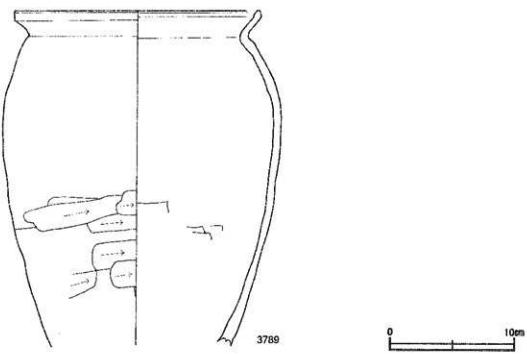
1　褐　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子微量

ピット　遺存していない。

覆土　遺存していない。

遺物出土状況　土師器片142点（坏14，高台付坏2，甕126），須恵器片5点（甕），瓦片1点（丸瓦），礫2点が，主に床面から出土している。これらは大半が細片で破断面が摩滅しており，後世の攪乱も激しいため本跡に伴う可能性は低く，伴う土器としては竈内から検出された3789が相当する。なお，3790は遺構確認面から出土したものである。

所見　伴う遺物が少ないため明確ではないが，住居跡の形態と主軸の向きから時期は9世紀代と推測される。



第666図　第434号住居跡出土遺物実測図

第434号住居跡出土遺物観察表（第665・666図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3789	土師器	甕	19.1	(26.8)	－	長石・石英	にぶい黄褐	普通	口縁部横ナデ，体部内面ヘラナデ	竈手前・竈石袖部	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
3790	丸瓦	(21.6)	17.4	10.5	1670	凸面ヘラ削り，凹面布目痕，玄線部を有する	遺構確認面	

第436号住居跡（第667・668図）

位置　調査区南部のK12ei区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第14号掘立柱建物跡を掘り込み，第437号住居，第874・1173・1237・1238号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　大半が調査区域外に延びているため詳細は不明であるが，東西軸は約2.7m，南北軸は1.90mだけが確認できた。

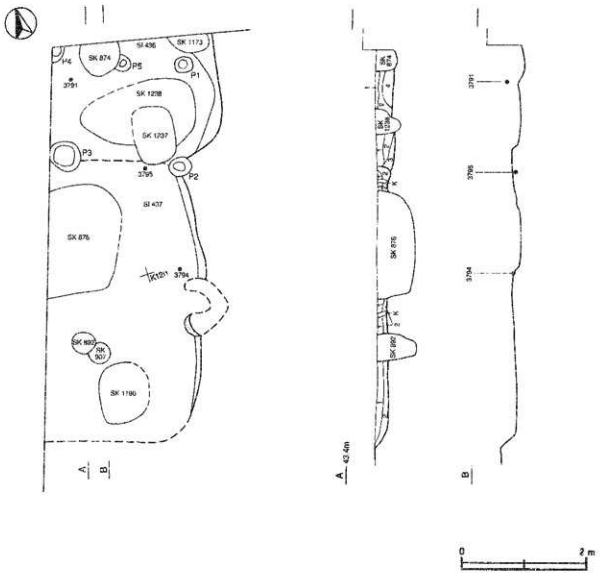
床　遺存している部分が少ないため，詳細は不明である。

壁　検出されていない。

ピット　5か所。いずれも径20～30cm，深さ20cm内外であるが，性格は不明である。

覆土　重複などのため不鮮明であるが，4層が確認されている。各層にローム土を含んだ人為堆積である。

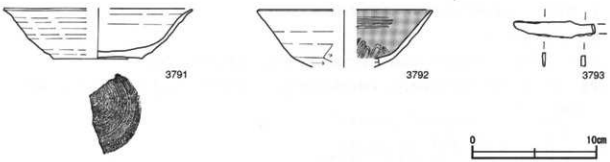
土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量



第667図　第436・437号住居跡実測図

遺物出土状況　土師器片200点（坏158，高台付坏８，甕34），須恵器片７点（坏３，蓋１，甕３），鉄製品４点（刀子１，不明３），礫12点が覆土中から出土している。土器類は，甕片に対して坏片が多数を占め，比率的に不自然であり，大半は住居廃絶後に投棄あるいは埋め戻しの段階で混入したものと推測され，伴う遺物は少ないと考えられる。

所見　土師器坏の形状から，時期は９世紀後葉と考えられる。



第668図　第436号住居跡出土遺物実測図

第436号住居跡出土遺物観察表（第668図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3791	土師器	坏	[15.0]	4.0	[7.0]	赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り	中央部覆土下層	15%
3792	土師器	高台付坏	[13.8]	(4.5)	－	雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3793	刀子	(6.5)	1.2	0.3	(6.45)	鉄	両関有り，柄部先端欠損	覆土中	

第437号住居跡（第667・669図）

位置　調査区南部のK11f0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第436号住居跡，第14号掘立柱建物跡を掘り込み，第876・892・907・1190号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　南北軸は約4.0mで，西側部分が調査区域外に延びているため，東西軸は約2.5mだけが確認でき，N－105°－Eを主軸とする方形または長方形と推測される。

床　ほぼ平坦で，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

竈　東壁の中央部やや南寄りに砂質粘土で構築されているが，遺存状態は悪く袖部も壁面に貼り付けられた砂質粘土が痕跡として残っているだけである。火床部には埋土と思われるロームブロックが多く，明確に火床面を捉えることはできなかった。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

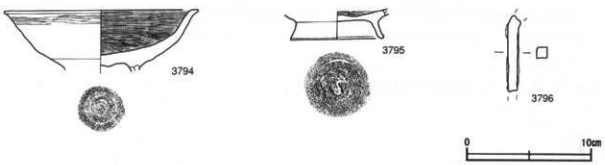
ピット　検出されていない。

覆土　重複のため不鮮明であるが，２層が確認されている。いずれもロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片335点（坏178，高台付椀20，甕137），須恵器片28点（坏15，甕13），鉄製品３点（鬥金具１，不明２），鉄滓６点，礫19点が主に覆土中から出土している。3794は竈左側の床面からまとまって検出されたもので，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見　土師器坏の形状と住居跡の形態から，時期は10世紀後葉と考えられる。



第669図　第437号住居跡出土遺物実測図

第437号住居跡出土遺物観察表（第669図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3794	土師器	高台付椀	15.4	(5.0)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り	左袖部脇床面	80%
3795	土師器	高台付椀	－	(2.3)	－	雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り	北壁際床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3796	鬥金具	(6.0)	(1.1)	0.9	(21.1)	鉄	断面方形	覆土中	

第439号住居跡（第670図）

位置　調査区南部のK12g1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第438号住居跡を掘り込み，第912・917号土坑，第42号井戸にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.0m，短軸約2.6mの長方形で，主軸方向はN－4°－Eである。壁高は約36cmで，外傾して立ち上がっている。

床　それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。中央部やや北壁寄りの床面に，径約60cmの楕円形状の焼土塊が検出された。床面に焼けた痕跡は認められず，投棄されたものと推測される。

焼土塊土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子少量，灰微量
2　赤　褐　色　焼土粒子・灰少量，炭化粒子微量
3　灰　　色　灰多量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
4　褐　　色　灰少量，焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　焼土粒子・炭化物微量

竈　検出されていない。

ピット　検出されていない。

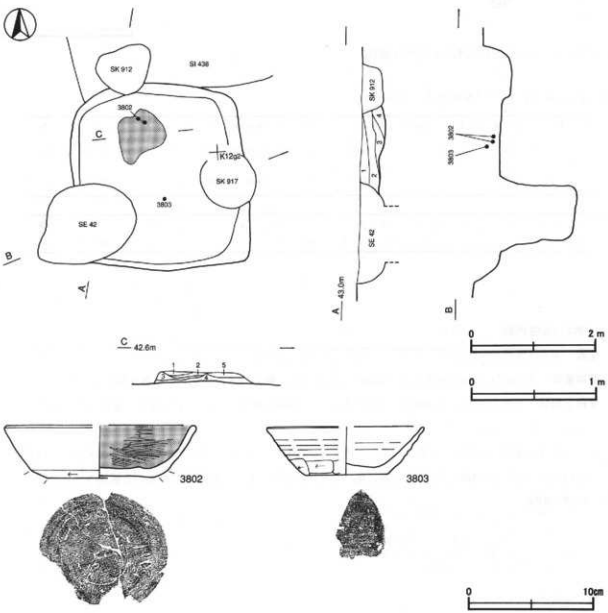
覆土　4層からなり，焼土粒子や炭化粒子を含んだ人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
4　暗 赤 褐 色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片240点(坏116，高台付坏5，甕129)，須恵器片30点(坏14，高台付坏4，蓋2，甕10)，灰釉陶器片1点（椀），礫1点が主に覆土中から出土している。大半は住居廃絶後に投棄あるいは混入したものと考えられ，図示した土器がそれらに相当する。また，中央部の床面に広がる焼土の中からも多数の土器片が検出されている。これらは，焼土と共に投棄されたものと考えられ，火熱を受けているものと受けていないものに分かれている。

所見　坏の形状から，時期は9世紀中葉と考えられる。



第670図　第439号住居跡・出土遺物実測図

第439号住居跡出土遺物観察表（第670図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3802	土師器	坏	[14.8]	4.1	8.0	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土下層	40%
3803	須恵器	坏	[12.4]	3.8	[6.4]	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り	覆土中層	20%

第445号住居跡（第671図）

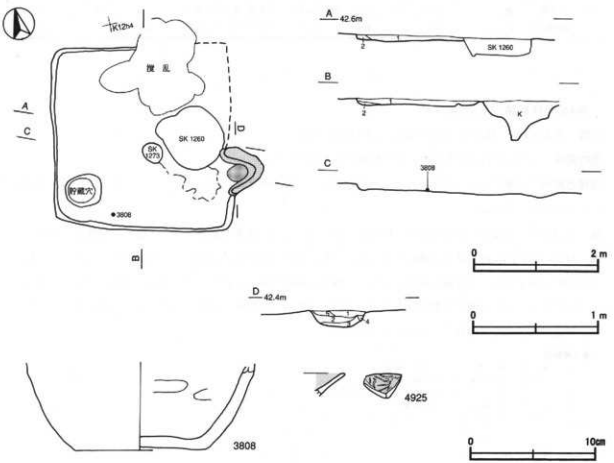
位置　調査区南部のK12h4区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第1260・1273号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　北壁部に撹乱を受けているが，長軸約2.9m，短軸約2.8mの方形で，主軸方向はN－104°－Eである。壁高は約10cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

竈　東壁の中央部南寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約74cm，袖部幅約80cm，壁外への掘り込みは約45cmである。袖部は崩落しているが，左袖部の芯材として壁際に置かれた礫が砂質粘土ブロックと共に検出された。火床部は浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第3層下面が火床面に相当すると考えられるが，焼き締まった感じはない。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。



第671図　第445号住居跡・出土遺物実測図

竈土層解説
1 暗赤褐色　焼土ブロック微量
2 暗赤褐色　焼土粒子少量，炭化粒子微量
3 赤褐色　ローム粒子・焼土粒子微量
4 褐色　焼土ブロック多量
5 暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック微量

ピット　検出されていない。

貯蔵穴　南西コーナー部に付設され，長径50cm，短径42cmの楕円形である。また，壁は外傾して立ち上がる。

覆土　2層からなり，各層に鹿沼パミスを含む人為堆積である。

土層解説
1 黒褐色　ローム粒子少量，鹿沼パミス微量
2 暗褐色　ロームブロック少量，鹿沼パミス微量

遺物出土状況　土師器片151点（坏55，甕96），須恵器片4点（蓋2，甕2），緑釉陶器片1点（皿），礫7点が覆土中から出土している。大半が細片で，本跡に伴う遺物は少なく，ほとんどが投棄されたり住居廃絶時に埋め戻す段階で混入したものである。3808は東壁際の床面からまとまって検出された破片が接合したものであるが，残存率が低く，住居廃絶後間もなく投棄されたものと推測される。

所見　坏の形状から，時期は10世紀後葉と考えられる。

第445号住居跡出土遺物観察表（第671図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3808	土師器	甕	－	(7.0)	16.2	長石・石英	灰黄	普通	体部内面横ナデ	南壁際床面	5%
4925	緑釉陶器	皿	－	(1.9)	－	細密	灰オリーブ	良好	内・外面施釉，線刻花紋	覆土中	5%

第446号住居跡（第672図）

位置　調査区南部のK12h3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第1195・1196号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.2m，短軸約2.7mの長方形で，主軸方向はN－104°－Eである。壁高は約23cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，中央部が若干低くなっている。また，壁溝が北東コーナー部で一部確認された。

竈　東壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約68cm，袖部幅約97cm，壁外への掘り込みは約50cmである。天井部は崩落しており，袖部も基部が確認されただけである。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられているが，床土と思われるロームブロックが多く，明確に火床面を捉えることはできなかった。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1 暗褐色　焼土ブロック・炭化粒子微量
2 にぶい黄褐色　粘土粒子少量，砂粒微量
3 暗褐色　焼土ブロック，粘土粒子少量，砂粒微量
4 暗褐色　焼土粒子少量，砂粒微量
5 暗赤褐色　焼土粒子・粘土ブロック少量，炭化粒子・砂粒微量
6 褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック・粘土ブロック微量

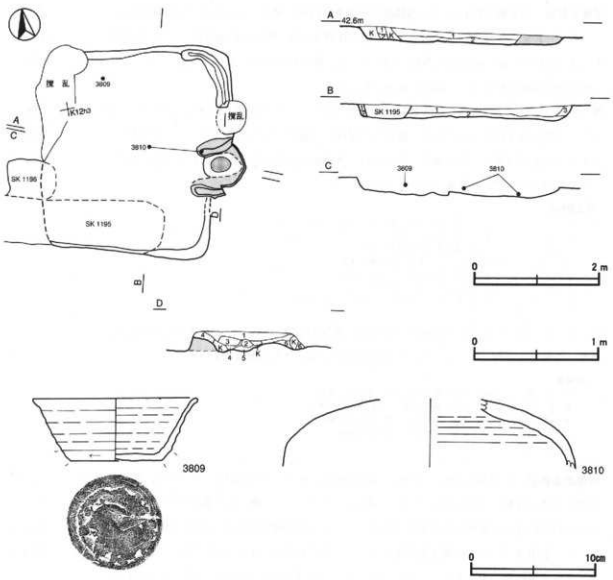
ピット　検出されていない。

覆土　3層からなり，レンズ状に堆積した自然堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片85点（坏27，高台付坏2，甕56），須恵器片23点（坏7，蓋2，甕13，長頸瓶1），礫2点が覆土中から出土している。3809は北壁際の覆土中層からほぼ完形に近い状態で検出され，3810は竈の左袖部と竈前の覆土中層から出土した土器片が接合したもので，住居跡廃絶後まもなく投棄されたものと考えられる。

所見　坏の形状から，時期は9世紀中葉と考えられる。



第672図　第446号住居跡・出土遺物実測図

第446号住居跡出土遺物観察表（第672図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3809	須恵器	坏	13.2	4.9	7.2	雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	北部覆土中層	100% PL235
3810	須恵器	長頸瓶	－	(5.4)	－	長石・黒色粒子	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	竈左袖部・覆土中層	10%

第450号住居跡（第673・674図）

位置　調査区南部のK11i9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第451号住居跡を掘り込み，第20号掘立柱建物，第1111・1131号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　南北軸は約3.7m で，西側部分が調査区域外に延びているため，東西軸は約1.2m だけが確認でき，N－100°－E を主軸とする方形または長方形と推測される。壁高は10cm 前後であり，壁は外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，竈の前面から西側へ向かってよく踏み固められており，壁溝が南壁際で確認された。南壁の調査区際の床面でわずかなくぼみが確認されている。

竈　東壁の中央部やや南寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約108cm，袖部幅約96cm，壁外への掘り込みは約57cm である。竈付近の床面には竈材と思われる焼土ブロックが散在しており，遺存状態は悪い。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられ，土層断面図中の第３層下面が火床面に相当し，赤変している。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

焼土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
4　黒　　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
5　褐　　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　赤　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量
7　褐　　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量

ピット　１か所。P1 は深さ20cm で，南西部の調査区域際に位置し，その性格は不明である。

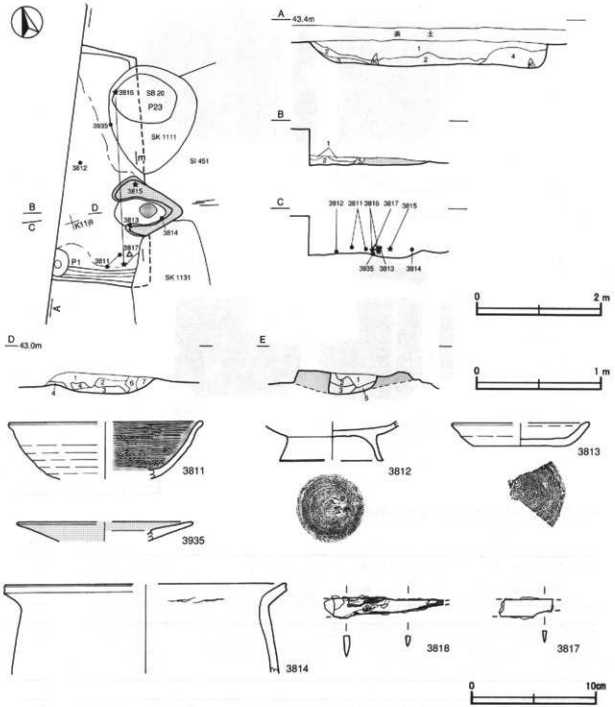
覆土　５層からなり，ロームブロックや炭化粒子を含んだ人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子少量・炭化粒子少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量・炭化粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
4　褐　褐　色　ローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子少量・ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片108点（坏41，高台付椀10，甕57），須恵器片８点（坏５，高台付坏２，甕１），緑釉陶器片１点（段皿），瓦片４点（平瓦），鉄製品１点（刀子），礫５点が覆土中と南壁際の床面から出土している。3815は崩落した竈袖部の基部から出土しており，竈の構築材として使用された可能性が高い。3816は北東コーナーと南東コーナーの覆土下層から出土した破片が接合されたものである。また，図示したその他の遺物は，すべて東壁際の覆土下層から出土しているが，住居廃絶後に投棄されたと考えられる。

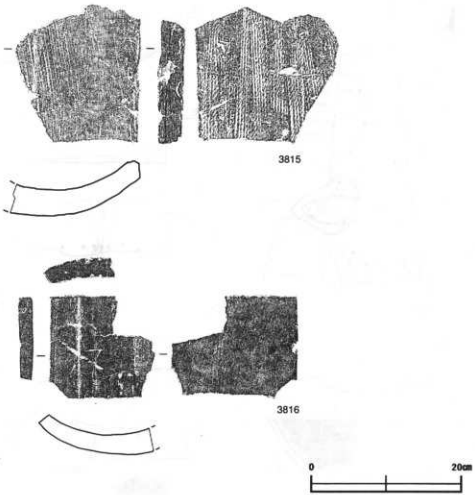
所見　坏・高台付椀・小皿の形状から，時期は10世紀中葉と考えられる。



第673図　第450号住居跡出土遺物実測図

第450号住居跡出土遺物観察表（第673・674図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3811	土師器	坏	[15.2]	(4.5)	－	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ磨き	南東コーナー部下層	40%
3812	土師器	高台付椀	－	(3.1)	[8.2]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り	中央部床面	10%
3813	土師器	小皿	[10.8]	1.8	[7.2]	雲母・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部および体部内・外面ロクロナデ	竈右袖部	20%
3814	土師器	甕	[22.4]	(7.1)	－	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・外面ロクロナデ	竈火床部	5%



第674図　第450号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3935	緑釉陶器	段皿	[14.9]	(1.5)	－	緻密	灰白・黄緑色の釉	良好	口縁部ロクロナデ，釉は刷毛塗り	東壁寄り床面	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3815	平瓦	(18.2)	(19.0)	(3.7)	(1440)	土	凹面布目痕，凸面縄目叩き	竈左袖部	
3816	平瓦	(13.2)	(16.5)	(3.0)	(937)	土	凹面布目痕	東壁際下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3817	刀子	(5.2)	(1.4)	0.3	(5.8)	鉄	片関か，両端部欠損	南東コーナー部下層	
3818	刀子	(9.5)	(1.6)	0.5	(14.9)	鉄	片関か，両端部欠損	覆土中	

第451号住居跡（第675・676図）

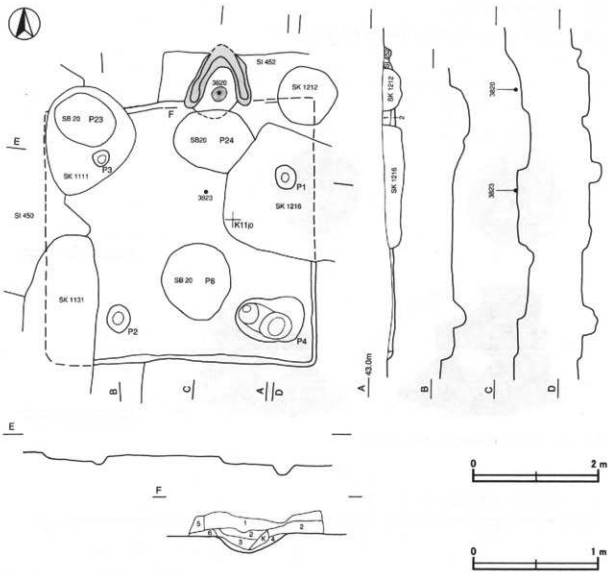
位置　調査区南部のK11i9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第452号住居跡を掘り込み，第450号住居，第20号掘立柱建物，第1111・1131・1212・1216号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，遺存している床面の範囲から，N－2°－Wを主軸とする一辺約4.3mの方形と推定される。

床　それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，袖部幅約90cm，壁外への掘り込みは約74cmである。焚き口部は土坑に壊されているものの，袖部と火床部の遺存状態は良好で，袖部の内側は赤変している。また，竈を構築する際，第452号住居跡を床面近くまで掘り込み，砂質粘土で袖部を構築しているのが確認された。火床部は浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第3層が火床面に相当し，厚さ約11cmほどが赤く焼き締まっている。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。



第675図　第451号住居跡実測図

竈土層解説

1　灰黄褐色　粘土粒子多量，ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　赤　褐　色　焼土粒子多量，ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
5　褐　　色　粘土粒子中量，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　4か所。主柱穴はP1～P3が相当し，深さ11～17cmである。なお，主柱穴が想定される北東コーナー部は土坑に掘り込まれており不明である。P4は深さ約22cmで，南東コーナー部に位置しており，貯蔵穴の可能性も考えられる。

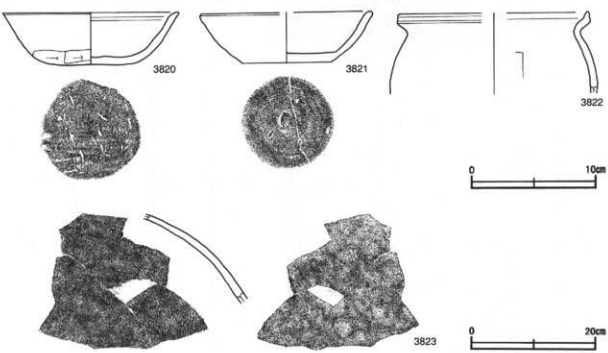
覆土　2層からなり，焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片324点（坏121，高台付椀9，甕194），須恵器片46点（坏4，高台付坏1，甕41），土製品2点（支脚，不明），礫14点が竈内と竈周辺の床面から出土している。3820は竈火床部，3823は竈前の床面からそれぞれ出土している。特に3820は火熱を受けており，火床面に伏せた状態で確認されたことから，支脚としての用途が考えられる。

所見　土師器坏の形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。



第676図　第451号住居跡出土遺物実測図

第451号住居跡出土遺物観察表（第676図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3820	土師器	坏	13.8	4.1	7.6	雲母・長石	橙	普通	口縁部および体部内・外面ロクロナデ	竈火床部	60%
3821	土師器	坏	[15.4]	4.0	7.0	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部および体部内・外面ロクロナデ	竈覆土中	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3822	土師器	甕	[15.0]	(6.5)	－	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	竈覆土中	5%
3823	須恵器	大甕	－	(14.0)	－	長石	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	竈前床面	5%

第453号住居跡（第677・678図）

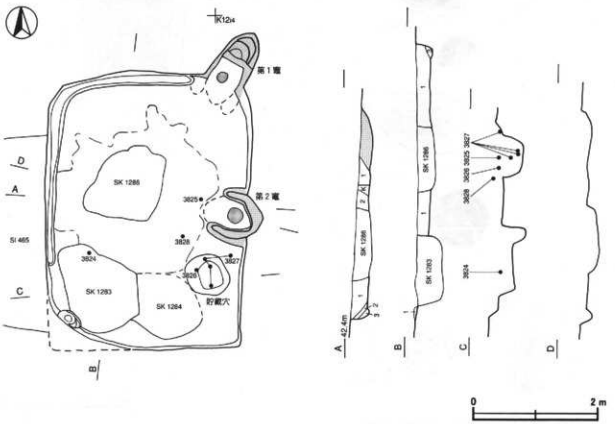
位置　調査区南部のK12i3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第465号住居跡を掘り込み，第1283・1284・1286号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約4.4m，短軸約3.4mの長方形で，主軸方向はN－92°－Eである。壁高は約10cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められており，北壁際から西壁際にかけて壁溝が巡っている。

竈　2か所。第1竈は北東コーナー壁部，第2竈は東壁部に砂質粘土で構築されている。第1竈は両袖部とも壊されて，第1竈から第2竈への据え替えが行われたと考えられ，また壁外への掘り込みは約86cmである。意図的に壊されているためほとんど遺存しておらず，火床部が皿状に掘りくぼめられて構築されているのを確認しただけである。煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。また，遺物は検出されていない。第2竈は焚口部から煙道部まで約108cm，袖部幅約80cm，壁外への掘り込みは約28cmである。遺存状態は悪く，袖部は基部が確認された程度である。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられているが，火床部には埋土と思われるロー



第677図　第453号住居跡実測図

ムブロックが多く，明確に火床面を捉えることはできなかった。なお，火床部からは火熱を受けた土器片が数点確認された。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がる。

ピット　検出されていない。

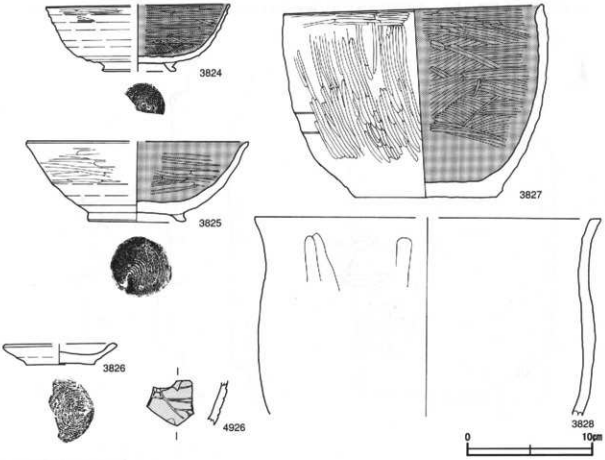
貯蔵穴　長径約80cm，短径約62cmの楕円形で，南東コーナー部に付設され，深さは約34cmである。底面形状は長方形を呈し，壁は外傾して立ち上がっている。

覆土　3層からなり，各層にロームブロックを含んだ人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片310点（坏224，高台付椀５，小皿６，甕64，鉢11），須恵器片10点（甕），灰釉陶器片２点（椀），緑釉陶器片１点（瓶），鉄滓７点，礫７点が主に南部の覆土下層から出土している。土器は甕片に対して坏片が多数を占め，比率的に不自然であり，大半は住居廃絶後に投棄されたと推測される。また，完形に近い状態で検出された遺物は少なく，本跡に伴う遺物は3824・3825・3828である。3826は貯蔵穴から，3827は第２竈の右側の床面からつぶれた状態で出土しており，本跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

所見　高台付椀・小皿の形状から，時期は11世紀前半と考えられる。



第678図　第453号住居跡出土遺物実測図

第453号住居跡出土遺物観察表（第678図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3824	土師器	高台付椀	[14.6]	5.2	[5.2]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	西壁より床面	30%
3825	土師器	高台付椀	[17.2]	6.3	7.7	雲母	にぶい赤褐	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，ナデ	第2竈手前床面	40%
3826	土師器	小皿	[6.6]	1.6	[5.4]	雲母・長石・石英	橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	貯蔵穴	50%
3827	土師器	鉢	20.6	15.3	11.2	長石・石英	にぶい橙	普通	体部内・外面ヘラ磨き	第2竈右側床面	70% PL235
3828	土師器	甕	[27.6]	(15.7)	－	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	第2竈手前床面	10%
4926	緑釉陶器	瓶	－	(3.6)	－	砂粒	オリーブ黄	普通	内・外面施釉	覆土中	5%

第455号住居跡（第679図）

位置　調査区南部のL12a5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　北壁中央部を第1557号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，遺存している床面の範囲から，N－3°－Wを主軸とする一辺約2.4mの方形と推定される。

床　遺存している部分はほぼ平坦で，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

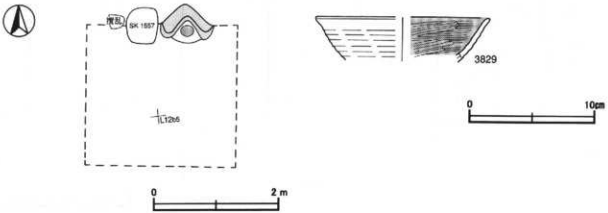
竈　北壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約60cm，袖部幅約85cm，壁外への掘り込みは約60cmである。竈付近の床面には竈材と思われる焼土ブロックが散在しており，天井部は崩落し，袖部も遺存状態が悪い。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられているが，焼き締まった感じはなかった。また，煙道は外傾して立ち上がる。

ピット　検出されていない。

覆土　遺存していない。

遺物出土状況　土師器片9点（坏6，甕3），須恵器片1点（坏），鉄滓1点が床面から出土しているが，これらは細片で破断面が摩滅しており，混入と考えられる。南東部から出土した3829も同様である。

所見　伴う遺物がないことや，遺構の重複関係からも判断できないが，出土土器の形状から，時期は9世紀末から10世紀前葉と考えられる。



第679図　第455号住居跡・出土遺物実測図

第455号住居跡出土遺物観察表（第679図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3829	土師器	坏	[12.6]	(3.5)	－	雲母・其石・石英	にぶい褐	普通	体部内面ヘラ磨き	確認面	10%

第456号住居跡（第680図）

位置　調査区中央南部の J13d0 区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第393・397・399号住居跡をそれぞれ掘り込み，第396号住居，第30号掘立柱建物にそれぞれ掘り込まれている。また，耕作による撹乱を受けている。

規模と形状　N－77°－Wを主軸とする長軸2.9m，短軸2.7mのほぼ方形と考えられる。壁高は最も残りの良い東壁で20cmを測り，壁は外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈手前から中央部にかけてよく踏み固められている。壁溝は確認されていない。

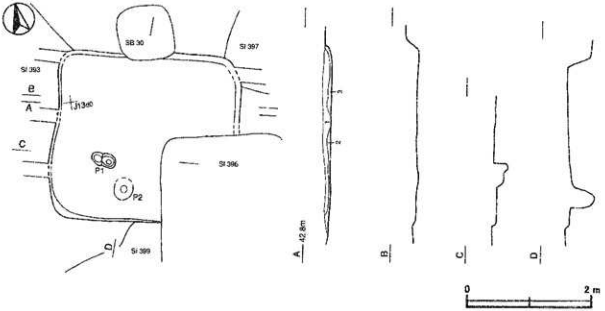
竈　北壁あるいは東壁に付設されていたものと想定されるが，他の遺構などによって両壁とも掘り込まれたと考えられ，遺存していない。

ピット　2か所。P1は深さが20cm，P2は深さが40cmであるが，性格は不明である。また，P2は出入り口施設に伴うピットと想定される。

覆土　3層からなり，ロームブロックを含んだ堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　ローム粒子微量

遺物出土状況　土師器片37点（坏9，甕28），須恵器甕片2点がほぼ全域から散在した状態で出土している。出土した土器は，いずれも細片である。



第680図　第456号住居跡実測図

所見　土師器小皿がまだ出現していないことと，10世紀後半の住居跡に掘り込まれている重複関係から判断して，時期は10世紀代以前と考えられる。

第460号住居跡（第681図）

位置　調査区南部のL11b9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第463号住居跡を掘り込み，第1133・1134号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　長軸約4.9m，短軸約3.8mの長方形で，主軸方向はN－10°－Eである。壁高は約13cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈の前面から出入り口施設にかけてよく踏み固められており，壁溝が周回している。

竈　北壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約74cm，袖部幅約91cm，壁外への掘り込みは約34cmである。遺存状態は悪く，竈構築材と考えられる砂質粘土が竈手前から住居跡中央部まで散在している。また竈内から火熱を受けた土器片が多数検出されており，住居跡廃絶時に意図的に壊された可能性が高く，土層断面図中の第2・4層が天井崩落土に相当する。袖部は基部が痕跡として残っているだけであるが，白色粘土を主体に構築されている。火床部は浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第3層下面が火床面に相当し，焼き締まっている。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
3　暗　赤　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
4　赤　褐　色　砂質粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量

ピット　4か所。主柱穴はP1～P3が相当し，深さ14～45cmである。なお，北東コーナー部には，主柱穴は確認できなかった。P4は深さ約12cmで，壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

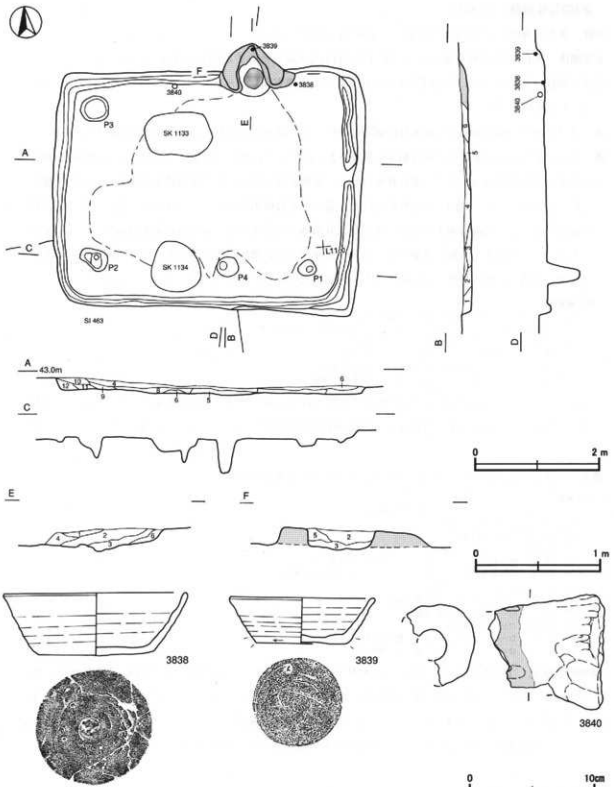
覆土　12層からなり，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量・焼土粒子微量
2　黒褐褐色　ロームブロック微量
3　黒　褐　色　炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック中量
5　黒　褐　色　砂質粘土ブロック少量，ロームブロック微量
6　黒　褐　色　砂質粘土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック少量
8　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
10　黒　褐　色　ローム粒子微量
11　黒　褐　色　ロームブロック少量・炭化粒子微量
12　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片147点（坏40，高台付坏2，甕104，甑1），須恵器片24点（坏19，高台付坏1，甕4），土製品3点（羽口），鉄滓2点，礫4点が中央部の覆土中と竈内から出土している。これらの遺物は，住居廃絶時に遺棄されたものと投棄されたものとに二分でき，前者は竈周辺から出土した3838と3840，竈煙道部から出土した3839が相当する。後者は中央部の覆土中から検出された遺物が相当する。

所見　本跡は当初から横長を想定した住居形態と考えられ，羽口の出土などと併せて，一般的な住居ではないとも推測できるが，それらを証明するような施設や遺物などは検出されていない。時期は，坏の形状から８世紀中葉と考えられる。



第681図　第460号住居跡・出土遺物実測図

第460号住居跡出土遺物観察表（第681図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3838	須恵器	坏	14.5	5.0	9.2	石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り	竈石袖部構	95% 内面2次
3839	須恵器	坏	[11.3]	3.7	7.2	長石	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り	竈煙道部	70% 底部外面ヘラ書き

番号	器種	長さ	外径	内径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
3840	羽口	(9.2)	9.1	2.4	(281)	長石・石英・砂粒	指ナデ指紋付者，外面ナデ，内面ヘラナデ，吸気部はラッパ状に外反	北壁際下層	

第464号住居跡（第682図）

位置　調査区南部のＬ12ｃ1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第433号住居跡の南東部を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約3.2m，短軸約2.8mの長方形で，主軸方向はＮ－０°である。壁高は約16cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈の前面から出入り口部にかけてよく踏み固められており，壁溝が周回している。

竈　北壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約102cm，袖部幅約100cm，壁外への掘り込みは約57cmである。遺存状態は悪く，土層断面図中の第３～５層が天井部崩落土に相当する。火床部は皿状に浅く掘りくぼめられているが，焼き締まった感じはなかった。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子，焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量
3　暗　褐　色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
4　にぶい褐色　焼土粒子中量，ローム粒子・砂質粘土粒子少量，炭化粒子微量
5　にぶい赤褐色　砂質粘土粒子中量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
6　極暗褐色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量

ピット　５か所。主柱穴はＰ１～Ｐ４が相当し，深さ17～23cmである。Ｐ５は深さ約14cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

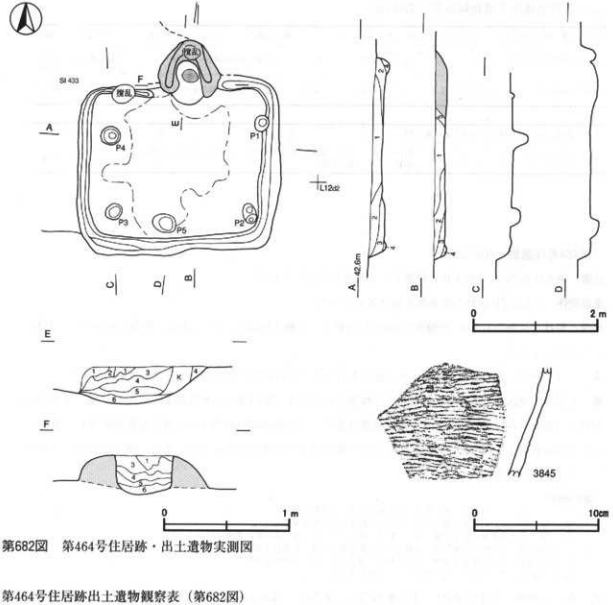
覆土　５層からなり，ロームブロックや粘土を含んだ人為堆積で，第４層は壁溝の土層である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック中量，砂質粘土ブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
2　暗　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック中量，炭化粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子中量，砂質粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量
5　灰　褐　色　砂質粘土ブロック中量，ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片137点（坏31，高台付坏３，甕102，鉢１），須恵器片47点（坏28，蓋３，甕16），土製品３点（支脚），礫２点が覆土中から出土している。大半が細片で，投棄されたり住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものである。

所見　坏の形状から，時期は８世紀後葉と考えられる。



第682図　第464号住居跡・出土遺物実測図

第464号住居跡出土遺物観察表（第682図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3845	須恵器	甕	－	(8.7)	－	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部外面横方向の叩き目	覆土中	5％

第465号住居跡（第683図）

位置　調査区南部のK12i3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第453号住居に掘り込まれている。

規模と形状　東側部分が第453号住居に掘り込まれているため，南北軸3.0m，東西軸は1.8mだけが確認され，平面形状は方形または長方形と推定される。主軸方向は，西壁の方向から判断してN－8°－E，あるいはN－100°－Eと推定される。壁高は最も残りの良い北壁で9cmほどであり，外方向に開き気味に立ち上がる。

床　ほぼ平坦で，硬化面は確認されなかった。壁溝も確認されていない。

竈　北壁，または東壁に付設されていたと想定できる竈は，第453号住居跡に掘り込まれたために遺存していない。

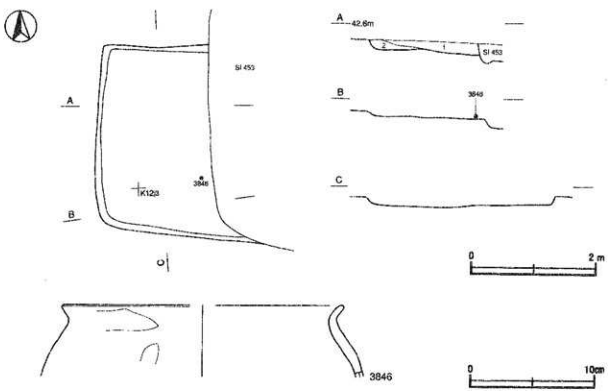
ピット　検出されていない。

覆土　2層からなり，ロームブロックを含む堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量
2　褐　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片58点（坏32，高台付椀5，甕21），須恵器片5点（坏4，蓋1）が，ほぼ全域から散在した状態で出土している。3846はほぼ中央部の下層から出土しており，本跡廃絶後に埋土と共に投棄されたものである。須恵器片はいずれも細片であり，混入したものと考えられる。

所見　本跡は硬化面が認められず，主柱穴を持たない住居形態である。出土土器の形状から，時期は10世紀中葉と考えられる。



第683図　第465号住居跡・出土遺物実測図

第465号住居跡出土遺物観察表（第683図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3846	土師器	甕	[22.4]	(5.7)	—	石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	中央部下層	5%

第466号住居跡（第684図）

位置　調査区南部のK12f4区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第470号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　東西軸は約3.0mで，北側部分が調査区域外に延びているため，南北軸は約1.5mだけが確認できた。壁高は約57cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

竈　検出されていない。

ピット　3か所。主柱穴はP1・P2が相当し，深さ38cm・57cmである。P3・P4は本跡を建てた当初の主柱穴と考えられる。P5は深さ約67cmで，位置が不規則であり，詳細は不明である。

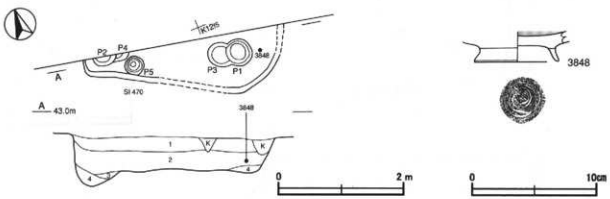
覆土　4層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・鹿沼パミス微量
3　褐　　色　ロームブロック少量・炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック少量，鹿沼パミス微量

遺物出土状況　土師器片13点（坏1，高台付椀1，甕11），須恵器片5点（高台付坏4，蓋1），礫6点が，覆土上層を中心に出土しており，床面から確認された遺物は少ない。これらの遺物はいずれも細片で，大半は住居廃絶後に投棄あるいは混入したものと考えられる。

所見　伴う遺物が検出されず，明確ではないが，遺構の重複関係などから，時期は10世紀中葉と推測される。



第684図　第466号住居跡・出土遺物実測図

第466号住居跡出土遺物観察表（第684図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3848	土師器	高台付椀	－	(2.3)	6.6	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，ナデ	南東コーナー下層	10%

第470号住居跡（第685図）

位置　調査区南部のK12f4区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第466号住居に掘り込まれている。

規模と形状　東西軸は約4.6mで，北側部分が調査区域外に延びているため，南北軸は約1.7mだけが確認できた。壁高は57cmで，ほぼ直立して立ち上がっている。

床　遺存している部分はほぼ平坦であるが，それほど硬化した部分は認められず，壁溝も確認されていない。

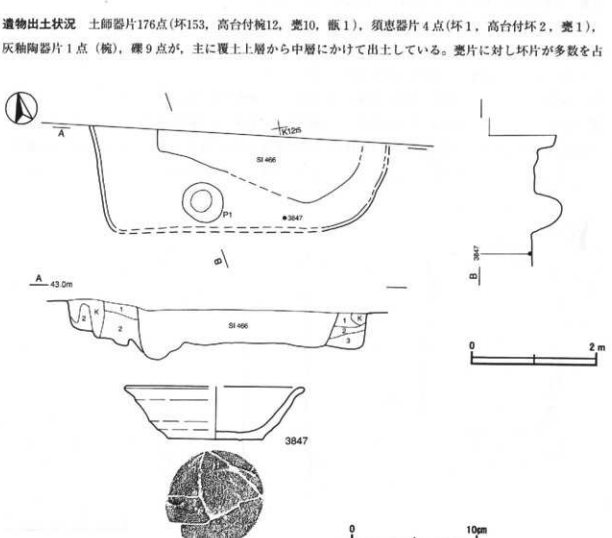
竈　検出されていない。

ピット　1か所。深さ52cmで，柱穴にしては，位置が不規則であり，詳細は不明である。

覆土　3層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
3　褐　　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片176点(坏153，高台付椀12，甕10，甑1)，須恵器片4点(坏1，高台付坏2，甕1)，灰釉陶器片1点（椀），礫9点が，主に覆土上層から中層にかけて出土している。甕片に対し坏片が多数を占



第685図　第470号住居跡・出土遺物実測図

め，比率的に不自然であることや細片が多く，破断面が摩滅していることから見て，本跡に伴う遺物は少ないと考えられ，ほとんどが投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻す段階で混入したものである。

所見　坏や高台付椀の形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。

第470号住居跡出土遺物観察表（第685図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3847	土師器	坏	[14.0]	4.1	7.4	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	南壁際床面	60%

第471号住居跡（第686図）

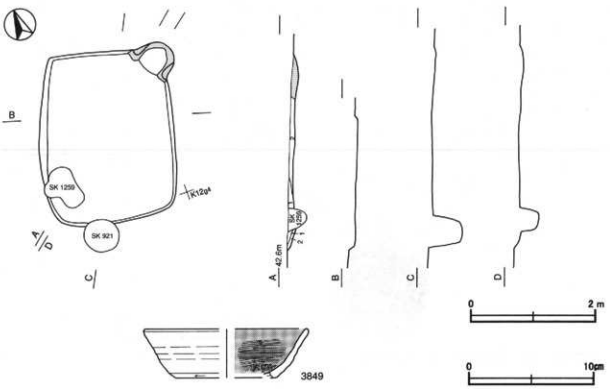
位置　調査区南部のK12f3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第921・1259号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸2.8m，短軸2.2mの長方形で，主軸方向はN－17°－Eである。壁高は最も残りの良い部分で8cmほどであり，各壁とも外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，それほど硬化した部分は確認されなかった。壁溝も確認されていない。

竈　北東コーナー部に付設されており，焚口部から煙道部まで48cm，袖部幅76cmである。袖部は，コーナー部の壁面に床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し，砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状を呈して赤変しているが，焼け締まった感じはない。また，煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がる。



第686図　第471号住居跡・出土遺物実測図

ピット　検出されていない。

覆土　2層からなり，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片66点（坏34，高台付椀3，甕29），須恵器片3点（坏）が全域から散在した状態で出土している。3849は覆土中から出土しており，本跡廃絶時の埋め戻しの段階で埋土と共に投棄されたものである。なお，須恵器坏の細片は破断面が摩滅しており，混入したものである。

所見　本跡はコーナー部に竈が構築された小形の住居跡であり，当遺跡における類例としては少ない。時期は，出土土器の形状から10世紀前葉と考えられる。

第471号住居跡出土遺物観察表（第686図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3849	土師器	坏	(12.8)	3.9	(8.6)	雲母・長石・石英	に赤い黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り，体部ロクロナデ	覆土中	5%

第472号住居跡（第687・688図）

位置　調査区南部のL12e3区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　南壁際を第1136号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　N－90°－Eを主軸とする長軸3.0m，短軸2.5mの南北に長い長方形である。壁高は最も残りの良い北壁で24cmを測り，外方向に開き気味に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈前から中央部にかけてよく踏み固められており，北部には硬化面が認められない。また，壁溝は南東部壁際を除いて巡っている。

竈　東壁の南寄りに付設されており，焚口部から煙道部まで80cm，壁外への掘り込みは44cmほどである。左袖部は基部だけが遺存していることから袖部幅は70cm前後と推定され，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂岩を芯材とし砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ，火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道の立ち上がり部には高台付椀が支脚として据えられており，火熱を受けている。煙道は，火床部から外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子・砂粒少量
2　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
3　黒　　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4　極暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・砂粒少量

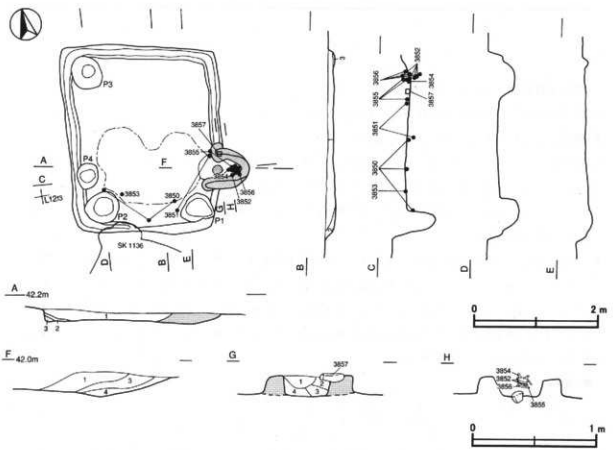
ピット　4か所。P1～P3の深さは8～30cmであるが，主柱穴とは考えられず，また北東コーナー部に対応するピットは検出されていない。P4は深さが46cmで，竈に対峙する西壁際に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　3層からなり，各層ともロームブロックを多く含む堆積状況を示した人為堆積である。

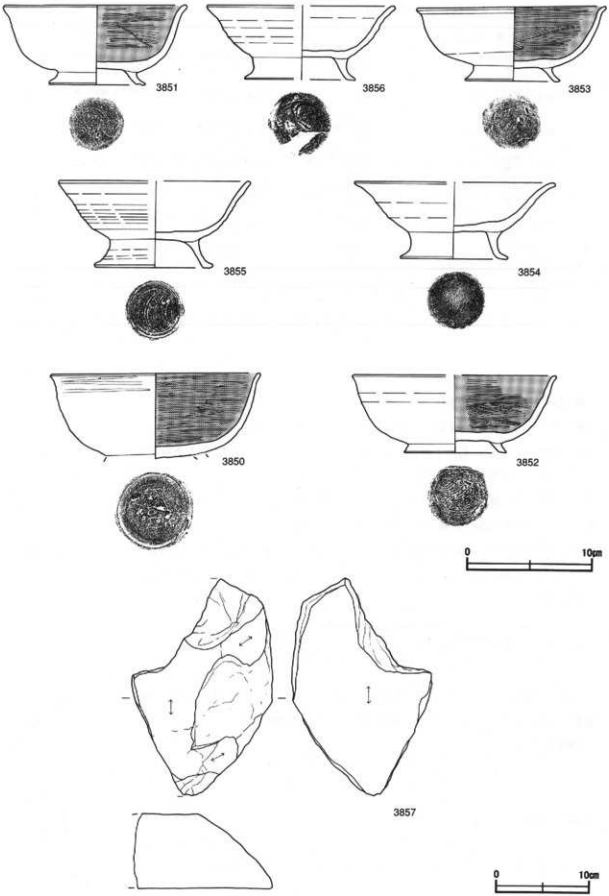
土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片219点（坏170，高台付椀18，甕31），須恵器片８点（坏３，高台付坏１，甕４），礫５点（被熱痕あり）が主に竈内やその周辺，および南壁寄りの床面から出土している。3850は南壁寄り，3851は南東部と竈前，3853は南西部のそれぞれ床面から出土している。煙道部の立ち上がり部には，3854・3852・3855・3856が上から順に逆位で重ねられた状態で出土している。これらの土器は隙間を焼土化した粘土で埋められて固定され，体部外面には被熱痕が認められることから，支脚として使用されていたものと考えられる。さらに下位には，砂岩が据えられて支脚として使用されている。前述したとおり，両袖部には砂岩が補強材として使用されており，被熱痕の認められる3857が砥石から転用されて左袖部に据えられている。遺物の多くは，本跡が埋め戻される段階で投棄あるいは遺棄されたものと考えられる。なお，須恵器の坏類ははいずれも細片で混入したものである。

所見　本跡から出土した土師器の高台付椀は高台が底部の内寄りに付く形態で，体部のふくらみが強調されるようになっており，時期は10世紀後葉と考えられる。また，硬化面の広がりが南部に片寄っており，北部は床を設置して使い分けがなされていたことが想定される。



第687図　第472号住居跡実測図



第688図　第472号住居跡出土遺物実測図

第472号住居跡出土遺物観察表（第688図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3850	土師器	高台付椀	16.5	(6.7)	-	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り，高台貼り付け後，ナデ	南壁寄り床面	70%
3851	土師器	高台付椀	14.4	6.4	7.5	砂粒	橙	普通	底部回転ヘラ切り，高台貼り付け後，ナデ	竈前・南東部床面	60% PL238
3852	土師器	高台付椀	[16.1]	6.2	8.1	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，高台貼り付け後，ナデ	竈燃焼部	50%
3853	土師器	高台付椀	14.9	6.1	7.5	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り，高台貼り付け後，ナデ	南西部床面	50%
3854	土師器	高台付椀	[15.7]	6.1	8.4	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け	竈燃焼部	40%
3855	土師器	高台付椀	[15.0]	6.9	9.5	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け	竈燃焼部	40%
3856	土師器	高台付椀	[14.8]	5.9	[8.3]	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け	竈袖部	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3857	砥石	(22.7)	(14.8)	(7.8)	(2,720)	砂岩	砥面3面，被熱痕あり	竈左袖部	

第473号住居跡（第689図）

位置　調査区南部のＬ12e1区に位置し，平坦部に立地している。

規模と形状　Ｎ－6°－Ｅを主軸とする長軸2.9m，短軸2.8mのほぼ方形である。壁高は最も残りの良い西壁で7cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈手前から中央部にかけてよく踏み固められている。また，壁溝が周回している。

竈　北壁のほぼ中央部に付設されており，焚口部から煙道部まで68cm，壁外への掘り込みは40cmほどである。袖部幅は108cmほどで，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し，火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道は火床部から外傾しながら立ち上がる。

竈土層解説

1　褐暗褐色　ローム粒子・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒褐色　ロームブロック中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量
3　黒褐色　粘土粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック中量，ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子少量
5　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量

ピット　5か所。Ｐ1・Ｐ2は深さが13cm・32cmで，主柱穴の可能性があるが，詳細は不明である。

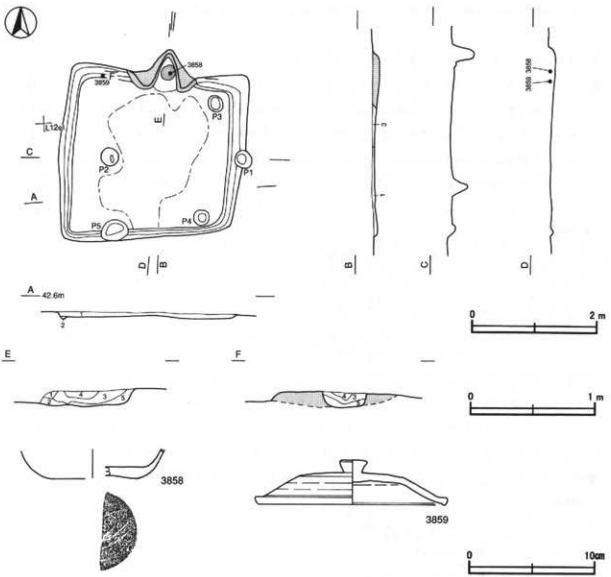
覆土　3層からなり，レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック少量
3　暗褐色　ロームブロック少量，粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片71点（坏28，甕43），須恵器片21点（坏6，高台付坏2，蓋8，甕5），鞴19点，鉄滓5点（着磁性あり）が全域から散在した状態で出土している。3858は竈火床部，3859は竈西側の北壁際下層からそれぞれ出土している。これらは，本跡が埋め戻される段階で遺棄あるいは投棄されたものと考えられる。

所見　出土土器の形状から，時期は8世紀後葉と考えられる。本跡から西へ15mほどの距離には，第481・483号住居跡が位置しており，主軸方向や出土土器から見て，本跡と同一の集落を構成していたことが想定される。また，前述したように2本柱で上屋を支える構造とすれば，当遺跡では特異な事例と言える。



第689図　第473号住居跡・出土遺物実測図

第473号住居跡出土遺物観察表（第689図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3858	須恵器	坏	－	(2.3)	[6.9]	長石・雲母・砂粒	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り，体部ロクロナデ	竈火床部	20% 底部外面ヘラ記号ヵ
3859	須恵器	蓋	15.0	3.4	－	長石	灰	普通	天井部外面の回転ヘラ削り	北壁際下層	70% PL236

第477号住居跡（第690・691図）

位置　調査区南部のL11f9区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第888・889号土坑，第3号欄跡のP3にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　床面まで削平された状態で検出されたため，竈とピットの位置から判断して，N－10°－Eを主軸とする長軸6.3m，短軸3.0mの東西に長い長方形と推定される。壁高は最も残りの良い西壁で7cmを測り，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈手前から中央部にかけてよく踏み固められている。

竈　北壁のやや西寄りに付設されており，焚口部から煙道部まで128cm，壁外への掘り込みは92cmを測る。袖部の遺存状態は悪く，その痕跡から袖部幅は90cmほどで，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築され，右袖部には土師器甕を芯材として使っている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱を受けて赤変硬化している。また，火床部には鵜羽口が直立した状態で先端部を埋め込まれて出土し，被熱痕が認められることから支脚として据えられていたものである。煙道は，火床部から外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　　色　炭化物少量，ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
5　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
6　褐　黒　色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　赤褐褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，粘土粒子・砂粒微量
8　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量
9　褐　　色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　7か所。P1～P3は柱穴の可能性があり，深さは10～22cmであるが，北西コーナー部に対応するピットは第888号土坑に掘り込まれており，確認されていない。P4は深さが11cmで，竈に対峙する南壁際に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P5～P7は深さが15～23cmで，性格は不明である。なお，P2・P3には砂質粘土が充填されており，ほぼ同時に埋め戻されたことが想定される。

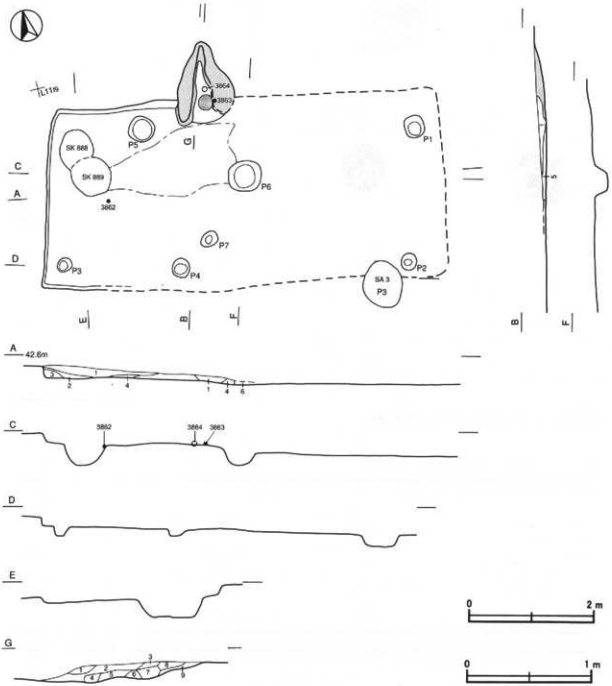
覆土　6層からなり，ロームや焼土を含んだ不規則な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

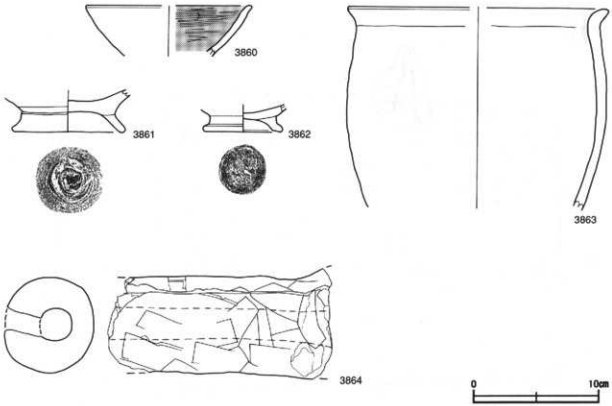
1　黒　　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　褐　　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
5　灰　褐　色　焼土粒子微量
6　黒　　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片83点（坏42，高台付坏6，甕35），須恵器片8点（坏1，甕7），鞴3点（被熱痕あり），土製品2点（鵜羽口），鉄滓7点（着磁性あり）が全域から散在した状態で出土している。3861はP1覆土下層，3862は中央部西壁寄りの床面，3863は右袖部，3864は竈火床面からそれぞれ出土している。3864の鵜羽口は吸気部がラッパ状に外反しており，その部分を使用することで支脚として十分に役目を果たしていたものと考えられる。これらの遺物は，本跡が埋め戻される段階で遺棄あるいは投棄されたものと考えられる。

所見　本跡は長軸が短軸の2倍の長方形を呈しており，他の住居跡とは様相を異にしているが，当遺跡内から検出された鉄生産遺構との関係から見て本跡は鉄生産に関連する工房的な施設の一部として機能していたか，あるいは工房的な施設を廃棄した後に，住居として再利用した可能性がある。土師器甕の口縁端部を丸く整えているなどの出土土器の形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。



第690図　第477号住居跡実測図



第691図　第477号住居跡出土遺物実測図

第477号住居跡出土遺物観察表（第691図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3860	土師器	坏	[13.0]	(4.0)	－	雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	体部内面ヘラ磨き	竈覆土中	5%内面に鉄付着
3861	土師器	高台付椀	－	(3.4)	9.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	P１覆土下層	10%
3862	土師器	高台付椀	－	(2.2)	6.3	長石・石英・雲母	暗灰黄	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け	中央部床面	10%
3863	土師器	甕	[20.6]	(16.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	二次焼成	口縁部内・外面横ナデ	竈右袖部	10%

番号	器種	長さ	外径	内径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
3864	鞴羽口	(17.9)	7.7	2.8	(694.0)	雲母・長石・石英	外面ナデ，胎土にスサを含む。吸気部はラッパ状に外反し，端部の厚みは薄い	竈火床面	二次焼成

第478号住居跡（第692図）

位置　調査区南部のＬ11ｅ8 区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第479号住居跡を掘り込み，第973～975・978号土坑，第２号道路にそれぞれ掘り込まれている。

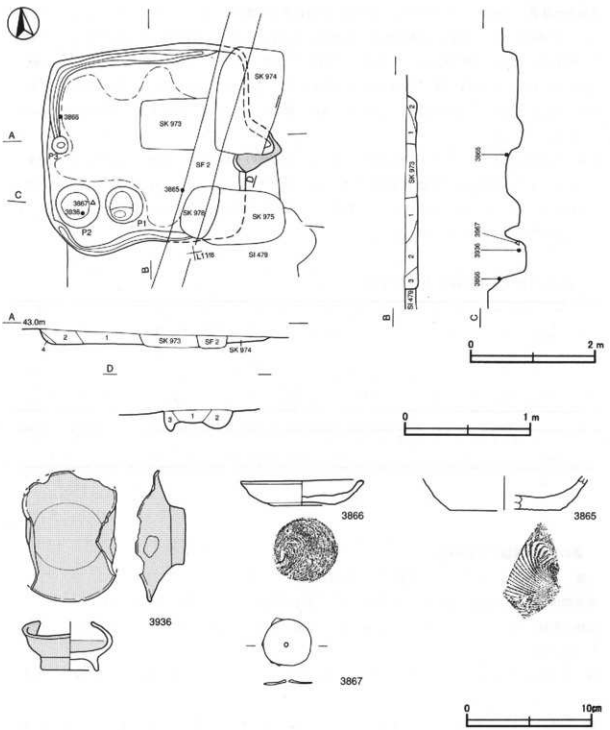
規模と形状　Ｎ－108°－Ｅを主軸とする長軸3.8m，短軸3.3mの長方形である。壁高は16～24cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈手前から中央部にかけてよく踏み固められている。また，壁溝が確認された壁際を巡っている。

竈　東壁のほぼ中央部に付設され，第974号土坑に掘り込まれているため右袖部と煙道部だけが確認された。壁外への掘り込みは50cmほどで，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。また，煙道は床面から外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1　暗赤褐色　ローム粒子中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量
2　極暗褐色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量



第692図　第478号住居跡・出土遺物実測図

ピット　3か所。P1・P2は深さが22cm・34cmであるが，対応するピットは検出されていないため性格は不明である。P3は深さが25cmで，竈と対峙する西壁際に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　4層からなり，ロームブロックを多く含んだブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　褐　褐　色　ロームブロック中量，炭化物・焼土粒子微量
3　黒　　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック中量

遺物出土状況　土師器片222点（坏122，小皿10，高台付椀12，甕78），須恵器片22点（坏10，高台付坏2，甕10），灰釉陶器片1点（耳皿），鉄製品1点（紡錘車），鉄滓18点（13点に着磁性あり），炉壁片1点，土製品1点（羽口），礫6点（被熱痕あり）が全域から散在した状態で出土している。3865は中央部床面，3866は西壁際床面，3867・3936はP2覆土下層からそれぞれ出土している。なお，3936は逆位の状態で出土しており，東濃産光が丘1号窯式と考えられる。これらは，本跡が埋め戻される段階で遺棄あるいは投棄されたものと考えられる。

所見　本跡から出土した小皿はまだ小形化しておらず，その他の土器の形状と併せて，時期は10世紀中葉と考えられる。また，灰釉陶器の耳皿は当遺跡において唯一検出されたものであり，確認された灰釉陶器の大部分が猿投産である中で数少ない東濃産の一つである。このことは，東海道ばかりではなく東山道を経由して搬入された可能性を示唆していると考える。

第478号住居跡出土遺物観察表（第692図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3865	土師器	坏	－	(2.7)	[8.8]	石英・雲母	橙	二次焼成	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	中央部床面	10%
3866	土師器	小皿	9.6	1.9	4.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	西壁際床面	80% PL236
3936	灰釉陶器	耳皿	10.5	3.9	4.4	緻密	灰白，乳白色釉	良好	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，釉は刷毛塗り	中央部下層	80% PL236

番号	器種	最大径	厚さ	長さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3867	紡錘車	3.7	0.2	－	4.2	鉄	円盤状の紡軸部，軸部の孔径は約3mm	P1覆土下層	

第479号住居跡（第693図）

位置　調査区南部のL11c8区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第478号住居，第973～978・993号土坑，第2号道路にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　N－96°－Eを主軸とする長軸5.4m，短軸3.6mの南北に長い長方形である。壁高は16～22cmで，壁はほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，竈手前から中央部にかけてよく踏み固められている。また，壁溝が南壁と西壁際の一部を巡っている。

竈　東壁のほぼ中央部に付設され，第975号土坑に掘り込まれているため，右袖部と火床面の一部から煙道部にかけてが確認された。壁外への掘り込みは30cmほどで，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用い

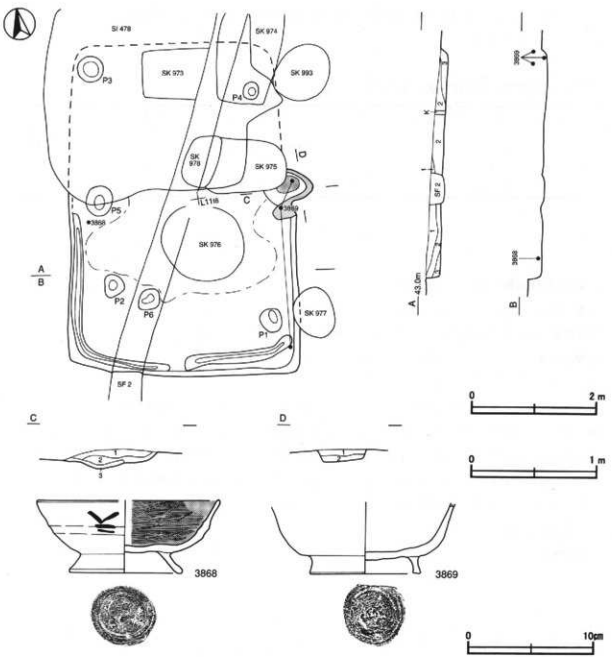
て構築されている。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており，火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道は火床部から外傾しながら緩やかに立ち上がる。

覆土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量，ローム粒子・炭化粒子微量
2　極 暗 褐 色　焼土ブロック・ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量，炭化粒子微量
3　暗 赤 褐 色　焼土ブロック中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量

ピット　6か所。P1～P4が配置と形状から柱穴に相当するものと思われ，深さは14～53cmである。P5は深さが19cmで，竈に対峙する西壁際に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さが38cmだが，性格は不明である。

覆土　3層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ堆積状況を示す人為堆積である。



第693図　第479号住居跡・出土遺物実測図

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片190点(坏84，高台付椀8，甕98)，須恵器片17点(坏14，甕3)，灰釉陶器片1点(椀)，礫3点(被熱痕あり)，鉄滓10点(着磁性あり)が全域から散在した状態で出土している。3868は西壁際下層から出土し，3869は竈火床部および南東コーナー部床面から出土した破片が接合したものである。これらは，本跡廃絶時に埋め戻される段階で投棄されたものと考えられる。なお，覆土中より出土している灰釉陶器の椀片は，猿投窯と考えられる。

所見　出土土器の形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。本跡は長軸が短軸の1.5倍もある特異な形状を呈していることや，覆土中より多くの鉄滓が検出されたことなどから，鉄生産に関連する工房跡が想定される。また，重複している第478号住居跡・第978号土坑の覆土中からも，鉄滓をはじめ鉄製品が出土しており，本跡に伴うものと考えられる。

第479号住居跡出土遺物観察表（第693図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3868	土師器	高台付椀	[14.4]	5.8	8.9	雲母	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	西壁際下層	60% PL236 外面墨書「二八」
3869	土師器	高台付椀	－	5.6	8.8	雲母	明赤褐	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	竈火床部・南東部床面	60%

第481号住居跡（第694・695図）

位置　調査区南部のL11f6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第480号住居跡を掘り込み，第872・998・999号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　N－7°－Eを主軸とする長軸3.6m，短軸3.2mのほぼ方形である。壁高は28～40cmで，各壁ともほぼ直立して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈手前から中央部にかけてよく踏み固められている。また，壁溝が周回している。

竈　北壁のやや東寄りに付設されており，焚口部から煙道部まで108cm，壁外への掘り込みは64cmほどである。袖部幅は110cmほどを測り，袖部は床面と同じ高さの地山面にローム土を主体とする黒褐色土を基部にして，その上に砂質粘土を貼り付けて構築されている。火床部は浅い皿状を呈し，火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道の立ち上がり部には砂岩が支脚として据えられ，火熱を受けて脆くなっている。煙道は，火床部から急な傾斜で立ち上る。

竈土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック微量
2　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
3　暗　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量
4　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
5　暗赤褐色　焼土粒子多量，粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
6　褐　色　被熱パミス多量，ローム粒子微量
7　にぶい赤褐色　被熱パミス中量，焼土粒子少量，ローム粒子微量
8　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　5か所。P1～P4は配置と形状から主柱穴に相当し，深さは16～20cmである。P5は深さが24cmで，

竈に対峙する南壁際に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

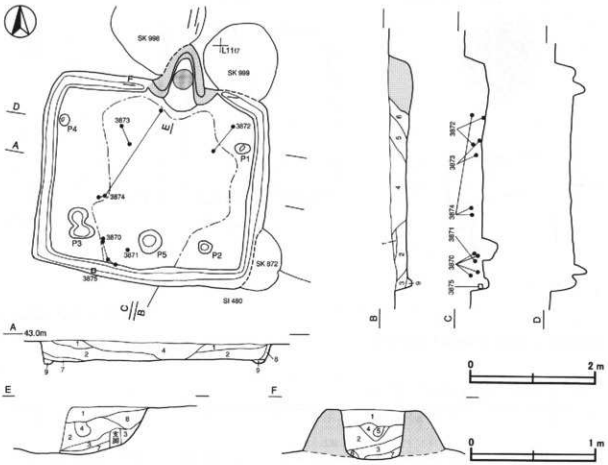
覆土　9層からなり，ロームブロックや焼土を含んだブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

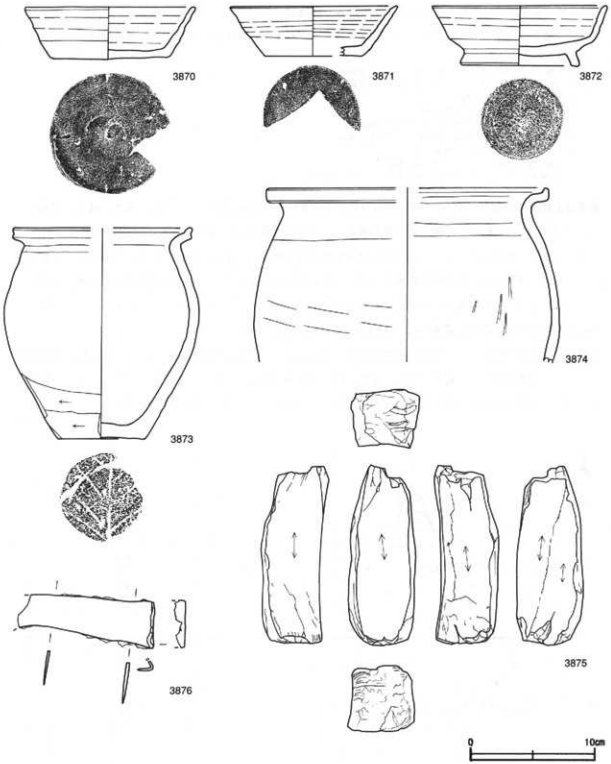
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子微量
4　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック微量
8　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
9　極 暗 褐 色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片212点（坏51，高台付坏2，甕159），須恵器片67点（坏57，蓋2，盤1，横瓶1，甕6），鉄製品2点（鎌，釘），礫3点（被熱痕あり，1点は支脚転用），鉄滓30点（14点に着磁性あり）がほぼ全域に散在した状態で出土している。3870は南壁際の覆土中層から下層にかけて出土した破片4点が接合したものであり，3871・3875も南壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。3872は北東部床面と覆土下層から出土した破片2点，3874は竈前や中央部から出土した破片3点がそれぞれ接合したものである。これらは，本跡廃絶時の埋め戻しの段階で遺棄あるいは投棄されたものと考えられる。

所見　出土土器の形状から，時期は8世紀後葉と考えられる。本跡の北東方向には，第473号住居跡が近接しており，主軸方向や出土土器から見て，本跡と同一の集落を構成していたことが想定される。また，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる砥石と鉄鎌がそろって出土しており，興味深い資料である。



第694図　第481号住居跡実測図



第695図　第481号住居跡出土遺物実測図

第481号住居跡出土遺物観察表（第695図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3870	須恵器	坏	13.4	4.3	9.4	雲母・長石	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	南壁際中～下層	60%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3871	須恵器	坏	13.5	4.0	7.6	雲母・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り	南壁際下層	30%
3872	須恵器	高台付坏	13.8	4.8	9.3	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ切り，高台貼り付け後，ナデ	北東部下層	60% PL236
3873	土師器	小形甕	[14.0]	16.7	7.0	雲母・長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部下半ヘラ削り	中央部北寄り下層	50%
3874	土師器	甕	[22.1]	(13.9)	－	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部内・外面ヘラナデ	竈手前～中央部中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3875	砥石	14.3	5.3	5.2	630	凝灰岩	砥面5面，両端部に研ぎ痕あり。	南壁際下層	
3876	鎌	(10.9)	(3.9)	0.3	(35.6)	鉄	刃部先端欠損，曲鎌(刈鎌)，基部は全体を折り返す。	覆土中	

第482号住居跡（第696図）

位置　調査区南部のＬ11ｅ6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第998・1103・1126・1201～1203号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　西側の大半が調査区域外に延びており，さらに土坑に掘り込まれている部分も多く，全容は不明である。南北軸3.6m，東西軸は1.2mだけが確認され，Ｎ－100°－Ｅを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は26～38cmであり，ほぼ直立している。

床　ほぼ平坦で，竈手前に硬化面の一部が確認されている。また，壁溝は認められない。

竈　東壁のほぼ中央部に付設されており，焚口部から煙道部まで76cm，壁外への掘り込みは40cmほどである。左袖部は第1126号土坑に掘り込まれているため遺存しておらず，その痕跡から袖部幅は84cmほどと推定される。袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ，火熱を受けて若干赤変硬化している。また，煙道は火床部から外傾しながら緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1　極暗褐色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
2　極暗褐色　焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
3　赤褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子小量
4　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量

ピット　検出されていない。

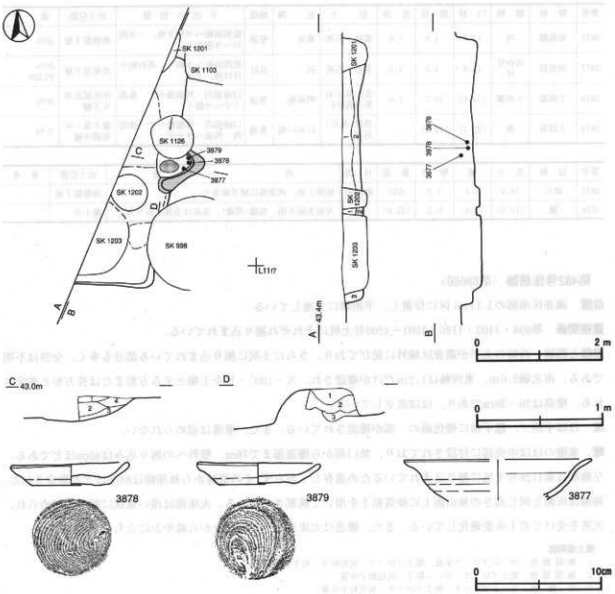
覆土　３層からなり，各層にロームブロックや焼土を含む層が見られる人為堆積である。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗褐色　ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量，粘土粒子・砂粒微量
3　褐色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片73点（坏32，高台付椀１，小皿４，鉢１，甕35），須恵器片４点（坏３，甕１），鉄滓２点が主に竈内から出土している。3877～3879はいずれも竈煙道部より出土しており，被熱痕が認められる。これらは，本跡廃絶時の埋め戻しの段階で投棄されたものと考えられる。

所見　本跡から出土した小皿はまだ小形化していないことなどから，時期は10世紀中葉と考えられる。本跡の東側３ｍほどに位置する第478号住居跡と主軸方向や出土土器が近似することから，同時期に集落を構成していたと推定される。



第696図　第482号住居跡・出土遺物実測図

第482号住居跡出土遺物観察表（第696図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3877	土師器	高台付椀	[14.8]	(3.1)	—	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ	竈煙道部	5%
3878	土師器	小皿	9.3	1.8	6.2	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	竈煙道部	100% PL236
3879	土師器	小皿	9.5	1.8	6.3	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	竈煙道部	70%

第483号住居跡（第697図）

位置　調査区南部のL11d7区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第865・890・1103～1105号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　西側部分が調査区域外に延びているため，長軸3.2m，短軸は3.0mだけが確認され，N－4°－

Eを主軸とする方形または長方形と推定される。壁高は最も残りの良い東壁際で24cmであり，ほぼ直立して立ち上がっている。

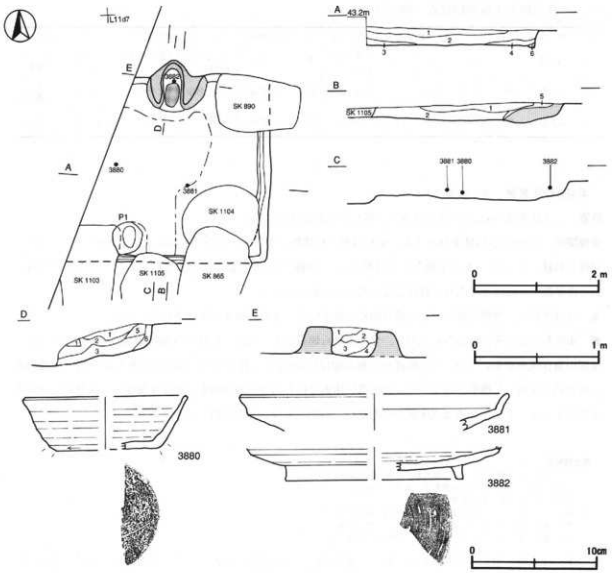
床　ほぼ平坦で，竈手前から南壁際にかけてよく踏み固められている。また，壁溝が東壁際と南壁際の一部で確認されており，本来は周回していたものと推定される。

竈　北壁のやや東寄りに付設されており，焚口部から煙道部まで81cm，壁外への掘り込みは25cmほどである。袖部幅は96cmほどを測り，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し，火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道は火床部から緩やかに外傾した後，急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量，焼土ブロック・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　粘土粒子・砂粒中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子小量
3　暗　褐　色　粘土粒子・砂粒・ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
5　極暗褐色　ローム粒子・焼土粒子少量，粘土粒子・砂粒・炭化粒子微量
6　暗　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子・砂粒少量，焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　1か所。P1の深さは25cmであり，竈に対峙する南壁際に位置していることから出入り口施設に伴う



第697図　第483号住居跡・出土遺物実測図

ピットと考えられる。

覆土　6層からなり，各層にロームブロックや焼土を含む層が見られる人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗赤褐色　ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　褐　　色　ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化粒子微量
5　黒褐褐色　焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子・粘土粒子微量
6　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片251点(坏70，高台付坏5，甕176)，須恵器片21点(坏19，盤2)，灰釉陶器片2点(椀)，小礫20点がほぼ全域に散在した状態で出土している。3880と3881はいずれも中央部下層から出土し，3882は竈火床部から出土しているが，被熱痕は認められない。これらは，本跡廃絶時の踏め戻しの段階で投棄されたものと考えられる。3881と3882の体部外面には自然釉が認められ，胎土の様子などからも，同一個体の可能性が考えられる。

所見　本跡から出土した口径20cm前後の盤の形状などから，時期は8世紀中葉と考えられる。本跡以外の他の住居跡も西側部分が調査区域外に延びており，当遺跡の集落が西側のなだらかな傾斜地に広がる可能性がある。

第483号住居跡出土遺物観察表（第697図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3880	須恵器	坏	[12.8]	4.1	[7.9]	雲母・長石・石英	黄灰	普通	底部一方向のヘラ削り，体部下端回転ヘラ割り	中央部下層	30% 火襷あり
3881	須恵器	盤	[21.2]	(2.8)	－	雲母・長石	褐灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	中央部下層	5% 外面自然釉
3882	須恵器	盤		(2.7)	[14.2]	白色粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，高台部貼り付け	竈火床部	5% 外面自然釉

第485号住居跡（第698図）

位置　調査区西部のE9c1区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第489号住居跡を掘り込み，第12号掘立柱建物，第1096・1329号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　N－93°－Eを主軸とする長軸3.0m，短軸2.3mの南北に長い長方形である。壁高は最も残りの良い南壁際で5cmほどであり，外傾しながら立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，壁際を除いてよく踏み固められている。また，壁溝は確認されていない。

竈　東壁のほぼ中央に付設されており，焚口部から煙道部まで64cm，壁外への掘り込みは50cmほどである。左袖部の遺存状態が悪いため，その痕跡から袖部幅は100cmほどと推定され，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し，火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道は火床部から緩やかに外傾した後，急な傾斜で立ち上る。

竈土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3　暗赤褐色　焼土粒子微量
4　褐　　色　ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子微量
5　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化物・ローム粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

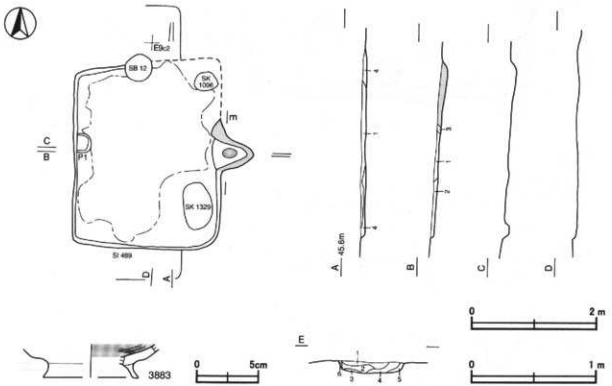
ピット　1か所。P1の深さは6cmであり，竈に対峙する西壁際に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　4層からなり，各層にローム粒子や焼土を含む不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片56点（坏12，高台付椀2，甕42），須恵器片2点（坏），礫5点がほぼ全域に散在した状態で出土している。3883は覆土中から出土しており，出土遺物の多くは本跡廃絶時の埋め戻しの段階で投棄あるいは混入したものと考えられる。

所見　時期は，出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。本跡の南東部には，それほど床面が硬化していない部分が存在しており，甕などの貯蔵用の土器などが保管されていたとも想定できる。



第698図　第485号住居跡・出土遺物実測図

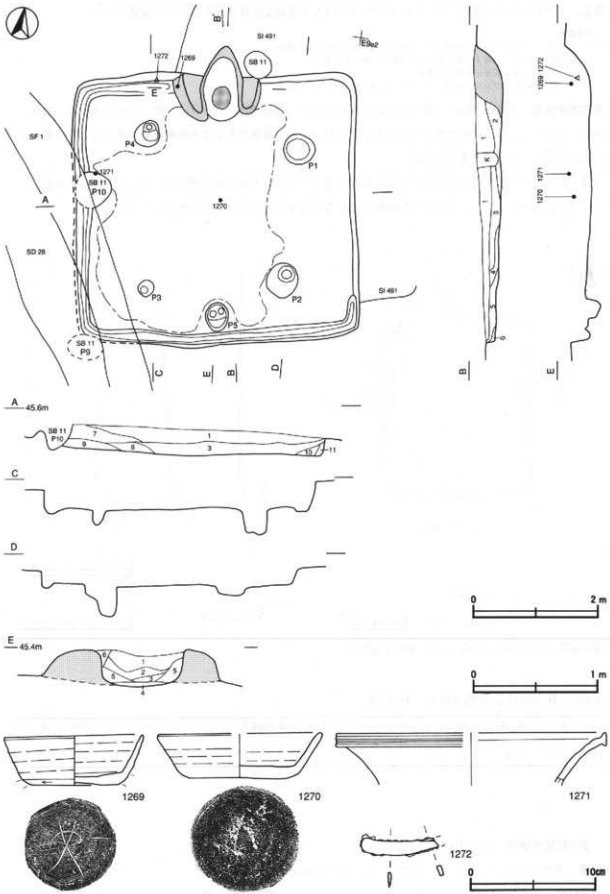
第485号住居跡出土遺物観察表（第698図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3883	土師器	高台付椀	－	(2.7)	[7.6]	雲母	明褐	普通	高台貼り付け後，ナデ	覆土中	5%

第492号住居跡（第699図）

位置　調査区西部のＥ９ｅ1区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第491号住居跡を掘り込み，第11号掘立柱建物，第28号溝，第1号道路にそれぞれ掘り込まれている。



第699図　第492号住居跡・出土遺物実測図

規模と形状　一辺が約4.4mの方形で，主軸方向はN－8°－Wである。壁高は17～48cmで，各壁ともやや外方向に開き気味に立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部から西壁際にかけてよく踏み固められている。壁溝は，北東コーナーから東壁際を除いて巡っている。

竈　北壁のほぼ中央部に付設され，焚口から煙道部まで118cm，袖部幅140cm，壁外への掘り込みは48cmである。袖部は，床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築され，内側が火熱を受けて赤変している。火床部は，浅い皿状に掘りくぼめられており，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。また，煙道は外傾しながら緩やかに立ち上がる。

竈土層解説
1　灰　褐　色　粘土粒子・砂粒少量，焼土ブロック・ローム粒子微量
2　にぶい赤褐色　焼土ブロック少量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子微量
4　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
5　灰　褐　色　粘土粒子・焼土ブロック・砂粒少量，炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット　5か所。P1～P4が主柱穴に相当し，深さはP1が15cmと浅いが，その他は25～45cmである。P5は深さ25cmで，竈と対峙する南壁際に位置することから，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　11層からなり，各層にロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
2　灰　褐　色　焼土ブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量
3　黒　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
8　黒　褐　色　炭化物・ローム粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
10　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
11　黒　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片526点（坏134，甕392），須恵器片52点（坏25，高台付坏2，蓋14，瓶2，甕9），鉄製品1点（刀子），鉄滓4点（着磁性あり），石器1点（砥石），礫12点（10点に被熱痕あり），軽石1点，が全域から散在した状態で出土している。1270は中央部上層，1271は西壁際の上層からそれぞれ出土している。1269・1272は竈西側の北壁際上層から出土している。これらは，住居廃絶後の埋め戻しの段階で投棄されたものや，埋土と共に混入したものと考えられる。

所見　本跡に伴う遺物は少ないが，出土土器の形状から，時期は8世紀初頭と考えられる。この時期の住居は，ピットが規則的に配されるものが多く，住居形態に規格性を窺うことができる。また，P5の底面から柱の圧痕が2か所確認されており，作り替えが行われたことが想定される。

第492号住居跡出土遺物観察表（第699図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1269	須恵器	坏	11.0	4.0	8.3	長石・針状鉱物	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ，体部下端回転ヘラ削り	竈西側の壁際上層	85% 底部外面ヘラ記号
1270	須恵器	坏	[13.0]	3.6	9.4	長石・針状鉱物	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	中央部上層	35%
1271	須恵器	甕	[21.4]	(4.0)	－	長石・針状鉱物・角礫	黄灰	普通	口縁部内・外面ナデ，頸部に3本の沈線	西壁際上層	5% 外面自然釉

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1272	刀子	(6.2)	1.5	0.3	(3.9)	鉄	刃先・茎尻欠損，両関か	竈西側の壁際上層	

第495号住居跡（第700図）

位置　調査区西部西寄りのＥ８ｉ９区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第1026・1027号土坑，第１号道路跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　西半分が調査区域外に延びているため，南北軸6.0m，東西軸は3.2mだけが確認された。遺存する煙や竈の位置から，Ｎ－５°－Ｅを主軸とする方形，または長方形と推測される。確認された壁高は12～44cmで，外傾しながら立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，北壁際から中央部にかけて第１号道路跡に掘り込まれているために，硬化面は確認されなかった。また，断面Ｕ字状の横溝が南壁際で検出されている。

竈　北壁の中央部に付設されていると推定され，焼き口から煙道部まで120cm，壁外への掘り込みは64cmである。天井部は崩落しており，上層断面図中の第５層が崩落土に相当し，粘土粒子や砂粒を含んでいる。左袖部の西側が調査区域外であるため，袖部幅は130cmほどが確認され，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。火床部は12cmほど皿状に掘りくぼめられ，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道部の立ち上がりには土師器甕が逆位の状態で据えられている。その甕は火熱を受けており，内部には焼土が詰まっていることから，支脚として使用されていたと想定できる。また，煙道は外傾して緩やかに立ち上がる。

竈土層解説

1　にぶい褐色　焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
2　褐　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量
3　にぶい橙色　粘土粒子少量，ロームブロック・焼土ブロック微量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子・粘土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子・砂粒微量
5　明 赤 褐 色　焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
6　赤　褐　色　焼土ブロック中量，粘土粒子・砂粒微量
7　にぶい橙色　焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量，ロームブロック微量
8　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，粘土粒子・砂粒微量

ピット　３か所。Ｐ１・Ｐ２の深さは52cm・60cmで，配置と形状からいずれも主柱穴と考えられる。Ｐ３の深さは35cmで，竈と対峙する南壁際に位置することから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴　北東コーナー部に付設され，長軸100cm，短軸68cmのほぼ長方形である。深さは24cmほどを測り，底面は平坦であるが，やや北壁側が高くなっている。また，壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ローム粒子微量

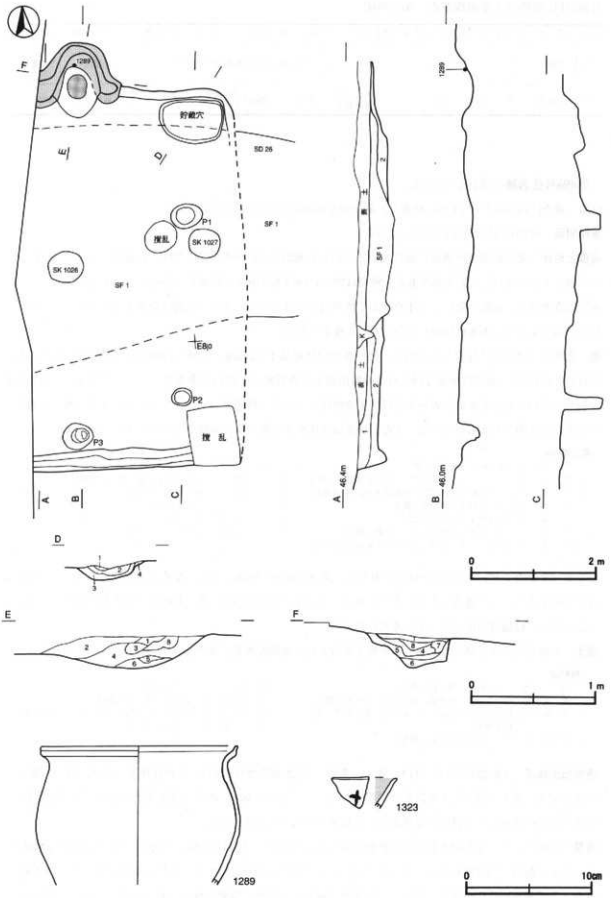
覆土　２層からなり，いずれの層にもロームブロックや焼土を含む人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片156点（坏７，甕149），須恵器片４点（坏１，甕３），礫４点（１点に被熱痕あり）のほとんどの遺物が竈内からの出土である。1289は前述したように，煙道部の立ち上がりに支脚として据えられていたものである。その他の土師器甕類も被熱痕が認められ，竈内での使用が想定される。墨書土器の1323は確認面から検出されており，混入したものである。

所見　時期は出土土器の形状から８世紀初頭と考えられ，調査区北部の第221号住居跡と主軸方向や住居形態が近似しており，両跡は同一集落を構成していたことが考えられる。当該期においては大形住居であり，古墳後期の影響をまだ残している。木跡の西側部分は調査区域外に延びており，当該期の集落が調査区域外に広がると考えられる。



第700図　第495号住居跡・出土遺物実測図

第495号住居跡出土遺物観察表（第700図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1323	土師器	坏	－	（2.4）	－	砂粒	にぶい褐	普通	体部ロクロナデ	確認面	5% 外面墨書「□」
1289	土師器	甕	15.6	(11.1)	－	雲母・石英・赤色粒子	赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部内・外面ナデ	竈掘道部	30%

第498号住居跡（第701・702図）

位置　調査区西部のＥ９ｊ４区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第499号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　東部が調査区域外に延びているために長軸は6.0mだけが確認され，短軸は3.9mでＮ－３°－Ｅを主軸とする東西に長い長方形である。壁高は20～44cmほどであり，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，壁際を除いて全体的によく踏み固められている。また，壁溝は南壁中央から南西コーナーを除いて巡っており，本来は周回していたものと推定される。

竈　北壁のほぼ中央に付設されており，焚口部から煙道部まで144cm，壁外への掘り込みは67cmを測る。袖部幅は116cmほどで，袖部は床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土を用いて構築されている。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ，火床面が火熱を受けて赤変硬化している。煙道部の立ち上がりには，土製支脚が下部を埋め込まれた状態で据えられている。また，煙道は火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
5　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化粒子微量
8　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
10　黒　褐　色　焼土ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
11　黒　褐　色　焼土ブロック・ローム粒子微量
12　にぶい赤褐色　焼土ブロック多量，粘土ブロック少量

ピット　３か所。Ｐ１・Ｐ２が主柱穴に相当し，深さは80cm・86cmである。配置と形状から，棟持ち柱の２本柱で上屋を支えていた構造であると考えられる。Ｐ３は深さが52cmで，竈に対峙する南壁際に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

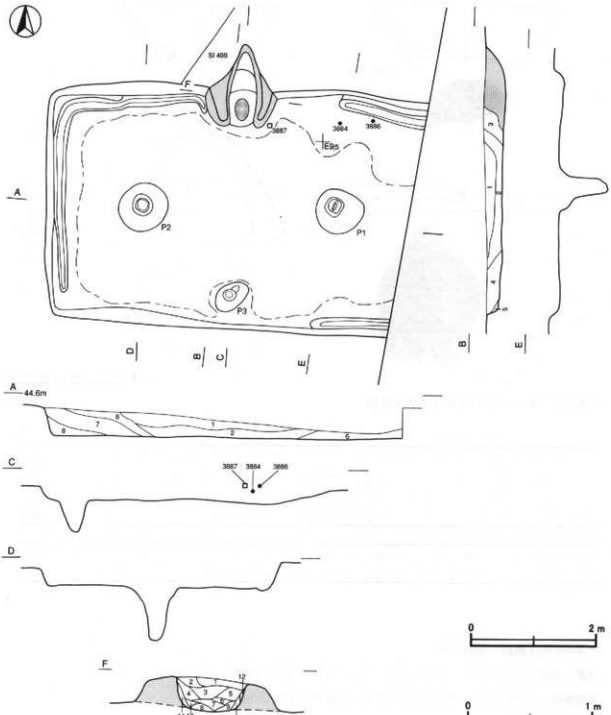
覆土　８層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　粘土ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子少量
6　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
7　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
8　黒　　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片154点（坏61，鉢１，甕92），須恵器片28点（坏14，高台付坏４，蓋３，盤１，甕６），碗１点が主に覆土中層から下層にかけて出土している。3884・3886・3887は竈東側の中層から出土しており，本跡廃絶時の踏み戻しの段階で遺棄あるいは投棄したものと考えられる。

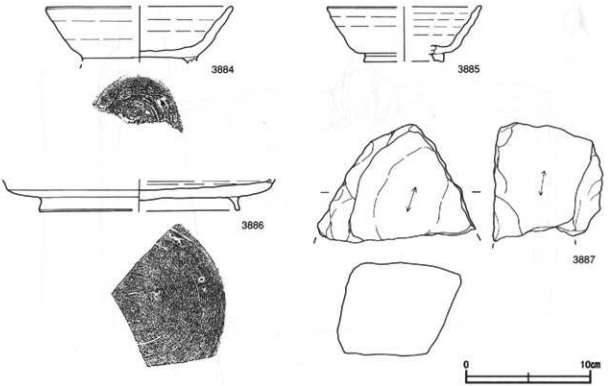
所見　時期は，出土土器の形状から８世紀中葉と考えられる。本跡は長軸が短軸の1.5倍強の特異な形状を呈しており，拡張した痕跡が認められないことから，当初から横長でしかも２本柱の構造で築いたものと考えられる。この横長の住居形態や，周辺から鉄生産に関係する遺構・遺物が検出されていることから，何らかの工房跡と想定されるが，それを裏付ける施設や遺物は確認されていない。



第701図　第498号住居跡実測図

第498号住居跡出土遺物観察表（第702図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3884	須恵器	高台付坏	［14.7］	(4.5)	－	長石	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	竈東側中朝	30%



第702図　第498号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3885	須恵器	高台付坏	[12.0]	4.4	[6.4]	長石・赤色粒子	黄灰	普通	高台部貼り付け後，ナデ	覆土中	5% 外面自然釉
3886	須恵器	甕	－	(3.5)	[15.8]	白色粒子・砂粒・骨針	褐灰	普通	底部回転ヘラ切り，高台貼り付け後，ナデ	竈東側中層	10% 内面自然釉

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3887	砥石	(9.3)	(12.6)	(7.3)	(1,030)	砂岩	砥面2面，端部片側欠損	竈東側中層	

第499号住居跡（第703図）

位置　調査区西部のＥ９ｉ４区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

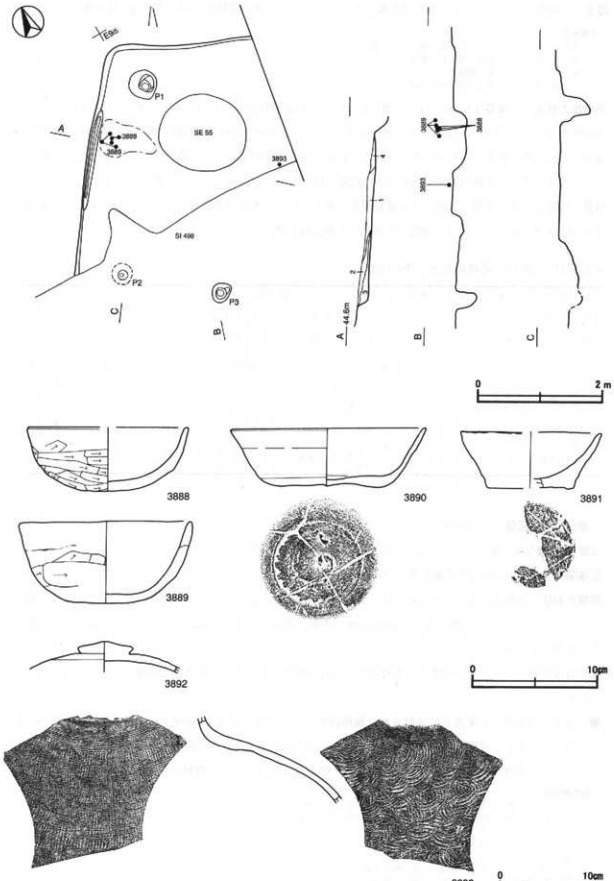
重複関係　第498号住居，第55号井戸にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　東側部分は調査区域外に延び，南部の大半は第498号住居に掘り込まれているために，東西軸の3.9mと，南北軸の4.2mだけが確認された。主軸方向は，西壁の方向から判断してＮ－38°－Ｅあるいは Ｎ－128°－Ｅと推定され，平面形は方形または長方形と考えられる。壁高は最も残りの良い西壁際で15cmほどであり，外傾しながら立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，それほど硬化した面は認められない。また，壁溝は西壁際の一部で確認されている。

竈　北壁，または東壁に付設されていたと想定できるが，調査区域外のため検出されていない。

ピット　３か所。Ｐ１は深さが46cmであり，北コーナー部に位置することから柱穴と考えられる。Ｐ２・Ｐ３は深さが36cm・44cmであるが，性格は不明である。



第703図　第499号住居跡・出土遺物実測図

覆土　4層からなり，ロームブロックや焼土を含んだブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ローム粒子微量
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況　土師器片163点（坏54，甕108，甑1），須恵器片27点（坏14，蓋6，甕7），鉄滓13点（9点に着磁性あり）がほぼ全域から散在した状態で出土している。3888・3889は西壁際の覆土上層から出土しており，埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。3890・3891・3892はいずれも覆土中，3893は中央部の覆土下層からの出土であり，本跡廃絶時の埋め戻しの段階で投棄あるいは混入したものと考えられる。

所見　時期は，出土土器の形状から8世紀前葉と考えられる。本跡が北竈を有しているとすれば，主軸方向は北方向から東に振れており，同時期の住居跡と主軸方向を異にしている。

第499号住居跡出土遺物観察表（第703図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3888	土師器	坏	[12.6]	5.0	－	長石・石英	褐	普通	体部外面ヘラ削り	西壁際上層	65%
3889	土師器	坏	13.7	6.5	－	長石・石英	褐	普通	体部外面ヘラ削り	西壁際上層	60%
3890	須恵器	坏	15.5	4.7	8.7	長石	灰白	普通	底部回転ヘラ削り，体部内・外面ロクロナデ	覆土中	20%底部外面ヘラ記号「一」
3891	土師器	手捏土器	[11.2]	4.5	[7.0]	雲母・石英・赤色粒子	赤褐	普通	内面ヘラナデ	覆土中	40%
3892	須恵器	蓋	－	[2.4]	－	長石	灰白	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	覆土中	10% 外面自然釉
3893	須恵器	甕	－	(3.5)	－	白色粒子・砂粒	褐灰	普通	体部外面縦位の平行叩き，内面同心円状の当て具痕	中央部下層	5% 外面自然釉

第501号住居跡（第704図）

位置　調査区中央部西寄りのⅠ11i0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第502・504号住居跡を掘り込み，第512号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　南西部が支谷部のため，住居全体の形状は把握できなかったが，遺存している北・東壁や竈の位置から，N－5°－Wを主軸とする一辺約4.0mの方形と推定される。確認された壁高は3～18cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，ピットの内側から中央部がよく踏み固められている。壁溝は北西部から南東部にかけて確認された。

竈　北壁の中央部やや東寄りに付設され，規模は焚口部から煙道部まで110cm，袖部幅95cmで，壁外への掘り込みは50cmである。火床部は35cmほど皿状に掘りくぼめられており，火床面が火熱を受けて赤変硬化していることから使用頻度の高かったことがうかがえる。煙道は火床部から急に傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　褐　色　焼土ブロック・粘土粒子少量，ロームブロック微量
2　灰　褐　色　粘土ブロック多量，ロームブロック・焼土粒子少量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量
4　赤　褐　色　粘土粒子多量，焼土ブロック中量
5　暗赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子中量
6　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子少量
7　黒　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
8　褐　　色　ロームブロック中積
9　黒　褐　色　ローム粒子中量
10　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック少量

ピット　3か所。主柱穴はP1・P2が相当し，深さは24cm・34cmである。P3は深さ24cmで，性格は不明である。

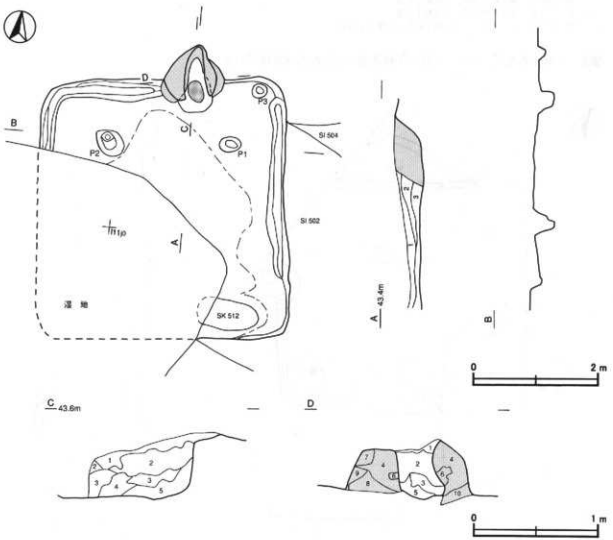
覆土　3層からなり，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

1　黒　　色　ロームブロック・焼土ブロック少量
2　黒　褐　色　粘土粒子中量，ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量
3　黒　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片52点(坏43，高台付椀4，甕5)，須恵器片20点(坏12，高台付坏1，甕7)，礫2点，鉄滓1点が出土している。大部分は破断面が摩滅した細片で，図示できたものはなく，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。

所見　本跡は南西部が支谷部のため住居全体の形状を把握することはできないが，9世紀後葉に比定される第504号住居跡や，10世紀前葉に比定される第502号住居跡を掘り込んでいることや，出土した土師器・須恵器片の形状から，時期は10世紀中葉と考えられる。



第704図　第501号住居跡実測図

第502号住居跡（第705・706図）

位置　調査区中央部西寄りのＩ11ｉ0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第504号住居跡を掘り込み，第501号住居，第512号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　遺存している北・南東壁から，Ｎ－116°－Ｅを主軸とする東西軸約4.0m，南北軸約3.6mの長方形と推定される。壁高は遺存状況が悪く，明確ではない。

床　ほぼ平坦で，硬化した面は認められず，壁溝は北・南コーナー部のみ確認された。

竈　東壁中央部に付設されていると考えられるが，遺存状態が悪く，火床面の一部のみが確認されただけである。

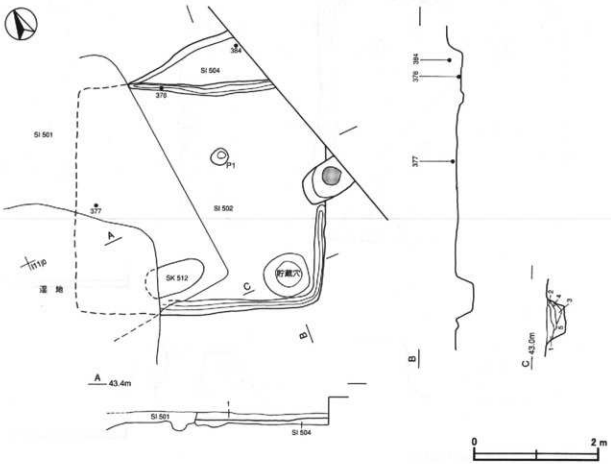
ピット　１か所。深さは42cmで，性格は不明である。

貯蔵穴　南東コーナー部に付設され，一辺約70cmの楕円形で，深さは30cmを測り，底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1　黒　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
2　明 赤 褐 色　焼土粒子多量，炭化粒子中量
3　明 赤 褐 色　焼土粒子多量，炭化粒子少量
4　褐　　色　焼土粒子中量，炭化粒子少量
5　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

覆土　１層からなり，ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



第705図　第502・504号住居跡実測図

土層解説
1　黒　　色　ロームブロック中量,焼土ブロック少量,炭化物微量

遺物出土状況　出土遺物は少なく，土師器片15点（坏９，高台付椀１，高台付皿１，甕４），須恵器片５点（坏２，甕３）が出土しただけである。377は西部の床面，378は北壁溝内から出土している。

所見　本跡は住居全体の形状を把握することはできなかったが，10世紀中葉に比定される第501号住居跡に掘り込まれていることや，出土土器の形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。

第706図　第502号住居跡出土遺物実測図

第502号住居跡出土遺物観察表（第706図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
377	土師器	坏	14.4	4.1	6.5	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部ロクロ整形，底部回転糸切り	西部床面	60%
378	土師器	坏	[14.8]	(3.4)	－	雲母	にぶい褐	普通	体部ロクロ整形，内面ヘラ磨き	北壁溝内	20%

第503号住居跡（第707・708図）

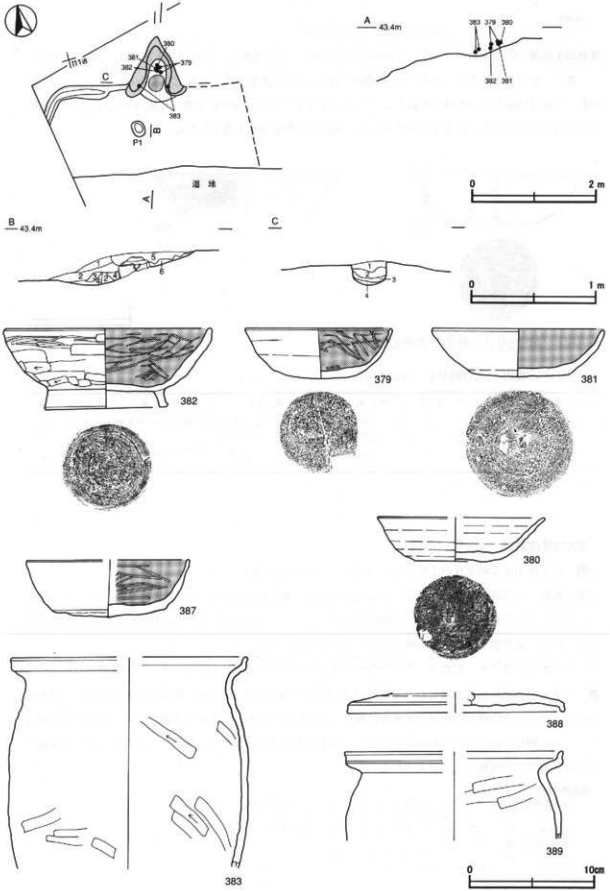
位置　調査区中央部西寄りのＩ11ｉ8区に位置し，平坦部に立地している。

規模と形状　中央部から南部にかけてが支谷部のため，東西軸の約3.2mと，南北軸の約1.5mだけが確認できた。遺存している竈，北西壁から，主軸方向はＮ－９°－Ｅと考えられる。平面形については方形あるいは長方形である。遺存状況が悪いため壁の立ち上がりは確認できなかった。

床　南部が支谷部になっており，全体的な状況は不明である。壁溝は北西コーナー部で確認された。

竈　北壁の中央部に付設されており，規模は焚口部から煙道部まで105cm，袖部幅95cm，壁外への掘り込みは約80cmである。火床部は約25cmほど皿状に掘りくぼめられており，火床面が火熱を受けてかなり赤変硬化しており，使用頻度が高かったことがうかがえる。煙道は火床部から緩やかに傾斜して立ち上がる。火床面には土師器坏が重なって支脚として据えられていた。

竈土層解説
1　極暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子，粘土粒子少量，ローム粒子微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック・粘土粒子中量，ロームブロック炭化粒子少量
3　暗赤褐色　焼土ブロック中量，粘土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック多量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化物・粘土粒子少量
6　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量



第707図　第503号住居跡・出土遺物実測図

ピット　1か所。深さは15cmで，性格は不明である。

覆土　遺存していない。

遺物出土状況　土師器片67点（坏4，高台付椀1，甕62），須恵器片2点（坏，蓋）が出土している。竈内からの出土が多く，379～382は逆位で重なって出土し，火熱を受けていることから支脚として転用され，そのまま遺棄されたものである。383は竈の左石の袖部から出土した破片が接合したものである。

所見　本跡は南部が削平されているため，住居全体の形状は把握できないが，当遺跡の特徴である主軸方向が東へふれる住居形態や竈内から出土した土師器坏片や高台付椀の形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。

第708図　第503号住居跡出土遺物実測図

第503号住居跡出土遺物観察表（第707・708図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
379	土師器	坏	11.6	4.0	－	長石	にぶい黄橙	普通	体部ロクロ整形，内面ヘラ磨き	竈火床部	70%
380	土師器	坏	[13.2]	3.5	6.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部ロクロ整形，底部回転ヘラ切り	竈火床部	55%
381	土師器	坏	14	3.8	8.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部ロクロ整形，底部回転ヘラ切り	竈火床部	100% PL236
387	土師器	坏	[13.0]	4.7	8.5	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部ロクロ整形，底部雑な回転ヘラ切り	北部覆土中	60%
382	土師器	高台付椀	16.6	6.6	10.0	石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	竈火床部	95% PL237
388	須恵器	蓋	[17.2]	(1.6)	－	長石	灰	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	北部覆土中	25%
383	土師器	甕	[18.9]	(16.8)	－	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ，体部内・外面ナデ	竈左右袖部内	20%
389	土師器	甕	[17.6]	(7.0)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ，体部内・外面ナデ	北部覆土中	5%
390	土師器	甕	[19.6]	(5.2)	－	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ，体部内・外面ナデ	北部覆土中	5%
391	土師器	甕	[19.6]	(8.3)	－	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口縁部横ナデ，体部内面輪積み痕	北部覆土中	5%

第504号住居跡（第705・709図）

位置　調査区中央部西寄りのI12i0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第501・502号住居に掘り込まれている。

規模と形状　大部分が第501・502号住居に掘り込まれているため，南北軸約1.8m，東西軸約1mだけ確認できた。確認された壁高は約30cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，硬化面や壁溝は認められない。

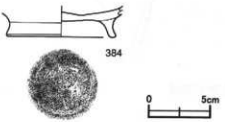
竈　調査区域外に位置すると考えられる。

ピット　検出されていない。

覆土　遺存していない。

遺物出土状況　出土遺物は少なく，土師器片４点（坏２，高台付坏１，甕１），須恵器片１点（高台付坏）が出土しただけである。大部分が細片で，ほとんどが投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。新治産と推測される384は，北壁際上層から出土し，住居廃絶後に投棄されたものである。

所見　本跡は大部分が重複関係や調査区域外に延びていることから，住居全体の様相は把握できないが，10世紀前葉と比定される第502号住居跡に掘り込まれていることや，投棄された土器の形状から，時期は９世紀後葉と推測される。



第709図　第504号住居跡出土遺物実測図

第504号住居跡出土遺物観察表（第709図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
384	須恵器	高台付坏	－	(2.4)	[8.6]	長石・雲母	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	北壁際上層	10% 新治産

第507号住居跡（第710図）

位置　調査区中央部のH12i0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第320・324・334号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，遺存している床面の範囲から，N－24°－Eを主軸とする，一辺3.0m前後の方形と推定される。

床　床面の一部が削平されているため詳細は不明である。

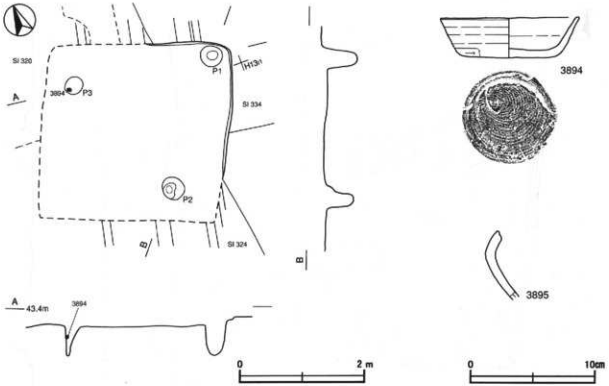
竈　検出されていない。

ピット　３か所。深さ44～46cmで，形状から見て柱穴と考えられるが，位置が不規則であり，詳細は不明である。

覆土　検出されていない。

遺物出土状況　土師器片12点（坏７，甕５）が，P３の覆土中と全域の床面から出土している。図示した遺物はいずれもP３の覆土中から出土しているが，3894は，完形の状態で検出されている。

所見　土師器坏と甕の形状から，時期は10世紀前葉と考えられる。



第710図　第507号住居跡・出土遺物実測図

第507号住居跡出土遺物観察表（第710図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3894	土師器	坏	11.0	3.1	7.4	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	P３覆土中層	95% PL236
3895	土師器	甕	－	(5.4)	－	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，体部外面ヘラナデ	P３覆土中	5%

第513号住居跡（第711図）

位置　調査区中央部のK12b6区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第430号住居跡を掘り込み，第836号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形は明確ではないが，遺存している床面の範囲から，N－11°－Eを主軸とする，長軸約5.1m，短軸約3.9mの長方形と推測される。壁の立ち上がりは不明である。

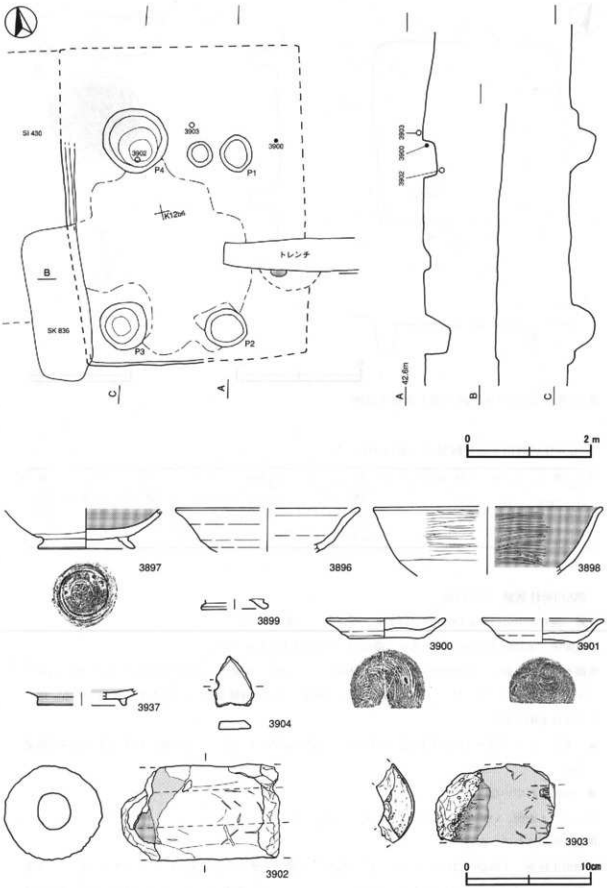
床　遺存している部分はほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。中央部にわずかなくぼみが確認されている。

竈　検出されていない。

ピット　４か所。いずれも主柱穴で，深さ22～40cmである。

覆土　検出されていない。

遺物出土状況　土師器片278点（坏92，高台付椀12，小皿24，甕150），須恵器片９点（坏８，甕１），土製品７（輪羽口６，紡錘車１），炉壁材片６，鉄滓49点，石７点（被熱痕有５）が，北部の床面とP4内を中心に出土している。大半の土器片は細片で埋土中に混入していたものと考えられる。また，3902・3903など６点の輪



第711図　第513号住居跡・出土遺物実測図

羽口片や炉壁材片は，北部から集中して検出されており，特に3902はＰ４の底面近くから検出されていることから，住居廃絶後間もなく，投棄されたものと推測される。

所見　時期は，10世紀後葉と考えられる。なお，検出された羽口や炉壁材は，住居廃絶時に投棄されたものであるが，当遺跡では他にも鉄生産に関わる遺物は多数検出されている。また，本跡から北東方向へ120m離れた地点には，11世紀前半に比定される鉄製作跡が検出されており（第１号鍛冶工房跡），鉄生産活動が継続的に行われていたことがうかがわれ，当遺跡の10世紀以降における集落の様相のひとつとして挙げられる。

第513号住居跡出土遺物観察表（第711図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3896	土師器	高台付椀	[14.6]	(3.5)	－	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ロクロナデ	覆土中層	10%
3897	土師器	高台付椀	－	(3.2)	7.5	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部下端回転ヘラ削り，内・外面ヘラ磨き	覆土中	40%
3898	土師器	高台付椀	[18.2]	(5.4)	－	雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土中	10%
3899	土師器	高台付椀		(0.8)	[5.2]	雲母・赤色粒子	橙	普通	高台部内・外面ナデ	覆土中	5%
3900	土師器	小皿	9.4	1.6	5.7	雲母・砂粒	明黄橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	竈壁寄り床面	30%
3901	土師器	小皿	9.4	1.9	4.8	砂粒	橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	覆土中	30%
3937	緑釉陶器	椀	－	(1.3)	[7.0]	緻密	灰オリーブ，オリーブ灰色釉	良好	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け，内・外面施釉	覆土中	5% 施設外

番号	器種	長さ	外径	内径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
3902	鞴羽口	(12.6)	7.7	3.0	(677.0)	雲母・長石・石英	外面ナデ，粘土にスサを含む，先端部分は火熱を受け，粘土が溶解したガラス質滓が付着	Ｐ４底面	
3903	鞴羽口	(9.6)	(8.3)	[3.1]	(148.2)	雲母・長石・石英	外面ナデ，粘土にスサを含む，先端部分は火熱で侵蝕され，砂鉄溶着滓が付着	北部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3904	紡錘車	(4.0)	(3.1)	(80.6)	(8.3)	土師器	土師器片の体部転用ｍ，ナデ調整痕あり	Ｐ２覆土中	

第514号住居跡（第712図）

位置　調査区中央部のＫ12d7区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第867号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　東西軸は約4.9mで，南側部分が調査区域外に延びているため，南北軸は約0.4mだけが確認でき，Ｎ－13°－Ｅを主軸とする方形または長方形と推測される。また，壁高は80cmで，ほぼ直立する。

床　大半が調査区域外に延びているため不明である。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，南北軸は約84cm，袖部幅は約100cmだけが確認され，壁外への掘り込みは約40cmである。なお，焚口部や火床部については，南部が調査区域外に位置しているため詳細は不明である。また，全体的に遺存状態は悪く，竈の構築材と思われる砂質粘土のブロックが，黒色土とともに混在している。また，煙道は外傾して立ち上がっている。

ピット　検出されていない。

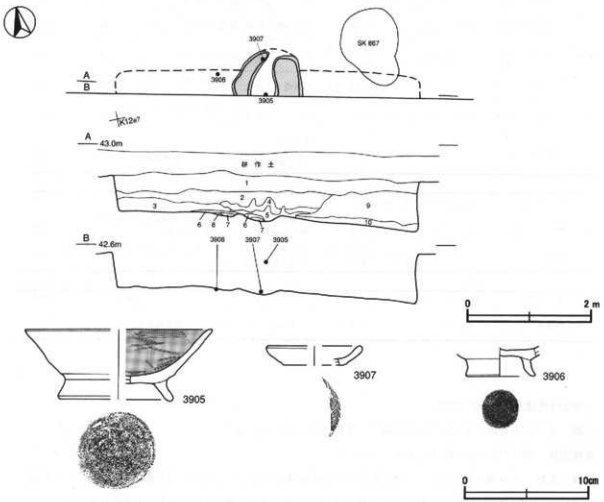
覆土　10層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。第4～8層は竈部の土層である。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
5　黒　　色　炭化粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量
6　極暗褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
7　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化粒子微量
8　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
9　極暗褐色　ローム粒子微量
10　黒　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片4点（高台付椀2，小皿1，甕1），須恵器片9点（高台付坏5，甕4）が，覆土中から出土している。すべて細片であり，投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻す段階で埋土に混入したものである。

所見　伴う遺物はないが，投棄された土器片の形状から，時期は11世紀前半と推測される。



第712図　第514号住居跡・出土遺物実測図

第514号住居跡出土遺物観察表（第712図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3905	土師器	高台付椀	[14.8]	5.6	[8.7]	雲母・砂粒	橙	普通	底部回転ヘラ切り，高台貼り付け後ナデ	竈手前覆土上層	40%
3906	土師器	高台付椀	－	(2.3)	－	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り，高台貼り付け後ナデ	竈左袖部脇床面	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3907	土師器	小皿	(7.6)	1.5	(4.6)	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転糸切り，体部ロクロナデ	竈火床部	10%

第518号住居跡（第713図）

位置　調査区西部のＦ８ｄ０区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第526号住居跡を掘り込み，第1014号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.3m，短軸約2.3mの長方形で，主軸方向はＮ－14°－Ｅである。壁高は約12～17cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。また，壁溝は確認されていない。

竈　北壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約68cm，袖部幅約108cm，壁外への掘り込みは約12cmである。袖部は遺存状態が悪く，砂質粘土ブロックの範囲から袖部を推定した。また，火床部は床面を４cmほど掘り下げて使用し，浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第２層下面が火床面に相当する。なお，火床面は硬化はしていないものの，赤変している様子が認められる。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量
2　暗赤褐色　焼土ブロック少量，炭化粒子微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック微量
5　灰　　色　砂質粘土粒子少量，焼土ブロック微量
6　灰　　色　砂質粘土粒子中量，焼土粒子微量
7　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
8　暗　褐　色　焼土・炭化粒子微量
9　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量

ピット　５か所。主柱穴はＰ１～Ｐ４が相当し，深さ６～30cmである。Ｐ５は深さ約10cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　６層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

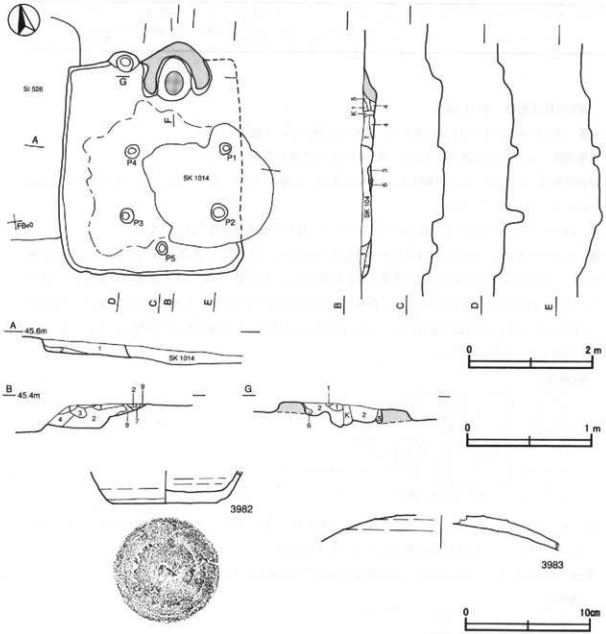
土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2　褐　　色　ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ロームブロック微量
4　暗赤褐色　焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
5　暗赤褐色　焼土粒子多量，ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
6　褐　　色　焼土粒子多量，ロームブロック少量，炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片71点（坏17，甕54），須恵器片８点（坏４，蓋１，甕３），石４点が，竈内と，中央部の覆土上層を中心に出土しており，床面から確認された遺物は少ない。また，竈内から検出された土器片は，火熱を受けていないことや，覆土中から検出された土器片に細片が多いことなどから，これらの土器片は住居廃絶後に投棄あるいは混入したものと考えられ，図示した土器が相当する。

所見　土師器坏や甕の形状から，時期は８世紀後葉と考えられる。なお，当該期に集落を構成していた住居数は９軒と少なく，この傾向は９世紀前葉まで続いている。

第518号住居跡出土遺物観察表（第713図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3982	須恵器	坏	－	(2.5)	8.2	雲母・長石	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後，ナデ	確認面	40%
3983	須恵器	蓋	－	(2.7)	－	雲母・砂粒	灰黄	普通	天井部左回りの回転ヘラ削り	確認面	40%



第713図　第518号住居跡出土遺物実測図

第519号住居跡（第714・715図）

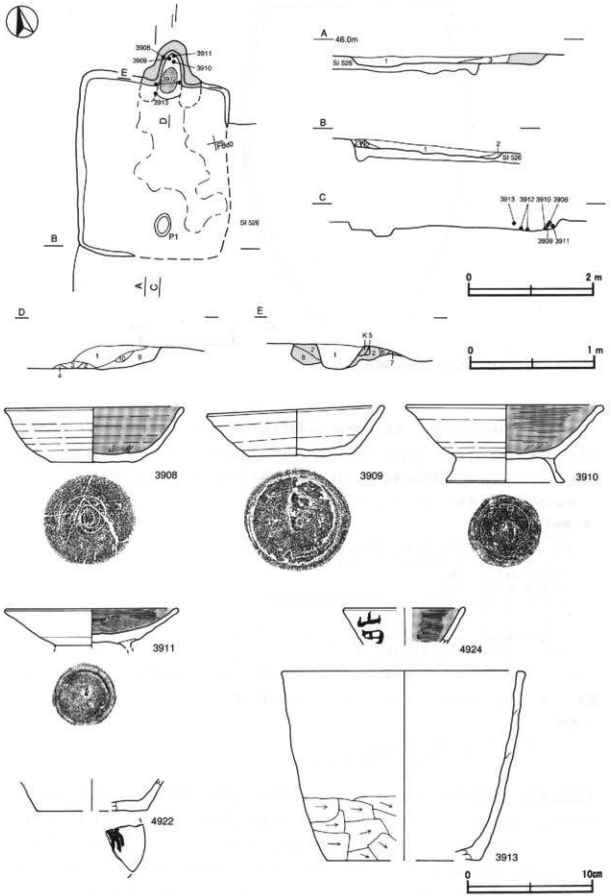
位置　調査区西部のＦ８ｄ９区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第526号住居跡を掘り込んでいる。

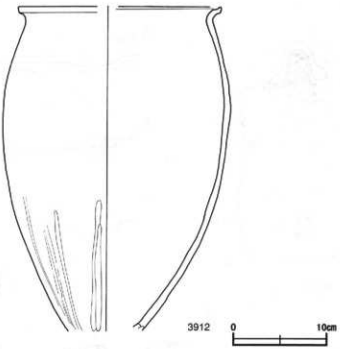
規模と形状　長軸約2.9m，短軸約2.4mの長方形で，主軸方向はＮ－14°－Ｅである。壁高は約13～28cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈の前面から中央部にかけてよく踏み固められており，壁際に比して中央部が若干高くなっている。壁溝は確認されていない。

竈　北東壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約96cm，袖部幅約92cm，



第714図　第519号住居跡・出土遺物実測図



第715図　第519号住居跡出土遺物実測図

壁外への掘り込みは約72cmである。竈付近の床面には竈材と思われる焼土ブロックが散在しており，意図的に壊された可能性が高く，袖部も上面が壊されているが，内側の一部で赤変している様子が確認された。火床部は浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第９層下面が火床面に相当すると考えられ，焼き締まっている。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化材・砂質粘土粒子少量
2　極暗褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子・砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量
3　灰　褐　色　砂質粘土ブロック多量，焼土ブロック少量
4　暗赤褐色　焼土ブロック多量
5　暗赤褐色　焼土ブロック中量
6　灰　褐　色　ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
7　褐　　色　ローム ブロック少量
8　暗　褐　色　ローム ブロック・砂質粘土粒子少量
9　暗赤褐色　焼土ブロック少量，砂質粘土粒子微量
10　暗　褐　色　焼土ブロック中量，砂質粘土粒子少量

ピット　１か所。深さ約14cmで，南壁際の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　３層からなり，各層にロームブロックを含んだ人為堆積である。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック少量
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・砂質粘土粒子微量

遺物出土状況　土師器片92点（坏17，高台付坏４，高台付皿１，甕70），須恵器片16点（坏11，高台付坏１，高台付皿１，甕２，鉢１），石１点が，主に竈中と竈前の床面から出土している。3908～3911は，竈中から出土しており，火熱を受けていることから見て，本来支脚として使用されていたものと考えられる。また，3912と3913は，竈中と竈前の床面から出土した破片が接合したもので，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。なお，竈の覆土上層から検出された炭化材は，いずれも形状を留めておらず，部位の同定には至らなかったが，出土位置から見て，他の土器片とともに投棄されたものと考えられる。

所見　本跡が立地する調査区西部は，山間部へ続く緩やかな斜面部を形成しているためか，中央部ほど住居跡は密集していない。時期は，土師器坏の形状から10世紀中葉と考えられる。

第519号住居跡出土遺物観察表（第714・715図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3908	土師器	坏	14.0	4.3	6.6	雲母・砂粒	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り，体部ロクロナデ	竈袖道部	90% PL236
4924	土師器	坏	[9.6]	(2.9)	－	雲母・石英	にぶい黄橙	普通	体部ロクロナデ，内面ヘラ磨き	覆土中	5% 体部外面墨書「山田」
3909	須恵器	坏	13.9	4.0	8.2	長石・石英	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り後，多方向のヘラ削り	竈燃道部	40%
4922	須恵器	坏	－	(2.5)	[8.5]	雲母・砂粒	灰白	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り	覆土中	3% 底部外面墨書「□」
3910	土師器	高台付椀	15.5	6.1	9.3	雲母・長石・石英	明褐	普通	底部回転ヘラ切り，高台貼り付け後，ナデ	竈煙道部	85% PL237
3911	土師器	高台付皿	13.6	3.2	－	雲母・長石・石英	明褐	普通	底部回転ヘラ切り，高台貼り付け後，ナデ	竈燃道部	80%
3912	土師器	甕	[21.2]	(34.1)	－	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	体部下位ヘラ磨き，口縁部内・外面横ナデ	竈火床面	40%
3913	須恵器	瓶	19.2	15.0	12.2	小礫・砂粒	にぶい黄	普通	体部外面下位横方向のヘラ削り	竈焚口部	20%

第522号住居跡（第716・717図）

位置　調査区西部のＦ９ａ１区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第496・521・523号住居跡を掘り込み，第1086号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　東部が削平されており，明確ではないが長軸約3.9m，短軸約3.2mの長方形で，主軸方向はＮ－９°－Ｅと推測される。壁高は約７cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。また，壁溝は確認されていない。

竈　北壁の中央部やや東寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約100cm，袖部幅約126cm，壁外への掘り込みは約60cmである。遺存状態は悪く，袖部も壁面に貼り付けられた砂質粘土が痕跡として残っているだけである。なお，火床部は浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第４層下面が火床面に相当すると考えられ，厚く焼き締まっている。なお，第４層には大量の灰が検出されている。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土ブロック少量
2　暗赤褐色　焼土ブロック・ロームブロック微量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，灰微量
4　灰色　炭多量，砂質粘土粒子少量，焼土粒子微量
5　にぶい赤褐色　焼土ブロック・砂質粘土粒子少量

ピット　検出されていない。

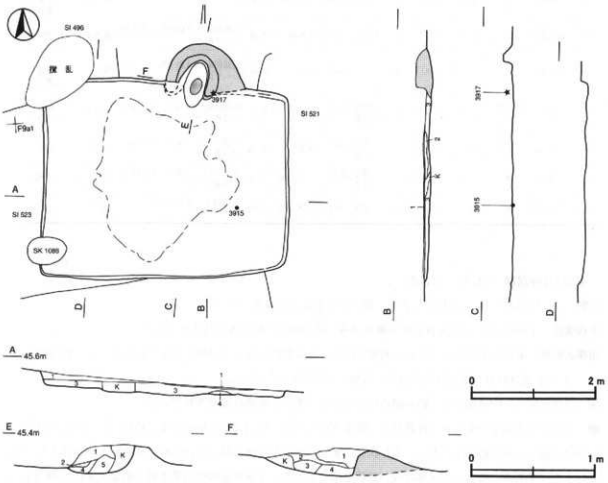
覆土　４層からなり，ロームブロックや焼土を含んだ人為堆積である。

土層解説

1　黒褐色　ロームブロック・焼土ブロック・砂質粘土粒子微量
2　褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量
3　暗褐色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
4　褐色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片203点（坏31，高台付坏３，甕169），須恵器片２点（甕），瓦１点（平瓦）が，主に竈中から出土している。3914・3917は竈中から，3915は東部の床面からそれぞれ出土している。これらは火熱を受けておらず，住居廃絶後間もなく投棄されたものと考えられ，また3916は，灰層の上から検出された破片が接合したもので，住居廃絶時に遺棄されたものと考えられる。

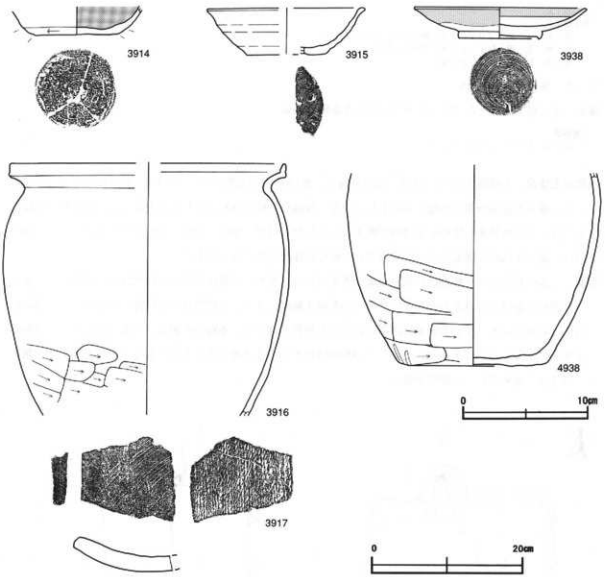
所見　土師器の坏の形状から，時期は９世紀後葉と考えられる。なお，同時期の住居跡としては，当遺跡内で最も大形の住居跡のひとつである。



第716図　第522号住居跡実測図

第522号住居跡出土遺物観察表（第717図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3914	土師器	坏	－	(4.3)	6.6	長石・石英	にぶい褐	普通	底部回転ヘラ切り，体部下端回転ヘラ削り	竈覆土中	45%
3915	土師器	坏	[14.4]	3.1	[6.4]	雲母・石英	橙	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ，体部ロクロナデ	中央部床面	20%
3916	土師器	甕	[21.8]	(20.0)	－	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部下半ヘラ削り，口縁部内・外面横ナデ	竈覆土中	40%
4938	土師器	甕	－	(15.5)	11.7	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部下半ヘラ削り	竈覆土中	20%
3938	灰釉陶器	皿	13.6	2.5	6.5	長石	灰黄	普通	底部回転糸切り後，高台貼り付け，釉は刷毛塗り，見込み無釉	確認面	100% 猿投産 PL237



第717図　第522号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質及び特徴	出土位置	備考
3917	平瓦	(11.2)	(12.5)	2.2	(462)	凸面縄目叩き。凹面粘土板からの糸切り痕と布目痕あり。縁部面取り。	竈石袖部	

第524号住居跡（第718・719図）

位置　調査区西部のＦ８ａ9区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第10号掘立柱建物跡を掘り込み，第525号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約2.9m，短軸約2.8mの方形で，主軸方向はＮ－６°－Ｅである。壁高は約16～25cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦であるが，それほど硬化した部分は認められない。また，壁溝は西側の壁際で確認された。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約82cm，袖部幅約76cm，壁外への掘り込みは約60cmである。袖部の遺存状態は良好で，内側は赤変している。火床部は浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第３層上面が火床面に相当すると考えられ，約８cmにわたって厚く焼き締まっており，使用頻度の高さがうかがわれる。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　暗　褐　色　焼土ブロック少量，砂質粘土粒子微量
2　暗　褐　色　焼土粒子・灰少量，炭化粒子微量
3　赤　褐　色　焼土ブロック少量

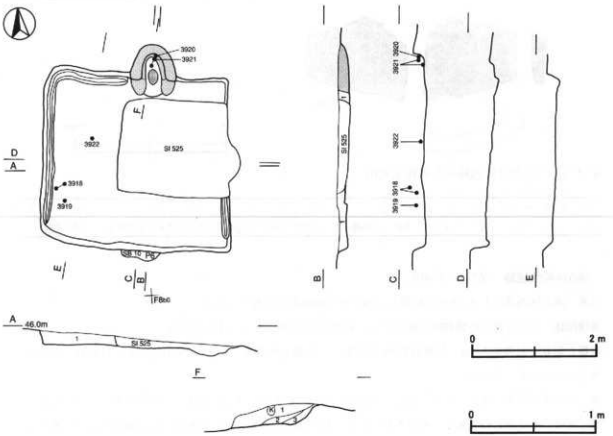
ピット　検出されていない。

覆土　単一層で，ロームブロックを含んだ人為堆積である。

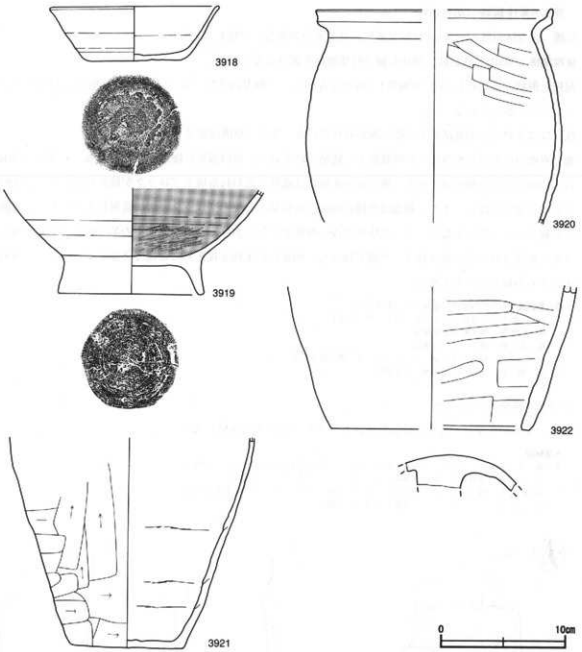
土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片146点（坏38，高台付椀８，甕100），須恵器片９点（坏６，高台付坏１，甕１，甑１）が，主に竈内と西部の覆土中層から出土している。西部から検出されたこれらの土器片は，住居廃絶後に投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻す段階で埋土に混入したもので，3918・3919・3922が相当する。また，3920と3921は，竈火床部から煙道にかけて検出された破片が接合されたものである。

所見　土器の形状から，時期は10世紀中葉と考えられる。なお，当遺跡における住居跡の主軸方向は，８世紀から10世紀にかけては真北方向あるいは東方向を指す傾向にあり，古墳時代の住居跡の主軸方向とは違いが見られる。斜面部に面している調査区西部においても例外ではなく，本跡の主軸も，真北方向からやや東向きを指す傾向にある。このことから，当時，この地域は地形による立地条件の変化に対応できる範囲内で，集落の同一性を強く求めていた可能性が高い。



第718図　第524号住居跡実測図



第719図　第524号住居跡出土遺物実測図

第524号住居跡出土遺物観察表（第719図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3918	須恵器	坏	13.3	4.4	7.4	雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り	西壁際下層	90% PL237
3919	土師器	高台付椀	－	(8.5)	11.6	長石	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り，体部下端回転ヘラ削り	西壁際下層	60%
3920	土師器	甕	[18.8]	(17.0)	－	雲母・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ，内面ヘラ状工具によるナデ	竈煙道部	20%
3921	土師器	甕	－	(16.7)	8.9	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り	竈火床面・煙道部	40%
3922	須恵器	瓶	－	(11.3)	[15.8]	雲母・長石・石英	暗灰黄	普通	体部内面ヘラナデ，孔ヘラ切り	中央部下層	5%

第525号住居跡（第720図）

位置　調査区西部のＦ８ａ０区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第524号住居跡，第10号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸約1.7m，短軸約1.5mの長方形で，主軸方向はＮ－92°－Ｅである。壁高は約14cmで，外傾して立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，中央部がよく踏み固められている。また，壁溝は確認されていない。

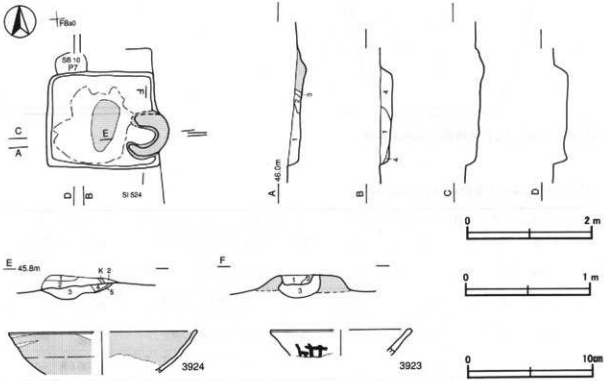
竈　東壁の中央部やや南寄りに砂質粘土で構築されており，焚口部から煙道部まで約64cm，袖部幅約76cm，壁外への掘り込みは約16cmである。竈付近の床面には竈材と思われる焼土ブロックが散在しており，意図的に壊された可能性が高い。また，袖部は直径約80cmの砂質粘土と焼土ブロックの層に暗褐色土が混じり，範囲を明確に捉えることはできなかった。火床部は浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第２層下面が火床面に相当すると推測されるが，焼き締まった感じはなく，明確に火床面を捉えることはできなかった。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がる。

竈土層解説（第３～５層は，竈掘り方の土層である。）
1　暗赤褐色　砂質粘土粒子少量，焼土ブロック微量
2　暗赤褐色　焼土粒子・灰少量
3　暗　褐　色　焼土ブロック微量
4　暗　褐　色　炭化粒子少量，ロームブロック・焼土粒子微量
5　暗　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量

ピット　検出されていない。

覆土　４層からなり，各層に砂質粘土ブロックを含んだ人為堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土ブロック微量
2　灰　　色　砂質粘土ブロック多量，ロームブロック・焼土ブロック微量
3　暗赤褐色　焼土ブロック・砂質粘土ブロック少量，ロームブロック・炭化粒子微量
4　暗　褐　色　ロームブロック・砂質粘土ブロック微量



第720図　第525号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　土師器片102点（坏15，甕87），須恵器片７点（坏６，甕１），灰釉陶器２点（椀），鉄滓１点が，北西部の覆土中から出土している。大半が細片であり，投棄されたり，住居廃絶後の埋め戻す段階で埋土に混入したものである。

所見　土器の形状から，時期は10世紀後葉と考えられる。なお，当概期における住居跡の形態は，小形で，竈は東壁部に付設されているものが多い傾向にある。

第525号住居跡出土遺物観察表（第720図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3923	土師器	坏	[11.0]	(2.1)	－	密・長石・赤色粒子	橙	普通	体部内・外面ロクロナデ	覆土中	10% 体部外面墨書「井上」？
3924	灰釉陶器	椀	[14.8]	(3.3)	－	緻密	灰白・灰オリーブ	良好	体部内・外面ロクロナデ，釉は内・外面ともに刷毛塗り	覆土中	10% 内径248 猿投産

第526号住居跡（第721・722図）

位置　調査区西部のＦ８ｄ９区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第518・519号住居跡，第23号溝に掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.7m，短軸約3.5mの方形で，主軸方向はＮ－12°－Ｅである。壁高は約16～32cmで，ほぼ直立する。

床　造存している部分は平坦で，ほぼ全域がよく踏み固められている。壁溝は壊されている東部を除いて確認された。

竈　北壁の中央部に砂質粘土で構築されている。竈の土部は，第519号住居跡に壊されているため不明であるが，焚口部から煙道部まで約120cm，袖部幅約124cm，壁外への掘り込みは約74cmである。袖部は遺存状態が悪く，壁面に貼り付けられた砂質粘土が痕跡として残っているだけであるが，火床部は浅い皿状を呈しており，土層断面図中の第５層下面が火床面に相当すると考えられ，焼き締まっている。また，煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
2　黒　褐　色　焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
3　黒　褐　色　焼土粒子，炭化粒子・粘土ブロック微量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子・炭化粒子微量
5　にぶい赤褐色　焼土ブロック微量
6　にぶい赤褐色　焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
7　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量

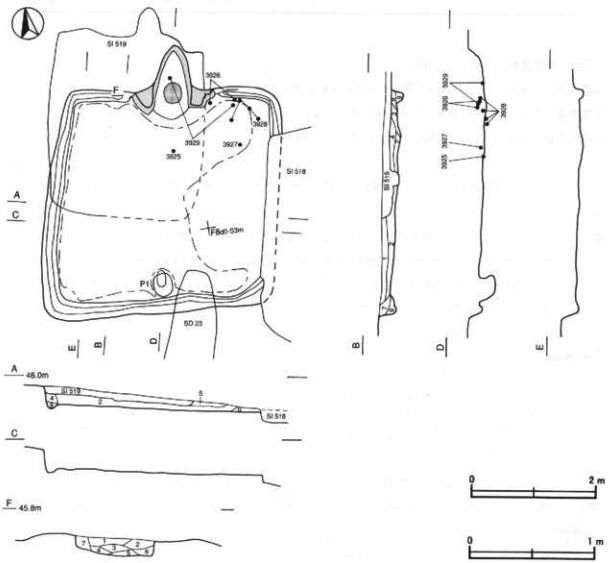
ピット　１か所。深さ約32cmで，竈廃棄の中央部に位置しており，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土　９層からなり，焼土粒子や炭化粒子を含んだ人為堆積である。第９層は壁溝部の土層である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量
5　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
6　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量
8　黒　褐　色　粘土粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
9　黒　褐　色　ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片140点（坏22，甕110，鉢８），須恵器片45点（坏39，高台付坏２，甕４）が，北東コーナー部の床面と覆土下層から出土している。3925は竈前の床面から，3926は竈右袖部付近からそれぞれ出土している。これらはほぼ完形に近い状態で検出されており，住居跡廃絶時に遺棄されたものと考えられる。また，3928は，北東コーナー部の床面と覆土下層から出土した破片が接合したもので，住居跡廃絶後間もなく投棄されたものと推測される。

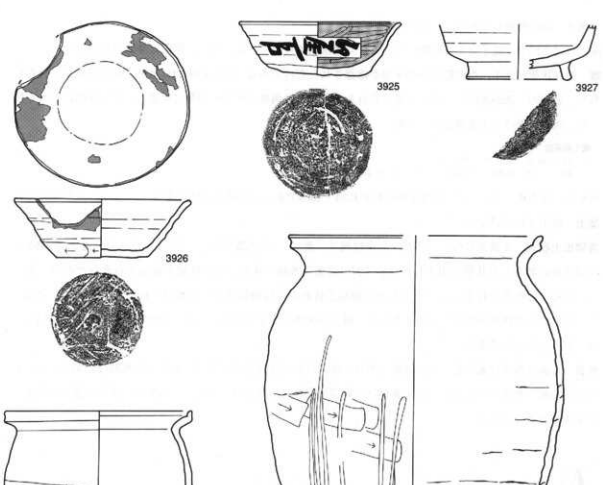
所見　土器の形状から，時期は９世紀後葉と考えられる。また，床面から検出された土師器坏には「御屋万得」と記されており，新治郡衙との関連を裏付ける資料のひとつと言える。なお，「屋」という字は，吉祥を表す「万得」という字とともに記されていることから見て，郡家にある建物の名称を表したものではなく，「郡家」と同様，郡衙の総称としている可能性もあるが，詳細は不明である。



第721図　第526号住居跡実測図

第526号住居跡出土遺物観察表（第722図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3925	土師器	坏	12.7	4.2	6.1	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ切り	竈前床面	80% PL250 体部外面墨書「御屋万得」



第722図　第526号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3926	須恵器	坏	13.9	4.7	7.3	雲母・石英	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り，体部下端手持ちヘラ削り	竈右袖部脇下層	90% PL237 内・外面油煙付着
3927	須恵器	高台付坏	－	(4.4)	[8.4]	雲母・長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り	北東コーナー下層	30%
3928	土師器	甕	[20.2]	(25.5)	－	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ヘラ削り後，ヘラ磨き	北東コーナー部床面・下層	40%
3929	土師器	小形甕	14.8	(13.1)	－	雲母・長石・石英	明褐	普通	口縁部内・外面横ナデ　体部下半ヘラ削り	竈火床部・右袖部脇下層	60%

第528号住居跡（第723図）

位置　調査区中央南部のJ14d1区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第383・399号住居跡をそれぞれ掘り込み，第30号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状　本跡の南半分が調査区域外に延びているために全容は不明であり，東西軸2.7m，南北軸3.2mだけが確認され，N－90°－Wを主軸とする南北に長い長方形と推定される。壁高は最も残りの良い北壁で20cm

を測り，壁は外傾しながら立ち上がっている。

床　ほぼ平坦で，竈手前から壁際にかけてよく踏み固められている。また，壁溝は確認されていない。

竈　遺存状態が悪く，西壁際から火床部が確認されただけである。付近の床面には粘土粒子や砂粒が散在しており，竈材の一部が流出したものと考えられる。火床部は西壁ラインの内側に位置し，浅い皿状に掘りくぼめられ，火熱を受けて赤変硬化している。

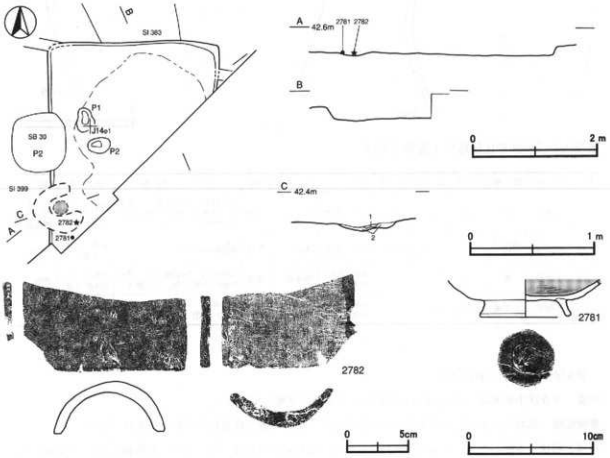
竈土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック中量
2　褐　　色　鹿沼パミス中量，ロームブロック少量

ピット　2か所。P1・P2は深さがそれぞれ34・40cmであり，性格は不明である。

覆土　検出されていない。

遺物出土状況　土師器片61点（坏21，高台付椀3，甕37），須恵器片3点（坏），瓦片1点（丸瓦），礫2点がほぼ全域に散在した状態で出土している。2781は竈左袖脇の床面，2782は竈左袖部からそれぞれ出土しており，2782には焼土が付着していることから袖部芯材あるいは補強材として使用されたものと考えられる。また，2781にも被熱痕が認められることから，竈での使用が想定できる。なお，須恵器片は破断面が摩滅しており，混入したものである。

所見　本跡は西壁に竈を有した住居跡であり，南北に長い住居形態である。拡張した痕跡は認められず，何らかの工房跡と想定されるが，それを裏付ける施設や遺物は検出されていない。時期は，出土土器の形状から10世紀中葉と考えられる。



第723図　第528号住居跡・出土遺物実測図

第528号住居跡出土遺物観察表（第723図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2781	土師器	高台付椀	－	(3.0)	7.1	雲母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後，高台貼り付け	竈左袖脇床面	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	出土位置	備考
2782	丸瓦	(15.0)	17.6	2.0	(930.0)	凹面布目痕，凸面ナデ，粘土紐による積み上げ，縁部面取り	竈左袖部	

第529号住居跡（第724図）

位置　調査区西部のＦ９ａ2区に位置し，緩やかな斜面部に立地している。

重複関係　第521号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　床面の一部が削平された状態で検出されたため，規模及び平面形状は明確ではないが，長軸約3.7ｍ，短軸約3.0ｍの長方形で，主軸方向はＮ－90°－Ｅと推定される。壁の立ち上がりについては不明である。

床　床面の一部が削平されているため詳細は不明である。

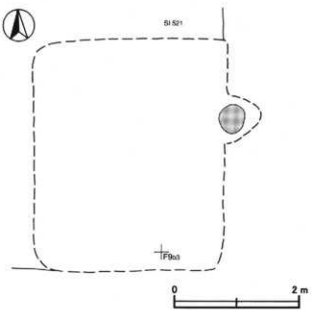
竈　竈の上半部分が削平され，検出できたのは火床面だけであるが，径約40㎝の範囲で赤変している様子が認められる。

ピット　検出されていない。

覆土　検出されていない。

遺物出土状況　検出されていない。

所見　遺物が検出されず，時期は不明であるが，住居の形態などから，大きく平安時代と判断した。



第724図　第529号住居跡実測図

第531号住居跡（第725図）

位置　調査区北部のＧ14ｇ5区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第49・50号住居跡を掘り込み，第46号住居跡，第348号土坑，第17号井戸跡に掘り込まれている。

規模と形状　北部を第348号土坑に掘り込まれているため，東西軸約3.5ｍ，南北軸約2.5ｍだけが確認できた。

遺存している壁からN－83°－Wを主軸とする長方形と推定される。確認された壁高は約30cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床　東部がやや深く掘り込まれており，硬化面や整溝は認められない。

竈　検出されなかった。

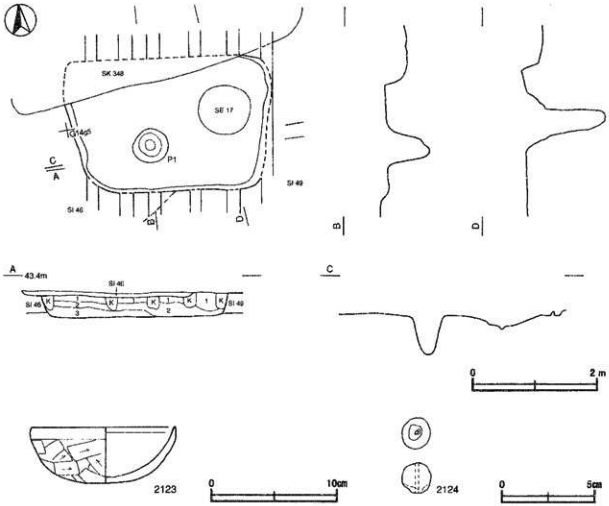
ピット　1か所。深さ約60cmで，詳細は不明である。

覆土　3層からなり，ロームブロックや炭化粒子を含む人為堆積である。

土層解説
1　褐黒褐色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
2　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
3　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況　土師器片147点（坏54，高台付坏2，蓋1，甕89，甑1），須恵器片19点（坏14，甕4，長頸瓶1），土製品1点（土玉），礫38点が散在した状態で全域から出土している。大半は細片で，破断面が磨滅していることから，住居跡廃絶後の埋め戻しの段階で混入したものと考えられる。2123は南東部，2124は北東部のそれぞれ覆土中から出土している。

所見　本跡の時期は明確ではないが，出土土器や6世紀後半に比定される第49号住居跡を掘り込み，10世紀中葉に比定される第46号住居跡に掘り込まれていることから，8世紀代から10世紀中葉までのいずれかに構築されたものと推測される。



第725図　第531号住居跡・出土遺物実測図

第531号住居跡出土遺物観察表（第725図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
2123	土師器	坏	11.5	1.6	－	雲母・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り，内面ナデ	南東部覆土中	60%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
2124	土錘	1.7	1.6	0.2	3.5	土	ナデ，明赤褐色	北東部覆土中	

第533号住居跡（第726・727図）

位置　調査区中央部北東寄りＩ13ｃ0区に位置し，平坦部に立地している。

重複関係　第１号溝跡を掘り込み，第653号土坑，第35号掘立柱建物跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　長軸約3.6m，短軸約3.3mのほぼ方形で，主軸方向はＮ－19°－Ｅである。壁高は８cmと低く，立ち上がり状況は不明である。炉や竈は認められない。

床　ほぼ平坦で，東南部にかけてよく踏み固められている。壁溝は認められない。

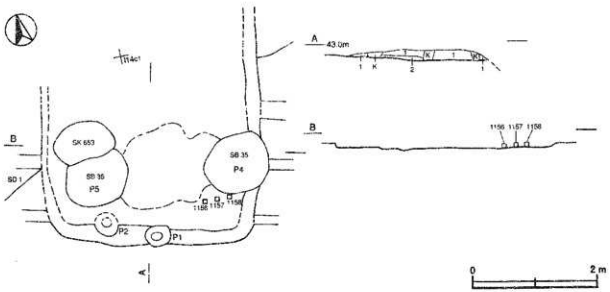
ピット　２か所。Ｐ１・Ｐ２の深さはそれぞれ６cm・10cmと浅く，性格は不明である。

覆土　２層のみ確認したが，堆積状況は不明である。

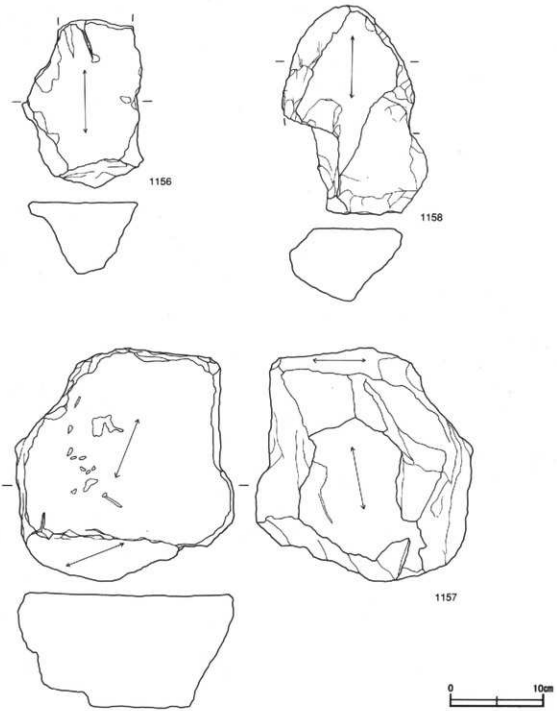
土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化物微量
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物少量

遺物出土状況　土師器片103点（坏29，高台付坏２，甕72），須恵器片９点（坏５，甕４），陶器片１点（椀），石器３点（砥石），礫７点が散在した状態で出土している。1156～1158はいずれも南東部の床面から出土しており，礫もほとんどが雲母片岩である。

所見　本跡は炉や竈が認められず，大きさの異なる砥石がいずれも床面から出土していることから，作業または工房として機能していた可能性が想定される。時期は６世紀前葉まで機能していた第１号堀を掘り込み，９世紀後葉に比定される第35号掘立柱建物跡に掘り込まれていることと土師器・須恵器片から，９世紀中葉と考えられる。



第726図　第533号住居跡実測図



第727図　第533号住居跡出土遺物実測図

第533号住居跡出土遺物観察表（第727図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1156	砥石	(17.8)	(12.7)	(7.5)	(1750)	砂岩	砥面1面，その他は破断面	南東部床面	
1157	砥石	(24.7)	(22.9)	(12.1)	(9090)	砂岩	砥面3面，その他は破断面	南東部床面	
1158	砥石	(22.1)	(15.3)	(7.7)	(3500)	泥岩	砥面2面，その他は破断面，被熱痕あり	南東部床面	

茨城県教育財団文化財調査報告第222集

辰海遺跡 1

（第２分冊）

平成16（2004）年３月24日 印刷
平成16（2004）年３月26日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和１丁目356番の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
ＴＥＬ ０２９－２２５－６５８７

印刷 (有)川田プリント
〒310-0041 水戸市上水戸４丁目６－53
ＴＥＬ ０２９－２５３－５５５１